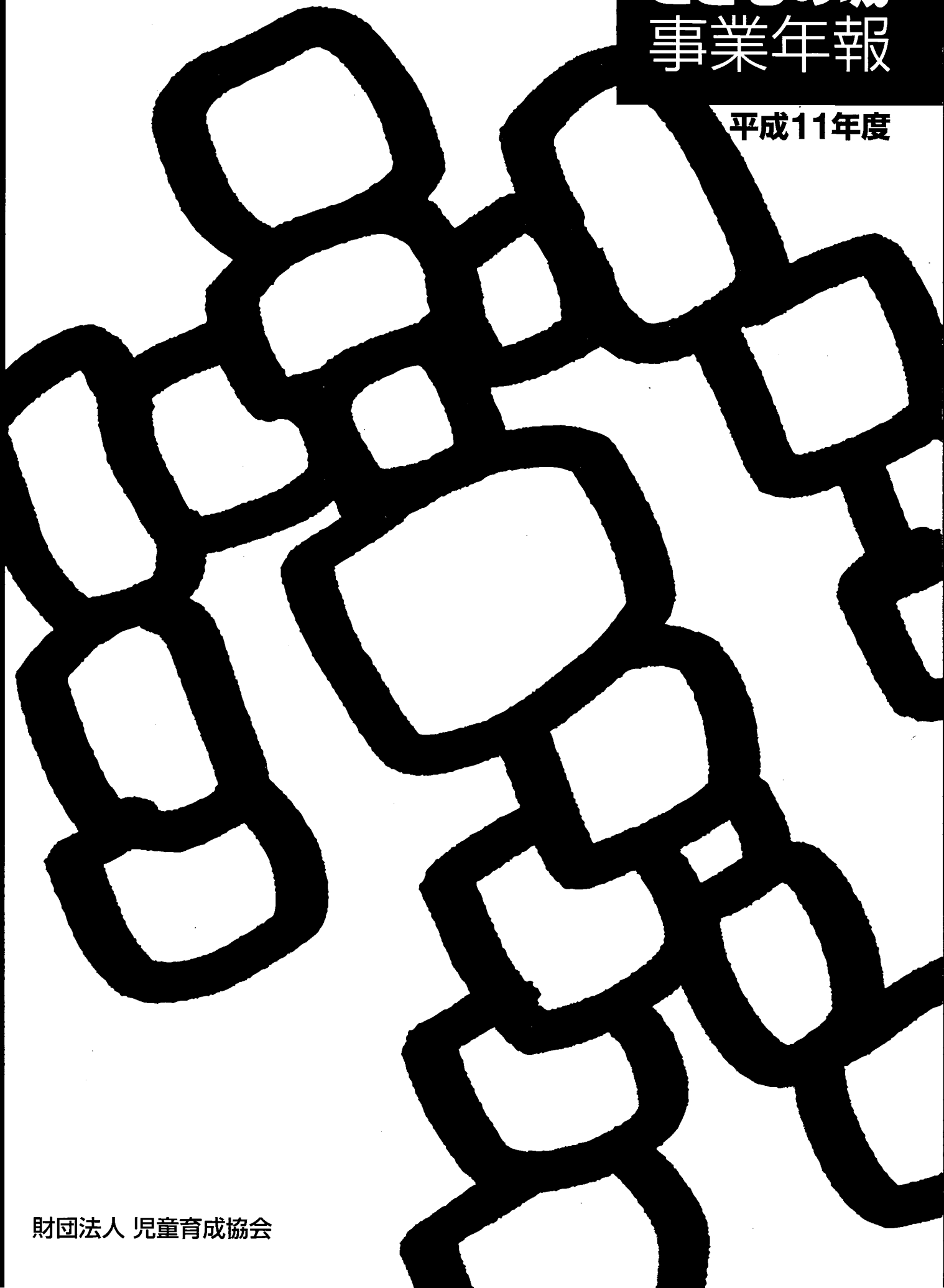
こどもの城
事業年報

平成11年度



財団法人 児童育成協会

CONTENTS

こどもの城 事業年報　平成11年度 目次

Ⅰ 事業の概要

平成11年度の活動 …… 7
❶ 事業と運営の基本的な考え方 …… 7
❷〔こどもの城〕の概要 …… 7
❸〔こどもの城〕の組織機構と役員 …… 9
❹ 平成11年度の事業活動の概要 …… 9
❺ センター的役割を果たすために …… 11
❻ 開館時間・入館料（こども活動エリア） …… 11
平成11年度活動一覧表 …… 13
❶ 入館者数 …… 13
❷ グループ活動実施状況 …… 14
❸ 講座・クラブなど …… 15
❹ 視察・見学実績 …… 17
1年の歩み …… 18

Ⅱ 各部の活動

体育事業部

平成11年度の活動 …… 21
❶ 一般利用 …… 21
❷ 講座・クラブ・講習会 …… 23
❸ グループ活動 …… 26
❹ その他 …… 26
❺ まとめ …… 26
平成11年度活動一覧表 …… 27
❶ 一般利用 …… 27
❷ 講座・クラブ …… 29
❸ その他 …… 32

プレイ事業部

平成11年度の活動 …… 33
❶ 一般利用 …… 33
❷ 講座・クラブ …… 38
❸ グループ活動 …… 39
❹ パソコンを使った遊びのプログラム …… 39
❺ まとめ …… 39
平成11年度活動一覧表 …… 40
❶ 一般利用 …… 40
❷ 講座・クラブ …… 43
❸ その他 …… 43

造形事業部

平成11年度の活動 …… 45
❶ 一般利用 …… 45
❷ 講座・クラブ …… 49
❸ グループ活動 …… 51
❹ 共同事業 …… 52
❺ 対外活動 …… 52
❻ まとめ …… 52
平成11年度活動一覧表 …… 53
❶ 一般利用 …… 53
❷ 講座・クラブ …… 54
❸ その他 …… 55
平成11年度プログラム一覧表 …… 56
❶ 親子プログラム …… 56
❷ 子どもだけのプログラム …… 57

音楽事業部

平成11年度の活動 —— 59
❶ 一般利用 —— 59
❷ 講座・クラブ —— 61
❸ グループ活動 —— 62
❹ その他の活動 —— 62
❺ まとめ —— 62
平成11年度活動一覧表 —— 63
❶ 一般利用 —— 63
❷ 講座・クラブ —— 66
❸ その他 —— 68

AV事業部

平成11年度の活動 —— 69
❶ 一般利用 —— 69
❷ 講座・クラブ —— 71
❸ その他 —— 73
❹ まとめ —— 74
平成11年度活動一覧表 —— 75
❶ 一般利用 —— 75
❷ 講座・クラブ —— 76
❸ その他 —— 78

保育研究開発部

平成11年度の活動 —— 79
❶ 保育事業 —— 79
❷ 研修事業など —— 83
❸ まとめ —— 84
平成11年度活動一覧表 —— 85
❶ 一般利用 —— 85
❷ 講座・クラブ —— 86
❸ その他 —— 88

小児保健部

平成11年度の活動 —— 89
❶ 活動の概要 —— 89
❷ 診療・相談活動 —— 90
❸ 講座など集団で行う活動 —— 91
❹ 研修会などの啓発活動 —— 92
❺ 研究活動・その他の活動 —— 92
❻ まとめ —— 93
平成11年度活動一覧表 —— 94
❶ 一般利用 —— 94
❷ 講座・クラブ —— 95
❸ その他 —— 96

企画研修部

平成11年度の活動 —— 97
❶ 事業全般にかかわる企画調整 —— 97
❷ 特別期間などに実施した事業 —— 98
❸ ボランティアの活動と養成 —— 102
❹ その他 —— 105
❺ まとめ —— 105
平成11年度活動一覧表 —— 106
❶ 一般利用 —— 106
❷ ボランティア関係の活動 —— 108
❸ その他 —— 112

CONTENTS

こどもの城 事業年報　平成11年度 目次

劇場事業本部

平成11年度の活動 ―― 113
本年度の主な演目 ―― 113
平成11年度公演演目一覧表 ―― 117
❶ 青山劇場 ―― 117
❷ 青山円形劇場 ―― 118

広報部

平成11年度の活動 ―― 121
❶ パブリック・リレーションズ ―― 121
❷ 宣伝関係 ―― 122
❸ その他 ―― 123
❹ まとめ ―― 123

国際交流担当

平成11年度の活動 ―― 127
❶ 交流プログラム ―― 127
❷ 講座・クラブ ―― 128
平成11年度活動一覧表 ―― 131
❶ 一般利用 ―― 131
❷ 講座・クラブ ―― 131
❸その他 ―― 131

業務部

平成11年度の活動 ―― 133
業種別の状況 ―― 133
平成11年度の概要 ―― 135
業務の一覧 ―― 135

Ⅲ こどもの城から全国へ

こどもの城から全国へ

平成11年度の活動 ―― 139
❶ こどもの城のセンター的機能について ―― 139
❷ センター機能の実践 ―― 139
❸ 今後の課題 ―― 140
平成11年度活動一覧表 ―― 141
❶ 〈動くこどもの城〉プログラム一覧 ―― 141
❷ 〈動くこどもの城〉実施一覧 ―― 143
❸ 講習会 ―― 144
❹ 講師派遣 ―― 144

利用案内

●開館時間

平　　日　　午後　0時30分～午後5時30分

土・日曜日・祝日
学校の季節休み中　　午前10時00分～午後5時30分

●休館日

毎週月曜日

（月曜日が祝日や振替休日にあたる場合は翌日が休館日となります。
また、学校の季節休み等には休館日が変則となることがあります。）

●入館料

こども 400円（3歳以上18歳未満）　おとな 500円

（20人以上の団体は、こども320円、おとな400円です。
事前にご連絡ください。）

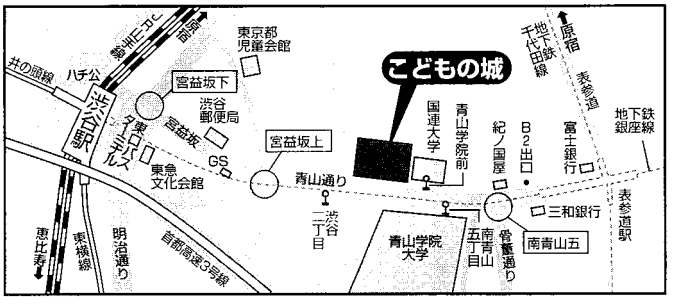
●交通案内

・渋谷駅　　徒歩10分（東口／東急文化会館側）
JR山手線・埼京線／東急東横線・新玉川線／
京王井の頭線／営団地下鉄銀座線・半蔵門線
○渋谷駅（東口バスターミナル）から都営バスが
ご利用いただけます。
新橋駅北口行　「青山学院前」下車すぐ

・表参道駅　徒歩8分（B2出口）
営団地下鉄銀座線・千代田線・半蔵門線

●駐車場（地下）

有料・約80台収容・車高制限2m
日曜日・祝日は混み合いますので、なるべく電車・バスで
ご来館ください。



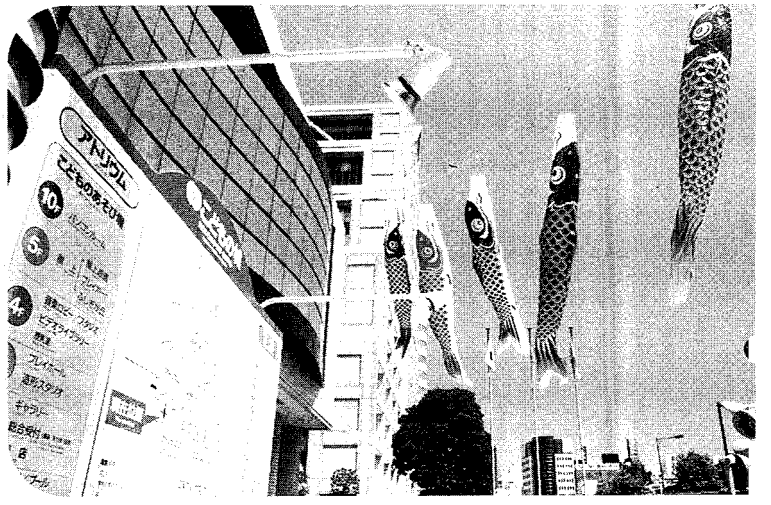
財団法人 児童育成協会

こどもの城

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-1
TEL 03-3797-5666（代表） FAX 03-3797-5676
こどもの城ホームページ　http://www.kodomono-shiro.or.jp/

I 事業の概要

事業の概要



平成11年度の活動

〔こどもの城〕は昭和54年('79)の国際児童年を記念して、厚生省（当時）が計画・建設した児童の健全育成のための総合施設である。

国が東京都から譲り受けた、渋谷区神宮前５－53－１の約１万㎡の敷地に、昭和56年11月に着工し、以来、４年の歳月をかけ、地上13階、地下４階のミラーガラスに包まれた美しい建物が完成、昭和60年11月１日に開館した。運営は、厚生労働省の委託を受けて㈶児童育成協会があたっている。

❶事業と運営の基本的な考え方

〔こどもの城〕の創設にあたって、昭和54年に「こどもの城企画委員会」（葛西嘉資座長）が設けられ、「“こどもの城”（仮称）の基本構想に関する意見」が厚生省児童家庭局長（当時）に提出された。

基本構想では、“子ども”を“未来を担う者”と位置づけ、「豊かで活力のある社会を将来にわたって維持していくため」に、子どもを健やかに育てることの必要性が強調されている。そして、〔こどもの城〕の性格を、①全国の子どもの健全育成に役立たせる施設　②全人としての子どもに接近する施設　③先導的・開拓的なプログラムを大胆に試行する施設　④子どものニーズに柔軟に対応する施設――とした。

厚生労働省と㈶児童育成協会は、この基本構想を踏まえ、協力しながら〔こどもの城〕の建設にあたり、運営に取り組んできた。現在も、社会環境の変化に柔軟に対応しつつ、基本構想に示された理念を大切に、より一層の充実をめざして児童のための福祉・文化活動を展開している。

〔こどもの城〕は、児童だけでなく、親をはじめ児童の福祉・文化関係者、研究者、教育者など、子どもの幸せを願うあらゆる人々が利用できるように開かれている施設である。

子どもを主な対象とした〈あそび〉のプログラムを中心にした活動ばかりでなく、大人も視野に入れた子育て支援の活動や、育児に関する研究・研修活動にも力を入れるなど、幅広い活動を展開している。

❷〔こどもの城〕の概要

〔こどもの城〕には、「こども活動エリア」と総称される体育、プレイ、造形、音楽、AV（オーディオ・ビジュアル）の各部門のほかに、保育研究開発、小児保健、企画研修、劇場事業（青山劇場・青山円形劇場）、広報などの部門がある。そして、それらの部門が相互に協力して、①芸術・文化・科学・スポーツなどの活動による児童の健全育成　②児童福祉関係者の研修・現任訓練　③児童福祉に関する研究・開発　④国際交流――といった各種機能を併せ持つ総合施設としての〔こどもの城〕の運営にあたっている。

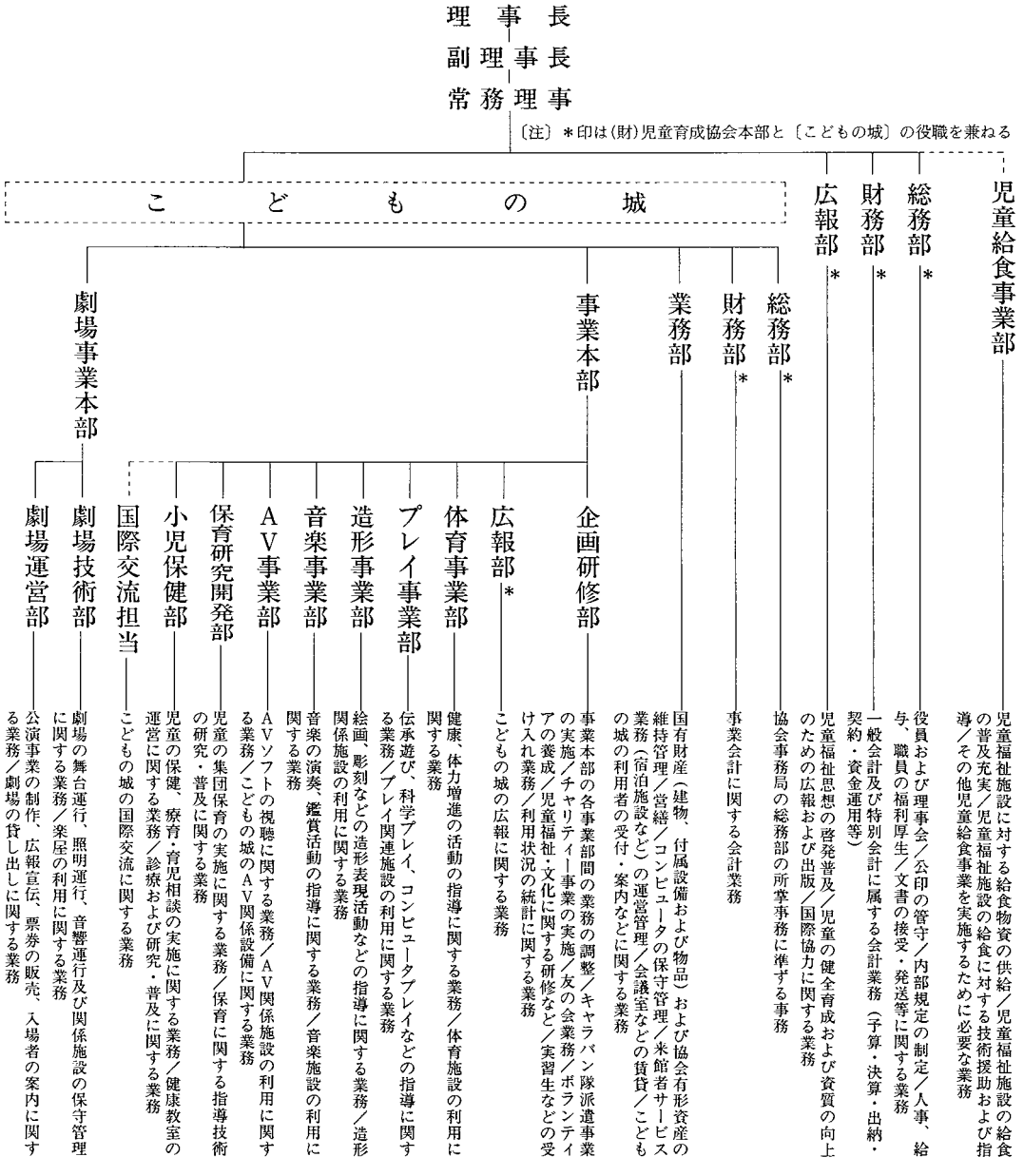
㋐　こども活動エリア

〔こどもの城〕の活動は、①一般来館児・者を対象とした活動　②団体を対象としたグループ活動　③講座・クラブ活動――の３つを柱としている。

「一般来館児・者を対象とした活動」は、〔こどもの城〕に来館した子どもやその家族が楽しみながら参加、体験できる〈あそび〉のプログラムで、毎日「こども活動エリア」で行われている。〈あそび〉をとおして、出会いと発見、そして仲間作りができるように工夫されたもので、初めての子どもでも自然に〈あそび〉の輪のなかに入って楽しむことができる。

平常期間の平日は、スタッフとのふれあいを大切にしたきめ細かいプログラムを、土・日曜日・祝日には、より多くの子どもたちが楽しめるようにプログラム内容などを工夫して対応している。また、学校の季節休み（夏休み、冬休み、春休み）と児童福祉週間（ゴールデンウイーク）、開館記念日（11月１日）の前後を特別期間として、各部門が協力して、たくさんの人が参加できる大型

【〔こどもの城〕組織機構図】（平成12年3月31日現在）



部＼職員数	一般	嘱託	計
総務	7	0	7
財務	7	0	7
広報	3	0	3
業務	20	0	20

部＼職員数	一般	嘱託	計
事業本部	1	0	1
企画研修	7	0	7
体育事業	8	1	9
プレイ事業	8	0	8
造形事業	4	0	4

部＼職員数	一般	嘱託	計
音楽事業	4	0	4
AV事業	6	0	6
保育研究開発	8	1	9
小児保健	5	0	5

部＼職員数	一般	嘱託	計
劇場技術	6	0	6
劇場運営	7	0	7
劇場事業本部	2	0	2
合計	103	2	105

【(財)児童育成協会役員】(平成12年3月31日現在)

役　職	氏　名	
理事長	高　峯　一　世	
副理事長	小　山　敬次郎	さくら総合研究所顧問
常務理事	本　橋　　紘	
理　事	石　野　清　治	(株)資生堂相談役
理　事	大　野　出　穂	
理　事	金　平　輝　子	
理　事	上　村　　一	(社福)恩賜財団母子愛育会理事長
理　事	品　川　正　治	日本火災海上保険(株)相談役
理　事	篠　原　　徹	日本商工会議所常務理事
理　事	成　瀬　健　生	日本経営者団体連盟常務理事
理　事	平　田　寛一郎	
理　事	平　山　宗　宏	日本子ども家庭総合研究所所長
監　事	秋　山　昭　八	弁護士
監　事	藤　間　秋　男	公認会計士

のプログラムを集中的に実施している。

「グループ活動」は、保育所、幼稚園、小学校、ハンディキャップを持った子どものグループなどを対象に、〔こどもの城〕ならではの〈あそび〉のプログラムを提供する活動で、平日の午前中に行っている。グループ活動のプログラムは、活動の中で個が全体に埋没せず、個としての存在も発揮できるよう、一般来館児・者や講座・クラブ活動の経験をもとに作り上げてきたものある。

利用法としては、事前に打ち合わせを行い利用グループの要望を取り入れて実施している。

「講座・クラブ」は、平日を中心に〔こどもの城〕の整った施設・設備を生かして行っている。幼児と親が一緒に受講するもの、就学前の幼児を対象とするもの、小学生から高校生までを対象とするもの、高校生から一般成人、さらに専門家を対象にするものなど50種類を超える講座・クラブを開講している。

(イ) その他の活動

「こども活動エリア」の各部門のほかに、先駆的な保育の実践と保育士などの研修事業を主とする保育研究開発部門、子どもの心や体の健康、育児相談などの家庭支援に取り組む小児保健部門、円滑な事業の推進をはかるための調整やボランティアの養成とコーディネート、全国の児童館などで子どもに遊びを指導する職員などの研修事業を担当する企画研修部門、機関紙「こどもの城ニュース」の編集などを行う広報部門、国際交流部門、ホテルや研修室などの運営にあたっている利用者サービス部門などがあり、〈あそび〉のプログラムをとおして直接子どもたちとふれあう活動だけでなく、研究や研修など幅広い活動を展開している。

(ウ) 青山劇場・青山円形劇場

あらゆる世代の人間が、それぞれの視点で楽しめ、見終わったあとに対話が生まれるような、真の意味での"ファミリー向け"の演目を上演する青山劇場・青山円形劇場の2つの劇場がある。自主公演はもとより、貸し劇場の場合でも、企画の内容を吟味し、〔こどもの城〕の劇場としてふさわしいものを選んで上演している。

❸〔こどもの城〕の組織機構と役員

〔こどもの城〕の組織機構と(財)児童育成協会の役員等は別表のとおりである。

❹平成11年度の事業活動の概要

(ア) 入館者数

本年度の年間入館者数は、一般来館児・者423,789人、劇場入場者416,747人。これに保育、小児保健、講座・クラブ関係の利用者、研修会議室やホテル関係の利用者を加えた総数は984,813人である(13ページ参照)。

(イ) 一般来館児・者活動

【平常期間】

体育、プレイ、造形、音楽、AV(オーディオ・ビジュアル)の「こども活動エリア」では、幼児と母親の来館の多い平日は、親子でゆったり過ごせる環境作りや気軽に参加できるプログラム作りに留意した。父親も含めた親子連れが多い土曜日・日曜日・祝日には、家族一緒に参加できるプログラムの充実をはかると同時に、小学生以上の子どもも満足できるようにプログラムの質にも配慮した。

また、日替わりプログラムや季節行事によって、活動に変化をもたせ、新鮮な魅力、効果を出すように努めた。

【特別期間】

学校の季節休み(夏休み、冬休み、春休み)の期間および児童福祉週間(ゴールデンウイーク)、開館記念日(11月1日:本年度は休館)の前後を特別期間として、多数の来館児・者が同時に楽しめるプログラム作りと効率的な施設利用の工夫をした。

また、屋上など全館を利用した大がかりな企画を各部門協力のもとに開催し、来館児・者に魅力ある充実したプログラムを提供すると同時に、今後に残るプログラム作りに努めた。

夏休み特別期間には、〔こどもの城〕、「東京都児童会館」、「NHK スタジオパーク」、「電力館」、「たばこと塩の博物館」および「天文博物館五島プラネタリウム」の6館共催で「渋谷スタンプラリー」を実施し、渋谷駅周辺の関連施設と共同で PR に努めるなど連携をはかった。

(ウ) 講座・クラブ

継続的・体系的に〔こどもの城〕を利用できるプログラムとして、講座・クラブなどを実施した。講座・講習会は47種83コースで受講者は1,850人、クラブは7種で受講者数949人となった。

このほか夏休み特別期間、春休み特別期間などには体育、造形、音楽などの各部門で短期集中講座(19種、626人受講)を開くとともに、指導者向け講習会(13種、1,060人受講)を実施した。

講座・クラブの運営にあたっては、地域児童の減少、ニーズの多様化などを念頭に入れ、改廃や新設を行い、きめ細やかな対応に努めた。

(エ) グループ活動

保育所、幼稚園、小学校およびハンディキャップを持った子どもたちのグループを対象に、平日の午前中、「こども活動エリア」各部門のプログラムを提供するもので、本年度は112グループ(総計2,661人)を受け入れた。

(オ) 保育研究開発と小児保健

保育研究開発部は、3つの柱である「幼児グループ」「保育クラブ」および「親子教室」を継続して実施したほか、「育児相談研修会」、「育児相談概論研修会」、「保育セミナー」の開催、「子育て支援のニュースレター」(「ニュースレター」を改題)の発行など、保育関係者のための研修プログラムを実施した。

また、児童福祉週間、夏休み、開館記念の各特別期間には一般来館児・者向けのプログラムにも積極的に取り組んだ。

小児保健部は、日常の診療・相談を実施したほか、他部門との連携事業である「健康スポーツ教室〈太りすぎクラス〉」、「母と子のリトミック〈ダウン症クラス〉」、「マタニティ・スイミング」などを継続して実施した。また、小児保健関係者のための「小児肥満のための指導者講習会」、「小児保健セミナー」、0～2歳児の子どもとその親を対象とした「赤ちゃんサロン」を実施した。特に「赤ちゃんサロン」は、毎回100組前後の参加者があり、盛況だった。

(カ) 劇場事業

自主公演は、青山劇場で1公演、青山円形劇場で8公演(15演目)を実施した。このうち、青山劇場での「第14回青山劇場バレエフェスティバル」、青山円形劇場での恒例の「五線譜のなかの動物たち」は、日本芸術文化振興基金の助成対象に選ばれた。

劇場の貸与は青山劇場が20件、青山円形劇場が63件で、両劇場とも年間フルに利用された(117～120ページに公演名一覧)。

(キ) 健全育成活動のセンター的役割としての各種の普及・協力活動

「事業と運営の基本的な考え方」の項でも述べたように、既成のプログラムを越えて実践活動の中から生まれた先駆的で実験的なプログラムを全国的に普及して行く役割を年々充実させてきている。

〔こどもの城〕の活動の趣旨・内容を広く知ってもらい、関係団体との交流をすすめるために各種の事業を行った。

主なものは、「児童厚生員等実技指導講習会」(5月、10月、平成12年1月)、「小児肥満のための指導者講習会」(9月、平成12年3月)、「小児保健セミナー」(10月)、「保育セミナー」(8月)などである。

また、前年度に引き続き各地の児童厚生施設との連携によって、地域の健全育成活動に対し巡回による支援活動と実技指導を行う〈動くこどもの城〉事業を19か所で実施した。さらに、各地の児童健全育成関係者の研修会などに、職員が講師として招かれ〔こどもの城〕のプログラム運営の実際と理念の普及に努めた。

(ク) 利用者サービス事業

〔こどもの城〕を利用する人などへの便宜をはかるため、ホテル、売店、自動販売機および駐車場の営業を行い、サービスに努めた。また、各種の研修や会議などに研修室を貸与し、多くの関係者に利用された。

(ケ) その他の活動

【広報】

〔こどもの城〕の事業の主旨、活動内容の周知および来

館児・者増をはかることを目的として、各種の広報活動を行った。活動の主な柱は、①「こどもの城ニュース」の発行（年11回）　②各種広報資料（ちらし、ポスター、パンフレットなど）の作成　③月刊誌「こども未来」(財)こども未来財団発行）をとおして〔こどもの城〕の活動紹介　④新聞・テレビ・雑誌など各媒体への情報提供――などである。本年度の新聞・テレビなどの取材対応は、外国からのものを含めて186件であった。

【国際交流】

異なった言語、文化基盤をもった児童をまじえた表現活動のための「パフォーミング・アーツ・グループ」を運営したほか、東京・横浜地区のインターナショナルスクールの子どもたちの合同美術作品展「アートスケープ展」をギャラリーで実施するなど、身近にいる子どもたちの自然な国際交流をめざした。

クリスマスには、青山円形劇場で「パフォーミング・アーツ・グループ」の１年間の活動の成果を多くの人々に披露し、国際交流活動への理解を求めた。

【こどもの城友の会】

〔こどもの城〕の活動をより理解し、利用してもらうために家族単位で参加する組織。「友の会通信」を発行し、会員との交流を深めるなど、より魅力的な「友の会」をめざした。常に加入の呼びかけを行い、平成12年３月末日現在の会員数は2,061家族である。

【実習生・研修生の受け入れ】

大学などの要請に応じて、〔こどもの城〕の各部門をフィールドとし、その活動内容を研修対象とする実習生・研修生を受け入れている。本年度は、実習生40人、研修生４人であった。

【チャリティ事業】

ハンディキャップを持つ子どもや児童養護施設の児童などを対象にチャリティ事業を行っている。本年度は、延べ10回、65人を青山円形劇場ならびに〔こどもの城〕の催しに招待した。

❺センター的役割を果たすために

〔こどもの城〕は、10年以上にわたって、従来の児童館などの枠を越えた幅広い福祉・文化の総合施設をめざし、さまざまな試みを繰り返してきた。その間に蓄積してきた知識・経験は少なくない。芸術・文化・科学・スポーツなど多方面から、〈あそび〉に内包されるさまざまな要素をそれぞれの専門分野の視点で見直し、新しい命を吹き込んできた。

これらのノウハウを広く公開し、児童の健全育成に役立ててもらおうと、平成６年度から国の助成を受けて「キャラバン隊派遣事業」（通称〈動くこどもの城〉）が始められた。さらに、前年度から〔こどもの城〕の活動プログラムをまとめた「活動事例集」の発行が加わり、充実した活動が展開されるようになった。

〈動くこどもの城〉は、〔こどもの城〕で開発・実施しているプログラムを持って全国の児童館などの児童厚生施設や文化センターなどに出向き、子どもたちに〈あそび〉のプログラムを提供すると同時に、児童厚生員や保育士などを主な対象にした講習会を開催し、プログラム（運営）の実際を紹介する活動である。〔こどもの城〕のさまざまなノウハウを公開する場であると同時に、全国の児童館・児童センターとの交流・情報交換を進める場として評価されている。本年度は19か所で実施した。

さらに、〈動くこどもの城〉とは別に、講習会・研修会の講師やプログラムの指導を依頼されることが増えている。〔こどもの城〕の活動が評価された結果と自負し、日常活動に支障をきたさない範囲で、これらの依頼にも積極的に対応するようにしている。本年度は、78件の講師派遣を行った。

このほかにも「こどもの城ニュース」の全国の児童館への配付、保育研究開発部門の「ニュースレター」の発行など、さまざまな形で〔こどもの城〕からの情報が発信されるようになった。

❻開館時間・入館料（こども活動エリア）

(ア)　平常期間

〔こどもの城〕の「こども活動エリア」の開館時間は以下のとおりである。

平　日	午後０時30分～午後５時30分
土曜日・日曜日・祝　日	午前10時00分～午後５時30分
月曜日	休館（祝日または振替休日にあたるときは開館し、翌火曜日が休館。開館時間は午前10時～午後５時30分）

(イ)　特別期間

学校の季節休み（夏休み、冬休み、春休み）は特別期間とし、曜日にかかわりなく、午前10時から午後５時30分まで開館した。

夏休み特別期間（７月20日～８月31日）は、本年度より毎週月曜も開館、全期間を通じて開館とし９月１、２、

３日を振り替えて休館とした。冬休み特別期間は12月25日から１月10日で、12月29日～１月２日を年末年始の休館とし、１月３日は午後０時30分に開館した。また、春休み特別期間は３月25日から４月５日で全期間開館し、期間中の月曜日を４月６・７日に振り替えて休館した。

また、本来の児童福祉週間は５月５日からの１週間であるが、４月29日「みどりの日」から５月５日「こどもの日」までのゴールデンウイークを〔こどもの城〕の児童福祉週間特別期間とし、厚生省（当時）、（社）全国児童館連合会（当時）との共催で「こどもフェスティバル」などの特別プログラムを実施した。

さらに、11月１日（ただし、本年の11月１日は休館日）の〔こどもの城〕開館記念日をはさむ、10月30日～11月３日に開館記念「ファミリーウイーク」を全館で実施した。児童福祉週間と開館記念特別期間の開館時間は平常期間と同じとした。

また、横浜開港記念日（６月２日）、千葉県民の日（６月15日）、川崎市制記念日（７月１日）、東京都民の日（10月１日）、埼玉県民の日（11月14日）は、午前10時に開館し、特別行事を企画、多くの来館児・者を迎えた。

(ウ) 入館料

一　　般	18歳未満	400円
	（保護者に同伴される３歳未満児は無料）	
	18歳以上	500円
回　数　券	18歳未満	12枚つづり4,000円
	18歳以上	12枚つづり5,000円
団　　体（20人以上）	18歳未満	320円
	18歳以上	400円

(エ) その他

例年どおり、５月５日の「こどもの日」は18歳未満の入館料を無料とした。しかし、11月１日の「こどもの城開館記念日」は、月曜日のため休館とした。

平成11年度活動一覧表

❶入館者数

	一般利用者			劇場利用者			その他	計
	有料		総数	青山劇場	青山円形劇場	小計		
		(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)
4月	大人	9,915	29,139	33,694	7,765	41,459	13,423	84,021
	子ども	9,478						
	団体	2,576						
	招待など	7,170	推計(34,105)					推計(88,987)
5月	大人	11,602	29,911	42,893	8,042	50,935	12,796	93,642
	子ども	8,387						
	団体	801						
	招待など	9,121	推計(35,719)					推計(99,450)
6月	大人	8,200	24,118	26,287	6,500	32,787	14,809	71,714
	子ども	6,519						
	団体	1,054						
	招待など	8,345	推計(28,227)					推計(75,823)
7月	大人	11,164	31,707	35,681	5,773	41,454	11,981	85,142
	子ども	10,539						
	団体	1,856						
	招待など	7,848	推計(37,295)					推計(90,730)
8月	大人	22,238	63,779	16,893	10,850	27,743	8,393	99,915
	子ども	24,586						
	団体	6,490						
	招待など	10,465	推計(74,905)					推計(111,041)
9月	大人	7,943	22,263	38,982	5,665	44,647	13,228	80,138
	子ども	5,893						
	団体	1,190						
	招待など	7,237	推計(26,239)					推計(84,114)
10月	大人	7,630	22,836	38,226	6,073	44,299	12,703	79,838
	子ども	6,483						
	団体	963						
	招待など	7,760	推計(26,658)					推計(83,660)
11月	大人	8,045	23,074	33,569	5,293	38,862	12,744	76,680
	子ども	6,555						
	団体	888						
	招待など	7,586	推計(27,102)					推計(78,708)
12月	大人	5,766	17,672	22,933	9,092	32,025	9,357	59,054
	子ども	5,103						
	団体	515						
	招待など	6,288	推計(20,564)					推計(61,946)
1月	大人	9,349	29,915	10,605	5,664	16,269	9,680	55,864
	子ども	8,569						
	団体	5,249						
	招待など	6,748	推計(34,595)					推計(60,544)
2月	大人	8,024	25,179	25,135	3,354	28,489	12,593	66,261
	子ども	6,372						
	団体	2,149						
	招待など	8,634	推計(29,195)					推計(70,277)
3月	大人	11,047	43,654	6,482	11,296	17,778	12,570	74,002
	子ども	11,234						
	団体	6,178						
	招待など	15,195	推計(49,185)					推計(79,533)
計	大人	120,923	363,247	331,380	85,367	416,747	144,277	924,271
	子ども	110,018						
	団体	29,909						
	招待など	102,397	推計(423,789)					推計(984,813)

注）一般利用者の推計は，3歳未満児の推定入館者数を含めたもの。
「招待など」は、招待と講座・クラブ受講生を合算したもの。
「その他」は、ホテル・研修室等の利用者。

❷グループ活動実施状況

			保育所	幼稚園	小学校	養護学校	ろうあ学校	盲学校	小学校特殊学級	中学校特殊学級	幼児教室・研究所	自主保育グループ	障害児施設	計
件数			22	32	11	21		3	14	2	1	3	3	112
月別内訳	4月			3										3
	5月		1	1				1			1			4
	6月		3		4	3			3					13
	7月					2								2
	8月													0
	9月		2	1		2						1	1	7
	10月		1		1	8			4					14
	11月		1	1	1	2			3	2				10
	12月		3	1	2							1		7
	1月		2	7		1						1		11
	2月		5	12	1	3		2					1	24
	3月		4	6	2				4				1	17
地域別内訳	東京都	区	21	30	9	12		3	12		1	2	3	93
		市			1	5								6
	他府県		1	2	1	4			2	2		1		13
参加児童数別内訳	10未満					8		2	9	2	1			22
	10～19		14	13		8		1	4			2	2	44
	20～29		5	6	4	3			1				1	20
	30～39		3	3	1	2								9
	40～49			3	4									8
	50～59			1										1
	60～79			5	1									6
	80～99													0
	100～149			1	1									2
	150以上													0
参加児童数	延べ人数		453	1,112	513	286		24	120	7	9	80	57	2,661
	1件当たり人数		20.6	34.8	46.6	13.6		8.0	8.6	3.5	9.0	26.6	19.0	23.8
引率者数			77	161	41	245		20	70	3	2	1	38	658
付き添い者数				93	13	26		12				70	57	271
活動部門	体育		5	8	2	1			3			1		20
	プレイ		11	13	4	2					1		2	33
	造形		2	7	3				1				2	15
	音楽		4	16	5	18		3	8			1	1	56
	AV		1	7	5	1			2	2		2		20
	プレイ自由		21	28	8	9		3	10	2	1	2	1	85
	AV自由													1

注）「活動部門」は、1つの団体が複数の部門を利用するケースがある。

❸講座・クラブなど

〈講座〉

部門	プログラム名	対象	コース	総定員
体育	親子水泳	幼児・親	1年 2コース	60(組)
	幼児水泳	〃	〃 6〃	330(人)
	幼児体育	〃	〃 3〃	120
	小学生水泳	小学生	〃 7〃	380
	シニア・スイミング	小・中学生	〃 2〃	60
	シニア・スイミング・フレッシュ	〃	〃 1〃	30
	小学生体育	小学生	〃 2〃	60
	ジュニア新体操	〃	〃 1〃	35
	シニア新体操	小・中学生	〃 1〃	35
	手足の不自由な子の水泳	小学生	〃 1〃	15
プレイ	キッズクラブ	小学生	〃 1〃	30
	ユースクラブ	小・中学生	〃 1〃	40
造形	こどもクリエイティブクラブ（クレイワーク）	小・中・高校生	〃 2〃	40
	〃 （プリントワーク）	〃	〃 1〃	20
	〃 （絵本の世界へ）	〃	〃 1〃	20
	〃 （ハンズワーク）	〃	〃 1〃	20
音楽	おかあさんもいっしょリトミック	幼児・親	〃 3〃	60(組)
	リズム・ムービング	幼児	〃 3〃	42(人)
	リズム・ムービング&パーカッション	小学生	〃 1〃	15
	合唱講座	〃	〃 1〃	30
	児童合唱団	合唱講座修了者	〃 2〃	90
	ガムラン講座	小・中・高校生	〃 1〃	15
	ガムラングループ	ガムラン講座修了者	〃 1〃	15
	三味線	小学生	〃 3〃	36
	和太鼓グループ	小・中・高校生	〃 1〃	12
	レッツ・プレイ・サンバ	小・中学生	〃 1〃	10
	シンセワーク初級	小・中・高校生	〃 1〃	8
	エレクトリック・アンサンブル	〃	〃 1〃	8
	パーカッション・アンサンブル	〃	〃 1〃	15
	混声合唱	高校生以上	〃 1〃	15
保育	幼児グループ	幼児	〃 1〃	24
小児保健	健康スポーツ教室〈太りすぎクラス〉	小学生	〃 1〃	25
	母と子のリトミック〈ダウン症クラス〉	ダウン症児・母親	〃 1〃	15(組)
国際交流	パフォーミング・アーツ・グループ	小学生	〃 1〃	40(人)
	表現クラブ	幼児・小学生	〃 1〃	20
	親子表現クラブ（YO-YO CLUB）	幼児・親	〃 2〃	40(組)
合計	36種		63コース	1,901

〈クラブ〉

部門	プログラム名	対象	コース	総定員
体育	ダイナミック・ヘルス・クラブ	一般	通年 1コース	会員 180(人)
	レディース・コース	一般女性	〃 1〃	150
プレイ	パソコンクラブ	小・中・高校生	1年 1〃	30
保育	保育クラブ	幼児・親	〃 1〃	400
企画研修	L．I．T．（高校生ボランティア）	高校生	〃 1〃	30
合計	5種		5コース	790

〈講習会(1か月以上のもの)〉

部門	プログラム名	対象	コース		総定員
体育	幼児・母親体育Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	幼児・母親	3か月	3コース	30(人)
	母と子のすくすくランドⅠ・Ⅱ・Ⅲ	〃	〃	3 〃	20
	母と子のパチャパチャスイムⅠ・Ⅱ・Ⅲ	〃	〃	3 〃	30
	成人集中水泳	一般	通 年(月7回)	12 〃	20
プレイ	小学生パソコン教室Ⅰ(初級)	小学生	2か月	1 〃	40
	小学生パソコン教室Ⅱ(中級)	パソコンⅠ修了者	〃	1 〃	20
音楽	おんがく星みつけた	幼児・母親	3か月	3 〃	90(組)
	おとなのためのガムラン	一般	4か月	1 〃	60(人)
保育	親子教室	幼児・親	3か月	3 〃	42
小児保健	マタニティ・スイミング	妊婦(16週〜)	通 年(月7回)	1 〃	35
企画研修	手話講座	高校生以上	5か月	2 〃	60
合計	11種			33コース	607

〈短期集中講習会(1か月未満のもの)〉

部門	プログラム名	対象	コース		総定員
体育	夏休みこども集中水泳	幼児・小・中学生	5日間	4コース	180(人)
	春休みこども集中水泳	〃	〃	2 〃	90
	夏休み体操教室 ガンバ '98	小学生	〃	1 〃	30
	ハッスル '98	水泳7級以上の講座生	3日間	1 〃	30
プレイ	小学生パソコン教室スペシャル	小学生	5日間	1 〃	20
造形	夏休み1日造形教室	小・中・高校生	1日間	25 〃	375
音楽	作って合奏 手作り楽器	小・中学生	〃	13 〃	260
AV	プロフェッショナルビデオ講習会	高校生以上	2日間	2 〃	60
小児保健	夏休みこども1日ドック	小・中学生	1日間	1 〃	10
企画研修	ボランティア講習会	18歳以上	11日間	2 〃	100
	女性ボランティア講習会	一般女性	4日間	1 〃	20
合計	11種	〃		53コース	1,175

〈専門指導者向け講習会等〉

部門	プログラム名	対象	コース		総定員
保育	育児相談研修会	育児相談担当者	3日間(年)	1コース	60(人)
	育児相談概論研修会	保育関係者	1日間	1 〃	130
	保育セミナー	〃	2日間	1 〃	150
小児保健	小児肥満のための指導者講習会	養護教諭等	1日/2日	2 〃	100
	小児保健セミナー	保育士・保健婦等	1日間	1 〃	100
企画研修	こどもの城児童厚生員等実技指導講習会	児童厚生員等	2泊3日等	3 〃	150
	おりがみにつよくなる講習会	保育士・児童厚生員等	1日間	1 〃	120
合計	7種			10コース	810

❹視察・見学実績

（　）内は件数

年度		都道府県・市区町村の本庁その他の行政部局，公共団体		児童館，保育所，幼稚園，学校，施設，サークル，これらの団体		海外からの視察・見学		その他		計	
昭和	60年度	(100)	1,122	(100)	1,578	(22)	169	(18)	410	(240)	3,279
	61年度	(121)	714	(192)	4,085	(52)	359	(31)	513	(396)	5,671
	62年度	(107)	439	(123)	2,437	(36)	347	(20)	477	(286)	3,700
	63年度	(91)	598	(69)	770	(30)	211	(32)	296	(222)	1,875
平成	元年度	(72)	541	(71)	931	(10)	86	(25)	195	(178)	1,753
	2年度	(65)	605	(27)	292	(8)	156	(17)	212	(117)	1,265
	3年度	(63)	417	(47)	705	(11)	77	(6)	274	(127)	1,473
	4年度	(78)	585	(62)	1,038	(9)	122	(6)	35	(155)	1,780
	5年度	(69)	698	(75)	1,182	(14)	119	(9)	41	(167)	2,040
	6年度	(96)	782	(73)	1,251	(13)	144	(13)	116	(195)	2,293
	7年度	(136)	956	(101)	1,542	(19)	273	(16)	94	(272)	2,865
	8年度	(63)	402	(188)	1,691	(19)	139	(8)	48	(278)	2,280
	9年度	(89)	723	(134)	1,335	(14)	229	(24)	43	(261)	2,330
	10年度	(63)	474	(150)	1,470	(26)	204	(24)	145	(263)	2,293
平成11年度	4月	(6)	108	(7)	24	(1)	30	(0)	0	(14)	162
	5月	(2)	13	(22)	63	(3)	33	(3)	6	(30)	115
	6月	(3)	84	(15)	111	(1)	6	(5)	28	(24)	229
	7月	(7)	19	(7)	64	(1)	22	(2)	20	(17)	125
	8月	(3)	26	(12)	56	(1)	23	(1)	2	(17)	107
	9月	(3)	46	(14)	257	(3)	20	(1)	1	(21)	324
	10月	(10)	90	(18)	124	(1)	2	(0)	0	(29)	216
	11月	(14)	226	(19)	80	(1)	11	(2)	5	(36)	322
	12月	(4)	98	(10)	63	(3)	17	(2)	4	(19)	182
	1月	(3)	3	(6)	14	(0)	0	(0)	0	(9)	17
	2月	(16)	106	(26)	82	(1)	6	(0)	0	(43)	194
	3月	(12)	44	(15)	37	(2)	7	(1)	2	(30)	90
	合計	(83)	863	(171)	975	(18)	177	(17)	68	(289)	2,083
累計		(1,296)	9,919	(1,583)	21,282	(301)	2,812	(266)	2,967	(3,446)	36,980

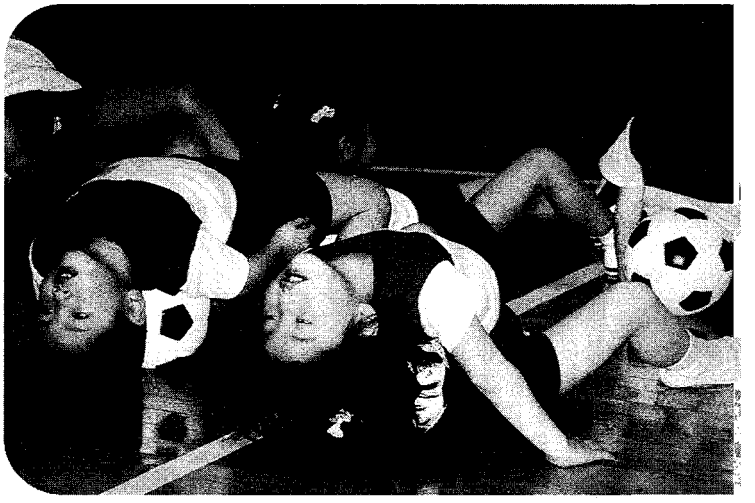
※「海外からの視察・見学」：韓国，中国，台湾，タイ，インド，アメリカ，その他
「その他」：中央官庁，中央団体，会社など

1年の歩み

月　日	事　項
平成11年	
4.11	第14回「こどもの城マタニティーコンサート」（青山円形劇場）
4.29〜5.5	ゴールデンウィーク（児童福祉週間）特別期間「帰ってきたキャスルクエスト―暗黒のラバナ」　みどりの日スペシャル「サンバでフットサル」 こども歳時記「端午の節句」などを実施（5月5日は18歳未満は入館料は無料） ゴールデンウィーク「こどもフェスティバル」（青山円形劇場　5.2〜5）
5.12/19	平成11年度第1回「こどもの城児童厚生員等実技指導講習会（通いの講習会）
5.21	ペルー、フジモリ大統領令嬢がこどもの城を視察
6.12〜8.31	「昆虫の世界特集」（ビデオライブラリー）
7.3〜7	「天までとどけ　ねがいごと」（プレイホール）
7.17〜8.31	ワークショップ「素材との出会い展〜竹と造形」（造形スタジオ）
7.20〜8.31	虫の形態をさぐる「むしむし探検隊」（アトリウム・ギャラリー）
7.23〜8.6	第7回「キンダー・フィルムフェスト・ジャパン」（Bスタジオ）
7.24〜25	ブラジルの武術「カポエイラ」紹介（体育室）「友の会ファミリーキャンプ」（ツインリンク茂木）
7.24〜27	「ちびっこ冒険団」（国立那須甲子少年自然の家）
8.3〜5	月猫えほん音楽会（青山円形劇場）
8.9〜11	青山バレエフェスティバル「バレエと変容」（青山劇場）
8.12〜15	「つくって遊ぼう〜親子工房」（保育室）「ヲーターアドベンチャー '99」（屋上ふしぎが丘」
8.21〜22	アニメーション「撮影・照明」必勝セミナー
8.25〜30	LITの高校生の企画運営「とびだせ! わんぱく探偵団」の実施
8.28〜29	「リトルセブンの冒険」（青山円形劇場）
9.17	北方四島の就学前教育専門家がこどもの城を視察
9.25	1500万人目の入館者、国松由里江ちゃんに記念品
10.14〜31	第13回「青山演劇フェスティバル　〜1999.再生へ」（青山円形劇場）
10.20〜22	平成11年度第2回「こどもの城児童厚生員等実技指導講習会」（児童館の手作りおもちゃ〜創って　遊んで）
10.22	「おまつり〜お店屋さんごっこ・お祭り音頭」（屋上遊園）
10.24	こどもの城友の会「ファミリー・ハイキング」（小金井公園）
10.30/31　11.2/3/6/7	「親子で楽しくレクレーション」（体育室）
10.30〜11.5	「ビデオ・アスレチック」（Bスタジオ）
10.30〜11.7	「うつしトルトル　なぞってアート」（パソコンルーム）
10.30〜11.7	第14回開館記念「こどもの城ファミリーウィーク」「第6回親子体験ワークショップ」（造形スタジオ）
10.30〜11.14	第6回おりがみカーニバル〜ことばで遊ぶおりがみ（アトリウム・ギャラリー）
10.20/21/23	ボランティアの活動発表「あそびのおもちゃ箱」（フリーホール）
12.4.5	バイリンガル・ファミリーシアター「ミセスサンタの宇宙からのEメール」（青山円形劇場）
12.25〜平成12.1.10	冬休み特別起案「木枯らしけちらせ―遊びに熱中！」 作って、あげて　「凧」（フリーホール）
1.3〜9	第12回こどもの城・キリン・ファミリー・オペレッタ　まんぷく村のハムスターキック4「ペットになりたいカラスのお話」（青山円形劇場）
平成12.1.19〜21	第3回こどもの城児童厚生員等実技指導講習会「発見！　子どもグループが育つ児童館」
1.30	エリック・カールのワークショップ「色であそぼう　紙であそぼう〜『はらぺこあおむし』のエリック・カールさんと」（研修室）
2.4〜3.3	「こども歳時記〜桃の節句」（造形スタジオ）
3.1〜12	第15回アートスケープ展（アトリウム・ギャラリー）
3.2〜4	女性ボランティアの活動発表「おやこであそぼう〜あそびのポケット」（フリーホール）
3.18〜20	音楽クラブ合同コンサート「ぼくらのサウンド2000」（青山円形劇場）
3.19	「WA2000　こどもの城体操発表会」（体育室） ボランティアの活動発表「ひらけ！あそびのおもちゃ箱」（フリーホール）
3.23〜(4/3)	こどもの城ファミリーコンサート五線譜のなかの動物たち「パリのいんげん豆II」（青山円形劇場）
3.25〜4.5	春休み特別期間「みるきくさわる感じるあそび」

Ⅱ 各部の活動

体育事業部



平成11年度の活動

25m×５コースのプール、バスケットコート約１面の体育室、体力測定を行う健康開発室、マシントレーニングなどが出来るトレーニングジム。これらのスペースを有効に利用して、一般来館者へのプログラムである一般利用；６か月の乳児から大人までが対象である水泳；体操の講座・講習会；６種類のプログラムが用意してあるグループ活動；大人のためのスポーツクラブであるダイナミック・ヘルス・クラブ（D.H.C）を行っている。夏のキャンプや冬・春のスキースクールなどの野外活動、そして他事業部との協力事業を行っている。今年の主なプログラム「みんなのからだは芸術品」は遊びながらからだのしくみについて考えた。どうして心臓は運動をするとドキドキするのか、肺はゼイゼイするのか等、説明を効果的にするために、独自に作ったキャラクター、心臓の「ドキドキさん」、肺の「ゼイゼイくん」、筋肉の「キンくん」、骨の「コツくん」、関節の「カンくん」、汗の「ポタくん」と一緒にその部位を特に使ってスポーツ遊びをした。特別期間の間はプログラムに参加した人に、これらのキャラクターシールを渡し、５枚集まった子どもにスポーツグッズのプレゼントをした。

❶一般利用

(ア) 平常期間

平常期間の一般利用は土・日曜日と祝日に、プール・体育室・健康開発室において行っている（平日の特定時間にもプールを一般開放）。体育室の活動はさまざまなスポーツ活動と触れ合い、スポーツの楽しさや喜びを感じたり、親子のコミュニケーションがとれる場になるように考えている。幼児から中学生までの参加があり、対象としている幅が広いが、練習内容に工夫をこらしている。最近では小学生の高学年や中学生の参加が増えてきたようである。今年度は単独の祝日（GW等を除く）にはタックルの代わりに腰につけた鉢巻きのようなタグを取る、「タグラグビー」を行った。タックルをしないので安全なラグビーができる。特に小学校高学年は少し練習をすると、パスを回したりステップを踏んで敵をかわしたり、ラグビーのゲームが展開できる。

【体育の日】

サッカーグランプリと題し、サッカーの技術を使ったゲームでグランプリを目指した。壁の角に向けて、２度壁にぶつかるように蹴ったボールが跳ね返りゴールに入るかを競う「カベカベシュート」。自分で持ったボールを上に放り、それをヘディングで的に入れていく「ヘディングショット」。キーパーの代わりにウレタンブロックを置き、それに当たらないようにPKでゴールを目指す「スーパーPK」。障害をよけながらドリブルを競争する「スピードリブラー」と４種目で競い合った。それぞれの種目の１～３位までに賞状と賞品を渡す。サッカーを習っているような上手な子ではなく、幼児が上位に食い込んだりと、参加者だけでなく応援している保護者もおおいに盛り上がっていた。最後は〔こどもの城〕独自のルールで行う「ウォールサッカー」のゲームを楽しんだ。

(イ) 特別期間

特別期間もプールの一般利用と健康開発室での体力測定、体育室のプログラムになるが、体育室のプログラムについては平常期間にはなかなかできない種目を実施したり、その年度の主となるテーマのスポーツを行っている。「みんなのからだは芸術品！」もこの期間に集中して行った。プログラム参加者には「みんなのからだは芸術品！カード」とキャラクターのシールを渡した。５回参加して全キャラクターシールを集めカードを完成させた子どもには、スポーツグッズのプレゼントをした。

【ゴールデンウィーク（児童福祉週間）特別期間】

「みんなのからだは芸術品！」の第一弾。心臓（ドキドキさん）と肺（ゼイゼイくん）について、胸に手をあてて鼓動を感じたりした。プログラムの開始時には、参加者に身体の仕組みについて判りやすく説明をしてから、実際にからだを動かしてみた。特に今回はサッカーやドッジボールなどと種目を限定せずに実際集まった子どもたちの様子や希望によって最後のゲームを何にするかを決定した。何をやるのか判らないので、何度か参加している子はワクワクさせながら「……がやりた～い」と要望をだして楽しんでいたが、中には何をするのか判らないと参加しないような子どももいたので、誰もが積極的に参加出来るように声を多くかけてあげたい。プログラム参加者には「ドキドキさん」「ゼイゼイくん」のキャラクターシールを渡した。

４月29日は、音楽家小澤敏也夫妻によるサンバの演奏で練習やゲームを盛り上げてもらったり、サンバのリズムに合わせて動いたりした。１時30分の回では特別ゲストとして、浦和レッドダイヤモンズのディフェンダーで活躍した元Ｊリーガーの田口禎則氏にサッカーの練習や一緒にゲームを行った。基礎になるキックやヘディングの大切さや練習方法も指導してもらった。

【夏休み特別期間】

「みんなのからだは芸術品！」の第二弾。筋肉（キンくん）、骨（コツくん）、関節（カンくん）を中心に身体が動く仕組みや、それぞれの役割についてプログラムの最初に子どもたちに話をしてからプログラムを展開した。期間を分けて、数種目に挑戦したが、それぞれには「スーパー虫」がいて、子どもたちが挑戦していった。スーパー虫は、その種目に関してすごい力を発揮する設定。実在しない虫だが、どんな虫か自由に発想してもらって「柔らか虫のグニャムリンになってごらん！」と子どもたちに問いかけると、筋肉や関節をグラグラ動かして、自分なりの柔らか虫になっていた。最後に、今日のスーパー虫と活躍した子どもをみんなで拍手した。ゴールデンウィークから渡していったカードやシールを全部集めた子どもが多数になり、夏休み終了時は約50人程になった。カードやシールが欲しくて参加をしていただけではないだろうが、たまにしか来られない子どもがしっかりカードを持ってきてくれたのをみると、カードやシールの効果が出ていた。

夏休みには恒例となっている「トランポリン」では指導者の山田光明氏にデモンストレーションと指導を、カポエイラ・ヘジョナル・ジャパオの矢部良氏とメンバーの方にブラジルの伝統的な武術であるカポエイラの指導と演武を見せていただいた。時間以外でもエントランスホールや４階のホールなど１日中、カポエイラの演武を披露した。

【開館記念特別期間】

《親子で楽しくレクリエーション》と名付けた親子を中心とした、レクリエーション、スポーツ遊びを行った。身近な道具を使ったスポーツ遊びは数年前から行っている代表的なプログラム。ボール、縄はもちろん、新聞紙やタオルなど、家庭でもすぐ身近にあるものを使っている。大きく広げた新聞紙をお腹に付けて手を放し、お腹から落とさないように速く走る「腹巻ダッシュ」などで楽しんだ。

【冬休み特別期間】

「みんなのからだは芸術品！」の第三弾。汗（ポタくん）をメインキャラクターにし、汗の仕組みや役割を覚えながら、汗を沢山かくような鬼ごっこや力試し運動を行った。この時期になると子どもたちもキャラクターの名前をしっかり覚え、場所や役割なども答えてくれるようになった。

【春休み特別期間】

「みんなのからだは芸術品！」の総集編として、前の年のゴールデンウィークから始まったシリーズの総てのキャラクターを登場させ、今までの身体の仕組みについてもう一度考えた。プログラムは「筋肉ムキムキ　キンくんワールド」の力試し運動や「ダッシュ　ダッシュでドキドキさん大集合」はいろいろな走り方に挑戦したり「鬼ごっこでポタくん　こんにちわ」は鬼ごっこでたくさん汗をかいた。人数や対象によって幾つかを組み合わせたり、多く取り入れたりした。春休みで「みんなのからだは芸術品！」としては最終回になったが、キャラクターの力や１年継続して行えたことは、今後のプログラム展開にも新たな方向が見えてきた感じがあった。

❷講座・クラブ・講習会

体育事業部の活動の中心である講座は、１歳からの幼児母親水泳をはじめとして、幼児・小学生・レディースイミングと幅広い年齢層を対象に指導を行っている。講座ごとに担当を決め、その担当を中心に技術レベルにあわせた班分けをし、講座を運営している。受講生には体育・水泳の苦手な子どもが多いので、指導は技術的なことと、親や子どもとのコミュニケーションを心掛けながら、個性的な子どもたちに対応している。技術的にも高度で、クラブ的な要素のあるシニアスイミングクラスは渋谷区の大会や辰巳プールでの長水路の大会などに挑戦した。

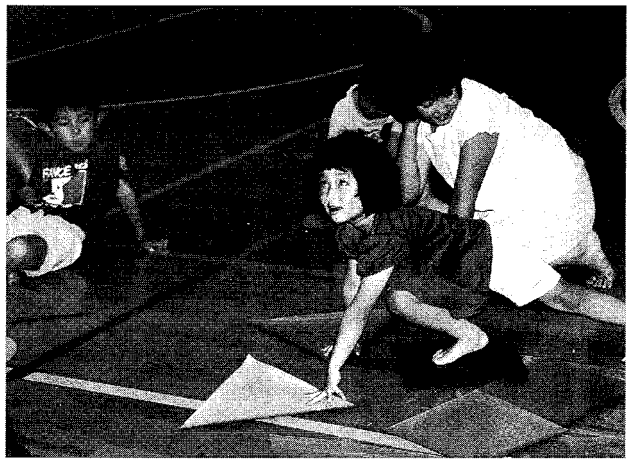
今年度から３学期の講座の回数を９回にし、１回減らした。今までも日程的に大変な部分であったが、今年は10回行うことができない日程になってしまった。その結果、料金・回数に変更を加えた。

(ア) 親子水泳と幼児のプログラム

昨年度から「親子水泳」は、お母さんと子供だけでなく、お父さんが参加できるようにした。水曜日と土曜日に講座があるが、土曜日の講座には沢山のお父さんが受講していた。お父さんが参加することでダイナミックなことでも積極的にやってくれ、講座も活気あるものになった。昨年から継続してきている親子が多かったので、第３期には子どもだけの練習が取り入れられるようになり、今までよりも１歩進んだところまで練習できた。子どもたちも親子での活動なので、安心感があり水泳との最初の出会いが楽しく、好きになるきっかけになっているようである。

「幼児水泳」は３・４歳児のクラスと４・５歳児のクラスに分かれている。３・４歳児のクラスは講座当初は泣いて嫌がる子どももいるが、水に慣れることとプールを楽しめるような活動を心掛けているので、元気良く活動できるようになっている。４・５歳児のクラスでは泳ぐことだけでなく、水の中で巧みに体を動かせるように指導を進めている。一番上の班では、クロールなどで25m泳げる子どもも多くなってくる。３・４歳児のクラスで受講者数が少ないクラスがあるので検討を行った。来年度に時間や対象の変更を行う。

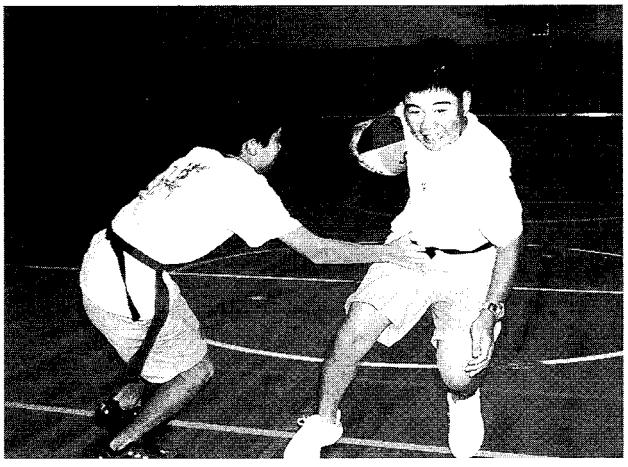
「幼児体育」も３・４歳児のクラスと４・５歳児のクラスに分かれている。一人遊びの世界から、少しずつグループでの運動へと移行していき、遊びの中から運動要素を多くしていく。並ぶこともままならなかった子どもも第３期には全員でリズム体操ができるようになる。４・５歳児のクラスは球技や器械体操を含め、バランスの良い運動体験、基本的な身体の使い方の習得を目標とした。



〈夏休み〉みんなのからだは芸術品！　やわらか虫・グニャムリンに挑戦

(イ) 小学生のプログラム

「小学生水泳」はクロール、背泳ぎから導入してバタフライ、平泳ぎへとつなげていく。以前より早くバタフライ、平泳ぎを始めることでこの２種目の上達が目ざましく、４泳法の習得が以前より早くなってきた。しかし平泳ぎのキックができずに苦労する子どもも多い。今後もより良い指導を目指していきたい。「シニアスイミング」は小学生水泳のステップアップの講座である。ここ数年小学生水泳で上級に合格した子にシニアスイミングを勧めても移行していかず、シニアスイミングの受講生が減少している傾向があったが、今年度はまとまってシニアクラスに変更していった。今後も継続し、魅力ある講座にして、小学生水泳から移りやすい状況を作りたい。「フレッシュ」講座は泳げない中学生や高学年からかなりの泳力を持っている子までいるが、それが良い方向になり初心者の上達も早いようである。人数も多く人気の講座の一つになっている。この夏には渋谷区の大会や辰巳プールの大会に参加をした。週に一度の練習ながらも思っていた以上の成績を上げた。特にフォームは他のクラブの子どもたちよりも綺麗であったようである。ただ泳ぎ込みは不足しているようで、力強さが足りなかった。子どもたちにも指導者にも新たな課題ができ、今後の練習の指針にもなった。子どもたちは普段見せない緊張した一面を見せたが、良い自信にもなったようである。辰巳のプールは50mの長水路のプールであり、普段の25mプールとは違い、なかなか泳ぐ機会も無く、また日本選手権も行っているそのプールで泳ぐことは子どもたちにとって良い経験になっている。


〈夏休み〉捕獲虫・ジャイアントカマキラーに挑戦

「小学生体育」はそれぞれのクラスで目標を作りそれに向かっていった。第1期の始めと第3期の終わりに体力測定を実施し、その指針にした。測定値も上がり、続けて受講した結果がでていた。この講座には運動が得意でない子どもが多く、技術的な練習をするための基礎的な体力トレーニングを行うこともあった。運動体験の少ない子どもが増えてきたように感じる。また水泳と体育の両講座をとれるシステムにしてあるが、都合の良い曜日が選べるので受講者が増えている。バランスのとれた体力作りを目指している。

「新体操」は、手具を扱う巧ち性、柔軟性、ジャンプ等で必要な瞬発力を要求される。ジュニアとシニアのクラスに分かれているが、ジュニアは基礎的な運動（柔軟）から手具を使い、簡単な演技の練習を行う。シニアではそれから一歩進めて個人や団体の演技を、自分たちで作る。ここでは自主性や表現力等を育めるようにしている。大会として東京ジュニア新体操選手権に参加した。個人、団体、チャイルドの部にエントリーした。毎日練習しているクラブの子どもたちとの差はあるが、大会で刺激を受け帰ってくる。年々大会にも慣れてきて、堂々と演技できるようになっている。

「手足の不自由な子の水泳」では、ボランティア・リーダーと一緒に水慣れから始め、徐々に自分にあった泳ぎを見つけられるように指導している。水を怖がっていた子どもも水の中で楽しく活動できるようになり、長く継続している子どもはかなりの泳力を持ってきている。

(ウ) 水泳記録会と体操発表会

「水泳記録会」は1年間の総まとめというような意味と集中して泳ぐ緊張感を味わうことで、1回の泳ぎの大切さを知ってもらう意味がこめられている。幼児、小学生、シニアスイミングの受講生が日々の練習の成果を発揮する場であるのは勿論のこと、他の曜日で練習している子どもたちとの交流や刺激が生まれれば良いと考えている。日頃は人の泳ぎをあまり見ていない子も、真剣な顔で上手な子の泳ぎを見ている。その後の練習でも、参加した子の顔つきが変わっていることもあり、大会の意義を感じる。

「体操発表会」は1部は幼児体育の部、2部は新体操の部とし、演技発表をした。幼児はほのぼのとした感じであるが、子どもの顔は真剣そのもの。緊張しながらも堂々と発表していた。逆に見ている保護者の方がおろおろしている様子も見られた。新体操では日頃の練習以上の演技をする子、投げ上げた手具を落としてしまい、しまったと言う顔をしている子などがいたが、みんな最後まで一生懸命演技をしていた。今年度は「わ」をテーマに和・輪・話と日本的な事に挑戦したり、新体操リングの演技を多く取り入れたりした。音楽家小澤敏也夫妻に音楽物語を、男性スタッフによる和太鼓の演奏、女性スタッフによる扇を使った創作ダンスを行った。

(エ) 成人のプログラム

昨年からレディースコースは13回のチケット制にして「レディーススイミング」3コースと「リズム&ストレッチ」1コースを合わせて4コースの全てを受講できるようにした。以前のシステムでは休むと振り替えがきかなかったが、13回を有効に使い切れるようにした。13回を使い切った方にはさらに6回受講できるクーポン券を発行し、受講してもらった。受講者は当初、以前に受講していた曜日のみの参加であったが、徐々に他の曜日やストレッチコースの方はスイミングなどを、受講するようになってきた。受講者の反応も良いようである。

小児保健部との共同事業である「マタニティ・スイミング」は妊娠16週以降の妊婦を対象に月単位で実施している。夏期には人数も多く活気のある講座になるが、冬期は寒さのため、参加人数が減少する傾向にある。プールでリラックスや、呼吸法の練習等をする。

(オ) ダイナミック・ヘルス・クラブ〔D.H.C〕

成人のスポーツクラブのダイナミック・スポーツ・クラブは、平日の昼間と夕方にプール、体育室、トレーニングジムで体力作りや健康維持を目指し、個人会員、法人会員、ビジターとそれぞれに合った方法で利用してもらっている。シーズンプログラムとして体育室のプログラムを展開、健康作りや技術習得などのきっかけにしてもらっているが、それ以外でもメンバー相互の交流がで

きる場になっている。３か月ごとにプログラムを変更しているが、ゴルフやバスケットボールなどが人気プログラムである。新規会員の確保は入会金100%オフ特別会員募集キャンペーンを行った。また会費も20%オフにして会員の募集に努めた。「渋谷ウォーキング」誌にも数度掲載した。

㈥ 講習会

講座と同じ時間割の中で10回で完結するもの、月７回の成人集中水泳、特別期間に３～５回で完結する集中水泳等がある。講座とは違い開始までに対象年齢に達していれば参加できるので、講座に入る前に経験したい人や、地域的に通いきれない人も参加しやすくなっている。

10回完結の講習会は「幼児・母親体育」、「母と子のすくすくランド」、「母と子のパチャパチャスイム」がある。６か月～３歳までの子と母親を対象にして、講座に１人で参加出来る前の土台作りをしている。「すくすくランド」はお座りができるくらいの乳児が、はいはいでの運動を自発的にすることで、この時期に必要な体力作りや母親とのスキンシップ作りを目指している。全講習終了２か月後には、思い出会として父親を含めて全員が集まり、活動中に撮ったビデオを見たり近況報告やゲームをして過ごす。ここでは同じ年の子どもを持つ仲間作り（家族での交流）ができればと考えている。

「幼児・母親体育」は２～３歳の子どもと母親を指導。親子体操やリトミック的な遊び等を中心に色々な運動を体験している。子どもと触れ合い、共に汗をかくことで信頼関係やコミュニケーション作りができている。始めは親から離れない子どもも一人で元気に体育室を走り回り、遊べるようになった。

「パチャパチャスイム」は幼児・母親水泳講座と同じ年齢対象だが、10回完結なので体験的な意味合いが深い。

「成人集中水泳」は月単位の講習会。前月20日に募集、火・金曜日で月７回行う。水泳経験の無い人から、レベルアップを目指している人が２つの班に分かれて練習を行っている。継続しての受講者はいるのだが、冬季の新規受講者が減少するので、広報等を進めて１年間コンスタントに人数が集まるようにしたい。

春休みと夏休みには「集中水泳」を実施。普段の講座とは違い５日間連続で練習でき、色々な泳法に挑戦したり泳ぐ量を増やしたりできるので、上達も早いようである。夏休みには７級以上の講座生対象のレベルアップ講習会「ハッスル'99」を実施。３日間１時間30分の練習で、質の高い泳ぎを目指す。やる気を持って参加しているので、練習にも熱が入り普段の講座以上に上達していたようである。レディーススイミング受講者の参加もあり、子どもたちに刺激され、お互いに切磋琢磨していた。

㈦ 野外活動

「スポーツキャンプ」はテニスの技術を学んだり、マラソンで体力トレーニングをしたり、栄養を考えた野外料理作り等、合宿的要素が大きいハードなキャンプである。カヌーやプールなどのリラックスタイムがあるが、苦しい練習を乗り越え、帰ってきた子どもは出発前よりひとまわり大きくなった気がする。

「チャレンジキャンプ」は１～３年生で、「何にでも挑戦しよう」を合言葉に山中湖 YMCA センターで開催。今年度のチャレンジは山中湖１周ウォーキングである。１周約15km を全員が歩き通した。途中に道が水没している所もあったが、水の中もどんどん歩きつづけていく子どもたちにたくましさを感じた。

「新体操合宿」は①集中的に練習を行うことで講座では出来ない活動を経験すること。②生活面、精神面での自立を促し、集団活動により協調性を養うこと。この２つを目標とした。講座ではできない集中的な練習だったため、個人の精神面を含めた成長が見られた。

「スキースクールⅠ」はここ数年雪不足に悩まされていたので、日程と開催地の変更を行った。第１期は例年開催している日程で、より積雪量が確保できるであろう妙高高原の池の平スキー場で行い、第２期は正月明けにグリーンピア津南で行った。池の平スキー場は、数年前まで開催していた場所であり、自然の地形を生かしたロングコースが楽しめるゲレンデである。グリーンピア津南のゲレンデは、毎年利用しているのでスタッフにも子どもたちも使い慣れている。この時期は降雪量やゲレンデ混雑も含めて最高の状況で開催できた。ただ、例年暮れの時期にスクールを開催していたので、今回の募集ではその時期の申込みが多く、第２期の参加者が少なかった。今後この時期に開催を続けるならば、広報やリピーターに声かけをして参加者を増やしていきたい。

「スキースクールⅡ」は低学年のキャンプで、雪遊びとスキーレッスンを通じて、自然と多く触れ合うことを目標としている。今回は初めてスキーをする子や１、２度の経験という子どもが多かったが吸収も速く、３日間の練習でスキー場の頂上からの滑走を楽しんでいた。日中は良い天気で、全面滑走可能のゲレンデをおおいに滑走した。夕方や夜中に大雨が降ったが、全プログラムを予定通り実施することができた。最終日の「スノーチュー

ブに挑戦！」では破ったビニール袋を被ってそれで滑り降りた。スキーとは違った滑走感覚、雪とのたわむれ、みんなとても良い顔をしていた。スキースクール全体としては、昨年度の反省を踏まえ、スキーレッスン中に怪我人を出さぬよう、スタッフ間でしっかりと危険な状況や場所を確認しあい、子どもたちにも伝えていった。また休息や声をかけることなどで怪我が防げるので、今後も注意をしていき、怪我人を出さぬようにしたい。

❸グループ活動

グループ活動は、講座との関係で火・木曜日の午前中に実施している。６種類のプログラムがあるが、からだを動かす楽しさや普通ではあまり経験できない種目を紹介、体験ができるようにしている。また利用団体のニーズに対応できるように、数プログラムの中から種目をピックアップして作っている。パラバルーン、フライング・ディスクや数種類の運動要素を組み入れたサーキット運動の実施回数が多かった。最近では幼児の利用が多く、小学生の利用がほとんど無かったが、今年度は数回小学生の利用があった。

❹その他

㈠ 協力事業

「こども１日ドッグ」、「マタニティ・スイミング」、「健康スポーツ教室」、「小児肥満のための指導者講習会」（以上小児保健部）、「ジュニア・アウトドア・スクール」（企画研修部・プレイ事業部と合同）などを行った。

㈡ 動くこどもの城

こどもの城の指導者が地方に出かけ、こどもの城で通常行っているプログラムを、多くの子どもたちや指導者に伝える活動である。フライング・ディスクや身近な道具でスポーツ遊びのプログラムを伝えた。フライング・ディスクのゲームは、運動の質・量等を含め小学生に適した運動であるし、身近な道具でスポーツ遊びは狭い場所でも楽しく活動できるプログラムなので、指導者に好評であった。

㈢ 研究活動

・「小児期からの総合的な健康づくりに関する研究――鬼ごっこ系あそびにおける運動量と平衡性の関係」羽崎泰男；渡邊恒一他著
『厚生科学研究』2000年３月号
・「子どもと生活習慣病」――小児期におけるリスクファクター　肥満　具体的な対応　運動――
羽崎泰男著　『小児科臨床』第52巻（増刊号）
1999年７月号（P.103～P.111）
・『親子といっしょに　こどものダイエット――小児肥満にならないための食生活と運動アドバイス』羽崎泰男　渡邊恒一他著
女子栄養医大出版部　2000年
・「乳幼児の運動と子育て」①～⑥
体育事業部　『保育界』1999.8～2000.2

㈣ 外部指導

親子体操、肥満児予防講習、骨粗鬆症予防講習、レクリエーション指導など、全国各地に指導に行った。

❺まとめ

体育事業部は毎年テーマにそって一般活動を行っているが、今年度は「みんなのからだは芸術品」を年間テーマとし、実体験をまじえながら、人間のからだの優れた機能や仕組みについても考え、どのようにからだを動かしているのかを子どもたちに伝えていった。

今回は、初めて年間を通してのキャラクターを作り、その６体のキャラクターを中心にプログラムを展開したことで、大勢の子どもたちの興味を引くとともに、からだについて考えることの手助けになったようである。また、プログラムに参加するごとに、キャラクターシールをカードに貼り集めてゆくことも、継続して参加することにもつながった。からだを動かす楽しさを知ってもらうのはとても大切であるが、同時にからだの機能を考えることも、体育事業部の活動として必要なことと感じた。

運動のプログラムでは、スポーツと遊びの要素を融合させて、取り組みやすくした「スポーツあそび」からサッカーやドッジボールなど子どもたちに人気のあるスポーツ、また、あまり知られていないスポーツなど、色々なスポーツとの出会いや挑戦も、体を動かす楽しさの一因となれば喜ばしいことである。

遊び広場の減少や、からだを動かすことの少なくなったといわれる子どもたちの健やかな成長を願い、子どもたちとともに汗をかき、子どもたちのすがすがしい笑顔を見ていきたい。

平成11年度活動一覧表

❶一般利用

〈平常期間〉

名　称	期　間	備　考
プール一般利用	土曜日　13:30～16:00 日曜日・祝日　10:30～17:30	各曜日にそれぞれの時間帯で一般開放。18歳以上300円、小1～17歳200円、幼児100円。 レンタル(タオル・水着)各200円。 幼児は保護者が1対1でついて利用。
体育室一般利用 レクリエーションゲーム ニュースポーツゲーム 卓球 ミニサッカー ユニホック	各月 第1日曜日と前日の土曜日 第2日曜日と前日の土曜日 第3日曜日と前日の土曜日 第4日曜日と前日の土曜日 第5日曜日と前日の土曜日	週ごとに内容を変えて行っている。卓球の週は終日卓球のみ(混み合う場合は各グループ20分交代で利用)。他の種目は日曜日の①14:00～　②16:00～の2回、土曜日①14:00～の1回、練習とゲームを行い、それ以外の時間帯はフライングディスクの的当てとフリースローイングを行っている。 利用時間は土曜日が13:30～16:00、日曜日が10:00～17:00。 単独の祝日〔GW、開館記念などを除く〕はタックルのかわりに腰に付いたタグをとるタグラグビーを行った。
体力測定	土曜日 日曜日・祝日	健康開発室で7種目9項目の体力測定を行っている。4歳児くらいから大人までだれでも利用でき、男女別に全国平均値と比べることができる。利用料1人100円。土曜日が①14:00②15:00の2回、日曜日が①11:00②13:00③14:00④15:00⑤16:00の5回。
グループ活動	毎週火・木曜日	午前中を使ってまとまった団体(グループ)を指導する。体育室を使っていろいろなプログラムを展開している。時間は10:00～12:00。
サッカーグランプリ	10.9、10、11	壁にボールを2度ぶつけてからゴールに入れる「カベカベシュート」自分で上げたボールをヘディングで的に入れる「ヘディングショット」キーパーの代わりのブロックを避けてPK戦の「スーパーPK」ドリブル競争の「スピードリブラー」と4つのゲームを作り、サッカーの技術を駆使してグランプリを目指した。
小児肥満のための指導者講習会	7.9	小児保健部との協力事業。体育では運動指導や測定についてのレクチャーおよび実践を行った。時間は10:00～12:00。
第11回水泳記録会	12.12	体育の水泳講座受講者がエントリー（1人2種目1,000円）を行い参加。年齢別・男女別で記録に挑戦。9:30～13:30に実施。幼児17名、小学生以上108名、計125人参加。幼児4種目、小中学生10種目。講座対抗のリレーも行った。
'99こどもの城 体操発表会	3.14	幼児体操受講生と新体操クラブ受講者による発表会。1部の幼児、2部の新体操、それぞれ1年間の成果を発揮し親、祖父母の前で演技を発表した。1部59名、2部40名の参加。外部からのゲストに小澤敏也氏、桜田素子さんをお呼びし音楽物語の上演と男性スタッフと共に和太鼓の演奏をお願いした。女性スタッフのダンスも行った。

〈特別期間〉

名　称	期　間	備　考
〈児童福祉週間〉　みんなのからだは芸術品！　素早く動けば遊びも楽し 心臓と肺(ドキドキさんとゼイゼイくん)について考えた。		
サンバでフットサル	4.29	小澤敏也夫妻によるサンバの生演奏にのせてフットサルを楽しむ。1時の回には元Jリーガー浦和レッズのDFの田口禎則氏の指導とゲームを一緒に行った。
心臓はどこだ、肺はどこだ	5.1～5	さまざまな種目のスポーツ遊びをしながら、ドキドキ・ゼイゼイする心臓や肺の変化を感じた。楽しくからだを動かしながら、からだのしくみについて考えた。
体力測定	4.29～5.5	風船、ストロー、ピンポン玉などを利用して、心肺の機能を測定をした。 通常の測定と違い、無料で開館時間中オープンしていた。
スポーツカードの配布	G・W、夏休み、 冬休み、春休み	期間中に体育室のプログラムに参加した人にカードを渡した。プログラム1回参加で、5種類のキャラクターシールを1枚渡し、5種類揃えた人にプレゼントをした。

名　称	期　間	備　考
〈夏休み〉みんなのからだは芸術品！part II　目一杯つかってみよう自分のからだ！　動きをつくりだす小道具。 各回ともスーパー虫に挑戦しながらからだのしくみや動き(筋肉・キンくん、骨・コツくん、関節・カンくん)について考えた。		
(やわらか虫) グニャムリンに挑戦	7.20〜23 ダンスゲーム	赤青黄緑のシート(それぞれ丸・三角・四角があり、30cm 大)を使う。リズムに乗ってシートを踏んだり、両手足を柔軟に使いシートをタッチするゲームをした。
ブラジルの武術 カポエイラに挑戦	7.24〜25 カポエイラ	ブラジル伝統の武術であるカポエイラを、カポエイラ・ヘジョナル・ジャパオの矢部良氏指導をお願いし、初歩の動作やキックの練習と演武を見せてもらった。
(対戦虫) クワカブトンに挑戦	7.26〜8.1 ドッジボール・対戦ゲーム	1対1で片手をつないでお互いにお尻を叩き合うゲームから、2対2やチームで対戦をするゲームをした。色々なドッジボールを楽しんだ。
(ジャンプ虫) 将軍バッタに挑戦	8.2〜6 ステップあそび・バスケットボール	ダンスゲームで使ったシートをちりばめ指定された色や形の上を軽やかにステップを使い走り抜けた。ポートボールやバスケットボールの練習とゲームを行う。
跳べ！跳べ！ トランポリン	8.7、8 トランポリン	夏休み恒例になっているトランポリン。山田光明氏の指導で基礎の跳躍からお尻で跳んだり向きを変えたりした。見た目よりもハードな運動である。
(素早い虫) スピーディースパイダーに挑戦	8.9〜15 サッカー	ラダー(なわばしご)やミニハードルを使って、素早く動く練習やゲームを行い、(こどもの城) 独自のルールである「ウォールサッカー」のゲームを行った。
(捕獲虫) ジャイアントカマキラーに挑戦	8.16〜22 ラグビー カバディ	お尻につけたしっぽを取り合う、しっぽ取りから、タックルの代わりに腰に付けたタグをとるタグラグビー、相手を捕まえる時は声を出し続ける、カバディを楽しんだ。
むし・ムシ 大運動会	8.23〜27 総合	虫の形態や行動をもじったゲームを行う。ジャンケンに勝って進化する進化ジャンケンや、上を向いて両手足で移動しながら障害を乗り越えるクモリレーで盛り上がる。
(力虫) 力ころがしに挑戦	8.28〜31 綱引き	力を使うゲームに挑戦した。2人で向かい合って手のひらで押したり引いたりして相手のバランスを崩すゲームや、綱引きをした。綱引きは親が多く参加してくれる。
〈　〃　〉 ちびっこプール	7.18〜8.31	5階屋上に仮設プールを設置、一般に開放。利用料200円、レンタル(タオル・水着)各200円。
〈　〃　〉 こども一日ドック	7.22	小児保健部との協力事業。体力測定など運動面の指導を担当。
〈開館記念〉 親子で楽しく レクリエーション	10.30、31 11.2・3・6・7	ボールやなわなどの道具を使い、からだを動かして親子で楽しめるスポーツ遊びを行った。

名　称	期　間	備　考
〈冬休み〉みんなのからだは芸術品！part III　汗・ポタくんについて考えた。		
「汗」力をこめて 2000年	12.25、26、28 1.3〜10	「汗」の秘密にせまりながら、汗をたくさん流して鬼ごっこや力を使うゲーム、綱引きのゲームで楽しんだ。
〈春休み〉みんなのからだは芸術品！総集編		
動いて感じる 体のしくみ	3.25〜4.5	みんなのからだは芸術品のまとめとして、心臓のドキドキや肺がゼイゼイすることを感じたり、筋肉・骨・関節を沢山使って、柔軟運動や力試し運動を。そして鬼ごっこなどで汗をかいて、からだのしくみについて考えた。
〈　〃　〉 こども一日ドック	3.10、11	小児保健部との協力事業。体力測定など運動面の指導を担当。
体力測定	特別期間中	健康開発室で7種目9項目の体力測定。男女別に全国平均値と比べることができる。
プール　一般利用	〃	10:30〜12:00　13:30〜17:30に一般開放。(プログラムにより変更あり)

❷講座・クラブ

〈講座〉

名　称	対象・定員	受講数	曜日・日時	備　考
	(組)	(組)		
親子水泳　A	親子	①　31	水曜日　10:00～11:00	今年度から親と子の水泳教室とし、お父さんの参加を促す。
	(30)	②　28		ダイナミックな動きなどは、さすがお父さんと思わせた。
		③　21		親子での参加であるので子供も安心して出来るようである。
〃　B	〃	①　31	土曜日　〃	受講料＝1期・2期27,000円、3期17,000円。
		②　31		
		③　28		
	(人)	(人)		
幼児　水泳　A	3・4歳児	①　8	火曜日　13:30～14:30	単に泳法の修得だけでなく、陸上と同じように水中でも楽しく活動できるように指導。プールでの活動を通して、水に慣れることやバランスよく水に浮く感覚など、水泳に必要な運動の基礎を身につける。クラスの人数も少ないので、ゆったりとした雰囲気で行われている。 6段階にレベル分けをして、次のステップへの目標としている。 受講料＝1期・2期21,000円、3期14,000円。
	(50)	②　11		
		③　7		
〃　B	〃	①　32	水曜日　〃	
		②　33		
	〃	③　32		
〃　C		①　12	木曜日　14:00～15:00	
		②　11		
		③　11		
幼児　水泳　D	4・5歳児	①　31	火曜日　14:30～15:30	水慣れから泳ぎへと個人差に応じた班分けを行っている。クロールなどの練習のみならず、幼児期に必要な水中感覚を得られように指導を行っている。6段階にレベル分けをして、次のステップへの目標としている。
	(60)	②　30		
		③　33		
〃　E	〃	①　39	木曜日　15:00～16:00	受講料＝1期・2期21,000円、3期14,000円。
		②　52		
		③　45		
〃　F	〃	①　26	金曜日　14:30～15:30	
		②　29		
		③　33		
幼児　体育　A	3・4歳児	①　14	火曜日　14:30～15:30	たくさんの友だちと一緒に思い切り体を動かし、運動遊びリズム遊びなど楽しく動きながら健康な体や運動の基礎をつくる。
	(40)	②　12		
		③　12		
〃　B	〃	①　21	水曜日　〃	
		②　29		
		③　23		
〃　C	4・5歳児	①　37	木曜日　15:00～16:00	幼児体育A・Bを土台にして、それを発展させながら様々な運動を体験し身体の使い方を学んでいく。
	(40)	②　39		受講料＝1期・2期19,000円、3期13,000円。
		③　38		
小学生水泳　A	小学生	①　55	水曜日　14:30～15:30	生涯楽しめるスポーツ「水泳」を基礎から学び、4泳法をマスター。シニア・スイミングへのステップアップを目標。
	(60)	②　52		
		③　41		各学期の後半に進級テストを実施(10級～1級)。次への目標としている。
〃　B	〃	①　38	火曜日　15:30～16:30	受講料＝1期・2期21,000円、3期14,000円。
		②　26		
		③　25		
〃　C	〃	①　46	水曜日　〃	10級　顔付け　もぐり　息こらえ　ボビング　水なれ
		②　45		9級　伏し浮き　背浮き　板キック　ボディーイメージ1
		③　36		8級　伏し浮きキック　背浮きキック　ボディーイメージ2
〃　D	〃	①　46	金曜日　〃	7級　ノーブレクロール　バックキック　ボディーイメージ3
		②　40		6級　クロール・バック(12.5)　ブレスト・バタフライ(キック)
		③　33		
〃　E	〃	①　50	木曜日　16:00～17:00	5級　クロール・バック(25)　ブレスト・バタフライ(リズム)
		②　55		4級　クロール・バック(50)　ブレスト・バタフライ(呼吸)
		③　45		
〃　F	小2以上	①　38	火曜日　16:30～17:30	3級　ブレスト(50)　バタフライ(25)　個人メドレー(タイム)
	(40)	②　36		2級　個人メドレー(100)(タイム)
		③　20		
〃　G	〃	①　24	木曜日　17:00～18:00	1級　個人メドレー(200)(タイム)
	(40)	②　22		
		③　26		

名　称	対象・定員	受講数	曜日・日時	備　考
シニアスイミング A	小・中学生 (30)	① 6 ② 5 ③ 6	火曜日　16:30～18:00	小学生水泳からの移行の場であり「シニアスイミングB」へのステップとしての役割もあるため、基礎体力の向上と4泳法の完成を中心に行った。
〃 B	〃	① 15 ② 12 ③ 13	水曜日　〃	個別のメニューを組んでより速く泳ぐことにチャレンジする上級者向けのコース。水球も経験する。指導者の推薦が必要。
シニアスイミング フレッシュ	小3～中学生 (30)	① 27 ② 23 ③ 21	金曜日　〃	小学3年生以上で泳ぎが不得意な人のクラス。クロールで25m以上泳ぐことを第一目標に練習を進める。90分の練習とあいまって上達の度合いが大きかった。 受講料＝1期・2期21,000円、3期14,000円。
小学生体育 A	小学生 (30)	① 18 ② 27 ③ 25	火曜日　15:30～16:30	器械体操、球技を中心に多種多様な運動経験をし苦手な種目を克服する。 受講料＝1期・2期17,000円、3期11,000円。
〃 B	〃	① 30 ② 31 ③ 22	木曜日　16:00～17:00	バランス良い発達が出来るよう体操と水泳の2講座の受講が出来る。 受講料＝1期・2期25,000円、3期17,000円。
ジュニア新体操	小1～3の女子 (35)	① 20 ② 20 ③ 20	水・金曜日　15:30～17:00	はねたり、跳んだり、回ったり、リボンやボールを使って楽しく身体を動かす。基礎的な運動も含めた新体操の初歩を指導。 受講料＝1期・2期26,000円、3期19,000円。
シニア新体操	小3～中学生の女子 (35)	① 23 ② 24 ③ 18	水・金曜日　16:30～18:00	ジュニアから一歩進んで新体操独特の美しい表現ができるような練習。創作活動や発表会も開催。 受講料＝1期・2期26,000円、3期19,000円。
手足の不自由な子の水泳	小・中学生 (15)	① 5 ② 5 ③ 5	土曜日　17:00～18:00	身体に障害があり、水泳の機会に恵まれない小・中学生を対象にし、スタッフ・ボランティアの個人指導を中心に楽しく活動。 受講料＝1期・2期16,000円、3期10,000円。
レディースコース	女性	① 79 ② 75 ③ 69		レディースのスイミング3コース、リズム&ストレッチ1コースを合わせてレディースコースとし、13回チケットでどこでも参加できるようにした。13回終了後は6回分の追加チケットを発行する。 受講料＝1期・2期21,000円　3期16,000円。 クーポン券(6回)5,000円。
スイミング			火曜日　10:00～11:00 木曜日　〃 土曜日　11:00～12:00	生活習慣の中に定期的な運動を取り入れることが健康づくりの第一歩。各クラスとも4班編成で、各自のレベルに合った班を選択し、クロールの練習から4泳法の修得を目標に健康づくりをしている。
リズム &ストレッチ			水曜日　10:00～11:00	ゆったりと気持ちのよいストレッチと軽快なリズム運動、楽しく動きながら明日への活力を生みだす。
健康スポーツ教室（太りすぎクラス）	太りすぎの小学生とその親 (25)	① 12 ② 14 ③ 15	土曜日　16:00～17:00	小児保健部との協力事業。医師によるチェック、栄養士によるチェック、体育指導者による体力チェック、この3者が協力してトータルな活動を行う。 受講料＝1期・2期22,000円、3期19,000円。
マタニティ・スイミング	妊娠16週以降の妊婦 (35)		火曜日　11:00～12:00 木曜日　〃	小児保健部との協力事業。水泳プログラムを通して、妊娠中を楽しく過ごすためのクラス。医師が活動前後にチェックを行い、活動中も不測の事態に備えて常駐する。お産や子育てに関するレクチャーや栄養・心理の相談も受けられる。 受講料12,000円(月7回)。

講座回数＝1学期13回　2学期13回　3学期9回(新体操は週2回)



チャレンジキャンプ「ウォーターゲーム」に挑戦

〈クラブ〉

名　称	対象・定員	受講数	曜日・日時	備　考
ダイナミック・ヘルス・クラブ（D. H. C）	成　人 メンバー ビジター 法　人 その他	（人） 年間延 8,295 403 233 404	火～土曜日 12:00～13:30 18:00～21:00 日曜日・祝日 18:00～20:00	18歳以上の大人のためのクラブ。プール、体育室、ジムほかを利用し体力作り、健康管理のために最適な環境で楽しく活動。個人会員は、入会金100%オフ、会費20%オフキャンペーンを実施して、新規会員の募集に努めた。 入会金０円、年会費50,000円、４か月20,000円、月会費5,500円、利用料（利用の都度）300円。 パス券（月3,000円、４か月11,000円）ビジター1,500円。
	計	9,348		渋谷ウォーカーに掲載。

〈講習会〉

名　称	対象・定員	受講数	曜日・日時	備　考
幼児・母親体育	（組） ２・３歳児と母親 （30）	（組） ① 20 ② 27 ③ 25	水曜日　11:00～12:00 ①②学期は10回 ③学期は９回	親子が体育室でリズムに合わせてはね、跳び、走るうちに運動神経を養い、楽しさを身につける。受講料＝１期・２期19,000円、３期17,000円。
母と子のすくすくランド	お座りのできる子～ （20）	① 23 ② 23 ③ 20	金曜日　10:00～11:00 ①②学期は10回 ③学期は９回	はいはいから歩行へと成長していく時期の赤ちゃんを対象に、楽しい体操や親子での遊び、お母さんのシェープアップも。 受講料＝１期・２期23,000円、３期21,000円。
母と子のパチャパチャスイム	１・２歳児と母親 （30）	① 22 ② 21 ③ 16	金曜日　10:00～11:00 ①②学期は10回 ③学期は９回	楽しくプールの活動をして、水慣れとともに母子のコミュニケーションを深める。 受講料＝１期・２期25,000円、３期23,000円。
水泳集中講習会	18歳以上の男女 （月20）	延べ 140	火・金曜日 18:00～19:00 （各月７回）	18歳以上の初心者やレベルアップを考えている人の集中水泳講習。月ごとに募集を行い、各月の講習種目に合わせて指導を行う。 受講料＝10,000円（月７回）。

〈短期講習会〉

名　称	対象・定員	受講数	曜日・日時	備　考
春休みこども集中水泳講習会A	（人） 小学生（50）	（人） 50	4.1～5　9:30～10:30	５日間の集中練習で泳力アップといろいろな泳法体験。 受講料＝7,000円。
〃　B	幼　児（40）	40	〃　10:30～11:30	
夏休みこども集中水泳講習会A	小学生（50）	51	7.21～25 9:30～10:30	５日間の集中練習で泳力アップといろいろな泳法体験。 受講料＝7,000円。
〃　B	幼　児（40）	40	7.21～25 10:30～11:30	
〃　C	小学生（50）	50	8.18～22 9:30～10:30	
〃　D	幼　児（40）	41	8.18～22 10:30～11:30	
ハッスル'99	水泳講座生 ７級～（40） レディース （15）	 9 9	7.29～31 9:30～11:00	クロールが泳げる講座生以上の泳力アップ特別プログラム。レディーススイム受講生にも募集をおこない、個々のレベルアップを目指した。 受講料＝7,000円。
ガンバ！'99	小学生（30）	30	8.18～22 9:30～10:30	器械体操や球技などの基本動作を習得する、体操の苦手な子の体操教室。 受講料＝6,000円。

〈野外活動など〉

名　称	期　間	備　考
新体操　合宿	7.10、11	小・中学生　7人参加。新潟県越後中里 MARUZEN 旅館。第11回東京ジュニア新体操選手権大会参加のための、選抜メンバーによる強化合宿。
新体操　夏合宿	7.30〜8.2	新体操講座生29人参加の技術向上を目指した合宿。福島県棚倉町・旭屋旅館。練習は勿論のこと、仲間との親交を深めた。お互いに切磋琢磨している姿が見られた。
スポーツキャンプ	8.5〜8	小3〜中学生28人参加。新潟県グリーンピア津南3泊4日の中で、テニスの技術の習得やカヌー、ランニングと合宿的な要素のキャンプを行った。
チャレンジキャンプ	8.25〜28	小1〜3年生45人参加。山梨県 YMCA 山中湖。みんなでチャレンジ！が合言葉の低学年の体験キャンプ。山中湖1周(約15キロ)ウォーキングにやウォーターゲームに挑戦した。
スキースクール　I 1期	12.25〜28	昨年までは年末にグリーンピア津南で90名の募集で開催したが、降雪状況などを考慮して、開催地を分けて実施した。 1期、小2〜中学生　45人、参加。新潟県妙高高原池の平スキー場にて実施。 積雪量は多くなかったが、全面滑走でき充分なレッスンが行えた。 2期、小2〜中学生　33人、参加。新潟県グリーンピア津南にて実施。 積雪量、雪質、そしてゲレンデの利用者も少なく良い条件でレッスンを展開できた。 1期に参加予定していた人が多く、2期の参加が不足したが初めの一歩を踏み出せた。
スキースクール　I 2期	1.4〜7	
スキースクール　II	3.28〜31	小学1〜3年生45人参加。新潟県グリーンピア津南。コテージに宿泊し、スキーや雪遊びで雪と親しむ低学年キャンプ。

❸その他

〈講師派遣〉

名　称	期　間	主　催	会　場	講　師
骨粗鬆症予防　講習会	4.1　〜全12回	横浜市衛生局保健所	横浜市各保健所	羽崎・山崎
室内スポーツあそび	6.23	板橋区児童女性部	板橋区産文ホール	渡邊
少年少女スポーツ指導者講習会	11.24	品川区教育委員会生涯学習部	品川区立大間窪小学校	羽崎
子育てひろば0.1歳児親子あそび	11.30	調布市福祉部	調布市多摩川児童館	中村
乳幼児の親子あそび	12.9	保谷市保健福祉部子育て推進課	保谷市下保谷児童館	中村
親子であそぼう	12.2.1	杉並区今川児童館	今川児童館	大関
親子であそぼう	3.11	大野南地区健康づくり運動普及員協議会	大野南公民館	大関



体操発表会

プレイ事業部



平成11年度の活動

はじめに

プレイ事業部では、プレイホールや屋上、コンピュータプレイルームやパソコンルームを担当し、子どもたちの遊びの活動を広げるため、次に述べる三つの考え方を軸にさまざまなプログラムを実施した。

第一には、「遊びの空間整備」である。遊びの空間を整備するということは、単に遊び場所を確保するということだけではない。子どもたちの発達年齢や、遊びの種類を考えてスペースと遊具を整え、遊び場のルール、さまざまな遊びのプログラム、そして子どもたちの遊びを支援するリーダーも配置し、彼らの活動を援助することである。

第二には、「児童文化、子どもの遊び文化をテーマにしたプログラムの提供」であり、季節の行事や折り紙といった伝承的なものから、コンピュータを使った遊びまで幅広く考えた。

第三には、「子どもたちの交流を促進するプログラムの展開」である。幼児期に遊び場所で他の子どもと出会うことから始まり、子どもたちが遊びを通して相互理解を進め、人間関係を深めていくことは、子どもの社会性の発達に非常に大切な要素である。この点をプレイ事業部は、活動の中心と考えた。

今年度は、近年増えてきた乳幼児と母親のための幼児コーナーの増設が課題となった。また、とくに交流を促進するプログラムは、他の団体からの照会や、講師依頼も増え、子どもたちの置かれている社会的な状況からも、より充実させるべき活動となってきた。

❶一般利用

(ア) 遊びの空間作り

〔こどもの城〕に来館した子どもたちの多くを最初に受け入れる場所として、プレイホールは大切なスペースである。ここでは、乳幼児から小学校高学年・中高生までの幅広い年齢の子どもたちが思い思いに自分の遊びを見つけて活動をしている。それぞれの年齢層にあった遊びのコーナーの設定を検討し、プレイホールが利用者の状況に応じた魅力ある遊び場になるように計画した。

【幼児コーナー・高学年コーナー】

今年度は、特に乳幼児を連れた母親の利用が増加した。乳幼児を持つ親子のプログラム（赤ちゃんサロンなど）の影響と思われるが、従来の0歳から2歳児コーナーだけでは足りず、ブロックコーナーで子どもをベビーカーから降ろして遊ばせたり、幼児向けのアスレチック遊具「わくわくらんど」で遊ばせる姿が見られるようになった。その中で、動きの大きい子どもとの接触や、運動能力に合わない遊具でのケガなどが見られるようになり、乳幼児が落ち着いて遊べる空間の整備が急がれた。今後は乳幼児の安全な遊び場の確保と、自然な形での母親同士の交流が進むようなプログラムが望まれる。

また、高学年コーナーでは、今まで利用してきた常連の子どもたちと、新しく常連になりつつある子どもたちが入れ替わりはじめた。学年が上がったり、講座やクラ

ブが終了したなどの理由が上げられるであろう。このコーナーにはバンパーという人気遊具があり、年に２回、春分の日と秋分の日にバンパー大会を実施している。学年も上り、平日には来ることができなくなった常連の子も多いが、このバンパー大会には続けて参加しており、新旧の常連の子どもたちにとっての交流の場となる。例年、小学生の部と中高生の部は、時間帯をずらして実施していたが、今年度は、同じ時間、場所で実施し、より幅の広い年齢層の子どもたちの交流が進むよう考慮した。

【ファミリープレイタイム】

昨年度、「遊びのワークショップ」を開始するにあたり、一昨年度末をもってファミリープレイタイムは、親子に対しての特別なイベントから日常的な活動として発展するために一端終了した。しかし、１年間の「遊びのワークショップ」の活動を経験し、家族を対象とするプログラムを考える中で、親子で一斉に活動するからこそ、できる活動を紹介する場として今年度復活することとした。再開するにあたり、今までのスタイルで実施すると１回に限られた組数の家族しか受け入れられなかったので、１期に一度は、当日受付を作ること。また参加組数が多いプログラムは、できるだけ多くの家族に参加してもらうための受付方法を検討することにした。実際には、１期から参加希望も多くあり、当日申込みの回も盛況であった。受付方法についても、各回の１か月前からの申し込みとし、活動日の紹介は学期ごとにチラシ等を作成した上でそれぞれの受付を行った。

【ファミリー・プレイ・タイム　実施プログラム】

4月24日	ファミリーわなげ大会（ゲーム大会）	年中児以上	30組66人
5月22日	オリジナル七宝焼風ブローチ（アクセサリー）	年長児以上	12組24人
6月12日	お父さんと三つ馬を作ろう！（父の日特集）	小学生父子	11組23人
7月11日	パクパク人形で遊ぼう！（劇あそび）	年中児以上	8組18人
9月15日	押し花カードを作ろう（敬老の日特集）	年長児以上	15組34人
10月９日	棒巻きパンを焼こう（野外クッキング）	年少児以上	14組30人
11月14日	おもしろチャレンジゲーム!!（ゲーム大会）	年長児以上	12組33人
12月12日	2000年カレンダーを作ろう（パソコン）	年長児以上	14組33人
1月22日	ぐにゃぐにゃ凧を作って遊ぼう（クラフト）	年少児以上	11組24人
2月11日	お城ビンゴラリー　（ゲーム大会）	年長児以上	16組34人
3月19日	焼き板ドアプレート（アウトドアクラフト）	年中児以上	8組17人

(イ) 児童文化、子どもの遊び文化をテーマにした活動

【季節の行事】

核家族化の進む現在、家庭の中からも、社会からも季節行事を祝う習慣が失われつつある。忘れられつつある日本の伝統行事、歳時記を季節に合わせて取り上げ、紹介する機会を設けた。大人でも知らなかった古くからの言い伝えや、事の起こり、行事に込められた願いなどを遊びのプログラムとして、わかりやすく子どもたちに伝え、さらに家庭でも祝えるようにというのがねらいである。

今年は、伝承していくことに加えて、親子、また、子ども同士が行事を介して遊べるようにプレイホールでの遊びの仕掛けを試みた。

七夕行事「天までとどけ願い事」では、「動物の願い事さがし」を行った。「わくわくらんど」の中に動物のイラストとその動物にちなんだ願い事をバラバラにして掲示し、組み合わせをさがして遊んだ。

ひなまつり行事「みんなでひな祭り」では、サブテーマを「ひなまつりを遊んじゃおう！」として、女の子だけでなく、プレイホールで遊んでいる男の子も親も一緒になってラリー形式でプレイホールを遊んでまわるゲームを行った。「わくわくらんど」を中心に課題を隠し、参加者は受付でもらう指令書を頼りに課題を解きながらゴールをめざす。課題は、絵探し・貝合わせ・空き缶雛壇積み・カード交換など、内容は低年齢の子どもの参加が多いので、知識的な伝承ではなく、見慣れている雛人形を題材に選んだ。

また、ボランティアリーダーは、運営に関わることで、子どもとの会話から行事の意味や風習などを話題として伝えていく立場の人となるので、打ち合わせでは行事についても理解をしてもらうようにした。行事が、知識の伝承で終わることのないように、コミュニケーションを図る活動になるように考えていきたい。

【人形劇ネットワークじゃんぐるじむの活動】

東京近郊の大学の人形劇サークルや児童文化研究会でメンバーを構成している「じゃんぐるじむ」は、1991年に結成された。人形劇を中心に子どもたちのために活動をしている大学生同士が情報交換をしたり、一緒に活動することでネットワークを広げていこうということを目的に発足した。〔こどもの城〕では、「じゃんぐるじむ」の発足当時から活動の場を設けたり、運営の助言をした

りなどの支援を進めた。

「じゃんぐるじむ」の活動の機会として、〔こどもの城〕を会場として5月と12月に人形劇フェアを行った。5月は、人形を作る、作った人形で遊ぶ、人形劇を見るというワークショップ形式のプログラム。そして12月は人形劇やパネルシアター、絵本など、各大学ごとに上演を行った。学生たちは、発足以来支えてくれている「パペットマーケット」(人形劇情報センター)の力を借りて、企画から当日の運営まで携わった。

「じゃんぐるじむ」のこのような活動には、多くの学生が参加している。その学生が関わることで、子どもたちは人形劇をより楽しみ、また他の人との会話、交流を楽しんだりと、豊かな時間を過すことができる。これは学生一人ひとりの持っている温かく優しい雰囲気が子どもたちに伝わり、その雰囲気が会場全体にも広がっていくからだ。

このような活動の機会を設け、子どもたちに関わろうとしている人(学生)たちの活動を支援することも大切な事業であると考えている。また支援をしていく上で忘れてならないことは、学生の自立を促すようなアプローチをしていくことである。

(ウ) 子どもたちの交流を促進するプログラム

遊びとは本来、誰に強制されるものでもなく、自発的に何かに興味や関心を抱き、自ら進んで取り組み、楽しい、面白い、気持ち良いなどの感情を伴う活動である。本能的に快適な感情が得られるから、できるだけ長引かせたいとか、もっと面白くしたいという意欲が出る。だから遊びの中で「回りの人ができるのに自分ができないのは悔しい」と思ったり、「友だちが自分の思うように動いてくれない」、「自分の意見を取り上げてくれない」といういやな問題に直面しても、それまでの快適な遊びを持続したいという気持ちが原動力となって、練習して問題を乗り越えたり、妥協したり、我慢したりするという体験を繰り返すことができる。このような理由で、子ども時代の仲間との群れ遊びは、成長に欠かせないものなのである。

ところが最近では、子どもたちは大勢のいろいろな個性を持った仲間と「群れて」遊ぶという機会が、少なくなってきている。都市化による遊び場の減少、一人遊び道具の氾濫、子どもの多忙など、さまざまな原因があるが、大きな変化は、子どもたちの遊びが群れ型の遊びから孤立型の遊びへと変容してしまったことである。そのために、本来子ども時代に育まれるはずの「人間関係作りの基礎能力」ともいうべき力が十分に発達しないまま大人になってしまい、問題の解決が困難になるケースも増加傾向にあると聞く。

プレイ事業部では、オープン当初から「遊びを通じた人間関係作り」という部分に着目し、さまざまな事業を展開してきた。

【キャッスルクエスト】

はじめて出会う子どもたちの相互交流促進のプログラムとして、毎年ゴールデンウィークに、テレビゲームをモチーフにした、ごっこ遊びプログラムを実施している。今年は1988年に行われた「キャッスルクエスト」を11年ぶりにリメイクして実施した。

今年の「キャッスルクエスト」はインドネシアに伝わるラーマーヤーナ物語をベースにし、テレビゲーム風のポスターや説明ビデオを作って、子どもたちの動機づけとした。

実施場所は、受付はプレイホール。修行の場は屋上ふしぎが丘と音楽エリア。館内にも至る所に謎解きの仕掛けを配置し、ゴールはBスタジオとした。

インドネシアの物語がベースということもあって、今年は音楽事業部の協力も得られ、音楽ロビーやAスタジオなどでは「魔法使いの修行」と称し、インドネシアの楽器ガムランを使ったゲームコーナーや楽器体験コーナーなどを盛り込むことができた。

また屋上ふしぎが丘では「戦士の修行」と称し、片足バランスやはじめの一歩のような運動遊びを行った。このエリアでは子ども同士で対戦するゲーム形式とし、ボランティア扮する賢者が、子ども同士の交流の橋渡しを行った。

AV事業部には、受付の説明ビデオの制作のほか、最終ゴールのBスタジオでの映像・音響効果を協力してもらった。最終ゴールでは、ボランティア演じる魔王ラバナの姿が白黒反転して大型スクリーンに写し出される。その映像と、子どもたちグループとが、身体全体を使った魔法ジャンケンの勝負を行う。子どもグループにはボランティアリーダー扮する賢者が付き、子ども同士の意見の調整を援助した。はじめて出会う子どもグループの意見を調整するためには、プレイリーダーの存在は欠かすことができない、重要な役割であった。

【遊びのリーダー】

子どもの社会性を養う上で、遊びのなかの子ども同士の関わりが重要である。また、個人で遊びからグループの遊びに発展することによって、よりダイナミックで楽しい遊びが展開でき、子どもたちもより楽しめることか

らも、プレイ事業部では、〔こどもの城〕に遊びにきた一人ひとりの子どもたちを、即席ではあるがグループにして一緒に遊べる状況を作るように心掛けている。

しかし、市町村の児童館と異なり、はじめて出会う子どもたちの来館が多いことからも、子どもたちだけでグループを作り遊ぶことは難しい。そこでスタッフやボランティアの存在、そしてその子どもたちへの関わりが重要になる。

子ども同士の交流を促進するプログラムをいかに組み立てていくか、あるいはプレイリーダーとして来館者にどのように係わっていけばよいか、その研修方法・育成方法などは、今後さらに深く考えていかなければならない重要な課題であると認識している。特別期間に行ったキャッスルクエストやウォーターアドベンチャーなどの大規模なプログラムの中でも、子どもたちがリーダーやスタッフの援助により、その場で作ったグループで一緒

【平成11年度キッズクラブの活動】

①4月17日	ゲームでよろしく	ゲームをしながら仲良くなることをテーマにして、「関所破り」「ジャンケン集合」「人間知恵の輪」「缶つみ競争」という班対抗のゲームを楽む。
②5月8日	ちょっとおでかけ 〜代々木公園へいこう	先行したリーダーが付けた矢印を追いながら、目的地を目指す「追跡ハイキング」。途中、宝探しやクラブで作った「地域振興券」を使っておやつを買うなどのチェックポイントを設定。
③5月22日	こどもの城なぞ解きラリー	なぞなぞをといて館内の隠されたチェックポイントを導き出し、そこに設定されている遊びの課題をクリアする班対抗のラリーゲーム。
④6月5日	ぼくも・わたしもパン職人	料理プログラム。本格的なパンづくりに挑戦しようと、粉をこねて生地を作るところから始めた。できあがったパンを食べながら今後の活動についての話し合いを行う。
⑤6月25日	とべ！プロペラ円盤飛行機	工作プログラム。薄いスチレンボードを円形に切り取り、ゴム動力のプロペラを取り付けて模型飛行機を作る。できあがった飛行機を持って近くの公園まで出かけ、みんなで飛ばし合った。
⑥7月17日	ウォータープロジェクトⅣ	2チームに分かれ、水鉄砲を使った陣取りを行う。頭にはちまきで金魚すくいの枠を縛り付け、水鉄砲を使って相手チームの的をたくさん打ち抜いたチームが勝ちというルールで行う。
⑦9月18日	Sケンにチャレンジ	近くの公園まで行き路地裏あそびSケンを行う。はじめはルールを覚えるため全体を4チームに分けて試合を何度か行い、その後2チームに合流。
⑧10月2日	デジカメしりとり	「こどものき」からはじまるしりとりを身の回りの中から見つけ、それをデジカメで撮影。途中に設定されたキーワードを必ず入れなければいけないというルールで〔こどもの城〕周辺を探検。
⑨10月23日	キッズアドベンチャーツアー	「渋谷駅10時7分発の電車にお乗りください」という館内放送からスタートし、電車の車掌がくれた手紙や道路に貼られた紙などが出すさまざまな指令に従い、ゴールである逗子海岸を目指した。
⑩11月6日	2000年まであと何日？ カウントダウンカレンダー	2000年までのカウントダウンをデジタル表示で示す大きなタペストリーを全員で制作しプレイホールに飾る。毎日メンバーが交代でカウントをかえるために来館した。
⑪11月27日	ファミリーキックベース大会	多摩川の川沿いにある野球場を借りて、メンバーだけではなく、保護者にも参加してもらいキックベース大会を行う。審判や場内アナウンスなども子どもの手で行った。

ゴールデンウィークプログラム「キャッスルクエスト」



キッズクラブの活動



⑫12月11日	ビストロキッズ〜1000年に一度のクリスマスパーティー	「パンを使ったクリスマスメニュー」をテーマに班に分かれメニューを相談。決められた予算内で材料を買いだし料理した。最後の試食会には保護者にも参加してもらいパーティーを行う。
⑬1月15日	スーパーカルタとり	自分たちで絵札、読み札を考えてA4大のカルタを作り、それを使ってチーム対抗のカルタとり大会を行う。
⑭1月22日	駒場野公園大作戦	4年生たちが下級生達のために企画運営したプログラム。早めに集合し、公園でどんな遊びをするか、だれが説明をするかなどを相談。「王様ドッジボール」や「仮装マラソン」などを展開した。
⑮2月5日	(こどもの城)の七不思議〜埋蔵金の謎を追え	キッズクラブに届けられた1通のビデオレターを手がかりに、(こどもの城)に隠された埋蔵金を見つけ出す「なぞ解き」のプログラム。リーダー達の色々な話を推理し、宝の隠し場所を探し当てた。
⑯2月19日	ステップアップ・パン職人への道	パンをテーマにした料理プログラムの3回目。班毎にテーマを決め、形にこだわって、パン作りを行った。
⑰3月11日〜12日	(こどもの城) 館内宿泊プログラム	年度のまとめの活動として(こどもの城)に宿泊。Sケン、暗闇じんとり、王様ドッジボール、さよならパーティーなどの活動を通して、仲間の輪を確認した。

【平成11年度ユースクラブの活動】

1期 ①4月11日	よろしくゲーム大会 (新メンバー説明会)	新しい仲間と出会う場。名前交換や名前ビンゴ等お互いを知るゲームで和んだ後、自己紹介や継続メンバーによるユースクラブの紹介を行った。
②4月25日	アソボーヨ代々木公園 外出=代々木公園	新メンバーを意識し、相互の関係を築いていくため代々木公園へ外出、手つなぎ鬼、手つながない鬼、クマ狩りなど体を動かすゲームを楽しんだ。
③5月16日	食いしん坊バンザイスペシャル 外出=横浜こどもの国	こどもの国に場所を移し、グループ単位で野外炊事を行った。「世界の混ぜご飯」と題して4か国のかわり種ご飯をみんなで楽しんだ。
④6月13日	KAWAで作ろう ユースおそろい物	みんなで同じ物を作ろうをテーマに、革細工でパスケース作りを行った。形は同じだが、色や模様を工夫し助け合い、それぞれの作品を作り上げた。
⑤6月27日	街で発見!!○○探し 外出=(こどもの城) 周辺	コンクリートジャングルで猛獣ハンティング。デジカメを使い街にあふれる看板やイラストなどの中から猛獣を探し撮ってくるゲーム。
⑥7月18日	みんなでつくろう ユースサマーパーティ	他の班と重ならないようにメニューを考え、予算内で買い物をし、時間内に作り上げるオール手作りのおやつパーティを実施した。
夏休特別 8月22日	真夏のアドベンチャーゲーム対決!! in代々木　外出=代々木公園	ハンターゲームやウォーターバトルなど水鉄砲を使った、夏ならではのダイナミックなゲームをグループにわかれて実施した。
2期 ①9月12日	2学期も遊ぼう ティータイムミーティング	1学期で活動のイメージがわかったところで、やりたいことを考える作戦会議を行った。会議はむしパン作りをしながら行った。
②9月26日	駒場公園で遊ぼう 外出=目黒・駒場公園	作戦会議で考えた「人間すごろく」を実際に行った。広場に巨大双六盤を置き、さいころで進む。止まったマスの指示を班のみんなで行うゲーム。
③10月17日	みんなでつくろう! オリジナル鬼ごっこ	グループごとに鬼ごっこを考えて、実際にやってみた遊びを作るプログラム。実際に作った鬼ごっこは全部実施して感想を述べあった。
④10月7日	「お台場道」 外出=お台場周辺	班に配られたお金の中でより楽しく低コストでお台場までたどり着くゲーム。余ったお金は班で相談してお菓子やお土産を買ってよいこととした。
⑤11月28日	ファイナルプロジェクトin1999 その1	1900年代最後の活動は、自分たちで作るをテーマに2期最終回の内容を考える作戦会議を行った。館内に泊まって思い切り遊ぶこととなった。
⑤12月11日〜12日	ファイナルプロジェクトin1999 その2	土曜の午後から集合し、日が暮れるまで代々木公園で陣とり等をして遊んだ。夜からは日曜に計画したパーティの企画会議を行い、次の日に実施。
3期 ①1月6日	お正月だよ!!　全員集合!	まとめの3期として、最終回を含め企画内容について話し合いを行った。前半はマクラ取り風フルーツバスケットのゲームを行った。
②1月23日	○○といったら…「マジカルしぶや」 外出=渋谷駅周辺	ビデオカメラを持って、班で考えたイメージでしりとりをしていくゲーム。写してきた各班の作品は最後にみんなで発表した。
③2月6日	春を探しにネイチャーウォッチング&作戦会議 外出=神奈川・弘法山	早春の山をトレッキングして、自然や土地に因む問題を解きながら山歩きを楽しんだ。昼食はキャンプ用コンロで簡単な野外炊事を行った。最後に一人一句の俳句を読んで発表。帰着後に最終回の話し合いも行った。
④2月27日	最終回にむけてどんなことをしようか作戦会議	3期を通して話し合ってきたものを現実にするため、「みんなで作る」を題材にした作品の試作を行ったり、内容を決める話し合いを行った。
⑤3月18日〜19日	みんなで作ろう 「ユースの木」	幹はメンバーで作り、葉っぱを来館した人たちに作ってもらう企画を泊まりがけで実施。葉っぱのワークショップは自分たちで分担して運営した。

に参加する場面をできるだけ多く設けるようにした。

❷講座・クラブ

(ア) キッズクラブとユースクラブ

子どもたちが小集団での活動を通して、他の人と関わることのルールや楽しさを感じながら、自主性や社会性などの社会の中で「生きていく力」を身につけ高めていくことが、キッズクラブとユースクラブの一番大切な目的である。クラブとして年間を通して継続的に活動し、また子どもたちは小学校1年はキッズクラブへ、そして5年でユースクラブへと、それぞれのクラブへ入会して最終学年まで継続して参加しているメンバーも多い。またキッズクラブからユースクラブへと継続しているメンバーも少なくない。発会より8年の年を重ね、継続して活動を実施している中で目的は発会当時から変わるものではない。しかし子どもたちを取り巻く環境は刻々と変化している。

近年、学校や社会など子どもたちが属する基本的な集団の中で、友だちとの人間関係もより希薄なものになり、子どもたちが本当に落ち着ける場所がどんどん減っているのを感じる。そのような環境の中で、本当の友だちとの関係作りや深め方を感じ、グループへの帰属感を深める機会としてこのようなクラブに参加する機会を持つことは、今後21世紀を迎えるにあたり、大切な体験のひとつと考えられる。

(イ) パソコン教室とパソコンクラブ

「小学生パソコン教室」では、開館以来パソコンを子どもたちのグループ活動、仲間遊びの道具・媒介物として利用した活動を行ってきた。

「小学生パソコン教室」では、教育用のプログラミング言語であるLOGOを利用し、簡単なアニメーションを組み込んだグラフィックス作品のグループ協同製作を内容とした。また春休みに行った、「小学生パソコン教室スペシャル～マルチメディア探検隊～」では、グループで話し合って決めた視点・切り口で、デジタルカメラを持って〔こどもの城〕館内を取材し、写真と文章を組み合わせたレポートを作成するという内容である。このレポートの結果は、〔こどもの城〕のホームページで発表した。

どちらの教室も、小学校4～6年生5人程度の異年齢グループを作り、パソコンを利用したグループの協同制作を楽しんだ。「パソコンクラブ」では、各人の興味にそった内容を進める自由利用を中心に、パソコン機器やソフトの使用方法の講習なども実施した。

(ウ) キャンプ活動

プレイ事業部のキャンプも年数を重ね、小学校低学年のキャンプでは開始から十数年の経験を積んできた。その間、対象は幼児向け、高学年などにも広がり、現在では高学年対象（夏休み；小4～6）のフェローシップキャンプ、低学年対象のちびっこ冒険団、ゆきんこ冒険団（夏・冬休み；小1～3）を実施している。これらのキャンプの基本は小グループによる活動を通じて自分を育み、仲間と育っていくことを目的にしている。キャンプでは日常を離れ、場所を移し新しい仲間と凝縮した期間を過ごすことにより、たくさんの新しいことに気がついたり、仲間のよさについて感じ、人間としての成長を遂げる機会であるといえよう。キャンプ自体は短い期間であるが、この活動の中で得る自覚と、自信は、子どもたちにとって大きな力となるはずである。

最近、キャンプに参加する子どもたちの様子が変わってきている。それは、以前は参加者の全体の1割程度であった他のメンバーと行動を共にできない子どもの割合が、多くなってきていることが顕著なことである。学校でも学級崩壊など我慢がきかない子が多いといわれている。キャンプの中でも多くみられる現象となってきている。しかし、そんな子どもたちもキャンプが進み期間が終わる頃になると、全体の中で他の人を認め、自分も他の人と協調して活動するようになってくる。これはキャンプという共同生活を通して一緒に生活する中で、お互いを認め、自分も認めてもらう体験があり、このような体験を通して子どもの中の何かが変わっていった現れであろうと思われる。

日常の中では大勢の異年齢の仲間と遊んだり、生活するという体験はなかなかできない状況になってしまっているが、これからも子どもたちの変化を見守りながら、

「ちびっこ冒険団」のキャンプ



キャンプでできることを考え、一層発展させていくことが大切だと考えている。

❸グループ活動

さまざまな「ごっこ遊び」や「劇遊び」などのプログラムを通して、豊かな心を育むと同時に、子どもたち同士が仲間意識を感じられるようになることを主なねらいとしている。

本年度実施したプログラムは「忍者修行道場」14回、「森へ行こう」9回、「みんないっしょに」3回、「キャッスルオリンピック」2回、「みんなであそぼうパペットランド」2回、その他「パソコンであそぼう」3回の計33回であった。

特に「忍者修行道場」の実施回数が多いのは、毎年かかさず「忍者」を利用する団体が多いためである。これはこのプログラムが、〔こどもの城〕来館前から園での導入活動を行うこと、一人ひとりの参加性が高いこと、「忍者」という子どもたちがイメージしやすい素材であること、全員が一致団結して課題を達成するという活動であること等が利用団体に評価されていることの現れであると考えられる。

❹パソコンを使った遊びのプログラム

パソコンルームでは、〔こどもの城〕来館者が自由に参加できる「一般利用」、そして登録したメンバーのための「パソコン教室」と「パソコンクラブ」〔別項（イ）参照〕の3つの活動を実施した。

一般利用では、パソコンの構造や使い方を学習するといった方向ではなく、パソコンのさまざまな機能を遊びの活動に利用し、プログラム活動を楽しめるようにした。野鳥や花の図鑑ソフトをデータベースと見立てて解答を考えるクイズ遊びや、デジタルカメラから取り込んだ顔を土台にして似顔絵を描くプログラムなど、知識や情報を操作、整理することや、創造活動を援助する道具としてパソコンを活用した。プログラムの内容も、1～1か月半ごとに内容をかえて運営した。

パソコンの学校や家庭への普及は進んでいるが、ハードの普及に比べて、より創造的な活動に利用するためのソフトや情報の量はまだまだ少ない。パソコンルームでも、実施しているプログラム活動をぜひ家でもやりたいといった声や、他の児童施設からの問い合わせも増えている。特に他の児童センターなどとの情報交換や、連携はさまざまな施設でのパソコン活動の質を高めるためにもますます重要になってきている。

❺まとめ

近年、子どもたちにまつわる悲惨な出来事が続いている。子どもが被害者になる場合も、また、その逆の場合も多い。子どもたちの間で、そして人々の間で、何かが少しずつ変わってきているのであろうか。人が人として、人々と共に生きていく力が少しずつ弱くなっきているのではないだろうか。

プレイ事業部では、子どもたちの交流が促進されるような遊びを、活動の土台として考えてきた。それは、子どもたちの成長発達、特に社会性を養い、他の人と協調して生きていく力をつけるためには、仲間と遊ぶ体験がかけがえのない要素と考えるからである。

子どもたちが「遊び」と「遊び仲間」から得る物は多い。コミュニケーションの力、力や技を発揮し、役割や責任を果たした心地よさや自信、いたわりと優しさの心。そしてみんなと協力することの喜び。このような仲間との遊びから得る物は、子どもにとっては大きな報酬であり、成長発達に欠かせないものである。

プレイ事業部では、子どもたちが、人と人との触れ合いのなかで「育ち合える遊び」を目指し、より活動の充実を図っていきたい。

パソコンルーム



平成11年度活動一覧表

❶一般利用

〈平常期間〉

名　称	期　間	備　考
おはなし紙芝居のつどい	毎週火曜日 15:00〜15:30	女性ボランティアによる紙芝居の公演。毎回、子どもたちと対話しながら楽しめる作品や物語の作品など、低年齢の子どもから楽しめる作品を含めて3本選び上演した。公演の前には、歌や手遊びなども合わせて行った。集まる子どもたちは2〜6歳くらいが中心で、親子で一緒に楽しむ姿も多く見られた。
おはなし人形広場Ⅰ	毎週水曜日 15:00〜15:30	女性ボランティアによる人形劇・影絵の公演とスタッフによるパネルシアターなどの公演、人形を作って遊ぶプログラムを週替わりで実施した。幼児だけでなく、3歳以下の子どもとお母さんの参加も多く、歌や音楽に合わせて影絵や人形が動くと、一緒に手足を動かしたり踊ったりして、母子ともに楽しめるプログラムとなった。
おりがみ遊び広場	毎週木曜日 14:00〜15:00	女性ボランティアの協力により実施。おりがみの題材は、季節や年中行事にちなんだものや、動植物、遊べるものなどを選び、親子での参加を促した。本年度は（こどもの城）主催の折り紙カーニバルに参加し、おりがみ遊び広場で子どもたちが折った作品や女性ボランティアが製作した壁面装飾を出展した。この活動は、普段の活動の発表の場となり、今後の活動の新たな足がかりとなった。
おはなし人形広場Ⅱ	毎週土曜日 15:00〜16:00	プロの人形劇団やアマチュア人形劇サークルなどによる公演。人形劇やパネルシアター、紙芝居など様々な形態を週替わりで構成。人形劇を初めて見る子どもたちや小学校低学年、親がゆったりとした空間の中で人形劇を楽しむ機会となった。
＜七夕行事＞ 天までとどけ ねがいごと	7.3、4 11:00〜16:00 7.6、7 13:00〜16:00	プレイホール中央に立てられた竹に願い事を書いた短冊を飾るワークショップ。竹飾りの由来を展示したり、プレイホール遊具に貼られた「動物たちの願い事」を探すゲームをしたりと、プレイホール全体に七夕の雰囲気が感じられるように行った。また、行事終了後に子どもたちの願い事を年齢別に集計し、プレイホールに掲示した。
＜秋分の日＞ 第24回　バンバー大会	9.23 小学生の部　午前 中・高生の部　午後	プレイホール高学年コーナーの人気遊具である『バンバー』をとおして、高学年の子もたちの仲間の輪を広げることを目的に行った。小学生8人、中高生9人が参加。特に小学生の部では初参加のメンバーが多く、新しい仲間を迎え、盛り上がりを見せた大会となった。（バンバー：ビリヤードに似たニュースポーツゲーム）
＜節分＞ 節分会 大まめまき大会	1.29　①15:00〜 1.30　①13:00〜 ②15:00〜	スタッフとボランティアが扮する鬼軍団に捕らわれた福の神を、会場に集まった参加者と司会者で豆まきをして助け出すという参加劇仕立てのプログラム。途中「節分の由来」をわかりやすく説明する場面も設け、プログラムの終了後、全員に砂糖豆を配付した。
＜ひなまつり＞ みんなでひなまつり	2.26、27 11:00〜16:00	「雛祭り」をテーマに、プレイホールのアスレチック遊具「わくわくらんど」を利用した遊びを実施した。子どもたちは、参加カードの指令に従って①「ひな人形探し」「三人官女の持ち物探し」、②「貝合わせ」「空きかんひなだんつみ」、③「ひしもちカードトレード」の3課題に挑戦。ゴールでは角香箱を作り、ひなあられを記念にもらった。男の子の参加も多く、家族みんなで協力し楽しむ姿が見られた。
＜春分の日＞ 第25回　バンバー大会	3.20 小・中・高生合同 13:00〜16:30	秋分の日の大会と同様に、高学年の子どもたちの仲間の輪を広げることが目的。今大会は、初の試みとして、今まで時間を分けていた小学生の部と中高生の部を同時に行った。なかなか顔を合わせることができなかった小学生と中高生が一同に集まることができ、お互いに交流が広げられたとともに、大会の雰囲気もよりいっそうの盛り上がりを見せた。小学生10人、中高生13人が参加。
あそびのワークショップ		
第1期 「床面を使った遊び」	1999年 12月〜	子どもたち自身で遊び方を決められるような遊びの仕掛けとして、プレイホールの床面にカッティングシートを使って模様を施した。仕掛けは「ケンパ」「ドンジャンケン」「グリコ」を意図した3種類、ただし、あえて遊び方は指定せず、子どもたちがその模様から自由に遊びを発想し、発展できるようにした。主に幼児から小学校低学年の子どもたちが単独で遊んでいたが、親子や数人のグループで、お互いに遊び方の相談をしながら遊ぶといった姿も見られた。また、まだ歩きはじめたばかりの乳幼児が、仕掛けの円や線をたどって楽しんでいる姿も見られた。
第2期 「こどもてれび」	2000年 3月〜	子どもたちのごっこ遊びを活性化させる工夫として、厚めのダンボールで大型のTVを作った。中には子どもが3人まで入れるようになっており、チャンネルの部分には「うた」「ニュース」「ものまね」など12種類のスイッチ表示を取り付けた。子どもたちは、演じる側と観る側を交互に交代しながらニュースキャスターを演じたり、コメディアンを演じたりしていた。また親がスイッチを押し、子どもがそれを演じている場面を、記念に撮影している場面も多く見られた。

名　称	期　間	備　考
パソコンルーム		
<児童福祉週間> ことばあそびの A☆B☆C	4.28〜6.2	しりとり、暗号解読、アナグラム、4W あそびという言葉遊びをコンピュータ相手に実施した。しりとりでは、どんどん言葉を覚えていくコンピュータ相手に、子どもはもちろん親も参加。親子で相談をして言葉遊びを楽しんでいる姿が見られた。
パソコン工房 わくわくボックス	6.3〜7.15	予めパソコンに用意した5種類（コモノイレ・タカラバコ・サンカクボックス・キンチャク・ペンダント）の箱の展開図に、パソコン画面上でイラストを貼ったり、色を塗って、プリントし、組み立ててオリジナルの箱を作るプログラム。タカラバコとコモノイレは特に人気で、何回も作りに来室する子どもたちもいた。
<夏休み> パソコンワンダー ステーション ジャングル☆カメラ	7.16〜8.17	ジャングル・草原・森などの風景を選び、そこに、生き物（動物・虫・植物等）や岩・雲などの様々な写真画像データを、組み合わせたり、重ねたりしながら自由に配置し、コラージュ手法によるグラフィック作りを楽しんだ。
<夏休み> パソコンワンダー ステーション ネイチャークイズ	8.18〜9.29	野鳥や草花の名前をパソコンを使って検索する「ネイチャークイズ」を実施した。子どもたちはもちろん、親子で相談をしながら答えを見つけたり、野鳥や草花を話題にして楽しむ姿も見られた。
きみも パソコンアニメーター	9.30〜10.26	パソコンで絵を描き、それを用いてパソコン上でパラパラマンガを楽しむプログラム。2コマの初級編と4コマの上級編を用意した。
<開館記念> うつしトルトル なぞってアート	10.27〜11.30	普段使用しているマウスの代わりにペンタブレットを使って、野菜や果物、魚やケーキなどの食べ物の写真をなぞり、コンピュータで食べ物の絵を描くというプログラムを実施した。副題に「とれとれマーケット」とつけ、お店屋さんのイメージの中で遊べるようにした。細かい部分を写し取るのは難しい様子だったが、学年が上がってくると色にぼかしを入れるなど工夫して描いていた。
<冬休み> わくわくカレンダー 2000	12.1〜1.25	2種類の型のカレンダーから1つを選び、その型にイラストや飾り枠を自由にレイアウトして作製した。飾り枠があることで、カレンダーにメモの要素が加わり、自分の誕生日や家族での行事を記入したりと、様々な工夫が見られた。
パソコン紙相撲 春場所	1.26〜3.14	力士の部品（頭・体・手・足）をデータの中からそれぞれ組み合わせてプリントし、オリジナル力士を作った。完成した自分の力士を、他の力士と土俵で対戦させて楽しむ子や、家でも遊べるように子どもと一緒に創作していく大人も多かった。
<春休み> 似顔絵ペインター	3.15〜4.18	コンピュータに接続したCCDカメラで、自分や友だち・家族などの顔を取り込み、ページを1枚上にのせて、取り込んだ静止画像を透かしながら似顔絵を描くプログラム。鉛筆やマーカー、水彩やペンなど使う画材によって似顔絵の雰囲気も変わり、それぞれが味のある似顔絵を描いていた。小さい子どもにはマウスの操作が難しかったが、お父さんやお母さんが膝の上に子どもを乗せ、描いている姿も見られた。

ファミリープレイタイム「棒まきパン」の作成風景



夏休み新幼児コーナー



〈特別期間〉

名　称	期　間	備　考
〈児童福祉週間〉 キャッスルクエスト 〜暗黒のラバナ〜	5.1、2、3、4、5 11:00〜16:00	〔こどもの城〕全館を使ったスゴロクのようなゲームで、人気のテレビゲーム（RPG）をモチーフとしている。受付で「魔王ラバナを退治する」という使命を与えられた子どもたちは、音楽ロビーや屋上で、修行と称する様々な遊びにチャレンジし、勇者になるためのスタンプを集める。最終ゴールのスタジオで、子どもたちは大型スクリーンに写し出された魔王と、魔法ジャンケンで決着をつける。本年度は〔こどもの城〕ボランティア、企画研修部、音楽事業部、AV事業部との共同事業として実施し、今まで以上に遊びのエリアと内容を広げることができた。
〈　〃　〉 ゴールデンウィーク 人形劇フェア	5.3〜5 11:00〜16:00 公演　①11:30 ②13:00 ③15:00	パペットマーケットと〔こどもの城〕が共同プロデュースを行い、大学生の児童文化サークル（じゃんぐるじむ）の協力により、人形を作る、作った人形であそぶ、人形劇を見るという3つのプログラムを実施した。特にあそぶコーナーでは、「お姫様とあそぼう」「カメ君の運動会」などの劇遊びを、子どもだけでなくお父さんやお母さんにも参加していただき行った。子どもたちは、お父さんの体を山に見立てて登ったり、いろいろなものを口にくわえたりと一生懸命人形劇遊びに参加していた。
〈夏休み〉 ウォーター アドベンチャー'99	8.12〜15 11:00〜15:00	水鉄砲やスプリンクラーなどを使った、ダイナミックな水遊びを屋上ふしぎが丘で実施した。海賊シャークに乗っ取られた『アクア王国』を参加した子どもたちが救うという設定。受付で5人程度のグループを編成し、協力しながら水鉄砲や楯を使い、悪者と対戦しながらゴールをめざす。ストーリー仕立ての楽しさと、水遊びの持つダイナミックさにより、いきいきと参加している子どもたちの姿が見られた。
〈開館記念〉 開館記念人形劇フェア	10.30、31 11.3　①13:00〜 ②15:00〜	親子で楽しめる人形劇として、昔話と、身近な道具で演じられる人形劇をテーマに公演した。人形劇を見せるだけでなく、出演者が舞台から出て会場とやりとりをしたり、公演後、人形を通して子どもたちに声をかけたり、見送ったりし、出演者の暖かさが感じられるものとなった。子どもたちも嬉しそうにしている姿が見られた。 10月30日（座・まりりん）「まりりんランドの大冒険」 10月31日（たかつ人形座）「切り紙で遊ぼう」「ジャックと豆の木」 11月3日（井村淳と仲間たち）「ぼくにもできるかな人形劇場」
〈冬休み〉 クリスマス 人形劇フェア	12.18、19　①13:00〜 ②15:00〜	近郊の大学の児童文化研究会・人形劇サークルで構成されている「じゃんぐるじむ」が企画、運営。人形劇の上演をとおして、来館児・者に対して児童文化の伝承に努めた。また、児童文化を伝えていく側としての学生の育成にも努めた。 12月18日（立正大学）大型パネル劇「おっちょこちょいサンタさん」 （創価大学）人形劇「つきよのばんのものがたり」 （明治大学）人形劇「道士悠俊とベビーキョンシー」 12月19日（大妻女子大学）パネルシアター「クリスマスメドレー」 （創価大学）大型絵本「おふろだいすき」 （東京家政大学）パネルシアター「かさじぞう」 人形劇「おたまじゃくし海へ行く」
〈　〃　〉 新春あそびのお年玉 みんなで遊ぼうお正月	1.3　13:00〜17:00 1.4〜10　11:00〜17:00	屋外と室内の2か所で実施。屋上遊園ではコマ、三ツ馬、木馬育（木製の空き缶ぽっくり型遊具）を実施し、Bスタジオの中にはテレビドラマ風の和室のセットと、板塀で囲まれた中庭のセットを設け、日替わりで手びねりゴマ、カルタ、百人一首、貝合わせ、お手玉、折り紙メンコ、ビー玉遊びなどを実施した。なお、Bスタジオでは1日1回、お正月にちなんだクイズ大会も行った。この模様はAV事業部の協力により館内テレビに生で放映された。
〈春休み〉 春休み人形劇フェア	3.25〜27　①13:00〜 ②15:00〜	毎週土曜日に行われている「おはなし人形広場」よりも、じっくりとお話の世界を楽しむことのできるフェア。大型絵本や人形劇、影絵と、毎日違ったジャンルでお話を楽しむことができた。 3月25日（パペットシアターおまけ）「へっこきじいさん」 26日（人形芝居くりちゃん）「ぬればやまのちいさなにんじゃ」 27日（クレヨンカンパニー）「こいぬのポピーとのらねこくん」

❷講座・クラブ

〈講座〉

名　称	対象・定員	受講数	曜　日・日　時	備　考
小学生 パソコン教室Ⅰ	(人) 小4～6 (20)	(人) 20 12	IAコース 4.11～5.23　6回 日曜日　10:30～12:30 IBコース 1.16～2.27　6回 日曜日　10:30～12:30	パソコンの入門コース。ロゴ言語を使用し、グループ活動によるコンピュータグラフィックスの協同制作を通して、ロゴ言語のプログラミングとパソコンを媒体とした小集団活動を楽しむことがテーマ。5人のグループを作り、各々が絵の部品を作成し、最後にその部品を合体するプログラムを作り、グラフィックスを完成させる。受講料＝各7,000円
小学生 パソコン教室Ⅱ	小4～6 (20)	14	Ⅱコース 9.19～10.24　5回 日曜日　10:30～12:30	小学生パソコン教室Ⅰを修了した子どものためのコースでゲーム作りがテーマ。ロゴ言語を使用し、ゲーム作りのプログラミングを通して、変数や再帰処理といった概念も学ぶ。受講料＝各6,000円
小学生パソコン教室 スペシャル ーマルチメディア探検隊ー	小4～6 (20)	20	3.27～31　5日間 連続　10:30～12:30	小学生パソコン教室のスペシャル版。デジタルカメラを持ち、グループごとにテーマを考えて（こどもの城）の様々な場所を取材した。パソコンで写真入りレポートにまとめ、インターネットのホームページに発表した。パソコンを新しい情報とコミュニケーションのツールとしてとらえたプログラム。 受講料＝各6,000円

〈クラブ〉

名　称	対象・定員	受講数	曜　日・日　時	備　考
キッズクラブ	(人) 小1～4 1期　(30) 2期　(30) 3期　(30)	(人) 30 30 30	隔週土曜日 15:00～17:00 1期・2期は6回 3期は5回開講	小学校1～4年生までのあそびのクラブ。①家庭や学校では体験できない活動を行う②地域や学校とは違う新しい人間関係作りをめざす③子どもたち自身がプログラムを考え作り上げることで、自発性や発言力を養うことの3点を目的としている。受講料＝9,000円（1・2学期）、8,000円（3学期）
ユースクラブ	小5～中3 1期　(40) 2期　(40) 3期　(40)	 36 29 31	隔週日曜日 13:30～15:30 1期・2期は6回 3期は5回開講	小学校5年～中学3年のあそびのクラブ。10代前半の心の成長期に集団活動を通し豊かな人間形成をはかるのがねらい。①色々な活動を通し様々な直接体験をする②仲間を通し人間関係を学ぶ③計画・企画を通し夢を実現することの3点を目的とする。受講料＝9,000円（1・2学期）、8,000円（3学期）
パソコンクラブ	小4～高3 (40)	11	水・木曜日14:00～17:30 土曜日13:00～17:30 日曜日10:00～17:30	パソコン教室を修了した子ども、またパソコンに興味のある子どものための交流を中心としたクラブ。交流のためのミーティング、パソコンやソフトの使い方の講習会を実施。受講料＝5,000円（1年間）

❸その他（野外活動、動くこどもの城、講師派遣など）

名　称	期　間	備　考
ちびっこ冒険団'99	7.24～7.27 3泊4日	小学校1～3年生のための舎営キャンプ。班での生活に重点を置き、大自然に恵まれた環境の中で「何をして遊ぼうか」とか「どうしたらみんなが快適に過ごせるか」などを班のみんなと相談しながら、社会性の基礎を養ったり、自然体験を通して感じる心を養うことなどを主な目的としている。今年は「森の中で耳を済ますと精霊の声が聞こえてくる」という話を動機付けに、冒険ハイキングやお祭り（野外炊事）など様々なプログラムを行った。参加者72名、ボランティア22名、スタッフ4名（福島県国立那須甲子少年自然の家）
ゆきんこ冒険団'99	12.25～28 3泊4日	小学校1～3年生のための舎営キャンプ。夏同様班での活動に重点を置いている。本年度は積雪、天候に恵まれ、雪合戦、かまくらづくり、そりあそび、歩くスキーなど班で相談して展開した活動のほか、もちつき大会やキャンプファイヤーなど、さまざまなプログラムラムを楽しむことができた。また、今回は小児保健部から保健スタッフが一緒に参加、健康管理等について対応した。参加者70名、ボランティア24名、スタッフ5名（福島県国立那須甲子少年自然の家）
フェローシップ キャンプ'99	8.6～10 4泊5日	小学校4～6年生のための基本的活動のキャンプ。豊かな自然の中、グループでの活動をプログラムの中心にし、新しい仲間と出会い、関係を深め、社会性を身につけることを目的とした。自然を楽しむ「沢登り」のプログラムや仲間と知恵と力を合わせ一晩を過ごす基地を作る「オーバーナイトキャンプ」のプログラム等、大自然の中で素直な気持ちで仲間を理解し、共に力を合わせ、スタッフ・ボランティアリーダーを含め、全員で楽しみながら作り上げたキャンプとすることができた。参加者37名、ボランティア15名、スタッフ4名（福島県国立那須甲子少年自然の家）

〈動くこどもの城、講師派遣、他〉

名　称	期　間	備　考
＜動くこどもの城＞ みんなで遊ぼう！ パペットランド （栃木県こども総合科学館）	10.12～14	栃木県子ども総合科学館において、身近な素材を用いた人形作りと劇遊びのプログラム「みんなで遊ぼう！パペットランド」を実施した。初日は指導者向け講習会、二日目と三日目には科学館で行われるイベント「児童館フェア」に、紙コップを使った人形作りのコーナーを出展。さらにそこで作った人形を用いた児童参加劇「おむすびころりん」を、両日とも11時と15時の2回上演した。児童、あるいは親子の参加性は非常に高く、朝から繰り返しブースに顔を出したり、劇に参加する子も多かった。
＜動くこどもの城＞ パソコン遊びのワークショップ （大阪府豊中市立豊中解放会館）	11.6～24	ワークショップ活動は、パソコン9台を使用、延べ13日間実施。プログラム内容は、幼児から大人までの対象に合わせ、今までに（こどもの城）で実施したプログラムの中から「キッドピクス」「わくわくボックス」「ジャングル☆カメラ」「フレンドシップカード」の4つのプログラムを行った。参加者は、2才の子と母親から60才以上の方までであり、運営の苦労はあったが、地域の施設として実施した意義は大きかった。活動前に行った指導者講習会にも、児童館指導員以外に、近隣の保育士、小中学校の教員の参加もあり、「遊具」としてのパソコン活用の方法が参考になったようだ。
＜平成11年度地域子育て支援センター担当者研修会＞ （こどもの城）	9.16 9.30 12.2	厚生省と日本保育協会主催による研修会。プレイ事業部による実技講習は、「みんなで遊ぼう！パペットランド」を行った。始めに「数集まり」や「好きな物集まり」など、アイスブレイクのゲームを行った後、紙コップを使った人形制作を実施。その後、人形を使って「買い物ごっこ」などの即興的なごっこ遊び、最後には人形を使った参加劇「おむすびころりん」を実施した。今回は4～5才位の親子の遊びを紹介したが、さらに年齢が低い対象に向けてのプログラム開発が新たな課題となった。
＜講師派遣＞ 埼児連西部ブロック研修会 （坂戸市坂戸児童センター）	11.18	県内を4ブロックに分けている地区内の児童厚生員への研修会。「仲間づくりのゲームの実際」として、「イニシアチブゲーム」と「オリンピックゲーム」の2種類を紹介し、実際の体験を通した指導法について講習を実施した。 対象：児童厚生員　参加者36名
＜講師派遣＞ 中央区児童館 保育士研修会 （中央区築地児童館）	12.1	区内の児童館等の児童厚生員を対象にした研修会。「仲間づくりのゲームの実際」として、「イニシアチブゲーム」と「オリンピックゲーム」の2種類を紹介し、実際の体験を通した指導法について講習を実施した。 対象：児童厚生員　参加者32名
＜講師派遣＞ （大田区鵜の木児童館）	10.13	児童館からの依頼により、プログラムの実際について実践を通した研修を行った。実際に、子どもたちに対してプログラム（鵜の木オリンピックゲーム大会）を実施し、終了後、児童館で指導にあたる方々と指導のポイント等について講習を行った。 対象：参加者　子ども約30名　講習会　指導厚生員　5名
＜講師派遣＞ 荒川区　ひろば館学童クラブ合同研修会 （荒川区町屋　ひろば館）	3.14	区内の児童施設などの児童厚生員への研修会。「仲間づくりのゲームの実際」として、「イニシアチブゲーム」と「オリンピックゲーム」の2種類を紹介し、実際に体験しながら指導法について講習を実施したる 対象：児童厚生員　参加者43名

平成11年度コンピュータープレイ利用実績

月・利用者数（人）　合計利用者数　61,811

4月	4,895	5月	4,663	6月	4,004	7月	6,126	8月	11,805	9月	3,913
10月	4,036	11月	3,895	12月	3,144	1月	4,913	2月	3,833	3月	6,584

造形事業部



平成11年度の活動

造形スタジオの15年間の活動歴で、今回のように同じ素材のワークショップを２年間つづけて実施するのは、今回が初めてである(1999年と2000年)。２年間、同じワークショップを行うため、企画が平板にならないように、節目ごとに内容的なアクセントを付けたりした。別記の活動実施表をみても分かるように、造形スタッフは、「竹」という素材の特長を生かしながら知恵を絞ってプログラムを研究開発した。そしてこのワークショップの実施に先立ち、日本の代表的な植物であり、生活素材として重宝された竹が、日常生活の中で忘れ去られようとしている事実に着目し、大人には生活の中から「竹という植物」を見つめ直す機会を設け、また、子どもたちには木でもない、草でもない、紙でもない特異な素材を身近に体験できるように３階のロビーおよび造形スタジオの造形環境を整えた。

❶一般利用

(ア) 素材との出会い展～竹と造形

平常期間＝平成11年４月８日～７月16日
①「やってみよう！つくってみよう！竹と造形」
夏休み特別期間＝平成11年７月17日～８月31日
②「素材との出会い展～竹と造形
～竹や横町にようこそ」
平常期間＝平成11年９月８日～３月16日
③「やってみよう！つくってみよう！竹と造形」
春休み特別期間＝平成12年３月17日～４月５日
④「竹体験ワークショップ～造形・竹づくし」

昨年10月から継続してきた造形素材として、本年度も竹を選び、夏休み特別期間は「竹と生活」という視点からワークショップ活動「素材との出会い展～竹と造形～竹や横町にようこそ」を行い、そして春休み特別期間は「竹と玩具」の視点から、２回目の「竹体験ワークショップ～造形・竹づくし２」を実施した。平常期間をプログラム試行のステップにして、プログラム開発、実施、再考から特別期間の構成準備を行った。今回も、展示・体験・制作という造形スタジオ独自のワークショップ形式で行った。

竹は、アジアや日本に特有の植物で、プラスチック製品の普及する前は、生活用品・農耕用具・工芸品・玩具など生活の中でさまざまな役割を果たし、非常に広範囲な用途のある材料であった。しかし、最近ではプラスチック製品の量産化や竹細工の手間賃の高騰などのため、子どもたちはもちろんのこと、大人でさえ竹でできた製品等に触れる機会が少なくなっている。つまり、私たちの祖先が培ってきた竹細工の伝統的な技や巧みな技が失われつつあるのである。

「素材との出会い展～竹と造形」は、竹の伝統的な役割と大切さを子どもたちに伝えること、子どもたちに造形素材としての竹の特性――しなる・かたい・筒状など――をどうすればプログラムに生かすことができるか考え、また、作ることだけでなく、五感で感じ、知り、楽しむことを根本的な要素として企画した。

初めての出会いでは予想できない背景をもって来館する「不特定多数の」子どもたちに、「竹と生活」という幾分かたくるしく思われそうな活動を、偏見や先入観なく自然に見て、触って、感じ、知ることができるように、「竹と生活」という言葉はあまり表面には出さずに、子どもたちが、生き生きとして遊ぶ横町界隈のイメージを想定し、活動スペース全体を竹の町＝「竹や横町」として1丁目、2丁目と設定し、タイトルも「素材との出会い展～竹と造形～竹や横町にようこそ」とした。

そして、活動空間の演出のひとつとして子どもたちと一緒に横町を遊び、探索し、先導者となる「狂言回し」的なキャラクター「たけくん」を創作した。活動空間のいたるところで「たけくん」と子どもたちが出会い、一緒に活動しているかのように設定した。

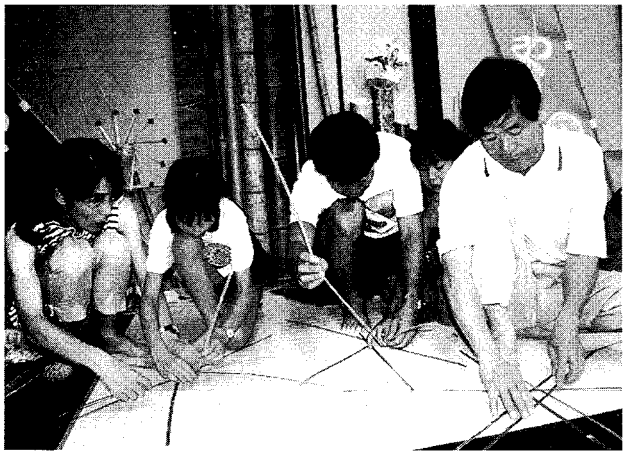
また、今回初めての試みとして、造形スタジオだけでなく、3階4基のエレベーターホールから廊下、ロビー、そして造形スタジオへと、子どもが直接竹と出会い、造形スタジオでの活動と有機的に関係づける展示・体験空間を広げた。「竹や横町」といった町並みをより具体化するためにエレベーターから3階に降り立った時からスタジオへの導入として、竹や横町の地図、「たけくん」が指さす方向には、小さめの竹の民具を廊下天井付近に展示した。そして、3階ロビーに設置した竹でできた交番に入ると、廊下の展示物の名前・使い方などがイラストと説明文で理解できるように配慮した。同じように造形スタジオ内の天井と壁面に展示した約80点の竹民具を全て写真と説明文で廊下壁面に展示した。同時に子どもたちや大人ががそれぞれに造形スタジオの展示物を見て、考え、探すという遊びながら「謎トキ」ができるように「民具探検隊」の「ワークシート」を作ったので、多くの子どもたちが参加した。展示物とその説明場所を分けることでより能動的に展示を見ることができたように思う。

3階ロビーには、前述の「竹や交番」をはじめ、筒状という竹の特性を生かして曲がりくねった「竹管電話」を作り、それを取り付けた直径1.2m×高さ2mのボイド管の「竹や電話ボックス」を設置した。円形劇場壁面には「たけくん」が朝起きてから就寝するまでの生活を10枚のパネルに紙芝居仕立てにして展示した。それぞれのパネルには竹製品や竹で遊ぶ「たけくん」を描いて、子どもたちにも分かりやすく竹と生活の関わりを解説した竹情報になった。また、スタジオで随時行った「竹皮のペン作りのワークショップ」の時にこのイラストをもとにした「紙芝居」を行った。スタジオ入口には、竹チップや竹の遊具、背負子などを置いた「竹や横町公園」を設置、竹を割ってしならせて作った「竹しなり門」をくぐると、竹の輪を賽銭の代わりに入れ、竹の鈴を鳴らす「竹神社」を作った。

初めての空間造りの試みとして、エレベーターホールからロビーへと「展示空間」を広げたことは、より積極的な展示物の鑑賞活動と造形活動へと繋がった。単独の事業部専有のスペースではないので、事前の展示準備(準備での時間的な制約など)や保守・点検などさまざまな配慮や人的な配置など検討が必要である。しかし、その効果を考えると、初めて来た来館者だけでなくリピーターへのアピールも高かったと思われる。

3階廊下と造形スタジオでの民具の展示物は、「武蔵野美術大学美術資料図書館・民俗資料室」から借用したもので、50年から100年ほど前に実際に漁猟や農耕を営む人たちの間で生活に使われていた物、そして人間国宝級の竹の職人の制作した竹の篭などである。これらの展示

イベント「竹かごをつくろう」での森谷氏と親子



「竹や公園」で竹かごと竹チップで遊ぶ子どもたち



物は、見知らぬものやめずらしいものへの好奇心に満ちた子どもたちだけでなく、実際にそうしたものを使っていた年長の人たちや、「こんなものもあったのか」と驚く壮年の人びとや青年など世代を越えて興味をひく展示となった。また、造形事業部がプログラム開発のためにコレクションしてきた風車やざるなどの竹製品やスタッフが制作した創作竹玩具などを「竹や商店街」の「あそびや」、「うつわや」などとお店仕立てにして展示した。

来館者の体験をより興味深くするために、竹に関するさまざまな情報を盛り込んだ「竹新聞」の発行や竹キャラクターのたけくんスタンプを作り、スタジオの各場所を探索して押すスタンプラリー形式のシートや前述した「竹民具探検隊ワークシート」など展示と体験を補助する役割のものも実施し、多くの来館者から好意的な反応があった。

そして、7月初旬から造形作家・松本秋則氏の協力を得て、竹と和紙による音の環境彫刻「竹や画廊～松本劇場」を制作した。松本さんから借用した竹の音具を設置して竹の音が聞ける竹の部屋を設置した。設置した16個のスイッチをそれぞれ入れると、竹の異なる音色が聞こえてくる。小さな子どもでも簡単が操作のできるように配慮されているので、誰でも竹のさまざまな音に耳を傾けることができた。スタジオでの制作空間ののこぎりなどの音の聞こえる活気のある空間と、また、竹の音が聞こえながらも静寂を感じさせるもう一つの「特別空間」であった。「竹や画廊」に来た来館者は、「心がやすらぐ、自然の音がする、竹の音はすばらしい、きれい」とか、異口同音にこの竹の音空間を評価してくれた。竹の民具の展示が来館者の視覚的、かつ、知識的な欲求を刺激したものであるならば、「松本劇場」は視覚、聴覚、臭覚を刺激し、心のやすらぎをもたらす展示・体験装置だった。

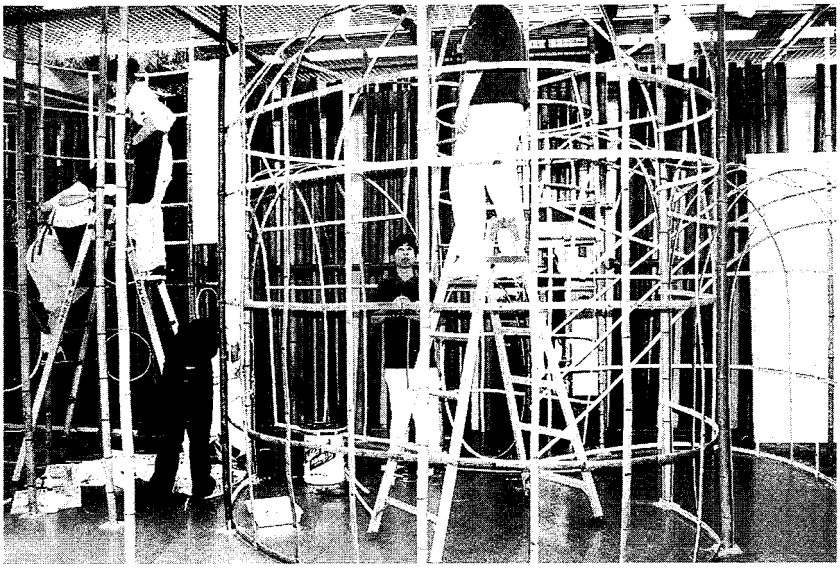
「親子プログラム」、「子どもだけのプログラム(小学1年～)／(小学3年～)」は、それぞれに人気があった。造形スタジオは、これら三者の利用者でほぼ毎日フル稼働した。プログラム内容もステップ期間に実施し、再考したもので充実したものであった（プログラム内容は別表に記す)。子どもたちだけで1日平均500人以上がプログラムに参加した。またプレイングボードの利用者および保護者をカウントすると、1,000人以上が造形スタジオを利用したと推測される。

未だ使える材料を捨てる、使った道具、材料をかたずけずに出し放しにしているなど、ここ数年の間に利用者の道具や材料の扱いなどが悪くなってきている。

造形スタジオでは、常にオリジナルのプログラムを実施しているので材料の補充、管理―竹のストックの問題(管理場所、虫食い、使いやすい大きさへの準備など)及び道具等のメンテナンスなどにも時間を要した。

造形スタジオに入ってすぐの「竹職人さんの仕事部屋」で、8月1日、8日、22日に「竹篭作りのワークショップ」を行った。各日2回、それぞれ3組の親子のみのイベント参加であったが、親子とも初めての体験ながら充実したものになっていた。今後は、スペース、時間、参加人数を検討し実施したい。

一日造形教室は、他事業部で「つくる」内容のプログラムが増えて、「竹」を素材としたプログラムでも競合してしまい、充足率は53%と芳しくなかった。今後、「つくる」という事業では事業部全体として調整を図る必要があるように思う。



「竹や画廊～松本劇場」を制作中の
松本秋則氏とスタッフ

㈠ 竹体験ワークショップ「造形・竹づくし2」

昨年の春休み特別期間に続き「竹と玩具」の視点から展示・体験・制作のワークショップ形式で創作竹玩具のプログラムを開発、実施した。

昨年の「造形・竹づくし」を踏襲するもので、円形劇場壁面には小さな子どもが触れるだけで音の出る竹の音具を設置した。造形スタジオ入口には、「竹しなり門」を壁面に当て、小さな竹の家のような設定にした。スタジオ天井には松本秋則さんの作品で竹を割った板で作られた大きなチューブをつないだオブジェに職人さんが作った大きな風車を飾った。造形スタジオ奥の一コーナーには「竹や」の屋台を設置し、お店の中で竹で遊べるように設定した。子どもたちは、プログラムに参加して作るだけでなく、お互いがお店の内と外で売り子やお客と役割を演じたり、竹のチップを竹の背負子に入れたり、出したり、運んだりと楽しんでいた。

㈡ 「こども歳時記」

昨年度に引き続き、竹素材を中心としたプログラムを展開。より深く、竹の特性・風合い・それぞれの季節感がともに感じ取れるように、参加型の展示やイベントを多く取り入れ、子どもたちが楽しく遊びながら歳時記に触れることが出来るように配慮した。

【端午の節句＝こどもの日】

造形スタジオの外に、大きなボイド管をふたつ組み合わせて、トンネルのようにした鯉のぼりを設置すると、子どもたちは、潜り抜けたり、中に寝ころがったりして遊んでいた。入口にあった「竹しなり門」を壁付けにし、壁には紐が引かれるとカチャカチャ竹の音を響かせる竹の鯉のぼりを設置、「竹やのぼりごい神社」が完成。受付では竹の諺が記された《竹おみくじ》を行った。普段あまり耳にしたことのない竹の諺を、子どもたちは持ち帰ったり神社のしなり門に結んでいったりしていた。会期終了時には、しなり門がたくさんのおみくじで飾られていた。

【七夕】

7月6日、7日の2日間限定で特別プログラムを実施、短冊と天の川をイメージした、くるくる回る七夕飾りを親子で協力しあいながら制作してもらった。

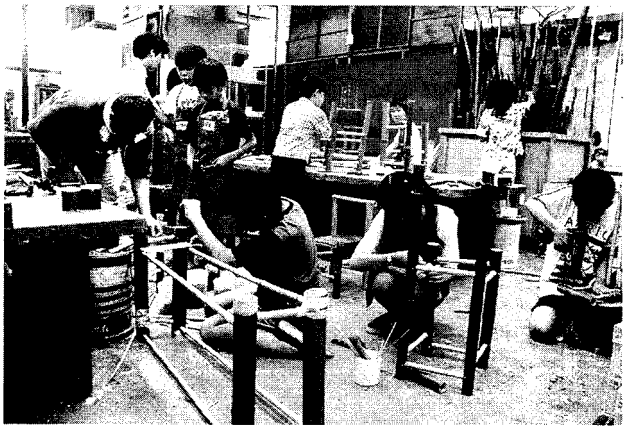
【クリスマス】

クリスマスをイメージした台紙に、竹キャラクター《タケくん》の12種類のスタンプを押していくコーナーを設置した。台紙の絵柄とスタンプのシルエットを見比べて、どこに押したら良いか考えながら、スタンプを集めてもらった。スタンプシートには、クリスマスにちなんだ絵を自由に描けるスペースを作り、指定した時間にその絵を見せると、竹の輪でオーナメントが作れるようにした。竹と和紙で大きな光るクリスマスツリーを作り、スタジオ内に設置し、華やかさを演出した。竹ポストを設置したところ、子どもたちが思い思いに書いたサンタさんへの手紙が投函されたので、柱飾りとして展示した。

【お正月】

幼児から参加可能な「竹ペン絵描き初め」のイベントを行った。はじめにお正月にちなんだ内容のカルタでカルタ遊びを実施。子どもたちに、古来より伝わる習わしや、風習（昔お年玉はおもちだったなど）を知ってもらった。次に《書き初め》にちなんだ《絵描き初め》をスタート。まず絵を描く為のペンを竹の皮で作り、和紙に

一日造形教室「竹DEイス」を制作中の子どもたち



竹民具の展示と竹のプログラム活動をする親子



それぞれ好きなものを水性絵の具で描いた。子どもたちは、和紙と竹皮ペンという普段見慣れない描画材との出会いに、新鮮な驚きを感じていたようだ。

竹と和紙で体の光る龍を作り、《ドラゴン神社》として設定。玉を入れるとコロコロ竹の音のする竹賽銭箱や、マジックテープを使った福笑いコーナーも設けた。ロビーのスロープに双六パネルを展示し、ルーレット式サイコロを使って、双六を実際に楽しめるように設定した。またエレベーターホールからロビーまでの廊下の壁にも、オリジナルカルタを登場させて遊べるようにした。それぞれのコーナーを子どもたちは満喫してくれていた。

【節分】

竹を輪切りにしてハンコにした竹豆まきスタンプを実施。赤鬼、青鬼のプリントされたスタンプシートにたくさんの竹豆スタンプを押してもらった。スタジオの外と内のところどころに、ユーモラスな鬼飾りを出現させ、制作の刺激になるよう配慮した。

【桃の節句】

竹ざるや、竹の熊手などを使って、竹雛段飾りを展示。天井には竹輪に和紙を貼って作ったお雛さまをたくさん飾りつけた。色とりどりのお雛さまが、子どもたちの制作を見守っていた。スタジオの入口ロビーには、大きなお雛さまの立て看板を設置。ぼんぼりや、お雛さまの顔の部分をくり抜いておいたところ、子どもから大人までみな、自分の顔や手をはめ込んでみて、男雛、女雛、ぼんぼりに変身して楽しみ、記念撮影までしていた。

㈡ 第14回造形スタジオ展

今回で第14回を迎えた「造形スタジオ展」は、開館の翌年以来、１年間の造形スタジオの活動を客観的に振り返るとともに、来館者に造形スタジオの活動をよく知ってもらうという意図が込められている。そして毎年11月のこどもの城開館記念月間にあわせて実施している。

それは丁度、開館記念の特別期間と符合している。

昨年の造形スタジオ展から１年の間に、私たち造形スタッフが子どもたちのために竹のテーマごとに開発したいろいろなプログラムと、参加した子どもたちの様子を作品と写真を通して「造形スタジオ」の活動を伝えることを目的としている。今回の展示では、特に夏休みに実施した「素材との出会い展～竹と造形」を中心にして、「こどもクリエイティブクラブ」各コースの活動を紹介した。

「素材との出会い展～竹と造形」では、竹がその特性として持つ「筒状」、「しなる」、「割れる」などの性質を生かして、伝統玩具を現代風にアレンジしたものから、独創的なオリジナルなものまで、プログラムは多岐にわたった。これらをプログラムごとに、写真パネルとプログラムボックスをＢ全判のパネルに貼りこみ、３階ロビー、円形劇場壁面、造形スタジオ入り口の３か所に合計21枚展示した。造形スタジオ内には、子どもたちが竹の皮(たけのこの皮）を丸めて筆にして描いた絵を展示した。そして天井には、子どもの民俗的な視覚体験をうながすために、夏から引き続き武蔵野美術大学の美術資料図書館から借りた竹の民具が数多く吊り下げられた。また、竹を素材にした活動をしているアーティスト松本秋則さんの作品を展示した「松本劇場」も再開し、子どもたち自身が竹の作品群の不思議な音や動きを手元スイッチによって操作できる展示体験空間を用意した。

「こどもクリエイティブクラブ」のコーナーでは、火曜日から土曜日までの各コースを作品と活動風景写真で紹介した。各コースとも、扱う素材や技法が異なるため、展示された作品もさまざまでユニークな展示となった。

「造形スタジオ展」は、いわば過去１年間の造形スタジオに遊びに来た子どもたちの活動のダイジェスト版的な展覧会である。多くの来館者に紹介すると同時に、私たち自身もこの展覧会から過去の内容を振り返り、そして新たな活動につなげていけるよう心がけている。

❷講座・クラブ

こどもクリエイティブクラブＡ・Ｂ

㈠ 「クレイワークＡ・Ｂ」（火・水曜日）

土にはいろいろな種類があり、それによって技法や釉薬、焼成方法などもさまざまである。「クレイワーク」では、土をこねる、たたく、つかみだす、など初歩的なことから、次第にくりぬきや象眼、たたら、型押し、ひも作りなど、子どもたちが遊びながらも、土の基本的な技法を習得し、土の可能性を追求しながら、それによって子どもたちの豊かで個性的な表現や、また独創的な表現力を引き出すための活動を行い、指導していった。また、年間を通じて子どもたちが使用する粘土は、一人あたり合計100kg以上というダイナミックな活動である。

１期は「かたまりからの変化」とし、普段は用いることのないような大きさの粘土の塊を使い、身体全体を使った活動を行った。初回はまず、粘土に慣れること、クラブメンバーがお互いに慣れることを目的としたワークショップ「粘土の冒険旅行」（グループ活動の一つ）を実施。これによって、最初は緊張していた子どもたちも和やかな雰囲気となったようである。次に、計50キロもの

土の粉に大量の水を混ぜ、足で踏んで粘土を作り、一部を平らにのばして自分たちの足型をとった。足型のそばにその日の日付けを入れる子、足型だけではものたりず、手型や肘型、あご型までとりだす子も出てきて、とにかくにぎやかな活動となった。

続いて、くりぬきの技法をつかう「住みかをつくろう」、くりぬきと象眼、みがきの技法をつかう「ボールをつくろう」、手びねりだけで作る「木をつくろう」を制作した。

2期は「板からの変化」で、これは四角形にこねた粘土をたたら板と切り糸で切っていくと、たたら板の厚さ分の粘土の板「たたら」ができあがる。これを切ったりつないだりして形作る「遺跡と城壁」、筒や半球にかぶせて型をとる「花瓶」や「キャンドルタワー」、箱状に組み立てる「宝箱」などを制作。

3期はひも状にした粘土を、蛇がとぐろを巻いているように巻いたり、積み上げたりして作る「ひもからの変化」で制作した。まず粘土のひもから器を作り、その中に自分たちの好きな食べ物を作る「お弁当箱をつくろう」を制作。おすしばかり作る子や、いろんな種類のショートケーキとお菓子といった甘いもの専門の子など、自分たちの好きなものだけが詰まったお弁当箱ができあがった。そして最後には1期にみんなで粉から作った粘土を使って、大物の「ランプスタンド」を制作した（平均的な大きさは直径30cm、高さ30cmくらい）。きれいな光の出し方やおもしろい形の浮かび上がらせ方など、実際にランプを入れた実験を繰り返しながら制作していた。完成後、焼き上がった作品にランプが灯ると、一様に喜びの声をあげていた。

(イ) こどもクリエイティブクラブC
ゆかいな造形「プリントワーク」（木曜日）

「プリント」というと、どうしても「浮世絵」など、私たち日本人に馴染みが深いためか、技法が先にうかび、木版、銅版、孔版などとジャンルで見てしまいがちである。この「プリントワーク」では、そうした版画の領域にこだわらずに、刷る対象も紙に限定せず身の回りにある木、金属、プラスチックなどさまざまなものに形・色・テクスチャーなどをうつしていく版画の領域を越えて、「うつす」ことを楽しむクラブである。

1期では、子どもたちが、その日のクラブに、出席した際に押す判子（スタンプ）を作り、毎回カードに押すようにした。そして、床・壁・木・金属などさまざまな身の回りの素材の手触感をフロッタージュし、その紙をもとにコラージュしたり、自分の描いた絵をもとに2色（2版）のシルクスクリーン製版を作り、重ねる刷り色を変えて何枚も色の重ねの効果を楽しんだり、卵の包装紙パックを水に溶かして紙を再生して新聞紙を丸めた型を使った型取りでお面を作った。また、スポンジローラーと型紙による版画体験としてTシャツも制作した。

2期では、水と油を使っての版の体験を中心にした。墨や色インクなどを使うマーブリンから始まり、40×60cmのアルミ板にソリッドマーカーを用いて「本格的な」リトグラフを刷った。絵の具の油分が水分をはじくことで絵が紙に定着することを自然に子どもたちは理解できた。他には石膏の型取りからキャンドルスタンドなどを制作した。

3期ではカラーインク・ボタン・羽などいろいろな素材を使い、OHPやコピー機などを用いた「光」と「影」



「クレイワーク」で制作中の子どもたち

をうつすプログラムや銅版を実施した。

(ウ) こどもクリエイティブクラブD
ゆかいな造形「絵本の世界へ」(金曜日)

「絵本の世界へ」では、1年という期間を通して制作された《本》を作るだけにとどまらず、本を作ることを通じてさまざまな表現方法を学んだり、いろいろな造形素材と出会って、絵本を作るために必要な想像力を広げる活動をした。そして世界に1冊しかない子ども自身の絵本作りを目的として進めた。1年を通じては、1期毎にテーマを決め、制作プログラムを行った。

1期は、絵本制作の前段階として、いろいろな素材や技法あるいは、手法を体験することを中心に活動した。絵の具やペン、紙などの従来の描画材に加え、スポンジではんこを作ったり、ネジ、ひも、小石などの身の回りにある素材をコピー機にかけコラージュ作品(はり絵)を作った。さらに懐中電灯で中空に絵を描き、それをスライドフィルムで撮影し、それを見る為のミニプロジェクターを竹で作った。上蓋が開閉式の木の箱に、マカロニ、大豆などの乾燥物を使い立体コラージュをしたり、いろいろな素材や表現方法を通して、新たな発見に出会う機会を設けた。

2期は、《お話し的》な要素をいくつかの場面に組み立て、絵本の制作を試みた。透明なシートで作る「重ね絵シート」や、全てのページに穴を開け、指人形がさまざまな場面に登場する「穴あき絵本」や、同じ紐がどのページをめくっても現れ、それを画面上にどの様に取り入れるかを提示した「紐が出てくるフェルト絵本」を制作した。また、昨年度に引き続き、AV事業部の協力を得てアニメーションの制作に取り組み、絵本の視点から画面上でストーリーを展開させていくことを体験した。今回で2度目の体験となった子どもたちは、すでに体験していた方法をさらなる表現方法へと模索し、実行し、子どもたちの表現への柔軟性や探究心を大いに感じた。

3期は、1・2期で体験したことを取り入れ、各自で構想から製本、カバー作りまでを行い、全員の作品を1冊の本「楽しく作ったみんなの雑誌集」にまとめた。自分たちの作品を「雑誌」という違う媒体に通して見る新鮮さと、他の子どもたちの作品を見ることによっても、新しい発見とさらなる刺激を受けていたようだ。

1年を通し、作品の完成度を高めることだけを重要視するのではなく、子どもたち一人ひとりの想像力や好奇心を伸ばすことを大切に進めてきた。いろいろな素材や表現方法との新鮮な出会いを子どもたちは、柔軟に受け止め、それぞれの《絵本の世界》へと生かしていたようだ。

(エ) こどもクリエイティブクラブE
「ハンズワーク」(土曜日)

本年度は、子どもたちに素材の可能性や技法等をより深く探ってもらえるように、ビデオや画集でさまざまなアーティストの制作風景と作品を鑑賞する機会を設け、実際に模倣を試みたりもした。

1期の前半では、杉の丸太から木の実のような形を削りだし、紙やすりで磨き込む作業を実施。素材が変化していく様子をじっくりと体験してもらった。さらに、普段から使い慣れている絵の具に注目し、筆先から絵の具をたらして描く《ドリッピング》技法を使い、自作の木のオブジェや数種類の紙におもいおもいの彩色を施した。また、からだを使った《ボディーペイント》、《フィンガーペイント》など直接足や指で絵の具を塗る方法にも挑戦、ひんやりとした絵の具の感触を子どもたちは体感した。後半には、流木やあけびの蔓といった自然物を用いて、オブジェや提灯を制作した。

2期に入ってからは、使用する素材の数を増やし、表現に幅をもたせた。水溶性と耐水性それぞれの絵の具の特性を生かした白抜き模様のTシャツを作ったり、ダンボールを使った持ち運びのできる家の制作。ビニール袋を膨らましてボンドをひたした凧糸をグルグルに巻き付けた糸巻オブジェ。そのオブジェを着彩すると同時に、7m近くもあるもぞう紙の上をころがしたり、たたきつけたりして巨大版画も制作した。蜂の巣からとれるミツロウを塗ったオブジェや、いろいろな素材をそのままボンドで接着するだけでオリジナルキャラクターを作り、そのキャラクターを屋外で写真撮影した後に、コメントなどを付けてストーリーブックに仕上げた。セメントとタイルを使っての重量級オブジェの制作も行った。

3期では、生き物の形をとりながらも、実用可能なイスをテーマに制作した。動物・植物図鑑をひろげて設計図を書き、人の重さに耐えられる構造を考えながら、ゆっくりと作業を進めた。何度も図面を見直したり、耐久性と座り心地を試しながら、不思議なイスは完成された。1期・2期で培ってきた、イメージを形として表現する力が十二分に発揮されたようだ。

❸グループ活動

例年通り、「かげをうつそう」、「木をつくろう」、「ねんどのジャングル旅行」を実施した。この3つのプログラムはすでにルーティンの仕事となっていて、事前の打合せ、リハーサル、実施とスムースに運営できた。今年度は、10月に東京都の小学校の「生活科教育研究会」の先

生たちの研修会を実施したが、竹のワークショップを実施していたので、生活と素材という観点から研修の材料に竹を用いて「竹と生活」、「竹のプログラム」を実施した。そのような経緯から「グループ活動」へ参加希望があった。これは、先生が実際に自分がプログラムを体験し、子どもに何を伝えないといけないかということが明確になっていたからだと思われる。

【竹体験ワークショップ】

子どもたちへは、竹の特質である「筒状」、「たてに割れる」「しなる」などを体験してもらうため、「四つ割り」という竹を割る道具を使ったデモンストレーションを導入にした。次に実際に割った竹を使って動く竹玩具「竹ぶり」の制作を行った。松本秋則氏の音具を体験するグループと先に制作に入るグループと2グループに分かれて活動した。初めてナタと鋸を使う子どもがほとんどで、最後までみんな集中して制作を進めた。先生からは「日頃、工作などにあまり興味をしめさない子が今日は最後まで積極的な参加していて驚いた。」という話を聞いた。今回の「竹体験ワークショップ」は実験的な部分はあるが、竹を割る音、におい、色手触りなど子どもたちは、体全体で竹を体験できたと思う。今後さらにプログラム内容を検討し、充実させていきたい。

都内の各小学校には「グループ活動」のリーフレットは送付されているはずであるが、先生との打合せでも「グループ活動」のことはあまり認知されておらず、こうした研修会での紹介など、より効果的な広報が必要に思う。

❹共同事業

【エリック・カールのワークショップ】

企画研修部との共同事業として「エリック・カールと色であそぼう　紙であそぼう」を実施した。造形事業部は、①ワークショップ以前の準備とカール氏に技術的な面の質問と確認。使用する紙の選択・色紙の制作（造形スタジオでの材料作り、道具の準備）。企画研修部職員とボランティアリーダーに対しての事前の指導。②ワークショップ当日のタイムテーブル作成の指導。③ワークショップ当日のスタッフ協力（3名）などといったワークショップの実質的な面を担当した。ワークショップを行った研修室は、子どもたちが制作をする空間としては無機的であるため、短時間で効果的な環境作りが必要と考え、事前に制作したコラージュ用紙を、展示もかねて窓側にカーテン状につるした。これは、子どもたちにとって制作への有効な動機付けとなった。カール氏も非常に気にいっていた。ワークショップは紙作りとコラージュの説明、子どもたちの紙作りの体験とコラージュ制作、カール氏の「はらぺこあおむし」のデモ制作、といった流れで進行し、参加した者全員が大変満足のいくものであった。しかし、企画、準備、実施などで問題点がいくつかあった。一つには、11月下旬の企画案から1月末の実施までに時間がなかったこと、一つには、カール氏の〔こどもの城〕での活動時間が非常に短いこと、一つにはカール氏にとって子どものためのワークショップが今回が初めてであったことなど。ワークショップを実施するには非常にきびしい条件で準備を始めた。そしてアメリカに居住するカール氏と具体的な質問をファックスでやりとりし、造形スタジオで紙作りの実験を行い、大きな問題点は解決した。もう一つの問題は、制作中の子どもたちの活動を妨げないように、保護者、関係者の見学室を設けたにもかかわらず、静観できず、会場に入室して子どもたちが楽しくスムースに進めていた制作を混乱させた見学者の大人げない態度である。

❺対外活動

今年度も、前年度同様に他の事業とスケジュールの調整をしながら、できるかぎり多くの研修会など対外活動を実施した。前年度までと違った点は、児童厚生員等の実技研修会だけでなく、シンポジウムや造形関連の学会への参加など、造形事業部の活動内容を外へ伝える対外活動が増えたことである。これは、〔こどもの城〕造形事業部の活動が社会教育の場として、博物館や美術館などの他の教育施設と同じく、着目されてきたのではないだろうか。今後もプログラムなどの実技研修だけでなく、こうした外部への普及活動もできるかぎり対応していきたい。

❻まとめ

冒頭で述べたように、昨年度と本年度の2年間にわたり竹のワークショップを実施した。当初は、竹という素材の生態学的（エコロジー的）な側面も実践に導入したかった。しかし、竹をエコロジー的な見方で捉えるには、現在どのように「竹」が生かされているか綿密な調査などが必要であり、それを実施するにはこの連続した2年間では時間的な幅がなく、今回は断念した。しかし、竹の自然資源的な意味や日常生活にいおける有用性は、国際的な竹会議などの動きもあり、ますます重要性を帯びてくるものと思われる。これから研究と調査を徐々に行いながら、再度「竹と造形」のワークショップを行いたいと考えている。

平成11年度活動一覧表

❶一般利用

〈平常期間プログラム〉

名　称	期　間	備　考
やってみよう！ つくってみよう! 「竹と造形」	4.8〜4.25 5.8〜7.18 9.8〜10.24 11.9〜12.5	夏休み特別期間、素材との出会い展「竹と造形〜竹や横町へようこそ」そして春休み特別期間、竹体験ワークショップ「竹づくし２」に向けて、竹とその特性ー硬い・筒状・しなるなどを竹の創作玩具などを作りながら体験できるようにさまざまなプログラムを実施した。
こども歳時記 「節分」	1.16〜2.3	「節分」の鬼にちなんだワークショップを竹を素材に使い実施した。プログラムは、「鬼ギリ」（親子）、「オニビラキ」（小１〜）。
こども歳時記 「桃の節句」	2.4〜3.3	「桃の節句」にちなんだワークショップを竹を素材に使い実施した。プログラムは、「おひなまとい」（親子）、「ゆりかごびな」（小１〜）。

〈特別期間プログラム〉

名　称	期　間	備　考
児童福祉週間 こども歳時記―たんごの節句	4.21〜5.5	「こどもの日」のコイにちなんで「コイの竹のぼり」（親子）、「ふきながし2000」（小２〜）、「たんごのたけ・タケ・竹」（小４〜）を実施した。
夏休み特別期間 素材との出会い展 「竹と造形〜竹や横町にようこそ」	7.20〜8.1 8.2〜8.15 8.16〜8.31	素材との出会い展の「紙」「木」「土」「金属」に続く五つ目の素材「竹」をテーマにしたワークショップ活動である。竹と生活という視点から日本特有の植物の竹を造形素材にしたワークショップを展開した。武蔵野美術大学資料図書館から借用した竹民具約100点、松本秋則氏の竹と和紙と音具の環境彫刻などの展示、竹やの森谷正春氏の「竹かご作り」などのイベントも行った。
＜開館記念＞ 第６回 親子体験ワークショップ 「竹体験ワークショップ」	10.26〜11.7	「親子ワークショップ」の第６回。親子で協力して竹を切ったり、磨いたりして愉快に動く創作竹玩具「タケノコノコノコ」を実施した。
開館14周年記念 第14回造形スタジオ展	10.30〜11.28	平成10年11月から11年10月までに造形スタジオに来館した子どもたちが制作したさまざまな作品とこどもクリエイティブクラブの子どもたちの作品の展示。一般プログラムでは、内容をよりわかりやすく実物見本と写真、キャプションで説明したプログラムボード形式の展示を行った。
こども歳時記 「クリスマス」	12.7〜25	クリスマスにちなんだワークショップを。竹を素材に使い実施した。プログラムは、「すっとびサンタ」（親子）「竹ツリー」（小２〜）。
こども歳時記 お正月	12.26〜1.16	お正月にちなんだワークショップを竹を素材に使い実施した。プログラムは、「ほたこたけ」（親子）「祝・竹太郎」（小１〜）。
〈春休み特別期間〉 竹体験ワークショップ 「造形・竹づくし２」	3.17〜4.5	昨年春休みの竹体験ワークショップ「造形・竹づくし」に続き、造形玩具の視点から「竹」という素材をとらえたワークショップを展開、実施した。

❷講座・クラブ

〈講座〉

名　称	対象・定員	受講数	曜日・日時	備　考
こどもクリエイティブクラブA 土の冒険 クレイワークA	(人) 小1～高3 (20)	(人) ① 5 ② 6 ③ 5	火曜日16：00～17：30	「土」は楽しいをテーマに、陶芸の枠組みにとらわれないプログラム活動を実施。器作りだけでなく、粘土による表現の可能性を追求し、素材を冒険的に体験しながら、子どもたちの無限の表現力を引き出すクラブです。
こどもクリエイティブクラブB 土の冒険 クレイワークB	〃	① 8 ② 9 ③ 8	水曜日　〃	同　上
こどもクリエイティブクラブC ゆかいな造形 プリントワーク	〃	① 3 ② 4 ③ 2	木曜日　〃	版画の領域を越えて、紙だけでなく身の回りにあるさまざまなものに、色・かたち・テクスチャーなどをうつしていく、なんでもプリントクラブ。
こどもクリエイティブクラブD ゆかいな造形 絵本の世界へ	〃	① 15 ② 15 ③ 13	金曜日　〃	絵本を描くときに使われる方法ー描画材料・絵の具・インク・紙などを用いた基本的な技法からユニークな方法まで幅広く体験しながら絵本の世界を体験するクラブ。
こどもクリエイティブクラブE ハンズワーク	〃	① 20 ② 14 ③ 14	土曜日　〃	紙・竹・木・金属などの素材や新素材をじっくりと吟味しながら、素材と技法、あるいは、道具などについてより広い知識を求め、造形表現にかかわる造形力を養うクラブ。

火～土曜日＝1期：11回、2期：12回、3期：9回、講師はすべて（こどもの城）専門職員
（受講料：1期：27,500円、2期：30,000円、3期：22,500円「クレイワーク」は各期毎に焼成費8,000円が必要）

〈短期集中講習会〉

名　称	対象・定員	受講数	曜日・日時	備　考
夏休み造形教室A 「竹DEイス」	(人) 小3～高3 (各日15)	5日間 計58人	7.27～7.31(火～土) 10：30～17：00	少し前の日本では竹の椅子も多く使われていました。竹を切って、穴を開け、つなぐ。人が座れるようにしっかりとした自分だけの椅子をスタッフと相談しながら作る。
〃 B 「遊遊バンブー」	〃	5日間 計33人	8.3～7（火～土） 10：30～17：00	竹の特質＝硬い・筒状・しなるなどを生かして不思議な音がする弓や、魔法の杖を作る。竹を割り、穴を開け、糸を通し細い竹を上からすべらすと、竹と竹があたり、やさしい音がした。
〃 C 「竹鳥物語」	〃	5日間 計38人	8.10～17（火～土） 10：30～17：00	竹ひごや割った竹などを組んで柱を作り、竹に穴を開けてひごを縦・横・斜めにさして囲いにした。自分で作った鳥のオブジェを入れるアート鳥篭を制作した。
〃D 「からくり竹」	〃	5日間 計33人	8.17～21（火～土） 10：30～17：00	竹を切ると糸を通すパイプになり、割って曲げればバネになります。ちょっとしたアイデアでとんだりはねたり、ユニークな玩具を制作した。
〃E 「竹で生活」	〃	5日間 計36人	8.24～28（火～土） 10：30～17：30	竹を切って、割って、みがいて、穴を開けて・・・竹の特質を鋸やナタを使って体験しながら、生活で使うはし、お碗、コップ、小物入れなどを作った。

❸その他

〈動くこどもの城および講習会〉

名　称	実施日	実施会場	備　考
愛知県博物館協会総会講演会	11.6.3	名古屋市アイリス愛知	愛知県博物館協会総会における講演会。「こどもと博物館の創造的な出会いを求めて〜ハンズオンとマインズオンによる体験学習〜」というテーマで前田ちま子職員が講演を行った。
第2回絵本学会大会	11.6.19〜20	富山県大島町絵本館	絵本学会主催よる「絵本学会第2回大会ーこどもとおとなブルーノ・ムナーリへのオマージュ」でパネルディスカッションへ岩崎清職員がパネラーとして参加、有福職員が「木をつくろう」のワークショップを実施した。
横浜市小・中学校図画工作科夏期実技研修会	11.7.27〜29	(こどもの城)研修室	横浜市教育委員会教育センター、横浜市小学校図画工作教育研究会主催による「造形・美術体験ワークショップ」。1995年からこどもの城造形事業部がコースのひとつを担当するようになった。
日本保育協会造形ワークショップ	11.9.16 9.30 12.12.2	(こどもの城)造形スタジオ	日本保育協会の主催によるマペット「地域子育て支援センター担当者の実技研修会」。親子で一緒に造形活動できるプログラム「マペット」「平成とんだりはねたり」「ひかりのチューブ」を実施。造形スタジオという環境の中でできたことは参加者に制作する上で重要なファクターになった。
山形県保育専門講座	11.9.16	山形県総合研修センター	山形県社会福祉研修所主催の3歳以上児童担当保母および児童館職員研修会。「表現を学ぶー造形遊びについて」をテーマに「マペット」「平成とんだりはねたり」「くっつけむし」「ひかりのチューブ」「バンブーじゃらん」を実施。
東京都小学校生活科教育会体験研修会	11.10.22	(こどもの城)会議室	東京都の童安全互助会・児童館等連絡協議会・母親クラブ連絡協議会主催による実技研修会。「マペット」「平成とんだりはねたり」「ひかりのチューブ」を約20名に実施した。活動が午前中であったために、グループ活動の一つとして扱われた。
山形県児童館・児童センター職員母親クラブ研修会	11.12.17	山形県総合研修センター	山形県児童安全互助会・児童館等連絡協議会・母親クラブ連絡協議会主催による実技研修会。「マペット」「平成とんだりはねたり」「ひかりのチューブ」を約120名に実施した。
広島県放課後児童指導員研修会	12.2.26 12.2.27 12.3.5	三次市平和人権センター 備後地域地場産業振興センター 広島県健康福祉センター	社会福祉法人広島県社会福祉協議会主催の、放課後児童指導員及び市町村担当者を対象にした造形実技講習会。広島県の地理的な関係で3か所、3日に分かれて実施した。それぞれに「マペット」「からくりオブジェ」「平成とんだりはねたり」「バンブーじゃらん」「光のチューブ」を実施した。アンケートなどでも参加者の反応は良かった。



コラージュ用紙を制作中の子どもたちとエリック・カール氏

平成11年度プログラム一覧表

❶親子プログラム

プログラム名	備　　考
「タケパーン」	平竹を2本しならせて背中合わせにし、片端をテープと紙でとめる。片方の平竹を台紙に固定し、もう一方の平竹に紙で作った受け皿をつける。受け皿に飛ばしたいものを入れて指で弾くと、ぴょんと飛んでいく。
「おっとどっこい」	竹ひごをやすりで尖らせ、尖った方を上にして段ボールの土台に差し込む。平竹をしならせて湾曲させ、中央にポンチで窪みをつける。竹ひごの上でバランスをとりながら飾り付けをすると完成。ゆらゆらと揺れる竹のやじろべえになる。
「まわりん棒」	しの竹を1～2 cm切る。クラフト紙の中央にポンチで穴をあけて竹ひごを通し、切ったしの竹を入れる。しの竹が飛び出さないよう、竹ひごの上に紙で飾りをつけると完成。この飾りを弾くと中のしの竹がクルクル回る。
「ミニジャンパー」	竹のしなりを利用したプログラム。平竹をしならせて両端と中央に飾りの紙をつけると完成。平竹を指先で押さえて弾くようにすると、ジャンプしたり回転したりする。
「わっとび竹」	60cmの長さの細い竹ひごをしならせて輪を作る。自由に装飾したら手のひらに乗せて軽く弾くと、ピョンと飛び上がる。
「とび竹」	長短2本の竹ひごをクロスさせて輪ゴムで縛り、飾り付けをした小さいしの竹を長い竹ひごに通す。竹ひごの先にしの竹の抜け止め飾りをつけると完成。飾りを弾くとしの竹がジャンプする。
「たなば竹」	七夕の親子特別プログラム。4本の平竹をしならせて束ね、たこ糸を一巻きしてしの竹に組み込む。平竹の先に飾りをつけて完成。たこ糸を引っぱるとクルクルまわる。
「平成とんだりはねたり」	半割りの竹に輪ゴムを4重に巻いたら、間に平竹を差し込み10回程度巻いてバネにする。装飾ができたらバネを半分巻いて指を離すとクルリと宙返りをする。江戸時代の伝統玩具「とんだりはねたり」の平成版。
「カゲボー」	2本の竹ひごであやつるからくりおもちゃ。クラフト紙から本体と動かす部分を切り出し、本体には竹ひごだけ、動かす部分には竹ひごと和紙をつける。この2つを組み合わせると完成。影絵にしても楽しめる。大阪の郷土玩具「影絵」からの発展プログラム。
「ハシッタケー」	細長い紙の帯の片端に竹ひごをつけてしっかり巻いたものを、2～3 cmの長さに切ったしの竹の中に入れて車輪にする。ボディーにする紙の真ん中に車輪が入る穴を大きめに開け、竹ひごの軸を固定しないように取り付けると、竹一輪車の完成。
「タケノコノコノコ」	直径5 cm程度の竹を2 cm位の長さで2個切り、平竹の両端に互い違いになるようにはりつけて車輪にする。クラフト紙をゆるめに平竹に巻き、そこに飾りをつける。スロープになったところで手を離すと、互い違いの車輪のせいでノコノコと走り出す。
「おじぎ竹」	指輪くらいの巾に切ったしの竹に平竹を入れたら、平竹と輪にしたたこ糸を組み合わせて弓状にする。竹ひごをたこ糸としの竹に通し、たこ糸の部分で固定したら装飾する。平竹をしならせると、竹ひごに付けた飾りがおじぎをしているように見える。
「竹プルーン」	しの竹を5 cm程度の長さで1個、1 cm程度の長さで2個切る。大きい方のしの竹に縦に輪ゴムを巻いて側面をテープで固定したら、上に竹ひごを差し込んで丁字型にする。次に、小さい方のしの竹にそれぞれたこ糸をつけて飾りをして、竹ひごの両端にぶらさげると完成。竹ひごを指で数回巻くと、プルンプルンと回りだす。

プログラム名	備　　考
「すっとびサンタ」	しの竹を2 cm程の長さに切り、輪ゴムをテープで固定する。竹ひごをしの竹の中に通し、輪ゴムにつけて飾り付けをすると、ピョンと飛び上がるおもちゃの完成。
「ホタコタケ」	長い竹ひごと短い竹ひごをT字にし、そこに15cm×30cm程の薄い紙のカラペ(色紙の一種)をはりつける。しの竹の輪切りを長い竹ひごに通して、たこ糸でカラペとつなげたら完成。風を受けるとカラペの帆がふくらみ、凧のようにも、帆掛け舟のようにも見える。
「鬼ギリ」	平竹と輪にした帯状のクラフト紙を組み合わせて弓状にする。ポンチで穴を開けた飾り用のクラフト紙と、和紙でつないだ竹ひごを組み合わせて装飾すると完成。平竹をしならせると、竹ひごの飾りがポンチの穴からニョッキリと飛び出す。
「おひなまとい」	ケント紙の帯の片端に竹ひごをテープで張り付けてしっかりと巻き、短く切ったしの竹の中に差し込む。クラフト紙で細長い帯を4本作り、それぞれ平竹にはりつけたら、帯としの竹をとめる。指で回すように動かすと、遠心力で平竹がふわりと浮かびあがる。
「春つげ虫」	両面色の違うクラフト紙を手でよくもんで柔らかくし、好きな形に切って飾り付ける。裏側に小さく切ったしの竹を2つ、テープではってたこ糸を通す。たこ糸と片方のしの竹をとめると完成。たこ糸を引っぱるとヒョコヒョコ動く。
「いないないバンブー」	しの竹を2～3 cm程度の長さに2つ切って、切り口を紙やすりで仕上げる。次に厚手の段ボールの波目のすき間にU字型にたこ糸を通し、その両端に先程のしの竹を結び、持ち手になる平竹をつける。平竹を引っぱると、2つのしの竹が出たり引っ込んだりする、かくれんぼ玩具になる。

❷子どもだけのプログラム

プログラム名	備　　考
「タケラケ」 (新小2以上、1.5時間)	90cmの長さの平竹をしならせ、両端を合わせてラケットのような形を作り、すき間を細い竹ひごをしならせながら、アルミ線でとめていく。骨組みができたら、好きな色のカラペを全体にはり合わせると本体の完成。新聞紙を丸め、外側を大きめの薄い色紙「カラペ」で覆って作ったボールを投げたり受けたりする。
「クルカラコイ」 (小1以上、1時間)	2～3 cmのしの竹を2つ切り、双方とも側面にきりで穴を開ける。竹ひごを2本しならせて、それぞれにしの竹を通してずれないようにとめる。竹ひごの根元を束ねて紙を巻き、飾りをつけ完成。軽く振ると、しの竹同士があたってクルクル回ったり、カラカラと音がする。
「でんぐりこい太」 (小3以上、1.5時間)	竹を1～2 cm巾に2つ切りそれぞれ1か所をなたで割り、内1つに竹ひごが通る穴を開ける。しの竹を2つ切って穴を開け、竹の中にくるように竹ひごを通す。2つの竹を組み合わせてボールのようにしたら飾り付けをして完成。転がすと中のしの竹もクルクルと回る。
「バンブーカー」 (小1以上、1.5時間)	たこ糸を平竹に結んで弓状にし、タイヤの数だけ(3～4個)しの竹を切る。前後輪とも軸になる竹ひごを輪ゴムで本体にとめてタイヤをつけ、全体を飾ると竹の車ができる。たこ糸に指をかけて後輪の軸と弾くと走りだす。
「おしゃべり竹」 (小2以上、1時間)	5 cmくらいの長さの竹を2つ切り、それぞれ片面に紙をはる。紙の面を外側にして2つを重ね、輪ゴムを布ガムテープで2か所はる。飾り付けをしたら、上の竹を持って左右に振ると竹同士がこすれ、筒の中で反響して不思議な音がする。

プログラム名	備　　考
「タケブクン」 （小3以上、1.5時間）	10cmくらいに切った竹の上の方に2つ、下の方に1つドリルで穴を開ける。長めのたこ糸を上の2つの穴に通し、真ん中を下の穴から通したたこ糸と結ぶ。上の穴のたこ糸に竹片で飾りをつけると完成。下のたこ糸を引っぱると上のたこ糸にもテンションがかかり、竹片の飾りが動く。
「タケ・ト・ロープ」 （小1以上、1時間）	しの竹を小さめに切って、きりで貫通穴を開けて、たこ糸を通す。たこ糸を平竹に結んで弓を作ったら装飾をする。平竹をしならせると、飾りのしの竹がクルクル回ったり前後左右に踊っているように見える。
「竹・タケ・たけ」 （小3以上、1.5時間）	半割りの竹の曲面を利用した土台を作り、そこに竹の端材を自由に組み合わせて、ゆらゆらと動くおもちゃをつくる。
「たけ・コト・マシーン」 （小1以上、1時間）	しの竹を5 cm程度に数本切り、側面にドリルで穴を開ける。段ボールに穴を開けて太めの竹ひごを差し込み、そこにしの竹を差し込む。しの竹のグラ付き防止の竹ひごを差し込むと完成。カチャカチャ、コンコンなど竹の音を楽しむ玩具の出来上がり。
「タケラケラ」 （小3以上、1.5時間）	「タケラケ」からの発展形プログラム。ラケットになったり、帽子やヘルメットになったりとさまざま。
「クルリン弓」 （小1以上、1時間）	指輪位の巾のしの竹と持ち手にする女竹を1つずつ切る。平竹にしの竹を差し込んだら、たこ糸を結んで弓状にする。竹ひごをたこ糸に1巻きしてしの竹に通し、持ち手の女竹も差し込む。竹ひごの上下に紙で装飾をして左右に動かすと、クルクルパタパタ回る竹玩具の完成。
「タケブリ」 （小2以上、1.5時間）	平らに割った竹を使う。短い竹を長い2本の竹の間にはさみ、十字架型に組み合わせ、穴を開けて竹ひごを通す。長い竹の先端にも穴を開けて竹ひごを通したら、短い竹にたこ糸を結び、途中をこの竹ひごに1巻きしてまた短い竹に結ぶ。短い竹を動かすと、先端の竹ひごにつけた飾りがクルクル回る。青森県八戸市の郷土玩具「えんぶり人形」からの発展プログラム。
「なかよし竹ちゃん」 （小1以上、1時間）	2～3 cm巾で輪切りにした竹をナタで半分に割り、その上にしの竹をボンドと紙ではりつける。これを2つ作り、双方並べて竹ひごを通して飾り付ける。台紙の上に乗せて台紙を揺さぶると、ゆらゆら仲良く動く。
「マルコロ竹」 （小1以上、1時間）	竹の輪と飾りのしの竹を切り出し、それぞれにきりで穴を開ける。竹の輪の中にしの竹がくるように竹ひごを通して飾り付けると完成。転がりながら、中の飾りがクルクル回る竹玩具になる。
「タケロデオ」 （小2以上、1時間）	平らに割った竹としの竹をそれぞれ切り出したら、平らな竹の方にたこ糸を通すための穴を開ける。平竹の片側にたこ糸を結んで、しの竹・平らな竹・しの竹と通し、平竹の反対側で結んで弓状にする。平らな竹の上に飾りを付けたら完成。平竹を動かすと、飾りが元気良く跳ね踊る。平竹のしなりとたこ糸のテンションを利用したからくり玩具。
「竹ツリー'99」 （小2以上、1時間）	いろいろな竹の端材や好きな形に切った竹に穴をあけ、段ボールに立てた太めの竹ひごに重ねて通して、竹のツリーを作る。
「祝　竹太郎」 （小1以上、1時間）	自分のつくりたいものの設計図を描き、それに合わせて竹を切り出す。それぞれに穴を開けたりたこ糸を通したりし、最後に引き手に結び付ける。引き手を引くと、たこ糸にテンションがかかり、手足などのパーツが動く。
「オニビラキ」 （小1以上、1時間）	直径5 cm程の竹を、長さ15cm程度の筒状に切る。クラフト紙を折って扇状にして、持ち手になる竹ひごを下側につけて竹筒に入れる。扇が竹筒から出た時に開くように、和紙の帯を竹筒にはりつけると完成。竹ひごを押し上げると、扇がパッと広がる。
「ゆりかごびな」 （小1以上、1時間）	直径7～8 cmの竹を2 cm位の長さに輪切りにし、2本のへいだ竹でそれを包むように篭にする。カラペを使って、篭の底をはり合わせたら、中におひなさまとおだいりさまを作って飾る。揺らしてもよし、回してもよし。
「テケテケ丸」 （小1以上、1時間）	平竹の片側だけ輪ゴムをひっかけてとめ、次にしの竹を指輪ほどの長さに数個切って、飾り付けをしたら輪ゴムに通す。平竹をしならせて、反対側にも輪ゴムをとめると完成。斜めに傾けると、中の飾りが輪ゴムにそってテケテケとユーモラスな動きをする。
「タケターン」 （新小2以上、1時間）	段ボールの土台の上に、竹ひごとしの竹、輪ゴムを組み合わせてブーリーの仕組みをつくる。手前のしの竹を回すと反対側の飾りがクルクルと回る。
「カタカタケ」 （新小4以上、1.5時間）	10cmくらいに切った竹筒の中に、しの竹と平らに割った竹、竹ひごを組み合わせてクランクの仕けをつくる。竹ひごのハンドルを回すと、カタカタ音をたてながら踊りだす、おもしろダンス竹玩具になる。

音楽事業部



平成11年度の活動

今年度の事業も新しい要素を取り入れることを積極的に行った。特別期間の催しは、過去のプログラムをベースにしながらも新しいアレンジを施し、時代の流れや雰囲気にも配慮しつつ演出することに改めて挑戦した。

こどもの城の理念は「児童の心身の健全育成」であり、その目的は揺るぎないものである。しかし、昨今の情勢を考慮すると、私たちのような施設は、それに加えてサービス業的な娯楽の要素も取り入れることを無視できない状況にあるのではないかと思われる。「健全育成」を遊びの視点でアプローチしたプログラム開発は当然のことながら、遊びに来た子ども、そして家族が心地よく活動できる環境作り、スタッフの対応の仕方などもおろそかにはできない。

❶一般利用

(ア) 平常期間

平常期間は一般来館児活動と並行し、A・Bスタジオで講座・クラブを運営しているために、一般に使用するスペースは、日曜日・祝日などにBスタジオで行うコンサート、イベント等を別にすれば、基本的に音楽ロビーに限定されており、昨年とほぼ同様の活動を行った。

今年度の音楽事業部の目的の一つが、遊びに適した環境作りであった。プログラムの枠はここ数年固定化しているものであるが、個々のスタッフの質によってその内容も変わってくる。子どもに対する言葉かけひとつをとっても大切な要素である。スタッフの「馴れ」によってそれらのことが意識されなくなりがちであるが、あらためてスタッフの「人としての魅力作り」に視点をおいて運営し、また建物や備品の老朽化についても、日常働いているとそれにも「馴れ」てしまいがちである。

初めて遊びにくる子どものことを忘れずに、常に心地よい遊び場として整備することにも重点をおいた。

【わいわいスタジオ】

世界各地の民族音楽を定期的にとりあげて、来館する親子に鑑賞型の音楽体験を提供している。開館以来のプログラムであるため、内容が安定しており、来館者のプログラムへの理解も浸透してきているようである。運営面での留意点は「安定＝マンネリ」にならないよう、常に新規の出演者による演奏を取り入れ、定番のプログラムとのバランスに気を付けてプログラムを組み立てることである。今年度の主な内容は次のとおりである。定番のものとして、南米アンデスの音楽、中国の音楽、童謡、ブラジルの音楽、三味線(講座生による)、インドネシアの音楽、草笛、手作り楽器のワークショップ、トリニダード・トバゴのスチールドラム、西アフリカの太鼓とダンスなど。新規のプログラムとして、ラテン音楽のビッグバンド（ラテンパーカッションと金管楽器のオーケストラ）やアジア文化会館の留学生を中心としたアジアの影絵芝居などを行った。

今後の課題としては、多くの人びとへの情報提供のために、早めのプログラム決定および広報活動に、より力を注ぎたい。

㈠ 特別期間

【ゴールデンウィーク（児童福祉週間）】

◎おんがくがスキ！

今年度で7年目となる「おんがくがスキ！」を円形劇場で公演した。〔こどもの城〕の一般来館児向けプログラムのオリジナル性を1時間に凝縮して演出している。

今回は「リズム」をひとつのテーマとして構成し、新たにパーカッショニストを1人加えた編成とした。2人のパーカッショニストのたたき出すリズムは、子どもにも大人にも強く印象に残るものとなった。楽器を紹介することにとどまらず、人間が生で演奏することによるエネルギーやそのバイタリティーを直接体験できる場を提供することは、とても大切なことと考えている。常に音楽は人と人との関わりから成り立つという視点を忘れずにいたい。

◎アンクルン特別コンサート

このコンサートは従来「わいわいスタジオ」で行っている「アンクルンコンサート」（職員とアルバイト5人による演奏）をベースとして拡大した企画であり、平成10年8月に実施した「手作り楽器ワークショップ・アンクルン」においてアンクルンを製作・合奏体験をした親子との合同コンサートであった。「手作り楽器アンクルン」に参加した約400名の受講者を対象にして、円形劇場におけるコンサートへの参加を募ったところ、約50人の親子が各自が制作したアンクルンを持参し、その上弁当持参で、気持ち良く参加してくれた。

手作り楽器の受講者たちとの再演ということで、手作り楽器の活動を深めたこと、約300人の円形劇場の観客と出演者全員での合同アンクルン演奏を行えたことなど、今では音楽ロビーを中心として簡単な体験にとどまっていた活動が、演奏する人、聞く人の両方にとってかなりじっくりとした深い体験へと形を変え、収穫の多い企画となった。

【夏休み特別期間】

昨年の企画「みつけた！サウンドサーキット」をアレンジし、今年度は「おんがくゲームアーケード・スーパースターゲッター」を実施した。音楽ロビーにさまざまな音楽遊びのゲームコーナーを設定し、参加するごとに星のシールをもらえるという内容。有名な映画『スターウォーズ』の夏の封切りを控え、意識的に全体を演出。音楽遊びは歌、おどり、民族楽器体験、電子楽器体験などの要素を盛りこんだ。予想以上に高学年の子どもにも人気があり、幅広い年齢層が参加できるプログラムとなった。今回特に家族が子どものゲームを楽しそうに見ている場面が多く、すいている時は一緒になって大人も参加し家族で楽しめるものとなっていた。但し、混雑時にはひとつずつの待ち時間が長く、改善を要する。また一日中たくさんの子どもと遊ぶスタッフの疲労も予想以上であった。そのため、活動をいっせいに休む時間帯を設けたり、担当する持ち場を一つの所に固定せずに、また、マンネリを防ぐ工夫をしたりして、疲労の軽減をはかった。スタッフが疲労すると、楽しい遊びが展開される雰囲気に影響するので、今後より一層改善していきたい。

◎手作り楽器半日講座

夏の手作り楽器ワークショップは今年で3回目。Bスタジオにて①竹のハンドベル「アンクルン」、②竹の風のオルゴール「ピンジュカン」、③西アフリカの太鼓の合奏「アフリカン・タムタム」を親子を対象として実施。

①はインドネシア・ジャワ島に伝わる民族楽器、2年連続の登場。竹のハンドベルと言われている楽器で、小さい子どもから大人まで多人数で楽しむ楽器。「お話・製作・合奏」の流れを大切にし、〔こどもの城〕開館以来、さまざまな形で紹介してきた「アンクルン」をさまざまな角度からの深い体験を目標とした。昨年の実施経験があるため安定した活動が提供できた。昨年、400人を越える受講者が参加した企画で、手作り楽器のリピーターが意外に多かったためか、目標定員数の6割程度に止まったことは残念であった。

②は今年の新企画。インドネシア・バリ島に伝わる竹の風のオルゴールと呼ばれている「ピンジュカン」。風によってプロペラが回ると、その軸に取り付けられたバチが3つの竹の小片を叩き、3音による独特なエンドレスの旋律を奏でる楽器。「お話・製作・音の調整」といった内容で合奏活動がなかったためか、少々「アンクルン」などと比較するともの足りない感が受講者に見受けられた。しかし造作・仕掛けに興味のある小学校中学年以上の男子を今まで以上に音楽に引きつけられたのではないかと思われる。

③は当初の企画としては、太鼓の「製作」と「合奏」を行いたかったのだが、材料費が大変高価なものになってしまい、実施に至らなかった。講師に西アフリカ、セネガル出身のパーカッショニスト、ワガン・ンジャエローズ氏を招き、氏の全面的な協力のもとに受講者用の30台を越えるオリジナルの太鼓（タムタム）を用意してもらい、「お話・合奏練習」の2本立てで行った。受講者が本物のリズムを求める気持ちとでもいうのか、大変に積極的で熱心であり、4日間定員30名のコースは、すべて



アンクル特別コンサート（リハーサル：GW）



アフリカンタムタム（一日体験講座・夏休み）

ほとんどいっぱいとなり、明るい雰囲気のなかで激しく繊細なアフリカのリズムに受講者はひたった。アンケートなどで再度の実施を求める意見が多数あり、その充実度がうかがえた。次年度は太鼓製作を加えた内容を実施したいと考える。「お話・製作・合奏」という3種の均等なバランスを大切に考えてきた「手作り楽器・ワークショップ」が、本年は少々、制作と音楽活動の時間的なバランスを崩したように思われる。より多くの子どもたちに今までにない音楽・楽器体験をしてもらうために、製作楽器・実施方法の再考が必要。

23日間に延べ約500人の受講者があり、前述のような作ることと音を出すこととのバランスなどの問題点を露呈した反面、多くの受講者を獲得することができた。

【開館記念特別期間】

◎パパ　ママ　わたしでアンクルン

全館共通のテーマ「親子、家族」を活動にとりいれて実施した。平常時は活動の中心が子どもたちのため、親子一緒に楽しく体験してもらう機会が少なかった。これは運営側にも参加する親子にも大変新鮮であり、内容などいろいろ新しく試みることができ、大変有意義なものになった。また、実際に体験することによりプログラムの意図や楽しさを大人（保護者）にも理解してもらえた。

アンクルンは、竹で作られたハンドベルと呼ばれている楽器で、参加者は一人ひとつずつアンクルンを持つ。担当する音の時だけ鳴らすため集中力や他者との協力が要求されるので親子内、他の親子との交流も図られた。今回は大人も一緒に演奏するため、普段はできないような難しい曲（となりのトトロの「さんぽ」）を演奏し、大きな達成感も持てた。

【冬休み特別期間】

昨年春に実施した「へんしん大飯店」を今年度は正月に実施。中国風の飾りつけは華やかで2000年の幕開けにふさわしいものとなった。今回も様々なコスチュームを用意した。家族で変身を楽しみ、コンサートや音楽遊びの催しに参加していた。この催しは常連の家族にも好評で、また期間中のリピーターも多かった。変身遊びの魅力、人気の高さを改めて感じた。

【春休み特別期間】

昨年冬の「おどれやピョンピョン」のコンセプトで、今回はダンス企画の第2弾「みんなでおどれ春ダンス！」を実施。世間ではパラパラをはじめとしてダンスが話題になっていたので、この企画もタイムリーであったといえる。前回と同じくアフリカ、サンバ、ストリートダンス、フォークダンスなどで構成。音楽は全て生演奏でビート感を大切にし、踊りと音楽は常に一体感をもっていることを強くアピールした。スタッフも2回目ということでダンスリーダーとしてレベルアップしたようだ。現代の子どもたちは、踊ることに全く抵抗がないように感じられる。ある世代までは「恥ずかしい」、「うまくできないからキライ」という感覚が、踊りに対してあると思われるが、子どもたちは本当に活き活きと体を動かしている。それを一種の驚きの表情で見ている大人の姿が印象的であった。

❷講座・クラブ

講座・クラブは昨年度とほぼ同様な組み立てで行われた。概ね定員に達しての運営がなされているが、一部恒常的に定員割れしているものがある。〔こどもの城〕の開館15年目を迎えるにあたり、今後クラスの統合等の見直しを図りつつ、時代のニーズを把握した新しいコース開講の検討も必要である。

㋐ ぼくらのサウンド2000

年度末の春休み直前の3日間、音楽事業部の講座・ク

ラブが１年間の成果を発表する合同コンサートで、館内の青山円形劇場で開催。前述のとおり講座・クラブの受講生の発表の場であると同時に、一般の来館者などに、広く〔こどもの城〕の活動を知ってもらうことも目的としている。

演奏には、女性ボランティアと青年ボランティアの共演も見られた。

❸グループ活動

音楽事業部は、グループ活動全体の利用件数の約半数を占めている。グループの希望をできるだけ取り入れて、フレキシブルな対応ができるように常に心掛けている。ほとんどの利用グループのアンケートで良い評価を得られているが、今後プログラムを開発する上で必要な部分は音楽の持つ「穏やかさ」、「心を落ち着かせるいやしの部分」であろうかと思われる。今の状況に甘んじることやマンネリズムに陥ることはないが、新プログラムの開発も必要である。

❹その他の活動

派遣事業は主にコンサート形式のものと、手作り楽器の講習会のものとの２本柱で行っている。私たちは健全育成施設のセンター的機能を常に意識しつつも、謙虚な姿勢で取り組みを行っている。

今年度も派遣の希望があった主催者側はいずれも熱心で積極的であった。私たちもその情熱を見習い、一つ一つの事業に対しその都度ベストな形で望めるよう努力した。今年度のコンサート形式の派遣の特徴としては、子どもも自らの手作り楽器をもってコンサートに参加するというスタイルになったことだ。これは長崎県佐世保市での公演の際に主催者側から提案があったものがきっかけで、その後の派遣にも音楽事業部からも働きかけて、主催者側と共同でプログラム作りを進めた。常に発信するだけでなく、相互に作用しながら、また、それを広めていくということの大切さを今年度改めて認識できた。

❺まとめ

〔こどもの城〕は、開館以来15年の歳月が過ぎ、この間日本の社会、また、子どもを取り巻く環境も大きく変化してきている。そして、それにともなって、〔こどもの城〕は、例えば児童の福祉・文化という観点に重点をおいた活動が、子育ての支援まで広がり、開館当初予想していた、こうあるべきといった枠以上の要望を受け入れるようになっている。そうした現実の社会の要望により、〔こどもの城〕の社会的な役割は必然的に変化せざるをえないと思われる。いま現在、今までに築き上げてきた経験やノウハウを根底にして、次のような点を視野に入れつつ、子どもの豊かな感性をより一層育むために新たなる方向を求めて、模索するという時代に突入しているといった実感を持っている。

・「遊び」をより意識した音楽活動
・親子を対象とした活動
・講師派遣（レクチャー、コンサート）
・民族ワールド系音楽の展開（2002年の文部省の指導要領改定にともなう活動）
・手作り楽器などに代表される音楽と他の活動との総合

これらの考えは、来年度だけに限らずこの先５年間の活動の大きな骨子になると思われる。現実を堅実に認識し同時に未来を冷静に見つめることを忘れず、精力的に活動を推進して行こうと考えている。



アフリカンタムタム（夏休み）

平成11年度活動一覧表

❶一般利用

〈平常期間〉

名　称	期　間	備　考
みんなでライブ！	毎週火曜日 14:30～	子どもたちのよく知っている手あそび、季節に合わせたパネルシアター、童謡、身体を動かすあそびのプログラム。音楽を楽しむ中で親子のふれあいを感じるものを取り入れている。親子がペアになって楽しむダンスも好評で引き続き行っている。
水曜コンサート	毎週水曜日 15:30～	うたあそび、手あそびを中心とした参加型プログラムと、アフリカ、インドネシア、ブラジル、中国の音楽を聴かせる観賞型プログラムの２種を実施。後者は観賞型であるが、使用した楽器に触れたり、スタッフと演奏する参加部分も設けた。
みんなであそぼう 木よう広場	毎週木曜日 14:30～	親子を対象としたプログラム。音楽を聴き、体を動かして自由に表現をすることをねらいとしている。ピアノ、ドラムなどの伴奏でリズム運動や歌遊び、ダンスなど様々なものを取り入れた。参加する子ども用の手作りの名札が大変好評だった。
木ようワンダーランド	毎週木曜日 16:00～	音楽スタッフ扮する「楽器屋さん」が世界各地の楽器を紹介する鑑賞と体験をねらいとしたプログラム。素材別のテーマで毎週違う楽器を紹介した。ボランティアによる導入の手あそび、やサンバの演奏等も行っている。
楽器であそぼう	毎週金曜日 15:00～	サンバのリズムに合わせて身体を動かすことに重点をおいた。ただ動かすのではなく、最後に新聞の中に飛び込む障害物を設けたことで、家庭ではなかなかできないことを体験できると好評。引き続き女性ボランティアが中心になって活動している。
ハートフル・ライブ	毎週土曜日 13:00～　14:00～ 人形劇のない場合13、14、15時	演奏を聴く・楽器に触れて演奏してみるという体験を通して様々な音楽を楽しむ鑑賞・体験合体型のコンサート。日本・中国・インドネシアをはじめ世界の楽器を、毎回テーマ(「弦楽器のおと」等)に沿って紹介。インドネシアの竹の楽器、アフリカの楽器の二つが新プログラムに加わった。
うたってHappy	毎週日曜日・祝日 13:00～　14:00～ 15:00～　16:00～	バンド形式による弾き語り。レパートリーは童謡のほか、アニメのヒットソングなどのリクエストも多く、子どもたちが積極的にロビーの楽器を楽しめる。それぞれのスタッフが毎回工夫し、個性豊かな内容を展開することが出来た。
サンバコンサート	「わいわいスタジオ」が音楽事業部担当でない日曜日	サンバの演奏、楽器紹介、ダンスの３部構成になっている。「サンバコンサート」は数名の演奏スタッフが必要なため、「音楽広場」に比べ実施回数が少なくなっているが、プログラム的な問題はない。今まで行ってきたベーシックな内容を基本として、演奏技術を向上させながら、プログラムの安定を図った。
音楽広場	祝日(隔週～月１～２回) 14:30～	担当職員１人１人の個性とレパートリーを生かした手あそび、歌遊び、リズム遊びを中心とした豊富な内容に、パネルシアターやダンスなども加えバラエティー豊かなプログラム。今年は特に親子で楽しめる内容を充実させるよう心掛けた。
いろいろ楽器コンサート	毎週日曜日 16:30～	世界各地の楽器を演奏し、紹介する鑑賞型のプログラム。世界のさまざまな楽器を演奏し、リズムを感じさせ、楽器の特長を紹介し、日本のこどもたちにとって馴染みの薄い楽器や音楽や、それだけではなく文化までも感じとれるよう努力した。
わいわいスタジオ	日曜日・祝日 (平均的に隔週) 13:30～ 15:30～	来館している親子全般を対象にしているコンサートで、幼児でも楽しめるように構成している。アフリカ、インドネシア、ブラジル、中国などの民族音楽、ラテンジャズやロック、草笛、手作り楽器のワークショップ等、常に新しい企画、様々なジャンルの音楽を取り上げるように努めている。

〈特別期間〉

名　称	期　間	備　考
〈G.W.特別期間〉 いろいろ楽器 コンサート	4.29 15:30 音楽ロビー	世界の民族楽器を紹介するコンサート。アフリカの太鼓、ブラジルのサンバ、インドネシアのアンクルン、カリブ海のスチールドラムを演奏。
〈　〃　〉 うたってハッピー	4.29 13:00　14:00　15:00 16:00　音楽ロビー	バンド形式による弾き語り。レパートリーは童謡のほか、アニメのヒットソングなどのリクエストも多く、子どもたちが積極的にロビーの楽器を楽しめる。それぞれのスタッフが毎回工夫し、個性豊かな内容を展開することが出来た。
〈　〃　〉 キャッスルクエスト	5.2〜5.5 開館時間中 音楽ロビー A・Bスタジオ	プレイ事業部、企画部との合同。館内ロールプレイングゲームの中で音楽事業部では歌、踊り、楽器などを活用した音楽遊びのコーナーを担当した。
〈　〃　〉 竹の響き アンクルンコンサート	5.2 11:00　13:30　15:30 青山円形劇場	こどもの城アンクルングループ(音楽事業部スタッフ)によるコンサート。竹のハンドベルともいわれるインドネシアのアンクルンで当地の民謡や日本の童謡などを演奏、客席参加のコーナーも実施。特筆すべきは、夏に行った手作り楽器ワークショップでアンクルンを作った親子50名が出演者として演奏に参加したこと。
〈　〃　〉 おんがくがスキ!	5.5 11:00　13:30　15:30 青山円形劇場	毎年恒例になったこどもの城オリジナルプログラムのコンサート。民族楽器やがらくた楽器をまじえたバンド編成で、音楽の楽しさを個性的なアプローチで訴えている。会場参加の遊びの部分も充実し、ファミリーで楽しめた。
〈夏休み特別期間〉 おんがくゲームアーケード スーパー スターゲッター	7.20〜8.31 開館中	昨年の「サウンドサーキット」の改訂版プログラム。今年は受付でバッヂを作り、ゲームをするたびに貰えるシールを集めていく。バッヂがシールでうまると、スーパースターゲッターとなり、認定証が発行される。巷で話題の映画のイメージを取り入れ室内を暗幕で囲い、宇宙のような雰囲気づくりをしたり、ゲームを行うスタッフも星から来た宇宙人という設定にした。前年の経験をもとに新ゲームの作成や、期間中にゲームを入れ替えて、リピーターの来館者に対応できるように心掛けた。一日に2回期間入れ替えで(アフリカンタムタム，アンクルン，ガムランの)体験型コンサートを行った。昨年からのリピーターが多く訪れてくれたのが印象的だった。
〈　〃　〉 ゆったり親子の おんがく園	8.7〜8.31 開館中Aスタジオ	0〜3才の幼児と親がゆっくりと音のでるおもちゃ（音具）で遊ぶことのできる部屋として昨年に引き続き開園した。親子の触れ合いを楽しむためのスペースとして位置づけられ、大勢の親子に利用された。
〈　〃　〉 親子でたたこう アフリカン・タムタム (半日講座)	8.14，15，21，22 13:00〜16:00 Bスタジオ	3年目を迎えた「手作り楽器ワークショップ」の枠で、西アフリカの太鼓だけの合奏音楽「サバル(タムタム)」のワークショップを行った。手作り楽器のコンセプトである(作る)＋(音を出す)＋(合奏)の後半部分のみの活動であったが、ほとんど定員いっぱいの状況で好評であった。講師はセネガル出身のパーカッショニスト、ワガン・ンジャエローズ氏。次年度に製作から合奏のプログラムの活動を実施予定。
〈　〃　〉 作って合奏手作り楽器 アンクルン (半日講座)	8.10〜13， 8.20，25〜28 13:00〜16:00 Bスタジオ	インドネシアの竹のハンドベルと言われている「アンクルン」は、昨年の好評を受け2年連続の実施となった。2年連続ということで全日フル動員にはならなかったが、3時間のワークショップが、(レクチャー)(製作)(演奏)のバランスのとれた内容で、また多くの受講者に興味を持ってもらえたようだ。実施日数の再検討を。
〈　〃　〉 作ってあそぼう手作り楽器 ピンジュカン (半日講座)	8.7〜9，16，17， 8.23，24，29〜31 13:00〜16:00 Bスタジオ	今年の「手作り楽器ワークショップ」新企画は、竹の風のオルゴール「ピンジュカン」。参加人数はほぼ8割方に達したのだが、この楽器の持つ性質として合奏体験につながりずらかったことが、少々他のプログラムとくらべると寂しかったと言えるだろう。しかし竹と風力だけで音を紡ぎだすこの「ピンジュカン」は、造作・メカニックとして多くの男の子にも興味を持ってもらえ、支持層の拡大につながった。
〈冬休み特別期間〉 わいわいスタジオ どうようコンサート うたおうクリスマス	12.23 13:30　15:30 Bスタジオ	歌のお姉さんのミホちゃん、ピアノニストのタッちゃん、人形のジェームスで展開するファミリーコンサート。クリスマスソングとお話しに加え、今回はオリジナルの呼び掛け歌を使用し、子どもたちにも歌で参加してもらった。
〈　〃　〉 うたって　ハッピー	12.25，26 13:00　14:00　15:00 16:00　音楽ロビー	歌、シンセサイザー、ベース、ドラムという楽器編成のバンドで様々な歌を演奏。子どもたちに大人気のクリスマスソングを中心に演奏し、親子で楽しむ姿が多くみられた。
〈　〃　〉 いろいろ楽器 コンサート	12.25，26 16:30 音楽ロビー	世界の民族楽器を紹介するコンサート。アフリカの太鼓、ブラジルのサンバ、インドネシアのアンクルン、カリブ海のスチールドラムを演奏。

名　称	期　間	備　考
〈冬休み特別期間〉 へんしん大飯店	1.6~1.10 開館中 音楽ロビー	昨年の春休みにスタートしたプログラム。華やかな装飾と扮装で一年の始まりらしい雰囲気を醸しだした。子どもたちも大人も変身グッズを身につけ、日常とは違った空間を演出。変身したお母さんの姿にびっくり!という子どもがいたり、親子で楽しむきっかけ作りになっていた。弾き語りの「うたって　まんぷく」、歌遊びやダンスを楽しむ「へんしん大宴会」、世界の音楽を紹介するコンサート「たらふくコンサート」などのプログラムが行われた。コンサートの合間にはスタッフによるマンボやポルカが演奏され、楽器をもって子どもたちとスタッフが自由に接する時間も好評だった。
〈　〃　〉 ゆったり親子の おんがく園	1.3~1.10 開館中 Aスタジオ	対象の中心は親子だが、家族で訪れ祖父母などと一緒に過ごし、こころゆくまで滞在し、ゆっくりすごす人たちがたくさんいた。今回はロビーの変身も小さい子どもから楽しめるとあって、混雑のない落ちついた雰囲気が保てた。
〈春休み特別期間〉 みんなでおどれ 春ダンス!	3.25~4.5 14:30 音楽ロビー	アフリカンリズム、サンバ、フォークダンス、ヒップホップのリズムに合わせてダンスをするプログラム。簡単なステップを組み合わせ、参加した人がすぐに踊れるように工夫した。大人も子どももそれぞれに音楽のもつリズムのエネルギーを身体で感じ発散していたようだ。
〈　〃　〉 いろいろ楽器 コンサート	3.25~4.5 16:30 音楽ロビー	世界の民族楽器を紹介するコンサート。アフリカの太鼓、ブラジルのサンバ、インドネシアのアンクルン、カリブ海のスチールドラムを演奏。
〈　〃　〉 うたってハッピー	3.25~4.5 13:00　14:00 15:00　16:00　音楽ロビー	バンド形式による弾き語り。レパートリーは童謡のほか、アニメのヒットソングなどのリクエストも多く、子どもたちが積極的にロビーの楽器を楽しめる。それぞれのスタッフが毎回工夫し、個性豊かな内容を展開することが出来た。
〈　〃　〉 ゆったり親子の おんがく園	3.25~4.5 開館中 Aスタジオ	ロビーが大きな子どもたちで賑わっていたため、落ちついてすごせるおんがく園を利用する親子が多く、混雑気味であった。混雑時も落ちついた雰囲気を保つ工夫をしていきたいというのが今後の課題である。
〈　〃　〉 みんなでならそう 春のとりぶえ	4.1~4.5 13:30　15:30 Aスタジオ	身の回りに廃材としてあるフィルムケースを使った鳥の鳴き声のする笛の制作。
〈春休み〉 ぼくらのサウンド'2000	3.18 17:00 (青山円形劇場)	和太鼓グループ、レッツ・プレイ・サンバの公演。
	3.19 13:00 (　〃　)	リズム・ムービングA、B、C、およびリズム・ムービング&パーカッションとパーカッション・アンサンブルの公演。今回初めておとなのためのリズム・ムービングが出演した。
	3.19 16:30 (　〃　)	三味線、ガムラン講座、エレクトリックアンサンブルの公演。
	3.20 13:30　16:00 (　〃　)	おかあさんもいっしょリトミック・合唱講座・合唱団Ⅰ・Ⅱ・混声合唱団の公演。

ガムランを体験する子どもたち(平常期間)



スチールドラムコンサート(パノラムスチールオーケストラ)



❷講座・クラブ

〈講座〉

名　称	対象・定員	受講数	曜日・日時	備　考
リズムムービング A	(人) 3歳児(12)	(人) ① 11 ② 8 ③ 9	火曜日　13:30～14:30 (全32回)	自分の名前を使って言葉でリズム遊びをすることから始まる。身の回りのさまざまなことからリズムを感じさせ、子どもたちの眠っている感覚を揺り動かし、創造性を引き出し、はぐくむことを目指した活動を行っている。主にコンガ、ボンゴなどの打楽器、リズムやメロディー、ハーモニーを即興で演奏できるオルフ楽器を使用しているが、そのほかに聞こえた音を全身で表現したり、造形活動を行ったりしている。楽譜は使用していない。
〃　B	4歳児(15)	① 9 ② 9 ③ 7	〃　14:30～15:30 (全32回)	
〃　C	5歳児(15)	① 5 ② 8 ③ 6	〃　15:30～16:30 (全32回)	
リズムムービング &パーカッション	小1～3 (15)	① 20 ② 19 ③ 17	火曜日　16:30～17:30 (全32回)	リズムによる自己表現を行う。更に読譜力など、音楽的基礎力の理解、打楽器演奏法の導入、オルフ楽器を使った即興演奏をするなど一歩踏み込んだ指導を行う。
おとなのための リズムムービング	18歳以上 (　)	① 15 ② 14 ③ 12	火曜日　18:00～19:30 (全16回)	今年度より開講。かねてから要望のあったおとなのためのコース。小学校教諭や音楽教室の指導者、一般企業の会社員や子どもコースの保護者と様々なメンバー。
お母さんも一緒 リトミックⅠ	3歳児 と母親 (20)	① 23 ② 21 ③ 18	水曜日　14:00～15:00 (全32回)	子どもの発達段階に即したリズム遊び、歌遊び、簡単な造形活動を通して親子のコミュニケーションを図り、音楽を楽しむ心と豊かな感受性を養うことを目指している。
お母さんも一緒 リトミックⅡ	4歳児と 母親 (20)	① 21 ② 19 ③ 16	水曜日　15:00～16:00 (全32回)	初級で培ってきた感性や音に対する感受性を引き続き伸ばすよう心がけ、それぞれの成長の実際に合わせながら、個性豊かな発達を促すような活動へと更に高めていっている。
お母さんも一緒 リトミックⅢ	5歳児と 母親 (20)	① 20 ② 20 ③ 17	水曜日　16:00～17:00 (全32回)	就学を控えるころになると子どもの感受性も親離れが始まり、子どもたち同士の接触の機会が多くなる。生き生きと目を輝かせて音楽を楽しみ、遊んでいる子どもたちが印象的。
おんがく星みつけた	2歳児と 母親 (30)	① 30 ② 30 ③ 30	木曜日　10:30～11:30 (1期10回　2期10回 3期9回)	就園前の幼児と母親が対象で、リズム遊びを中心に、造形活動や身体表現なども取り入れた活動を行っている。母親とスキンシップをしながら楽しく音楽と遊べることを目指す。
シンセワーク初級	小5～高3 (8)	② 7 ③ 7 ③ 7	金曜日　17:00～18:00 (全32回)	シンセサイザーの基礎やコンピューターとの接続、レコーディングなどを体験する基本講座。今年から1年間の講座となり、2学期後半から3学期にかけてはバンド実習も行う。
和太鼓グループ	(人) 小3～高3 (12)	(人) ① 9 ② 10 ③ 12	土曜日　14:00～15:30 (全32回)	湯島に伝わる「助六太鼓」のコース。大太鼓、中太鼓、締め太鼓の3種の太鼓を使って演奏する組み太鼓。口唱歌で指導している。
レッツ・プレイ・ サンバ初級	小1～小3 (10)	① 11	土曜日　13:00～14:00 (全5回) (1学期のみ)	今年度は試験的に開講。サンバ講座の入門コースとして位置づけている。サンバの打楽器のアンサンブルを核にゲーム、楽器作りなどもとりいれた。
レッツ・プレイ・ サンバ	小4～高3 (10)	① 14 ② 12 ③ 12	土曜日　15:30～17:00 (全29回)	ブラジルの独特な打楽器を使い、サンバのリズムを楽しくアンサンブルするコース。対象年齢を引き上げたため、より高度で力強い演奏を展開している。
合唱講座	小1～4 (30)	① 32 ② 32 ③ 31	土曜日　14:00～15:30 (全32回)	遊ぶことを通して無理なく声を出し、身体表現なども取り入れて、上手に歌うことだけではなく、身体全体で音楽を表現するユニークな合唱活動プログラム。
混声合唱	高校生以上 (15)	① 44 ② 44 ③ 40	土曜日　19:00～21:00 (全32回)	子どもたちに豊かな音楽や表現のすばらしさを伝えることを目指している。コンサートや合宿などのときは、常に「こどもの城児童合唱団」と活動をともにしている。
エレクトリック アンサンブル	小5～高3 (8)	① 12 ② 12 ③ 12	日曜日　10:00～12:00 (全32回)	アンサンブルの中での各楽器の役割が分かりやすいバンド形式のプログラム。無限の音色が操れるシンセサイザーを活用することで、さまざまなジャンルの音楽にチャレンジしている。

名　称	対象・定員	受講数	曜日・日時	備　考
三味線講座　I	小2～高3 (12)	①　8 ②　8 ③　8	日曜日　10:00～11:15 (全32回)	ぼくらのサウンドに加え、毎年出演している田島講師主催の「三味線のつどい」では「三味線組曲」を演奏。わらべうたから古典曲までをプロの演奏家と共に熱演。今年に入り、外国の方に日本の伝統音楽に取り組んでいる子どもたち、というテーマでの出演依頼や、今後に予定されている教育指導要領の改定に伴い、新しい感覚で邦楽に取り組む子どもたち、というテーマでのテレビ出演などが相次いでいる。講師のアレンジなどにより、始めたばかりの子どもたちでも、三味線の魅力を身体で感じることの出来る講座を展開している。
〃　II	小2～高3 (12)	①　6 ②　6 ③　6	日曜日　11:15～12:30 (全32回)	
〃　III	小2～高3 (12)	①　7 ②　7 ③　7	日曜日　12:30～13:45 (全32回)	
ガムラン講座	小1～高3 (15)	①　11 ②　11 ③　10	日曜日　14:00～16:00 (全32回)	インドネシアの青銅の打楽器アンサンブル「ガムラン」の初心者のクラス。さまざまな音楽的な要素が潜在しているガムラン音楽は、アンサンブルでその特異さが分かる民族音楽。
大人のための ガムラン講座	18歳以上 (15)	①　16	日曜日　18:00～20:00 (全10回) (1学期のみ)	インドネシアの代表的な民族音楽である「ガムラン」の幅広い世界を見聞し、既成の音楽感にとらわれずに、音楽の多様な可能性を体験する入門的なコース。

〈クラブ〉

名　称	対象・定員	受講数	曜　日・日　時	備　考
パーカッション アンサンブル	(人) 小4～高3 (15)	(人) ①　22 ②　17 ③　14	火曜日　17:30～19:30 (全32回)	さまざまな打楽器をふんだんに使い、演奏したり、体を楽器にしてリズム打ちを行ったり、子どもたちのはじけるようなリズム感を表現する。初心者も、ていねいな指導で、すぐに楽しむことができる。
こどもの城 児童合唱団 I	小2～3 (30)	①　37 ②　36 ③　34	土曜日　15:30～17:30 (全32回)	音楽を通し、協調性・創造性・幅広い知的好奇心を養い、豊かな音楽性を育てることを目的としている。合唱活動だけでなく野外活動、シンセサイザーやリズム楽器による合奏なども体験するユニークな総合プログラムを展開。
〃　II	小4～中3 (60)	①　99 ②　92 ③　88	土曜日　17:00～19:00 (全32回)	
ガムラングループ	小4～高3 (15)	①　11 ②　10 ③　10	日曜日　16:00～18:00 (全32回)	ガムラン講座の継続者のコース。年齢の差を超えて、子どもたちは打楽器の合奏を楽しむことができる。初級終了者と経験者が一緒になり、アンサンブルをして練習している。

エレクトリック・アンサンブル(ぼくらのサウンド2000)



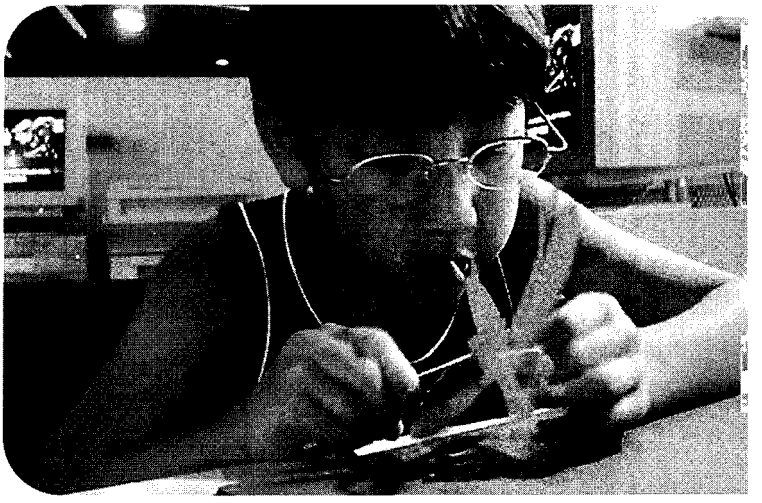
レッツ・プレイ・サンバ(ぼくらのサウンド2000)



❸その他（動くこどもの城など）

名　称	期　間	備　考
（演奏依頼） 第8回　おもちゃの 図書館国際会議	8.31 国立オリンピック記念 青少年センター	おもちゃの図書館全国連絡会、国際トイライブラリー協会主催。世界各国のおもちゃの図書館の仲間が集まり、経験とアイデアの交換・交流を通し、世界の障害のある子どもたちをはじめ、全ての子どもたちをとりまくあそびの環境を豊かにすることを目的としたもの。アジアの文化を外国の子どもたちやゲストに伝えるため、三味線講座の子どもたちが依頼を受け、わらべうたや、古典曲を演奏。子どもたちが外国のゲストに三味線を体験させるコーナーなどが好評であった。
（講師派遣） 地域子育て支援センター 担当者育成研修会	9.16.30 12.2 音楽ロビー	昨年度に引き続き4回目。主催は(社)日本保育協会。約150人が参加。対象は保育所の主任保母など。乳幼児と、身近なものなどを取り入れて親子であそぶ援助法や活動のプログラムの進行法等を中心に幼児と保育者の活動法をテーマとした。
（演奏依頼） 毎日こども 国際会議	10.10 国立オリンピック記念 青少年センター	毎日小学生新聞、毎日中学生新聞、毎日新聞主催。子どもたちの環境活動を支援し、国際交流を図るプロジェクトとして、日頃の環境活動を発表しあう国際会議。参加する国内外の子どもたちと同じ世代で日本の伝統音楽に取り組んでいる子どもたちに、その魅力を紹介してほしいと依頼を受け、三味線講座の子どもたちが出演。
（演奏依頼） 狛江みずほ幼稚園	11.9 狛江みずほ幼稚園	園児約400人が参加。通常のロビー活動の中から生まれた音楽劇や、手遊び、歌遊び、ダンスのコンサート。音楽に合わせて全員で体を動かす参加型のプログラムが好評であった。
（演奏依頼） 世田谷区立砧幼稚園 親子コンサート	11.11 世田谷区立 砧幼稚園	4・5歳児と保護者向けの親子コンサート。約160人が参加。てあそびや楽器の演奏、ダンスなど、こどもの城でおなじみのプログラムや、園にある楽器を使ってのリズムあそびなど、通常の活動をもとに園側の活動とリンクさせた内容となった。
（演奏依頼） 第十一回 三味線のつどい	11.28 青山円形劇場	こどもの城三味線講座の講師である田島佳子氏と音楽事業部の共催する演奏会。三味線講座生も3クラス揃って出演。今回は「三味線組曲」を演奏。この曲は「かごめかごめ」「すいすいずっころばし」といったお馴染みのわらべうたから、威勢のいい祭りの合方、「越後獅子」や「勧進帳」といった古典の名曲を三味線講座のために講師自身が構成した組曲。最近、注目度の高い日本の伝統音楽に気軽に取り組んでいる姿が観客に好評であった。
（講師派遣） 母親学級卒業生の 交流会	2.24 杉並区立永福和泉 区民センター	杉並区立和泉保健センター主催。管轄保健センターでの母親学級卒業生の交流会の一貫として行われた乳幼児あそびの講習会。講習会、と堅いものではなく、日々の生活の中に気軽に取り入れられるあそびのヒントを中心に、具体的なプログラムで展開。7か月から1歳10か月の乳幼児と親、合わせて約100名が参加。
がらくた楽器のコンサート	7.11 長崎県佐世保市 コミュニティーセンター	児童館で事前に子どもたちがそれぞれ手作りで楽器を作り、それを会場に持参してのコンサート。初めての試みだったが、今まで以上に全体の一体感があった。
がらくた楽器のコンサート	10.3 香川県 さぬきこどもの国	さぬきこどもの国の音楽室での手作り楽器ワークショップとリンクした形でのコンサート。そこで作った楽器を持ち込んでのコンサート。自分の作った楽器を持ってすぐに演奏でき好評。
おんがくがスキ！	1.16 兵庫県神戸市 総合児童センター	震災復興5年を記念しての企画として実施。ファミリーで音楽を楽しめるよう考慮して演出。
おんがくがスキ！	2.13 静岡県藤枝市 市民会館	市内の幼稚園、保育園の通園児童とその保護者を対象とした催しで2回公演し、1回目803人、2回目537人の親子が集まった。主催者側の積極的な働きかけもあり、手作り楽器を持参してのコンサートとなった。
（講師派遣） 親子で楽しく リズム遊び	12.15、1.18 八王子市立 由木児童館	近隣に在住の2才以上の実就学児とその親を対象にした講習会。簡単なリトミックやリズム遊び、歌遊びを実施。参加者は2回とも約70組の親子。
（演奏依頼、他） アンクルンコンサート	11.3 富山県 こども未来館	来館している親子を対象に竹の楽器アンクルンのコンサートを実施。アンクルンの演奏体験もまじえ約1時間の公演。同時にスーパースターゲッターのゲームプログラムの貸し出しも行った。

AV事業部



平成11年度の活動

〈みる〉

見る活動は、主に4階の「ビデオライブラリー」とBスタジオで行われる「こどもの城映画劇場」が好対照をなすことで展開されている。

前者には、約1万7千タイトルのビデオソフトが登録されており、利用者はこの中から好みのものを選択し、家族やグループ単位での視聴ができる。登録ソフトの中には、一般市販のもの以外にも双方向対話型の「インフォビジョン」と呼ばれるものや、青山劇場・青山円形劇場の公演を収録した作品など、ビデオライブラリーでしか視聴できないものも数多くある。

一方、後者の「こどもの城映画劇場」では、優れているが、日常子どもたちの目にあまり触れることのない国内外の作品を厳選し、画像品位の高いフィルムによる上映を行っている。また、このプログラムでは、単に上映のみを行うのではなく、前後に見どころや背景などの解説を加えることで、より深く作品に接してもらえるように心がけている。

〈しる・つくる〉

映像を見るだけでなく、もっと能動的に接してもらいたいと願い、4階のBスタジオや音楽ロビーで展開している活動が「不思議な映像実験室」である。ここでは、子どもたち自身が簡単なアニメづくりなどを通し映像による自己表現を行ったり、映画・ビデオといった現代のメディアに至る過程での視覚玩具づくり等を体験することができる。

また、ビデオライブラリーにあるさまざまなソフトの内容を具現化するという目的で行われている夏休みの工作コーナーは、今回初めて短期講習会という位置づけで実施した。内容的には、「紙でつくる虫」と題したペーパークラフト教室であるが、昆虫に関する知識を解説したり、パソコンで自分だけの空想の虫の型紙をつくれるなど、一風変わった工夫がなされた。

〈その他の活動〉

本年も、劇場公演の番組化、館内映像情報の送出、講師派遣、指導者向けビデオ講習会の実施等さまざまな後方支援的活動に積極的に取り組んだ。中でも、講師派遣にあっては、日常の活動が多くの指導者に周知されはじめたためか、年々増加の一途をたどっている。今後、学校の美術のカリキュラムに「映像」が加えられることを考えると、この傾向にはさらに拍車がかかるものと思われる。できるだけ、多くの要望にこたえられるような体制作りを心がけて行きたい。

❶一般利用

(ア) 〈みる〉活動

【ビデオライブラリー】

本年度より『AVライブラリー』から『ビデオライブラリー』に、名称が変わった。この名称変更は、以前から考えられていたもので、理由としては、良く利用する子どもたちには、AV(AUDIO VISUAL)ライブラリーよりも“ビデオの図書館”と呼ばれることが多い。また、

初めての来館者には、AVライブラリーがどのような施設か分かりにくいようである。そのようなことから、今回の名称変更になった。

さて、ビデオライブラリーの分類別の利用状況を前年度と比較すると、著しく利用が多くなった分野は、「昆虫」と「育児や子どものしつけ等」が上げられる。特に「昆虫」は、今夏視聴促進特集（詳細は後述）を行ったが、前年の10倍も利用があった。この分野についていうと、子どもにとって昆虫は身近なものでとても興味があり、また、親の観点も積極的に見せたい内容ということになる。今回は、この両者の一致した希望に上手く乗った感じがある。また、「育児と子どものしつけ等」でいうと、前年に「成長特集」を行ったが、カタログを継続して置いておいたのが、よく見られた原因と思われる。このように、特集を行うことで、一応の効果が上げられることが分かる。

次に、数年前よりビデオライブラリーでは、パソコンによるCD－ROMソフトのライブラリーも利用できるようにした。現在は、パソコンを2台（Macintosh）、ソフト本数150で運用している。当初は、人手がかけられないこと、操作方法が煩雑なことなどから、幼児は必ず保護者が付かなければならなかった。現在では、幼児向けソフトの充実や幼児でも家庭にパソコンがあって、操作方法などの指導の心配がないことから、幼児単独での利用も受け付けている。また、保護者の間からは、幼児からパソコンに親しめるので感謝しているとか、ここで良いソフトの選定が行えるなどの評価もいただいている。今後は5台程度で運用していきたい。

◎昆虫特集

ビデオライブラリーには昆虫関連ソフトが約70タイトルあるが、より多くの人びとに存在をアピールするために「昆虫特集」を行った。

昆虫はおよそ75万種類いるといわれており、それを全部取り上げるのは非常にむずかしいので、日本に住む昆虫の中の日常出会いやすい種類をえらび出して、主役になってもらった。昆虫の生態に近づけるように観察コーナーと体験コーナーを設け、わかりやすい方法であらゆる角度から昆虫を紹介することができた。観察コーナーでは、昆虫飼育箱［パイプを組んで作った人工的な虫の世界＝生きた虫を入れた］があって、その回りに顕微鏡をはじめ虫めがねや聴診器などの観察道具が揃っていて、自由に子どもたちが使えるようになっていた。また、体験コーナーでは昆虫の立体映像やレンズで復元拡大されたハエの目のレプリカを覗いて昆虫になった気分を体験するコーナーなどを用意した。さらに4階ロビーにもクイズコーナーや昆虫の鳴き声コーナー、展示コーナーなどが盛り沢山で、大勢の子どもたちが喜んで参加した。



昆虫特集展示を見る子どもたち

【こどもの城映画劇場】

フィルムライブラリー「武藤行雄記念文庫」収蔵のカナダ国立映画制作庁（NFBC）作品から、毎月テーマを決め、作品を選んで上映している。今年度は、英語の台詞がある作品の上映は、日本語のテープを作成し、同調して上映するオーバー・ボイス方式に積極的に取り組んだ。夏期に実施している「キンダー・フィルムフェスト・ジャパン」（以下キンダー）では、以前からこの方式を採用している。幼児にも内容が理解できるし、画面に集中できるので、子どもの鑑賞にはオーバー・ボイス方式は最適であると思われる。しかし、日本での外国語作品の上映は、映画館では字幕スーパーが一般的で、最近ではビデオソフト化する際に字幕作成をしてしまうので、テレビでも字幕スーパーでの放映が増えてきている。そのため、あたかも字幕による鑑賞が外国語作品では正当な鑑賞方法であり、テレビの吹き替え版やオーバーボイスは、邪道で即席な方法というような印象を、とくに映画ファンなどが強く抱いているようだ。ところが欧米では、一般的な興行では字幕スーパーはほとんど無く、吹き替えが当り前であり、オーバー・ボイスは、専門的なシネマテークなどで採用されている方式なので、けっして字幕スーパーによる鑑賞に劣るものではない。字幕スーパーに固執せず、日本の外国語映画の鑑賞方式を考えていくことも、とくに子ども向け作品の場合には重要な仕事であると感じる。

この催しは毎月第2日曜日に定期的に実施しているので、リピーターも増加し、翌月の上映プログラムを告知するチラシを配布した効果もあり、一般からの上映作品

に対する問い合わせも増えている。今後は、キンダー等で上映した世界各国の作品を収集していくことも積極的に取組みたいと思うが、一般の商業ルートによる映像作品の購入は著作権関係の処理が複雑で、購入価格も高価なので、本気で取り組むのであれば、「児童健全育成施設」としてのライブラリーの目的を明確にアピールしていくことで、相手の制作・配給会社に理解を求め、公立図書館と同じような処遇にしてもらうことも考えていかなければならないだろう。



キンダー・フィルムフェスト・ジャパン　オーバー・ボイス方式の上映



キンダー・フィルムフェスト・ジャパン　ゲストのグレッグ・ローソン氏によるワークショップ

(イ) 〈しる〉〈つくる〉活動

【不思議な映像実験室】

映画発明以前の動く画を見る《視覚玩具》をつくるワークショップや、ビデオ機器を使用したワークショップを総称して『不思議な映像実験室』と呼んでいる。

《視覚玩具》を題材としたプログラムでは、映画発明以前に動く画などを見るために考え出された《見るおもちゃ》を通して映画を技術的に成立させるための様々な要素を体験するのが目的。ワークショップでは視覚玩具を《つくる》ことが作業の中心となるが、目的としているのは《工作》ではなく、完成した視覚玩具によって生ずる《映像的効果》を体験すること。

ピンホールカメラのワークショップや、残像効果を体験する「ソーマトロープ」、円錐型の鏡で見ると正しい絵が見える変形画を描く「アナモルフォシス」、写真に針で穴をあけて夜景のイルミネーションを再現する「ライトパノラマ」などを実施。このラインナップはここ数年変化がないが、材料等にかけられるコスト、スタッフの人数などから、新規プログラムも打止めの感がある。本年は「アナモルフォシス」の用紙に絵を描くガイドとなる変形したグリットを印刷してみるなど細かい工夫をするにとどまった。

本年は特別期間は開館記念の時期、10月30日から11月3日までビデオ機器を使用したワークショップ『ビデオアスレチック』を実施。テレビモニターとインカム（ビデオ収録時などにスタッフ間で交信するためのヘッドホンマイク）を利用した「テレビでんわ」、パーソナルコンピュータを使って2枚の静止画像を交互に表示する「人間ぱたぱたアニメ」、ビデオの映像信号の特定の色をキーにしてマスクとし、別の画像と合成する「クロマキー」を実施。これまで『ビデオアスレチック』で行なったクロマキーは空撮画像などをビデオデッキで再生したものとを合成していたのだが、今回は両方の画像ともBスタジオに設置したビデオカメラからの画像としてみた。会場に来た親子や友だち同士が1人は自分の顔がアップで写るカメラに向かい、もう1人は自分の姿が全身写るカメラに向かう。顔がアップで写っている人が口を開け、全身写っている人は立ち位置を調整すると《巨人に食べられそうになっている小人》というような映像がモニターに映るといったものである。この映像を白黒ビデオプリンターで出力し参加者にプレゼントした。「ちょっと変わった記念写真のお土産」といった感じで親などに好評であった。

本年の『不思議な映像実験室』は、特別期間の実施が開館記念の時期という年間で最も地味な期間に行っただけということもあり、非常に影が薄いものになってしまった。他の事業にかける労力やコストとのバランスの問題もあるが、内容的には夏休みの特別期間などにも実施するようにしていきたい。

平常期間の土曜日夕方に音楽ロビーで行う「くるくるアニメ」も昨年に引き続き実施した。

❷講座・クラブ

【プロフェッショナル・ビデオ講座】

一般成人向けとして実施している本講座は、事業所や

施設のビデオ担当者やビデオ作家などに好評をいただき、年々参加者が増加している。リピーター増のねらいもあり、参加者の意見や要望等を参考にしながら、翌年度には新しいコースを設定してきた。今年度は従来から実施している、ソフト作りやハード運用に関する基礎的な知識や実践的なノウハウを伝える２つのコースに加え、映像機器に不可欠な電気全般に関する知識を深める「ビデオマンの電気基礎入門」コースを新設した。電流や電圧、電気容量などの計算方法に始まり、音声、照明の基礎と実際など、撮影現場では必要不可欠な知識だが、意外とうろ覚えの感がある実例を元にして解説するという内容。関係する参考書籍も見当たらないことから、参加者にはとても好評であった。

参考書籍がないということは、毎回の実施に際してテキスト作りに労力を費やすことになるが、この作業によって講座の対象を明確にでき、難易度を決めることができるので、担当職員にとってはテキスト作りは講師を務める際の格好なトレーニングになっている。講座実施後は、担当した職員同士で意見交換をして、テキストの改訂を進めている。現在は、コピーによって必要部数のみを毎回作成しているが、数年後に完成度が高まった時点で印刷して、ひろく頒布することも検討している。


不思議な映像実験室「アナモルフォシス」を制作する

また今年度は、夏期に「アニメーション撮影・照明必勝セミナー」を実施し、定員を上回る学生や社会人が参加した。自分でフィルムやビデオを使ってアニメーションを作りたいという若い人たちが増加している。絵の作画や人形アニメのセットづくりなどに関するノウハウはアニメ関係の書籍から得られるが、では絵や人形をどのようにして映像にしていくのかを解説したものはほとんど存在しない。これらの知識や技術は写真や映画などの分野では必須であるが、それとアニメとを直接を結び付けて解説した専門書が非常に少ないのだ。そのためか、今回の講座の参加者には、映像の専門学校や美術大学に通っている学生が多く、また、学芸員養成過程などに映像分野が取り上げられてきたので、映像全般の知識を深めるために参加したという学生もいた。

AV事業部の講座は、専門学校や民間のカルチャースクール等ではあまり実施されていない内容なので、今後も参加者は増加するのではないかと考えている。

【短期講習会「紙でつくる虫」】

ビデオライブラリーの夏休み工作コーナーは、本年度はギャラリーの企画「むしむし大行進」中の短期講座「虫をつくろう」のプログラムの一つとして、ギャラリーの特設コーナーに場所を移して実施した。

１枚の型紙を切りぬいて折り込むことにより、カミキリムシ・クワガタ・カマキリ・トンボ・セミの５種類の昆虫のペーパークラフトを作っていく。昆虫の大きさは実物に合わせてあるため、細かい作業となる。ハサミで切り抜けないところはカッターを使い、折り目づけには指だけではなくピンセットも併用する。それでもボランティアや両親の支援のもと、１時間前後の努力を丹念に続けていくと、低学年でもそれなりの作品が完成する。


不思議な映像実験室「ビデオアスレチック：クロマキー」の合成

時間内にすべての昆虫を作ることはできないので、残りの型紙は家に帰ってから作ることになる。最終的に何匹つくるかがわからないので、「お持ち帰り」となるクリヤーケースの標本箱は大きさの違うものを３種類用意して選ばせる。同時に本式の昆虫標本の作り方に準じた飾り方を伝授する。また作業への合間には昆虫という種の地球生態系における位置や、体の構造などを小学生にわかる形で簡単に講義する。

会場に置かれたパソコンには、〔こどもの城〕で開発したオリジナルソフト「混虫工場」がインストールされており、帰り際希望があれば自由に使うことができた。「混虫工場」では昆虫および混虫（昆虫の体を『混』ぜて作り出す空想の虫という意味の造語）のペーパークラフト

を作成でき、持ち帰れる。

自分が子どもの頃の感覚を思い出してみても、工作物で子どもに受けるのは飾り系のものより、遊び系のオモチャであるように思う。つまり工作の結果でできたものが動く、音を発する、など。そういう意味ではペーパークラフトというのは年少者へのアピール度が弱いように感じられる。1枚の紙の折り込みで昆虫の体節構造が表現できたり、しごきにより触覚のカーブがつくれるという部分にどう感動できるかというのが分かれ目である。そしてその感覚をもった子どもたちも確かに存在する(あるいはこの場合、昆虫そのものに興味があるという子どもも少数いるが)。来年度は再びオモチャ的な工作に戻るかもしれないが、このような「飾り系」の工作も分けへだてなく続けていきたい。

なお、この講座で開発したペーパークラフトの型紙は若干の修正を行い、冬休みから〔こどもの城〕売店での販売を開始した。

❸その他

(ア) 動くこどもの城

愛知県岡崎市の「おかざき世界子ども美術博物館」で4月から開催されたアニメの展覧会「世界のアニメーション・ワンダーランド展」で、5月2日～4日にかけて「ぱたぱたアニメ」、「おはなしぱたぱたアニメ」、「デジタル・アニメに挑戦」を実施し、また、22日には保育士、博物館や児童施設の担当者、学生など約60名の参加を得て、指導者向けの講習会を行った。今回は、従来の「動くこどもの城」とは異なる体制で行われた。AVプログラム自体の実施以外に、展覧会の準備期間から協力し、資料の提供や展示作成のアドバイス、機材選定、スタッフの指導などに数か月前から関わった。また、この展覧会のタイアップ企業のCS放送局からワークショップへの機材提供などが行われ、この企業とは、展覧会終了後も協力関係を保つことができたため、こどもの城での一般来館活動への機材協力などが引き続き行われた。

「動くこどもの城」は、〔こどもの城〕で開発したプログラムを広く紹介して、終了後も実施した施設の指導者によって実際に継続してもらうことが肝心だが、実際にはなかなか難しい。今回のような事前の協力体制がとれれば、機材等の手配や実際の運用までを含めて実施先のスタッフが関わることができるので、よりプログラムを深く理解してもらうことにつながると思う。

(イ) 講師派遣

今年度は、講師派遣依頼が非常に多く、一般来館活動との調整を取りながら、その間をぬうような形で対応するように努めた。今回の講師派遣依頼者のほとんどが、以前に実施した講師派遣でのワークショップ体験者、または、実施した施設の職員からの口コミにより、内容に興味を持ったという方であった。専門家向けの上映や講演の依頼は、「みる・しる・つくるアニメーション・キット」や「事例集」によって、AV事業部の活動が知られるようになったことが幸いしている。さらに、学習指導要領の改訂により、来年から中学校の美術に映像やアニメが取り入れられるようになるが、他に子ども向けのアニメ・ワークショップを実施している施設がほとんどないことから、美術関係者がAV事業部のプログラムを知って、それに関心を持ちはじめたことが大きいようだ。また、残像現象などをテーマにして科学的な観点からAV事業部のプログラムに着目し、高学年向けの実験教室として開催する要望なども寄せられはじめている。今年度では、「北陸電力エネルギー科学館ワンダーラボ」の科学実験教室に招かれた。確かに視覚玩具は、科学的な根拠に基づいて映像が写ったり動いたりするので科学教室向きではあるが、いままでその観点から実施したことがなかったので、従来とは異なる導入を行った。どうして映像は動いて見えるのかということをカメラのストロボを使ったり、残像の実験を行ったりして皆で確かめて、それから視覚玩具作りに進むような構成を取った。幸い、この館の展示物の説明が大きな「驚き盤」になっていたり、エジソンの映写機が展示されていたので、それらを話の中に折り込むことで、科学的な部分を膨らますことができた。「動くこどもの城」では対応できない小規模な開催や、指導者や専門家向けの講演や講習会などの依頼は、今後も増加する傾向にあるが、15年間に実施してきた成果を披露する格好の機会ととらえ、相手の要望に沿う形でなるべく対応していきたいと考えている。

(ウ) 他部門との協力事業

AV事業部では、部としての一般活動や講習会などの他に、他部への協力事業が年間に多数ある。協力なのか共同なのかという切り分けが難しいものもあるが、幾つかを挙げてみる。

【ゴールデンウィーク　仕掛け絵本のビデオ】

企画研修部で行ったギャラリーでの仕掛け絵本の展示用ビデオである。絵本のページをめくる際に、なんらか

の仕掛けで絵本の一部が動いたりするもので、実際に子どもたちに触らせることの出来ないものをビデオで撮影し、これを上映した。音楽事業部の職員によるオリジナルBGMを使用するなど、手の込んだビデオであり、この1回で使い捨てにするのは少々惜しいと感じた。【『キャッスルクエスト』導入ビデオ】

プレイ事業部主催のイベントの参加者導入ビデオ。ゴッコ遊び的な要素の強いこのイベントでは、導入での雰囲気作りが重要な要素の一つ。イベントのストーリー設定が変わる度に新しいものを撮りおろしている。手間がかかっているビデオなだけに古いものをまた利用したいが、イベントの性質上毎度ストーリーやキャラクターが変わってしまい、このビデオも使い捨てになっている。

【夏昆虫ビデオ】

ゴールデンウィークに続いて、夏に企画研修部で行った昆虫の展示で、スズムシの泣き声やカブトムシの歩き方など、その場で実物を展示することが難しいものを撮影・編集して展示。様々な面でやや淡白なビデオになってしまった感がある。今後は内容や見せ方などもう少し綿密な打ち合わせが必要であろう。

【スーパースターゲッター】

音楽事業部でゴールデンウィークと夏期特別期間に使用した、ゲーム用ビデオの作成。ゲームといってもインタラクティブなものではなく、ゲームセンターのゲームを模して画面をつくったもの。そして夏期には追加で「ラッパの吹き方」というゲームのためのインストラクションビデオも作成した。

【エリック・カールドキュメンタリー吹き替え】

エリック・カール氏来日に合わせてのドキュメンタリー映像を独自に吹き替え、日本語版を作成。使用許諾さえとれれば、ビデオライブラリーで視聴できるようにしたいところだが、これも使い捨て状態となった。

その他、プレイ事業部で行うキャンプの記録ビデオの編集・MA（音声編集作業）協力など、主にビデオ作成を中心に他部事業の後方支援を多数行った。

(エ) 館内放送

以前『MAC-TV』という名称でイベント速報などの館内放送を行なっていたが、機材、人件費等の面で中止していた。これが、昨年の本田技研工業との共催企画（＝バイクワールド）で宣伝映像の送出として復活。あくまで「バイクワールド」のための館内放送ではあったが、独自の番組を準備し、館内の各テレビに映像を映すことで、〔こどもの城〕の「遊び場」としての雰囲気の向上に役立っている印象をもった。そこで、番組の準備などの手間を極力簡略化して、特別期間のみイベント案内放送を行う方向で館内放送を再開した。

館内放送の再開にはハードウェアも一役かっている。それまで使用していた追記型レーザーディスクの老朽化により映像に乱れが生じることが多く、また、なにより生ディスクが高価！ビデオデッキのオートリバース機能も使用してみたが、巻き戻し中に映像が流れないことや、毎日のセッティングの手間などの問題があった。そこで試したのがビデオCDである。CDにMPEG1圧縮の映像・音声を記録する方式でなにより安価！再生機・ディスク共に追記型レーザーディスクのおよそ1/100の価格。リモコンを改造し、市販のオーディオタイマーと組み合わせ、自動運転をしている。画質的にはこれまでの1/10といったところ。コストが1/100なのと合わせて考えると、10倍のコストパフォーマンスといったところか。

この事業は、こども活動エリアに花を添えるような地味なものであるが、（それでもグループ活動の記録映像の放送を見ての問い合わせが数件あったとの報告もある）今後は、講座案内ビデオやオリジナルの番組なども手掛けていきたい。

❹まとめ

AV事業部の活動は、ある種のハードウェアを仲立ちとして子どもたちに接するケースが大半を占める。開館当初(1985年)、ここでいうハードウェアといえば、映像を撮り込むためのビデオカメラや、それらを記録するためのビデオデッキ、そして収集された素材を加工・編集するためのさまざまな周辺機器などをイメージした。

ところが、昨今では技術の飛躍的進歩とコストダウンによって、コンピュータが映像を記録できるようになったばかりでなく、編集やさまざまな加工までもこなすようになった。さらに、従来映像情報はビデオテープなどの媒体に記録され手渡しされていたが、現在ではネットワークを通じ短時間内のやり取りが可能となった。

私たちにとって、たった十数年の間に映像を取り巻く環境は、大きく様変わりした感が強いが、現代の子どもたちにとっての映像は、家庭にあるパソコンで扱うことができる身近な存在になりつつあるといえるだろう。今後の10年を考えた場合、映像メディアがどのように進歩して行くか明確にイメージすることはむずかしいが、その時々の子どもたちが常に新鮮味を感じることができる活動を展開するためには、職員自らの切磋琢磨が重要であると感じる。

平成11年度活動一覧表

❶一般利用

〈平常期間〉

名　称	期　間	備　考
ビデオライブラリー 自由利用	開館時間中	趣味、教養、娯楽、スポーツ、アニメなど、さまざまなジャンルにわたるビデオソフトが、17,000タイトル網羅されたビデオの図書館。利用者は、ビデオライブラリー内に設置された35のブース(小部屋)で好みのソフトを視聴できる。
ビデオライブラリー 「昆虫特集」	6.12〜8.31	「昆虫」に関するビデオソフトの視聴促進を目的に行った特集。生きている昆虫の観察コーナーや遊びのコーナーを設けた。
走れ！キャッスルトレイン〜こども鉄道模型運転会〜ー第6回ー	6.19〜27	鉄道模型(Nゲージ)の運転を体験できるプログラム。オリジナル電車カード工作や鉄道関連のビデオを視聴したりするコーナーも合わせて設置した。
走れ！キャッスルトレイン〜こども鉄道模型運転会〜ー第7回ー	10.10〜17	鉄道模型(Nゲージ)の運転を体験できるプログラム。電車が動くカードを作るコーナーやプラレールコーナーなども設置。ボランティアによる鉄道博士クイズも行った。
走れ！キャッスルトレイン〜こども鉄道模型運転会〜ー第8回ー	2.12〜27	本年度の鉄道イベントの締めくくりとして、アトリウムギャラリーを使用した催しを実施。通常行っているものの他、カードゲームやパソコンゲーム、鉄道パズルや手回し発電鉄道模型運転コーナーなど、さまざまな趣向を凝らした。
不思議な映像実験室「写真館〜しゃしんかん〜」	3.19〜20	空缶を使ったピンホールカメラで写真を撮るワークショップ。ピンホールカメラをつくるワークショップ。写真の仕組みや歴史のパネル展示。(4階音楽ロビー)
おもしろビデオ館	毎週金曜日　15：30〜16：00	ビデオライブラリーにある、上映可能ビデオソフトからテーマを決めて作品を選び、上映。絵本を基にしたヤマハの「世界絵本箱」シリーズ、日本の昔ばなしシリーズなどを紹介。(4階スタジオB)
おもしろビデオ館スペシャル	毎月の最終木曜日	おもしろビデオ館で上映し、人気のあった「世界絵本箱」と「もぐらのトッピィくん」をアンコール上映。(4階スタジオB)
くるくるアニメをつくろう	毎週土曜日　16：00〜17：30	2枚の絵を描いて簡単なアニメおもちゃを作るワークショップ。(4階音楽ロビー)
こどもの城映画劇場	日曜日・祝日(月1回)	「武藤行雄記念文庫」収蔵のカナダNFBCのアニメーション映画他をスタジオBで上映。①11：30②13：30③14：30④15：30の4回上映。(4階スタジオB)
不思議な映像実験室	日曜日・祝日(月1〜2回)11：00〜17：30	映像が動いて見えるしくみや写るしくみを応用した、映像遊びを展開する催し。2つの絵が合成されて見える「ソーマトロープ」、1枚の風景写真から昼と夜の景色を作りだす「ライトパノラマ」、風景が筒の中に写る「ピンホールカメラ」などを実施。(4階スタジオB)
バンダイビデオ試写会	日曜日・祝日スペースの使用が可能な日に実施	ビデオライブラリーの待ち利用者を対象に、がん具メーカーのバンダイと提携して行っている人気ビデオ作品の試写会。開催時間は12：45〜17：15。(地下1階フリーホール)
テレビ中継録画	日曜日・祝日・特別期間	スタジオBで実施される、各部プログラムの館内へのテレビ中継及び録画。特別期間には、催し物案内情報の送出も実施。(4階Bスタジオ、映像調整室)
かんたんアニメ教室	4.10　4.24 6.12　6.26　9.25　11.13	「おはなしぱたぱたアニメ」や「驚き盤」など、簡単な作画でアニメを作る2時間のプログラムを実施。小学生以上を対象。定員は1回10名。(10階アニメスタジオ＝仮称)

〈特別期間〉

名　称	期　間	備　考
〈夏期特別期間〉第7回キンダー・フィルムフェスト・ジャパン	7.23〜8.6	ドイツのベルリン国際映画祭・子ども映画部門「キンダー・フィルムフェスト・ベルリン」との提携関係により実施される日本で唯一の国際子ども映画祭。第7回目の今年の内容は、ベルリンでのグランプリ受賞作品をはじめ、世界各国から子ども向けの短編映画を選りすぐって上映。また、オランダのアニメ作家グレック・ローソンさんを招き、アニメ制作の舞台裏を紹介するワークショップを開催。(4階Bスタジオ)
〈春期特別期間〉こどもの城・映画劇場アニメーション作家・山村浩二作品集	3.25〜31	子ども向けのすぐれたアニメ作品を作り続けている山村浩二さんの代表作品を13作品上映。昨年度に実施した「ジュニアー・ディレクターズ会議」の作品『どっちにする?』のメイキング上映や、作曲家らによるトークやミニ・コンサートも実施。(4階スタジオB)
バンダイビデオ試写会	スペースの使用が可能な日に実施	ビデオライブラリーの待ち利用者を対象に、がん具メーカーのバンダイと提携して行っている人気ビデオ作品の試写会。開催時間は12：45〜17：15。(地下1階フリーホール)

❷講座・クラブ

〈ビデオ講座〉

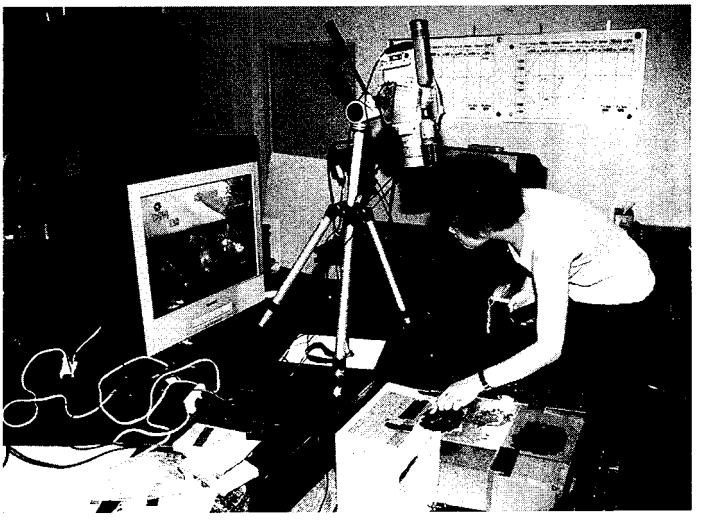
名　称	対象・定員	受講数	曜　日・日　時	備　考
プロフェッショナル　ビデオ講座 ◎ビデオマンの“他人に聞けない”電気基礎入門	(人) 30	(人) 17	1.29(土) 15：00〜18：00	伝送や照明などに関して現場で起こりうるトラブルを検証しながら、ビデオ撮影や機器運用に不可欠な電気に関する基礎的な知識を再確認するための講座。会場は12階会議室。
◎VE技術コース	20	22	5.29(土) 2.26(土) 13：00〜17：00	アナログ機器に必須なビデオの信号管理と実際の技術を、各種モニターを実際に使用しながら詳細に解説する。ウェーブフォーム、ベクトル、ピクチャの各モニターを受講者が体験使用する時間も設定。毎回好評に付き、今年度は前期、後期と2回実施した。会場は、10階アニメスタジオ(仮称)、12階会議室。
◎映像ソフト制作セミナー	30	36	2.27(日) 13：00〜17：30	講師にテレビ番組やビデオソフト制作で活躍するカメラマンやディレクター、音響技師を招き、小規模なビデオ・ソフト制作での撮影や編集、音響に関する技術的なポイントを、詳細に各種の映像資料を比較して講師が論じるセミナー。会場は、4階Bスタジオ。
アニメーション「撮影」「照明」必勝セミナー	10	12	セミナー8.21(土)／22(日)ワークショップ8.23〜29	アニメ作りでの撮影技術にスポットをあて、カメラや照明機器の選び方とその使用方法などを講義するセミナーと、実際に受講者が短い作品を作るワークショップを実施。会場は、10階アニメスタジオ(仮称)、11階会議室。

〈短期集中講習会〉

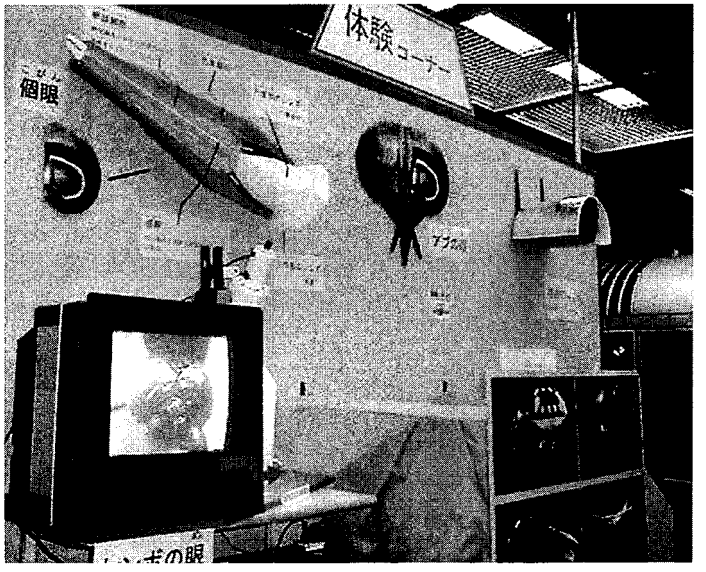
名　称	期　間	備　考
混虫工場：紙でつくる虫	7.20〜8.8	夏期ギャラリー工作コーナー「虫をつくろう」の協賛企画。1枚の紙を切りぬき、折り曲げて昆虫のペーパークラフトをつくる。また、独自開発のパソコンソフト「混虫工場」により昆虫や混虫(空想の虫)のペーパークラフトをデザイン。



プロフェッショナルビデオ講座



アニメーション撮影・照明必勝セミナー
セミナー終了後に行ったワークショップの様子





アニメーション作家　山村浩二氏(左)のセミナー

短期講習会「紙でつくる虫」完成品



「キャッスルトレン」で遊ぶ子ども



「キャッスルトレイン」を親子で楽しむ

❸その他(動くこどもの城など)

〈映像記録〉

名　称	期　間	備　考
館内活動の記録	通年	館内の講座等をビデオ取材しソフト化して参加者に販売。体育事業部「母と子のすくすくランド」[Part Ⅰ～Ⅲ]の3本。尚、同作品はオリジナルソフトとしてビデオライブラリーに登録。
館外活動の記録	夏期特別期間 冬期特別期間 春期特別期間	(こどもの城)の館外活動に同行してビデオ取材、ソフト化して参加者に販売した。体育事業部「チャレンジキャンプ'99」「スキースクール」[Part Ⅰ－1期、Part Ⅰ－2期、およびPart Ⅱ]の4本。尚、同作品はオリジナルソフトとしてビデオライブラリーに登録。
劇場公演の記録	通年	青山劇場・青山円形劇場でおこなわれた公演・発表会をビデオ記録し、編集の上ビデオライブラリーで公開。また一部を出演者等に販売。◎青山劇場－自主公演：「第14回青山バレエフェスティバル」◎青山円形劇場－自主公演：「音楽の玉手箱」「第13回青山演劇フェスティバル」「まんぷく村のハムスターキック4」など34本◎青山円形劇場－外貸公演：「こどもの城の王様」「スタジオライフ死の泉」。

〈動くこどもの城〉

名　称	期　間	備　考
愛知県岡崎市おかざき世界子ども美術博物館	5.2～4	「世界のアニメーション・ワンダーランド展」の協力事業として「ぱたぱたアニメ」、「おはなしぱたぱたアニメ」を実施。この期間の入館者数は約5000人。毎日数百人が「ぱたぱたアニメ」に参加。「おはなしぱたぱたアニメ」は、事前予約で3日間で29人が参加。また、指導者講習会を22日に開催。60人の保育士、学生らが参加。
山口県山口市児童センター	11.19	「不思議な映像実験室」と題して、「ピンホールカメラ」、「くるくるアニメ」、「ライトパノラマ」などの視覚玩具づくりを実施。近隣の児童館職員など48名が参加。(指導者向け講習会のみ)

〈講師派遣など〉

名　称	期　間	備　考
日本アニメーション学会第1階総会	7.10～11	東京写真美術館で開催された日本アニメーション学会の研究発表で、(こどもの城)フィルム・ライブラリーのカナダの作品からノーマン・マクラレン作品上映と講演を実施。
アニマックス・アニメワンダーランド展	7.20	銀座ソニービルで開催された催しで、CS放送局とのタイアップ事業として「おはなしぱたぱたアニメ」を実施。
瀬戸内しまなみ大学・映画ワークショップ	8.15、9.11	広島県尾道市「しまなみ交流館」で開催された、映画製作のノウハウや実際の撮影～編集までを学習する市民講座で、講演と実習を実施。施設の指導者、学生、映像ファンが17名参加。
メビウスの卵展・東山町展	8.17	岩手県東山町「太陽と風の家」のアートフェスティバル「メビウスの卵展」に関連し、視覚玩具を作るアニメ・ワークショップを開催。
アニメーション・ミュージアムを創る会主催上映会	10.17	練馬区役所ホールで「カナダ名作アニメーション上映会」と題して、(こどもの城)フィルム・ライブラリーのカナダ作品23本の上映とトークを実施。入場者数約100名。
福岡市総合図書館・小型映画の世界	12.26	展示、上映、講演等で構成される特別企画展として開催された催しで、映像のハードウェアーの歴史と特徴などをさまざまな映像資料などで展望する講演を実施。
大学におけるアニメーション教育の現在	3.11	武蔵野美術大学で開催された専門家向けの研究発表会で、こどもの城の映像活動を紹介する講演を実施。
北陸電力エネルギー科学館ワンダーラボ	3.19、20	科学実験室の一環として「不思議な映像実験室」を開催し、残像現象を利用した「ソーマトロープ」やスリットを応用した「驚き盤」などの視覚玩具作りを実施。2日間で約120人が参加。

保育研究開発部



平成11年度の活動

『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』(ロバート・フルガム著、河出書房新社) という本が10年前にベストセラーになった。幼稚園や保育所の砂場、あるいは園庭は子どもたちにとっては心おきなく遊べるところであり、人生のすべてを教えてくれる最も大きくて温かい場所であると書かれている。しかし、現代社会における子どもたちの育つ環境は厳しい。幼い子どもへのいじめや虐待をはじめ、親の育児不安の増大、育児放棄など心が痛むことがあまりにも多くなっている。このような社会情勢の中で保育研究開発部は、本年度も「子ども家庭支援プログラム」としての保育事業 (「親子教室」、「保育クラブ」、「幼児グループ」) および保育現場を持っていることを生かした研修事業 (「保育セミナー」、「育児相談研修会」、「育児相談概論研修会」、「ニュースレターの発行」)、一般来館・者を対象とした「1・2歳児の遊び場」(保育室II、土・日曜日)、「作って遊ぼう親子工房」(保育室I、各特別期間) を行った。また、土曜日の活性化として昨年から試みに始まっている「よちよちクラブ」(1・2歳向け) と「親子で遊ぼう」(3～5歳向け) のプログラムを引き続き行った。

保育事業では、登録して利用する会員制の「保育クラブ」は会員数383人 (4月) でスタートした (年間を通しては467人)。本年度も2歳児の会員希望が多く保育クラブの利用にあたってはキャンセル待ちになることも例年になく多かった。

子どもの保育のみではなく、子育て支援の立場から日常的な保育活動と併せて、親 (家族) に対しても5階のベランダで花や、野菜の栽培(キャッスルガーデン)、本の貸し出し (おひさま文庫) などを保育クラブの親たちとともに進めた。

具体的な作業をすることで親同士の交流が始まり、子育ても少し楽しくなったと言う母親の声も聞かれ、親の仲間づくりの場になっている。

一方、さまざまな力を保育に生かすという観点から、保育ボランティアの受け入れを行っているが、学生を中心に社会人、主婦などの女性ボランティアが継続的に子どもたちとかかわり、双方で人間関係を広げている。

なお、小中学生ボランティアについては、夏期特別期間に集中的に受け入れている。今後、国の教育改革の一環からもボランティアの希望者が益々増えることが予想されるが、受け入れ体制を含めて検討すべき課題である。

視察・見学受け入れについては、近年、再度視察・見学に訪れる例が多くなっている。

〔こどもの城〕という総合施設で行う「子ども家庭支援プログラム」の具体的なプログラムの実践と生活や文化に対する考え方を先行事例として参考にしたいとするのがその主な理由である。

❶保育事業

(ア) 親子教室

本年度は「育児をしない男を《父》とは呼ばない」という男女共同参画社会に向けて厚生省がバックアップしたポスターが社会的に話題を呼び、父親の育児参加に注

目が集まった。〔こどもの城〕の「親子教室」はプログラムの特徴の一つに両親参加プログラム(12回のうち３回)がある。近年、「親子教室」の参加を希望する理由に「夫婦で相談をして参加を決めた」、「両親プログラムがあるので応募した」などと書かれることが珍しくなくなった。

父親も母親も自然な形で育児にあたっている様子がうかがえるものが多い。「親子教室」は、１歳児の親子を対象にして年３期間（１期は12回）行っている。育児を楽しく豊かにするために、「もう一度育児を見直してみる」、「他の親子と交流する」などがねらいである。本年度も定員を上回った。

●親子教室終了後の主に父親からの感想より（抜粋）

・赤ちゃんから幼児に移行するこの時期は、一番目が離せない時期であり父親として暖かい気持ちで接したいと思っている（父親)。
・「子どもができても、夫婦でデートをすることは大事である」の講師の一言が胸に響き、夜、子どもたちが寝た後に近所のラーメン屋にでかけ二人で語り合った(父親)。
・何人かのお父さんの意見を聞き、皆さん子育てに関して本当に前向きでしっかりしていて、勉強になった(母親)。
・皆で（参加の親たち）和気あいあいとトークできたので楽しかった（父親)。
・子どもは、父母を見て育つという、当たり前のことを親になって今感じている（父親)。

「親子教室」は親子遊びを中心にプログラムの展開を行うが、親子の参加者のほとんどは、既に何らかの幼児サークル等に参加したことがあったり、習い事（プールなど）をしているケースが多い。これは単に、子どものためというだけではなく、親自身が子育てへの孤立感を持っての参加が大きい。「親子教室」の参加理由にも周囲に子どもがいない、他の親子と交流をしたい等と書いてくる。また、より良い子育てをしたい、〔こどもの城〕だから参加したい等々の理由がある。

●親子への関わり方と援助の難しさ

親子教室は定員14組の親子参加。保育スタッフは一人一人の親子に丁寧に関わり、受け止めるためにそれぞれの親子を担当する。以前は母親にも担当の保育スタッフを伝えていたが、固定したスタッフよりも母親が自由に気軽に話せるように本年度からは伝えないで進めた。保育スタッフは母親の対応で難しいと思われる時は「他のスタッフとも相談してみます」と伝え、親子教室担当者で話し合った後母親に返すようにしている。しかし、12回という限られた回数の中では限界もある。例えば母親が子どものことで気になることがありながら保育スタッフに話すことなくプログラムが進み、途中で母親と意見の相違が起きた場合などである。複数のスタッフでできるだけ親子を把握してアプローチの仕方を考えているが、残念ながら、本年度は一組の親子が途中で参加を取り止めた。

(イ) 保育クラブ・幼児グループ

保育活動は、２年間週４日定期的、継続的に保育する４・５歳児の「幼児グループ」と、１年ごとに登録更新す

お庭で描こう（幼児グループ）



両親参加プログラム（親子教室）



る「保育クラブ」（2～5歳児）を統合して行っている。

本年度の「保育クラブ」は、更新・新規を合わせて約467人が登録。2歳児の保育、3～5歳児の保育では友だちや色々な大人との関わりや、遊びや表現活動などにより、発達に見合った経験の場を提供する。家族プログラムでは親子遠足、保育クラブ通信などにより親に対してのプログラムを用意している。

【2歳児の保育】

2歳児の保育は「集団のなかで生活と遊びを経験する」ことを中心に「保育クラブ」の定期保育（年間で利用する曜日を固定した利用システム）とフリーで利用する子どもたちが一緒になって活動した。本年度は新たに4時間保育（Bプログラム）をスタートした。少子化社会における2歳児の集団保育への関心の高さ、そのプログラムの展開、親へのアプローチを探るためである。これは幼稚園にも還元できるプログラムをめざすものでもある。従来の3時間保育（Aプログラム）とフリーの子どもの保育を統合して月曜日から金曜日迄の各曜日で行った。

●2歳児の4時間保育（Bプログラム）について

1学期（4月～7月）は始めて集団の場に参加する子どもも多いことから、子どもの様子をみながら少しずつ遊びをふくらましていくように計画をたてた。

●Bプログラムの子どもの姿

1学期のBプログラムの子どもたちの様子は給食中から眠たくなる子、休息用の布団の上でゴロゴロする子、保育室からの移動を嫌がる子などの姿がみられた。また、親がBプログラムを希望したが、子どもが親からなかなか離れられないケースがあり、親との話し合いからしばらくは1時で帰ることにした子どももいた。

この他、1時以降に子どもが少なくなる（7人）ことで不安になる子や反対に人数が少なくなることで元気に遊び始める子どももいた。

こうしたBプログラムの子どもたちの様子から、Aプログラムの子どもたちが帰るところをみて不安を感じさせないためにやんわりと保育室から他の場所へ活動を移した。

活動の場はこどもの城の館内を中心に行った（B1、フリーホールのイベント、1F、ギャラリー、4F、AVライブラリー、音楽スタジオ、5F、屋上遊園、ふしぎが丘、緑ネット、ベランダ）。そして〔こどもの城〕の外へ出ての散歩など。

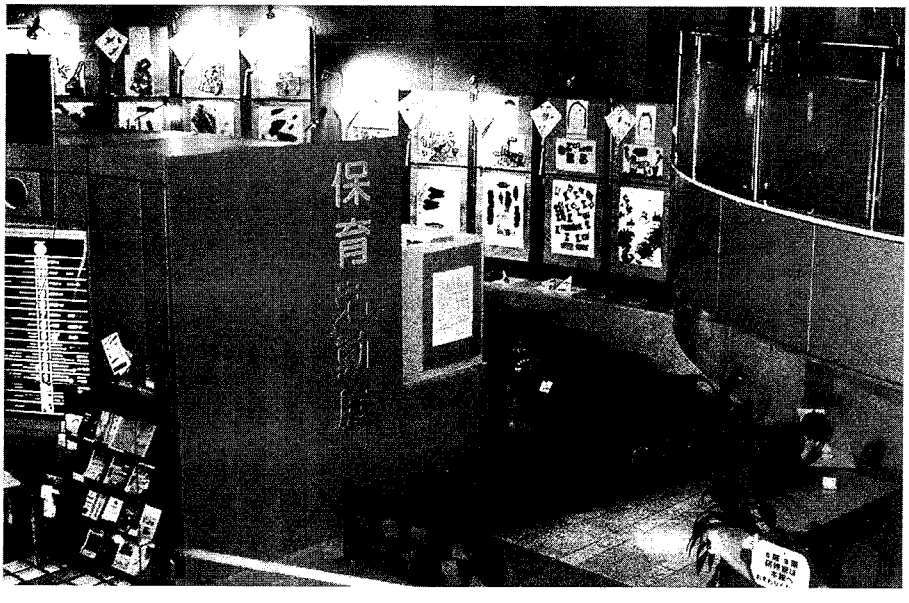
●保育室から移動する際の保育スタッフの配置と子どもへの援助

保育スタッフは事前にA・Bプログラムの担当を曜日によって決めてあるが、子どもの状態によっては臨機応変に動くようにした。例えば、入室時に親と離れられない、不安が強いなどの場合、最初に受けいれた保育スタッフが子どもの安定を優先して、担当配置を変更するなどである。また、移動することで不安になる子どもには、無理に移動させずにAプログラムの子どもと一緒に帰りの集まりに参加させた（紙芝居や絵本を見る等）。

その上で本人には「○○ちゃんはもう少し遊んで帰ろうね」などと保育スタッフから話して聞かせるようにした。

●今後に向けて

Bプログラムの1学期の1時～2時の時間帯は皆で簡



年1回の保育活動展（保育クラブ・幼児グループ）

単な遊びをすることもあったが、不安になる子や眠い子など休息が必要な子どもが多く、発達的なことに加え、環境に慣れることで精一杯のようだった。しかし２学期、３学期と進むにつれて次第に体力もつき、友だち意識もはっきり出て仲間としての結束力も強くなった。遊びの面ではＡプログラムとの差が後半でてきた。

●Ｂプログラムの親の姿

子どもが４時間の保育に参加している時間帯は親（主に母親）は家事、育児をはじめ、買い物、通院、美容院、習い事、勉強、自営の仕事の手伝い、仕事（仕事の下調べ含む）などにあてている。出産以来久しぶりに自分の時間が持てたと言う親や同じような悩みを持つ親がいて、気が楽になったという親などもいる。また、子どもたちと同様に少人数のグループとなるために親同士も仲良くなり交流が深まった。

【３～５歳児の保育】

「幼児グループ」の４・５歳児に、曜日は別に参加する「保育クラブ」(主に３歳児)が加わった異年齢統合保育を行った。保育は４人が一つのチームとなって行う、いわゆる《チーム保育》である。それぞれの保育スタッフの持ち味を生かしながら、子ども一人一人の人とのかかわりやさまざまな経験を広げ、その力を発揮できるようなプログラム作りをめざしている。本年度も《チーム保育》の力を生かした遊びをさまざまに計画したが、テーマ活動に追われがちだったという昨年の反省から、テーマ(例、音楽、造形、運動等)となる活動を、これまでより少なくして、その分一つの活動の時間を十分とるようにした。

本年度のもう一つの特徴は、「親子で共に経験する楽しさを味わう」ことをねらいにおいた。年々、子どもたちの生活技術の低下をはじめ、遊びの矮小化を感じてのことである。

親に保育参加してもらうことで親が子どもに対して言葉だけを先行していることに気づくことと、他の親子の生活スタイルも目にしてほしいと期待した。年度始めに、親子で館外活動や親の保育参加を積極的に行いたいと伝えた。親の反応はどんなことをするのかという不安もあった様子で、必ずしもスンナリと受け止められなかったようだ。しかし、実際に親子遠足でのバーベキュー調理や相撲見学などが始まると、それなりに親の方も他の親子との接点が見つかったりするなどで次第に落ちついたものになった。保育側には、例えば親子遠足での調理という場面で親子の経験の深さなどが把握できた。また、日常の保育活動の中に親を参加させて子どもたちと関わって遊ぶプログラムを行った。半日を昼食を共にしながら子どもたちと行動を共にする経験は、親たちにとっても新鮮でいろいろな気づきや発見が生まれた。しかし、これは親側の遊びの経験度が問われることにもなり戸惑った親もいた。この他、お祭りごっこやお店屋さんごっこの遊びにも親が参加したが、親はプログラム参加にあたっての細かな説明を求めたり、説明文を欲しがったりする傾向が強くなっていることを感じた。親参加のプログラムを今後も進めるにあたっては、押しつけのプログラムにならないように、親と話し合う機会を持つことや、親の保育での位置づけなどを明確にしておくことが大切になってくることを改めて実感している。

【延長保育】

保育クラブの３～５歳児以上に火～金まで、原則午後４時までの延長保育を行っている。週に一度は思いっき

砂と水と遊ぶ（２歳児の保育）



節分の豆まき（２歳児の保育）



り集団の場で遊ばせたい、親自身の時間を取りたいなどの理由で利用されている。本年度も、定期的に来る子やフリーで来る子が一緒になって保育計画のもとにいろいろな遊びを体験した。子どもたちからは「おやつぐみ」と親しまれ家庭的な雰囲気で過ごした。

●延長保育を利用した親の感想より

・プログラムがきちんと決まっていてもっと参加させたかった。
・特に延長する必要もなかったのですが、いつも楽しそうなプログラムが書いてあるので参加しました。
・手作りのおやつ作りが楽しかったようです。
・延長保育は《残される子ども》ではなく、《特別な子ども》という意識が強くうれしいようです。
・基本的には4時までですが、仕事上5時の時もあり助かりました。

【親子イベント】

家族を対象としたプログラムは、今年も「春の遠足」「ファミリーフェア」などを行った。《家族で参加する楽しさ》、《子育てにおける家族同士のつながりの重要性》を積極的に伝えるねらいも昨年同様であった。また、53回を数える「保育クラブ通信」（年3回発行）をリニューアルし、パーソナルコンピュータを使用して編集、発行した。

5月8日に行った「春の遠足」は（92組の親子256人が参加）会員相互の顔見せという側面もあり、職員も存在をアピールする必要から、家族をつなぐケームなどの内容を入れながら楽しく行った。「先生を探せ」ゲームは変装した職員が公園内に散開、家族で探し出し、見つけたらシールをもらえるルールで、親子が相談しながら歩く姿は微笑ましかった。2月5日の「ファミリーフェア」は「保育クラブまつり」と題して、出店、ゲームコーナー、ファミリーマーケット、写真展を行った。中でも、写真展は会員から集めた、親が撮った子どもの写真を紹介したり、職員の幼児の頃の写真で名前を当てるクイズなどを行った。また、卒園児の父である写真家のハービー山口氏の講演もこの中で行われた。第1土曜日にしては、多くの参加者があり大盛況であった。反面、昨年同様企画段階から加わる親側の人数が少なく、保護者と親との共同企画という面は弱くなり課題となった。

❷研修事業など

【保育セミナー】

第13回こどもの城保育セミナー「家庭とこども・地域と家庭 PART Ⅲ」は今年度も8月7日(土)・8日(日)の2日間で実施した。

シリーズ最終回の今年も、まだまだ子育て支援を捉えたテーマは広く参加者の関心を集めた。

1日目の基調講演は山崎美貴子明治学院大学副学長。テーマは家族のライフスタイルや価値観が多様化する中で育っている子どもの問題・家族の問題を、どう支援するかについて。物も情報もたくさんある中で、子育てに不安や負担を感じている母親・家族に対して、保育所がバリアを外し地域の拠点となって、さまざまな機関や人とネット（連携）を組めるような、子育て支援の砦となっていくことが必要であると述べられた。

パネルディスカッションでは、まず司会の大場幸夫大



アヒルホッケーで遊ぶ（2歳児の保育）

妻女子大学教授から主旨説明があった後、父親の立場から感じる子育てについて中沢信一氏（元〔こどもの城〕保育クラブ父兄）から保育所での子育て支援について、迫田圭子茶々保育園（埼玉県）理事長から幼稚園での子育て支援にについて、木都老誠一金井幼稚園（横浜市）園長からそれぞれ発言があった。その後司会者も交え幼稚園での預かり保育について論議した後、谷田貝公昭目白大学教授から「子どもの生活技術」についての調査報告があり、これを受けて再度、司会者、パネラーでマニュアルの必要性、子どもの生きる力の保障、スキルの伝承の有無について等意見交換が続いた。休憩をはさんで会場の参加者同士のバズセッション、意見発表の後、司会者から全体のまとめと共に参加者がこれからの各自の実践の中で考えていくための問題提起がなされた。

2日目は4つの分科会。第1分科会は助言者の巷野悟郎小児保健部顧問による「乳児と集団保育」は、昨年に引き続き2回目の開催だったが、午前中は「集団保育の長所・短所・注意点について」と題して講義があった。その後参加者はグループに分かれ、講義の中からテーマを選び、自由に話し合った後、各グループの話しを発表し合い、さまざまな現場での悩みに共感したり、実践を参考にしたりした。午後からは、グループワークの中で出された問題点に合わせて、再度講義、質疑応答があった。最後に2年間の分科会のまとめとして、巷野氏から「子どもは育っていく過程で『風をひく・熱を出す・咳が出る』等は大切なこと。怪我についても同じで小さな怪我を体験することで子どもは上手に立ち回る知恵がつく。けんかも大切で自分を主張することが出来るようになったり、相手のことがわかるようになる。保育所や幼稚園で『型にはまらない保育』、『幅を利かせた保育』をしてほしい」とまとめた。

【育児相談研修会】

相談事業従事者を受講の対象としているこの研修会は、それぞれが担当した（している）事例について具体的に検討しながら、相談の進め方を学ぶところに特色がある。

本年度も例年通り、年3回開催。家庭における育児支援が大きなテーマだが、本年は具体的には「育児相談の基本」と「育児相談における他機関との連携」にしぼって研修会を行った。

【育児相談概論研修会】

本年度が5年目。本年度から、かねてからの要望に応えて春、秋2回の実施にし、各回ごとの講義終了後に受講修了証の発行を行った。第1回目は「育児相談の基礎」のテーマで、西村重稀厚生省保育指導専門官の行政施策の説明「最近の保育行政の動向について」の後、山崎美貴子明治学院大学副学長が「育児相談の基本構造」について講義。その後「育児相談の実際」と題して、〔こどもの城〕育児相談研修会企画委員から事例報告があった。

また、秋の第2回「育児相談における連携の必要性」のテーマで、最初に小西哲郎厚生省保育指導専門官の行政説明「保育を取り巻く最近の動向」の後、企画委員から「乳児院の子育て支援の実践とネットワーク」と題して連携先の1つである乳児院と、そこで行う育児体験講座についての事例報告があった。そして最後に「相談活動と社会資源――相談活動と連携（ネットワーク）」について明治学院大学副学長の山崎美貴子先生から講義を受けた。

【ニュースレターの発行】

今年度からは、保育所以外の児童福祉施設でも子育て支援事業を行っていることから、名称を「子育て支援のニュースレター」と改め、行政情報も厚生省（当時）だけでなく、広く関係省庁のものを掲載した。

「子育て支援のニュースレター」第4～6号（通刊20～22号）を発行したが、さまざまな分野の内容が網羅されていて読みやすいと好評で、本年度も128団体から申し込みがあった。

❸まとめ

社会の生活様式や価値観の変化を背景にして今、児童福祉施設をはじめ教育機関等においてはさまざまな改革が始まっている。保育研究開発部門の保育事業も「こども家庭支援プログラム」を実践している中で、子どもを取り巻く環境が大きく変容してきていることを実感させられる。こうした情勢のもとで〔こどもの城〕の保育を希望する親の多くは、居ながらにして〔こどもの城〕の文化に接することを魅力の一つに挙げてくる。保育所が選択される時代になり、さまざまな民間育児サービスの出現により親は少ない子どもにより豊かな経験をさせたいと思うのは自然なことだと言える。しかし、「親子教室」、「保育クラブ」、「幼児グループ」のプログラムをとおして対応する親からは、子育ての基盤が変わり始め、親も拠り所を求めている実態がある。今後、子どもの処遇とともに親に対しても、子どもがいることで生活が豊かに広がることを味わい体験できる魅力的なプログラム作りを模索するとともに提供もしていきたい。そして、同時に研修事業等に提案の形で活かし、全国の児童福祉施設をはじめ、子どもや親に関わる多くの関係者の参考にしてほしいと考えている。

平成11年度活動一覧表

❶一般利用

〈平常期間〉

名　称	期　間	備　考
春の親子遠足	5.8	保育クラブ、幼児グループ2～5歳児親子プログラムとして実施。代々木公園の自然の中で親子同士、家族同士を保育スタッフが仲介をして交流を深めることがねらい。親子の紹介ゲームや変装した先生を探すゲームなどで家族同士をつなぎながら楽しめるように工夫して行った。92組256人の参加。
土曜日企画	平常期間の土曜日	〔こどもの城〕に遊びに来た親子を対象にしたプログラム。2歳児の担当者、3～5歳児の担当者で年間10回を担当。それぞれの持ち味を生かして、1・2歳児の親子を対象にした「よちよちクラブ」3歳児以上を対象にした「製作もの」、「新聞紙遊び」、「運動遊び」等を展開した。
親と保育者の共同企画 ファミリーフェア	2.5	5階の保育室とギャラリーの一部て行う。5階はバザー的な要素を持った「フリーマーケット」ギャラリーでは「ゲームコーナー」「出店」「おもしろ写真展」写真家のハービー山口氏の講演を行った。参加者は昨年同様多く、入館者数に影響を与えることができた。
保育活動展	1.30～2.5	今回もギャラリーで実施。1年間の保育クラブ・幼児グループの保育活動を子どもたちの作品や写真を中心に展示紹介した。親子、家族で観覧。ギャラリーのため一般来館者も観覧。
保育室の一般開放	土曜日 14：00～17：00 日曜日・祝日 10：00～17：00	保育室「に遊具やがん具を用意。一般来館の親子が自由に遊べる場を提供した。両親と共の利用や祖父母の姿、中にはベビーシッターによる利用もみられた。ここを目指して来館する年少児の親子が増えている。大きい子どもたちと混じり合う、ほかのスペースと違い、親子が安心して過ごせる場所となっている。

〈特別期間〉

名　称	期　間	備　考
＜春休み＞ 作って遊ぼう親子工房 “キラキラしゃぼん玉”	5.3～5	主にラッピング用に使用するホログラムフィルムを使って作るしゃぼん玉。赤ちゃんからお年寄りまで楽しんだ。3日間で1582人の参加者があった。親子同士、家族同士和気あいあいの光景が繰り広げられた。
＜夏休み＞ 作って遊ぼう親子工房 “木の実虫作ろう”	8.13～16	「色々な実、木の実、木の枝を使って、素敵な“虫”を作ってみよう」のキャッチフレーズで、多種多様な虫作りに挑戦。参加者は自分のコノミムシを作った。4日間で479人の参加者。今年も親子工房の常連が多くなった。
＜開館記念日＞ 作って遊ぼう親子工房 “アロマ　クリスマスカード”	11.2～11.3	この企画も、祖父母、両親、兄弟一緒に保育室でくつろぎながら、作る姿が見られた。「カードを開くとポプリの香りが素敵ですね」と親からの声。ゆったりとした雰囲気の中で祖父母、兄弟がそれぞれに作って楽しんだ。2日間で164人の参加者。
保育室の一般開放	特別期間中の土曜日 14：00～17：00 日曜日・祝日　10：00～17：00	平常期間と同様に、保育室IIを一般開放した。

❷講座・クラブ

〈講座〉

名　称	対象・定員	受講数	曜　日・日　時	備　考
親子教室　1期 2期 3期	(組) 1歳児親子 (各期14)	(組) ① 14 ② 〃 ③ 15	月曜日10：15～12：30	親子遊びを中心に育児の楽しさを両親で体験するプログラム。保育スタッフの援助により、他の親子との交流にもつなげる。医学・心理発達に関する講義、保健婦からのアドバイスもあり全12回の講座。よりよい子育てをめざす。 申込みは定員オーバー。受講料は40000円。
幼児グループ	(人) 4歳児(10) 5歳児 (10)	(人) 9 10	火曜日～金曜日	(こどもの城)を保育の場として週4日、2年間にわたる継続的な保育活動。異年齢保育として保育クラブの3歳児が、曜日毎に異なる顔ぶれでこの活動に参加する。一人一人の個性を発揮させるために遊びの選択を巾広く考えている。複数の担当者がそれぞれにテーマを持ち保育にあたるチーム保育を行った。また、多様な人間関係を体験する場としてさまざまな分野からのボランティア、人を積極的に受け入れている。今年は親子一緒の館外活動も積極的に行った。4歳児は定員をオーバー。保育料は月額33000円給食費は4800円(月額)。

〈クラブ〉

名　称	対象・定員	受講数	曜　日・日　時	備　考
保育クラブ	2～5歳児 (登録児童数467)	14 14(1日当たり)	月曜日～土曜日 (2歳) 火曜日～金曜日 (3～5歳)	集団への参加、母親の社会参加などを主な目的とした育児支援策として、日時を選べる保育プログラム；イベント・通信・育児相談などの家族プログラムを行った。両親の参加が目立った。(送迎、イベント参加など)。子どもにより良い環境を与えたい、集団遊びの中での社会性、協調性を身につけさせたいとする理由が多い。他の幼児施設と併せて利用する親の姿勢が窺われた。入会金10000円、年会費5,000円。保育料として、2歳児1,200円(1時間)、3歳児以上850円(1時間)。昼食代600円、おやつ代200円。

ふしぎな発見（3～5歳児の保育）



かるた大会（3～5歳児の保育）



〈講習会等〉

名　称	対象・定員	受講数	曜　日・日　時	備　考
第13回こどもの城保育セミナー ～家庭と子ども・地域と家庭 PART III～	(人) 保育関係者親など (150)	(人) 157	8.7　10：00～17：00 8.8　10：00～15：00	全国の保育所、児童館、行政の児童福祉担当者などを対象に行った。子どもに関する様々な立場の人達と、それぞれに考え、疑問を出し合い、また、情報交換を図ることがねらい。 (基調講演) 「家族と子どもをめぐる豊かな社会」 山崎美貴子（明治学院大学副学長） (パネルディスカッション) 「子どもの生活を支える」 パネラー　谷田貝公昭（目白大学教授） 迫田圭子（茶々保育園理事長） 木都老誠一（金井幼稚園園長） 司会　大場幸夫（大妻女子大学教授） (分科会) ①「乳児と集団保育 PART II」 助言者　巷野　悟郎（こどもの城小児保健部顧問・小児科医） ②「幼児期に育てるものは?PART II」 助言者　大場　幸夫（大妻女子大学教授） 事例報告者　高根沢　昭（杉並区立善福寺保育園） ③「地域子育て支援を支える」 助言者　山田　美和子（CVS アドバイザー） 事例報告者　黒岩　和子（ホット子育てふれあいセンター・アドバイザー） 事例報告者　山崎　佐喜子（こどもの城）シニアボランティア） ④ワークショップ「こどもの城の実践」 ー親子で楽しむ造形活動ー 助言者　深谷　ベルタ（こどもの城）保育研究開発部）
育児相談研修会	育児相談担当者　(50)	46	5.1511.27　2.19 14：00～20：00	テーマは「育児相談事業のすすめ方――連携の必要性と実践――」。スーパーバイザーは、山崎美貴子（明治学院大学）と山田美和子（元全社協・高年福祉部）。(平成11年度から定員を50名に増加)
育児相談概論研修会	育児相談担当者 (各130)	108	6.19　14：00～17：00 10.16　14：00～17：00 (今年度から2回野開催)	テーマは「児童福祉施設が行う育児相談の基本と実践」。平成11年度から、かねてからの要望に応え、春・秋年2回の開催とし、各回ごとに講座修了後修了証の発行を行った。第1回目は「育児相談の基本」第2回目は「育児相談における連携の必要性」について学んだ。各回とも厚生省保育指導専門官（春は西村重稀先生、秋は小西哲郎先生）から行政説明を受けた後、山崎美貴子明治学院大学副学長から基本講義、こどもの城育児相談研修会の企画委員が事例報告を行った。
ニュースレターの発行	児童福祉関係者	有料 400部	第20号(7.15) 第21号(1.15) 第22号(3.15)	平成4年度から「保育所の育児相談ニュースレター」を発行してきたが、育児相談が「保育所」だけではなく、より広範に必要とされることになったため、平成10年度からは名称を新たに「子育て支援のニュースレター」と改めた。 全国各地で育児センター機能が活発化してきており、具体的な資料を求める声が多く保育所や関係機関からの問い合わせが目立った。児童福祉法一部改正に伴い一層広範囲の情報が必要とされている。内容は、行政、経済界、利用者に関する情報及び子育てをめぐる世界の情報、育児相談研修会の内容の概要など。主な配布先は、市長会、見学者、関係所管課。年間講読料2,000円(郵送費、印刷代一部負担金)



第13回〔こどもの城〕保育セミナー

❸その他（講師派遣など）

名　称	期　間	備　考
幼児のつどい	毎月１回（８月を除く）	親子のふれあいを目的とした集い。幼児と親子が対象。主催は東京都港区高輪児童館。
幼児のつどい	毎月１回(8月・12月を除く)	親子のふれあいを目的とした集い。幼児と親子が対象。主催は東京都港区白金児童館。
体を使った親子遊	6.20	１・２歳の父親の育児参加のきっかけ作りの遊びを紹介。気軽に参加びする父親が増えてきた。主催は富士見市健康増進センター。
（こどもの城）に於ける保育の実際	6.24	こどもの城と保育研究開発部の事業の説明。又こども家庭支援プログラムの実践例を学生に講義。主催は玉川大学児童教育学部。
親と子のふれあい	7.3	家庭で親子が自然に楽しく遊べる遊びを紹介。講義と実技を小学生の親たちに行った。主催は品川区立芳水小学校ＰＴＡ。
保育士としての親との接し方、関わり方	9.1	子どもの処遇だけではなく親対応について講義。全国の鉄道弘済会経営の保育所から熱心な保育士が参加した。主催は（財）鉄道弘済会。
子どもの健やかな成長と遊び	9.3	子育て支援について〔こどもの城〕の実践事例から紹介。地方における子育て支援の情報を直に得る。主催は福島県社会福祉協議会。
子育てフォーラム	9.11、25 10.9、23、30	男女共同参画の視点に立った子育て支援を考える。企画の段階から参加。主催は千葉市教育委員会社会教育課。
地域子育て支援センター担当研修会	9.16、30　12.2	〔こどもの城〕の子育て支援プログラムの紹介と見学。同じ内容で３回実施主催は（社福）日本保育協会。
楽しい子育てセミナー	10.8	３歳以上の子どもの親を対象に遊びが心や体にどれほど大切であるかをワークショップをまじえて行った。主催は柏市教育委員会。
家庭と子ども・地域と子ども	11.18	〔こどもの城〕の子育て支援プログラムを紹介しながら現代社会の子育て事情を児童委員と保育関係者に講演。〔こどもの城〕に対する関心の高さを感じた。喜多方市社会福祉協議会。
親子のふれあい体操	11.19	体操を通して親子のスキンシップをより深めることがねらい。主催は豊島区要町第２児童館。
幼稚園における子育て支援について	H.12.15	幼稚園の保護者や親との関わりや対応の仕方について〔こどもの城〕の実践例をスライドを交えて紹介。幼稚園関係者の園児減少に対する対策の真剣さに触れた。主催は富山市教育委員会。
親子遊びを楽しく	H.12.2.10	音楽的要素を盛り込んで家庭でも簡単に親子で遊べる表現遊びを幼児と親に実技指導。主催は千代田区四番町児童館。
育児支援プログラムの実際	H.12.2.25	〔こどもの城〕の子育て支援プログラムの立ち上げからをスライドをまじえて紹介。保育士や保育士養成校の学生達が熱心な眼差しを感じた。主催は宮城県社会福祉協議会。

お父さん手伝って（親子工房）



稲の苗を植える（キャッスルガーデンの親たち）



小児保健部



平成11年度の活動

❶活動の概要

小児保健部は、子どもの健康について取り組み、小児科のクリニックにおける診療・相談を中心に、講座等の「子育て支援」の活動を行っている。すなわち、妊娠中の女性の健康や友だちづくりの場となっている「マタニティ・スイミング」、０～２歳の乳幼児と親の井戸端会議の場である「赤ちゃんサロン」、「マタニティ・スイミング同窓会」、年１回のイベント「赤ちゃん大集合」、「マタニティ・コンサート」、ダウン症児親子のための「親と子のリトミック」、肥満の小学生を対象とした「健康スポーツ教室」である。

平成11年度の事業で特に目立ったことは、平常期間に月２回（年18回）行っている「赤ちゃんサロン」の参加者がさらに増加したことだった。年１回秋にファミリーウィークの一環として行っている「赤ちゃんサロン」のイベント版「赤ちゃん大集合」も281組の親子が参加した。乳児を持つ親（特に母親）が安心して外出できる場所は少ない。気軽に子どもを連れて来ることができ、そして他の母親たちと話ができ、他の子どもの様子を見たり、日頃の子育ての疑問を解消できる場は、母親たちにとって魅力的なのであろう。ここ数年続いている傾向とはいえ、あらためて、乳児を持つ母親たちに「赤ちゃんサロン」の需要が高いことを感じさせられた。

また、これまで、小児保健クリニックの受診者は、館内で遊ぶ時に別に入館券を購入しなければならなかった。平成11年度より、初診者・再来者を問わず、希望者には、受診当日の無料入館券を、年齢に応じて本人と保護者の分を渡すことにした。時には子どもにとって緊張しがちな診察・相談であるが、その後家族で遊ぶこと、楽しめることにつながっている。継続することにより、本人の子どもらしい活力や家族の関係を高める上で、よい効果をもたらしている。

平成11年度は、子どもをめぐる問題のなかでも、特に子育てをする親同士の関係が事件にいたることがあり、話題になった年であった。地域社会の中で、母親たちが信頼できる人間関係を築き、不安に陥っても相談したり、頼るところがあったり、子育てに自信と喜びを持ってかかわることができるような援助が必要である。親自身の生き方を含めて、まわりの社会がサポートしていくことが求められる。

一方、子どもよりも親自身の生活パターンが中心になっていて、乳幼児期の子どもにとって、大切な昼夜の生活リズムや食生活が乱れる傾向も見られる。生活習慣自体が従来の常識どおりには、形成されなくなっている。

子どもたちの遊びも、幼児期から一人で行うコンピュータ・ゲームが普及し、戸外でからだを使って遊んだり、友だちといっしょに遊ぶことが少なくなっている。子どもの生活がかなり変容してきている。世の中の動きに応じ、子どもの健康な成長を守り、親自身の自己実現の欲求と折り合いをつけながら、親と子がよりよく生き合える道をさぐっていくことが大切であろう。

【小児保健クリニック月別診療・相談件数（初診・再診内訳）】（表１）　（件）

診療		65	60	65	85	53	72	63	75	68	59	68	86	819
健康診査（公費）		11	18	6	11	16	14	4	11	16	9	12	11	139
健康診断（自費）		2	4	33	5	6	4	4	8	2	7	2	3	80
育児健康相談		1	0	1	2	2	0	1	0	0	1	1	0	9
心理相談		119	118	117	119	131	109	113	96	111	81	79	97	1290
ダウン症療育相談		7	7	9	9	8	8	11	8	11	9	10	7	104
合計		205	207	231	231	216	207	196	198	208	166	172	204	2441
内訳	初診（新規）	19	24	49	35	23	19	21	21	26	16	21	20	294
	再診	186	183	182	196	193	188	175	177	182	150	151	184	2147

【小児保健クリニック新規来所者の居住地域内訳】（表２）

人	78	23	24	10	75	28	238	22	20	5	9	56	294
(%)	(26.5)	(7.8)	(8.2)	(3.4)	(25.5)	(9.5)	(80.9)	(7.5)	(6.8)	(1.7)	(3.1)	(19.1)	(100)

【小児保健クリニック初回来所時の年齢内訳】（表３）

人	59	42	30	21	25	28	13	19	12	12	8	7	13	5	294
(%)	(20.0)	(14.3)	(10.2)	(7.1)	(8.6)	(9.5)	(4.4)	(6.5)	(4.1)	(4.1)	(2.7)	(2.4)	(4.4)	(1.7)	(100)

❷診療・相談活動

小児保健クリニックは、予約制で、小児科医をはじめ、保健婦・看護婦・管理栄養士・臨床心理士等が連携し、心身両面の相談に応じている。医師の診療は健康保険が適用されるが、初診では１時間をとって、親の話をよく聴き、背景にある子どもの生活や親子関係を理解するよう努めている。

平成11年度の月別診療・相談件数は、表１の通りである。平成10年の件数と比べると、診療・相談の総件数で2,594件から2,441件と153件（5.9%）の減少、新規来所件数も334件から294件と40件（12.0%）減少している。診療（健康保険適用）・育児健康相談（医師による健康保険適用外の相談）・ダウン症療育相談は減少したといってもわずかで、前年度に比べほぼ横這いである。また、健康診査（公費）と健康診断（自費）は、計180件から219件とむしろ21.7%増加している。大幅な減少となったのは心理・発達相談で、延べ1,465件から1,290件と175件（11.9%）の減少となった。特に年度の後半で申込み件数が減少したことがその理由であるが、相談料扱いとなっているので不況の影響もあるかもしれない。内部の体制上の理由のほか、平成11年度は不登校の相談が少なくなり、「学校で落ち着かない」など「集団不適応」を主な訴えとして相談に来る例が増加し、問題が質的に変化してきている面もみられる。

また、小児科診療の一部として、小児精神科医師が毎週診察を行うようになり、心理相談に継続来所していた人の一部が薬の服用を機会に、そちらに移行していることも一因であろう。

表２は、新規来所者の居住地域別内訳だが、東京都が

【新規来所者の診療・相談内容別内訳】（表４）

発達についての相談	言語発達遅滞（疑いも含む）	33(11.2)
	ダウン症、その他先天異常	8(2.8)
	精神・運動発達遅滞（疑いも含む）	10(3.4)
	学習障害・注意欠陥／多動性障害等	15(5.1)
	自閉症・自閉的傾向	6(2.0)
	小計	72(24.5)
情緒・行動面の相談	情緒障害・情緒不安	18(6.1)
	育児不安（夜泣き・指しゃぶりなど）	4(1.4)
	不登園・不登校	5(1.7)
	集団不適応	4(1.4)
	神経症（強迫神経症・恐怖症など）	9(3.1)
	その他（かん黙症など）	0(0.0)
	小計	40(13.7)
身体的・心身症的な相談	肥満・肥満と心理面の問題	19(6.4)
	夜尿症・遺ふん・ひん尿など	9(3.1)
	アレルギー疾患・湿疹・ぜんそくなど	8(2.7)
	その他身体面（低身長・股関節脱臼疑いなど）	10(3.4)
	その他心身症（脱毛・チック・吃音など）	17(5.8)
	小計	63(21.4)
合計		175(59.6)
健康診断（乳幼児健康診査を含む）		119(40.4)
総計		294(100)

８割とこれまでの４分の３より割合が増えている。港区・世田谷区など近いところからの受診が増加したためであろう。地元の渋谷区は、割合としては昨年度とほとんど変わらないが、乳幼児健康診査などでの利用は定着してきている。

表３の初回来所時の年齢内訳も、大きな変化はないが、１～２歳児が割合として増加しているのは、健康診査や発達の相談が増加したためと思われる。表４は、診療・相談内容別の内訳であり、健康診査・健康診断だけで４割に達した。発達の相談が割合としては18.9%から24.5%に増加、特に「学習障害・注意欠陥／多動性障害」の受診が５件から15件と増えている。「集団不適応」の受診が増え、小児精神科医により「注意欠陥／多動性障害」かどうかという診断も可能になったためでろう。服薬を続けている子どももいる。しかし、「集団不適応」の訴えであっても、小さい頃からの親子関係の問題がベースにあり情緒発達に不全をきたしている「情緒障害」や、心のなかに悩みや葛藤が生じ、症状が出ている「神経症」、転居や離婚などの環境の変化が要因となって起きている「適応障害」などの場合もあり、それぞれに応じた対応が必要である。「情緒・行動面の相談」や「身体的・心身症的な相談」は、全体に減っているが、なかでは、「不登校」が減り「神経症」が増えるなど、実際にはより複雑化しているように思われる。

平成11年度から診療・相談活動は、大学病院・総合病院の小児科医が交代で行っている。じっくりと時間をかけて親子の話をきくことで、通常の医療機関では得られない思わぬ親の心理状態や生活背景がわかり、従来の常識的な応答だけでは解決のつかない微妙な事柄への対応が、いかに大切かが感じられるとのことである。前述のように、小児診療の一部に、小児耳鼻科(言語聴覚外来)・小児精神科が加えられて、幅の広い相談が行われるようになった。

❸講座など集団で行う活動

冒頭で述べたように、毎年続けて行っている講座等の活動の中では、「赤ちゃんサロン」への参加者が秋に急激に増加し、その対応に追われた。140組もの親子が来所し、会場に入りきれなくなることもあった。ひとつには、「赤ちゃん大集合」のイベントに参加した人たちが、やはりこのような「集いの場」を求めてその後も繰り返し参加したということがある。また、ひとつには、育児雑誌その他のマスコミに「赤ちゃんサロン」が紹介されたためである。乳幼児期からの「子育て支援」が大切であり、それには特別なプログラムを組まなくとも、母親同士が集まって自由に話をするような「井戸端会議の場」を設定し、専門家がサポートする形をとることで十分よい効果があるということである。親にとっては他の親やスタッフと話したり、他の子どもの様子をみたりして、人とのふれあいのなかで過ごすうちに、子育ての不安を解消し、気分転換をはかることができてゆく。しかし、人数が増えすぎて、安全面・健康面への配慮から広い場所に移すことが必要になり、平成12年度からは４階の音楽ロビーで行うことになった。

復活して２年目の「マタニティ・スイミング同窓会」は、今年も54組の親子が参加して盛況だった。「マタニティ・コンサート」は、はじめて「ジャズ絵本」を行った。こどもの城劇場事業部の職員能祖将夫の絵本の朗読（３冊の絵本のスライド上映をしながら朗読）とジャズの佐山雅弘の即興演奏との「コラボレーション」である。うさぎの母子などの登場する絵とストーリーに音楽がつくことで、絵本の世界になじみの少ない人も抵抗なく入り



親と子のリトミック（「ダウン症クラス」）

こんでいける。その中で、母親・父親的な感情、子どもとまわりの人や物との出会いなど、子どもとの暖かな結びつきを喚起しながら、深い情緒的な意味を伝えて感動を与えていた。恒例の呼吸法（助産婦）やメディカル・トーク（小児科医・産婦人科医）も行われて好評だった。

このほかの「マタニティ・スイミング」「親と子のリトミック〈ダウン症クラス〉」「健康スポーツ教室〈太りすぎクラス〉」は、例年通り行われた。「健康スポーツ教室」は、父親の送迎も多く、子ども同士だけでなく、親同士の交流も増えている。ふだん、学校ではあまり運動が得手でなく、友だちも少ない子どもも、ここにくると楽しんでいて、何年も通い続ける例も少なくない。運動面だけでなく、精神的な意味でも子どもたちの成長を援助する機会となっている。

❹研修会などの啓発活動

毎年１回行われている「小児保健セミナー」は、「子育てとは？支援とは？―親子関係の再発見―」というテーマで、「子育て支援」に取り組んでいる保健所・保育所・児童館の職員を対象にした。まず、援助者として人と接するための基本的なコミュニケーションを学ぶ「コミュニケーションの実技」の実習の時間を持った。その後、保健所・保育所・児童館の現場でそれぞれ親たちへの支援に取り組んでいる中堅の方々より、実践的なお話をうかがうパネル・ディスカッションを行い、皆で考える機会とした。これは、乳幼児の子育て支援にこのような地域の機関の役割が大きくなってきているからである。最後に、「浮世絵の中の親子」の講義を通して、日本の伝統的な親子関係を振り返り、外国からの知識や情報に流されがちな我が国で、地に足のついた子育て支援を行っていく必要性を感じさせられた。

このほか、恒例になっている「小児肥満のための指導者講習会」は今年も１日コースと２日コースが開催され、ほぼ定員どおりの参加者があった。14年続いているが、その時々の社会的な状況等に合わせて講師が最新の情報や考えかたを提供している。今回も子どもたちの食生活が乱れてきているなか、人形などを使った楽しい指導法の紹介もあった。

平成11年度も、「動くこどもの城」や「講師派遣」などで、個々の専門職員が乳幼児の親の「子育て支援」活動や、それに携わる現場への研修活動に出向くことがあった。当部では、従来、保健・保育・教育関係の現場に赴くことが多かったが、最近は児童館からの要請も増えてきている。「小児保健セミナー」で児童館の実践を含めた構成にしたのもそのためである。そうした講師の依頼では、臨床心理士には「子育て相談の実際」や「子どもの心の発達」、管理栄養士には「子どもの食生活」や「肥満予防」、保健婦・看護婦には「子どもの健康」や「応急処置」などのテーマの要望が主となっている。これからも、各地域に赴き、「子育て支援活動」に取り組むお手伝いをしていきたい。

なお、『小児保健部研究生』は、平成11年度は心理相談の研修生７名、栄養相談の研修生１名、発達検査標準化のための研究を行う研究生１名、卒業論文を作成する研究生５名が登録し、卒業論文には、「集団不適応児に関する研究」、「早期教育について」、「マタニティ・コンサートについての研究」、「乳児の獲得行動の発達」、「育児に関する電話相談の調査研究」がテーマとして取り上げられた。

❺研究活動・その他の活動

平成10年度に厚生省（当時）発行の子育て支援小冊子「それでいいよ　だいじょうぶ」の編集に協力したのに続き、平成11年度はその指導者向け解説本の編集に各スタッフが協力した。

小児保健セミナー（「コミュニケーションの実技」）



ミタニティ・コンサート（「絵本の朗読とジャズのコラボレーション」）



学会報告は、「肥満教室に通う児の特徴―栄養摂取状況について―」（第46回日本小児保健学会）、「大震災被災幼児の小学校入学後の『心のケア活動』―絵画にみる混乱と成長―」（第40回日本児童青年精神医学会）等を行った。このほか、〔こどもの城〕の他部門への協力活動として、8月の「こどもの城児童合唱団」の広島での合宿に看護婦が、12月のプレイ事業部主催の「ゆきんこ冒険団」キャンプ（那須甲子少年自然の家）に保健婦が、それぞれ保健担当として参加した。

❻まとめ

診療・相談活動は、大学病院・総合病院などで勤務している医師が交代で診療にあたる体制となったが、その中に、小児耳鼻科・小児精神科の医師も加わり、充実した内容となっている。件数としては、乳幼児健診の来所者は増加したが、心理・発達相談の件数は減少した。心理相談の内容では、以前に多かった「不登校」より「集団不適応」が増加してきている。その一部は継続的な薬の処方も必要であり、小児精神科的な対応が欠かせなくなってきている。社会的な状況を反映して、子どもの成長期における問題も変化してきているのであろう。

子どもの生活そのものが、大人の生活の変化につれて変ってきており、今後も親へのサポートを心がけつつ、子どもたちの心身の健康と健全な成長を守るために、乳幼児期からの「子育ての支援」がますます大きな課題になってくるであろう。地域の保健・保育・教育関係施設のほか、児童館でも、こうした活動が重要性をおびてきている。小児保健部としても、広い視野・長期の展望に立って、こうした支援にじっくり取り組んでいきたいと考える。

平成11年度活動一覧表

❶一般利用

〈診療・相談〉

名　称	期　間	備　考
診療・相談 小児科診療 育児・健康相談 乳幼児健診 健康診断 栄養相談 ※専門相談 心理相談 発達相談 ダウン症療育相談	月曜日を除く毎日 9:30〜17:00 日曜日・金曜日 (各月1回)	診療・相談はすべて予約制である。小児保健部の小児科医師・看護婦・保健婦・臨床心理士・管理栄養士が診療・相談を行う（週1回小児精神科・月1回小児耳鼻科を含む）。 小児科医師の診療には、原則として健康保険が適用される。健康保険が適用されない相談もある。（育児・健康相談は相談料1回5,000円、心理・発達相談は担当者1人の場合1回50分5,000円、医師を通さない場合の初回相談料7,000円、専門相談のダウン症療育相談は、相談料8,000円である。） 専門医が担当。
赤ちゃんサロン	第2・第4火曜日（原則） 13:30〜15:00	対象は0〜2歳までの子どもとその親、あるいは妊婦。入館料対応。参加者同士の自由な交流（井戸端会議）の場で、育児情報の交換や、医師・保健婦・栄養士・臨床心理士による育児相談が行われる。本年度は延べ3,121人が参加した。
第14回マタニティ・コンサート	4.11	妊娠によって生活に制約を受けがちな妊婦に、楽しくリラックスできるひとときをすごしてもらい、出産を迎えようという主旨のコンサート。今回は、「ジャズ絵本」として、絵本のスライド上映と朗読に合わせて佐山雅弘がジャズピアノの即興演奏を行うコラボレーションに、市川英子助産婦の呼吸法の指導、野末源一医師（山王病院産婦人科）と巷野悟郎こどもの城小児保健部顧問のメディカル・トークをまじえて、好評だった。297人参加。
第7回マタニティ・スイミング同窓会	6.2　13:30〜15:00	乳児（2歳未満）のいる、マタニティ・スイミングの卒業生（母親）を対象とした同窓会。小児科医のトークや体育事業部の親子体操を楽しみ、久しぶりに会った仲間と子育てについて語り合い、懇親を深めた。55組109人が参加。

〈特別期間〉

名　称	期　間	備　考
〈夏休み〉 こども1日ドック	7.22　12:00〜17:30	対象は小学生と中学生。体育事業部との共同事業。医師による診察、検査（尿・血圧測定）、身体計測、生活習慣調査、食生活調査、心理検査、体力測定の結果に基づいた診断・指導。受診者は5人。
〈開館記念〉 赤ちゃん大集合〜赤ちゃんサロンスペシャル	11.2　10:30〜15:00	「赤ちゃんサロン」のイベント版だが、今年度は、小児保健部主催の会場での「小児科医トーク」や「親子遊び」のほか、体育室での「親子体操」、音楽ロビーでの「音楽遊び」、育児用品や育児情報の展示コーナーなど、全館を使い、他の部の協力も得て大きな規模で行われた。参加者は281組(562人)と盛況であった。乳児を持つ母親たちが安心して外出できる集いの場を求めていることが今年も感じられた。
第14回小児保健セミナー「子育てとは・支援とは?ー親子関係の再発見ー」	10.2　10:00〜17:00	保育園・保健所・児童館などでの子育て支援に携わる職員に、「コミュニケーションの実技」（植松紀子こどもの城小児保健部臨床心理士）で人とのふれあいの基本を学び、「お母さん達にどう接するか」のパネルディスカッション（藤井徳子台東区清川保育園主任保育士・楯石てる子板橋区志村健康保健福祉センター保健指導係長・石井妙子北区神谷南児童館長・巷野悟郎こどもの城小児保健部顧問）で現場での親への援助について考え、「日本文化の中の親子関係ー浮世絵をとおしてー」（北山修九州大学大学院人間環境学研究科教授）の講義」で我が国の伝統的な親子関係のあり方を振り返ってもらう機会とした。62人の参加。

❷講座・クラブ

〈講座〉

名　称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備　考
健康スポーツ教室〈太りすぎクラス〉第16期	(組) 小学生1～6年の太りすぎ児童とその親 (25)	(組) ① 12 ② 14 ③ 15	土曜日　14:00～17:00 〃 〃	体育事業部との協力事業。太りすぎの改善のために医学指導・栄養指導・体育指導を行う。外部講師として、村田光範東京女子医科大学第2病院院長他同大学病院医師、坂本元子和洋女子大学教授・石井荘子助教授・藤澤由美子講師。
マタニティ・スイミング	(人) 妊娠16週以降の妊婦 (35)	(人) 4.29 5.25 6.24 7.25 8.24 9.26 10.24 11.27 12.21 1.14 2.16 3.21	水泳（火・木曜日月7回） 10:00～12:00	体育事業部との協力事業。水泳という活動を通して、妊娠中を心身ともに健康に過ごすことをねらいとしている。水泳の前後の検診担当に、日本赤十字社医療センター産科医師、助産婦。
母と子のリトミック〈ダウン症クラス〉第16期	(組) 3～5歳のダウン症児とその親 (15)	(組) ① 11 ② 10 ③ 9	木曜日　14:30～15:30 〃 〃	音楽事業部との協力事業。リトミック活動を利用し、子どもたちが親やスタッフとリラックスして一緒に活動する中で、自分の気持ちを表現できることをねらいとしている。講師は音楽事業部吉村温子。

〈講習会等〉

名　称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備　考
小児肥満のための指導者講習会（第26回）	(人) 養護教諭、栄養士、保健婦、保育士など(50)	(人) 48	7.9　10:00～17:00	平成11年度も1日コースと2日コースを各1回行った。全国から肥満児の指導について学習したい養護教諭・栄養士らが集まった。内容「肥満の判定と指導」村田光範東京女子医科大学第2病院院長、「肥満改善のための食事・栄養指導」坂本元子和洋女子大学教授、「肥満児の運動指導・実技紹介」羽崎泰男こどもの城体育事業部長。
小児肥満のための指導者講習会（第27回）	養護教諭、栄養士、保健婦、保母など　(50)	51	3.10、11 10:00～17:00	2日コースには心理面の講義を加えている。全国から養護教諭・栄養士が多く参加した。内容「肥満の判定と指導」村田光範東京女子医科大学第2病院院長、「肥満改善のための食事・栄養指導」坂本元子和洋女子大学教授、「肥満児の運動指導・実技紹介」羽崎泰男こどもの城体育事業部長・山崎綾子同指導員、「肥満児の理解と心理的対応」吉田弘道東京都精神医学総合研究所研究員。

❸その他（動くこどもの城など）

名　称	期　間	備　考
神奈川県藤沢市教育委員会「相談指導教室・いじめなんでも相談ふじさわ」	4.22、6.24、7.22、8.26、10.28、2.24	不登校の児童・生徒の相談・指導にあたっている教職員の研修会に、定期的に臨床心理士が出向いて、助言・指導を行った。
長崎県総合体育館肥満傾向児童の健康指導研修会「食べ方を見直そう！ー肥満の傾向と対策」	6.29	長崎県主催の児童の保護者・指導者向け研修会で、子どもの食生活と肥満対策について管理栄養士が講義を行った。
＜動くこどもの城＞お母さんと赤ちゃんのすくすく体操	6.14、15	三重県津市保健センター、四日市市立塩浜児童館での、親子向けの体育のプログラムに臨床心理士が同行。乳幼児の親向けに親子関係・発達などの側面から助言を行ったほか、保健婦等の指導者に研修を行った。
石川県第３回児童福祉施設栄養士研修会「離乳食と幼児食の考え方ー実践を交えてー」	9.21	石川県主催の市町村児童福祉施設（保育関係等）の給食等を担当する栄養士に向けての研修会で、管理栄養士が講義を行った。
＜動くこどもの城＞お母さんと赤ちゃんのすくすく体操	9.30	大阪府交野市保健福祉総合センターでの、親子向けの体育のプログラムに臨床心理士が同行。乳幼児の親向けに親子関係・発達などの側面から助言を行ったほか、保健婦等の指導者に研修会を持った。
＜動くこどもの城＞「お母さんと赤ちゃんのすくすく体操」	10.5	埼玉県坂戸市立児童センターでの、乳幼児親子向けの体育のプログラムに臨床心理士が同行。乳幼児の親向けに親子関係・発達などの側面から助言を行ったほか、児童館職員等指導者に相談事例の援助のし方などについて研修を行った。
＜動くこどもの城＞お母さんと赤ちゃんのすくすく体操	11.20	秋田市子育て総合センターでの、親子向けの体育のプログラムに保健婦が同行。１～２歳児の親向けに、生活リズム等の観点から助言を行ったほか、保健婦・子育てサークルリーダーなどへの研修会でも話をした。
＜動くこどもの城＞お母さんと赤ちゃんのすくすく体操	1.20	千葉県佐倉市立志津児童センターでの、親子向けの体育のプログラムに管理栄養士が同行。子どもの食生活の観点から親向けに助言を行ったほか、職員への研修を行った。
東京都新宿区児童館職員研修会「乳幼児の発達Ⅰ・Ⅱ」	2.1、24	新宿区の児童館や区民福祉会館児童コーナーの職員を対象に、１回目「０～３歳での発達」、２回目「子育て相談の実際」のテーマで、臨床心理士が講義を行った。
岐阜県健康福祉環境部児童家庭課「子育てコンサルタント養成講座」	2.29、3.6	岐阜県の子育てコンサルタントの養成講座（関市・大垣市）に、臨床心理士が子育て支援の際の援助のし方等について講義をした。

企画研修部



平成11年度の活動

本年度も、全館的な事業の調整を中心とした業務（企画部門）とボランティアの養成・コーディネイトを中心とした業務（研修部門）を行った。

企画部門では、全館的な事業の調整の他に、特別期間を中心とする利用者増を目的とした企画展や催しの企画・運営、国庫補助事業「動くこどもの城」の事務局、全国の児童館などの情報の収集、インターネットを利用したホームページの運営などを行った。

また、研修部門では、ボランティアの養成と日常活動のコーディネイトの他に、野外活動の企画運営、児童厚生員などを対象とした実技指導講習会などの企画運営に当たった。

❶事業全般にかかわる企画調整

(ア) 事業全体のとりまとめ

企画部門の最も大切な業務として、夏休みやゴールデンウイークなどの特別期間を中心とした事業の調整があげられる。今年度は、各特別期間の約２か月前に、特別期間ごとの目標やテーマを設定し、その目標を各事業部ごとに検討・調整してもらい、全館的なイメージの統一を図った。

また、入館者増のための対策を練っていくことも大切であり、その柱の一つとして地域の小学校・幼稚園・保育所などとの連携を図った。今年度は開校記念日の招待（渋谷区・港区）に加え、春休みの新１年生の招待（渋谷区・港区・目黒区・世田谷区）、小学校・児童館など施設へのチラシ配布と夏休みの優待などを行った。渋谷区・港区については、これらの対策も３年目となり、定着してきた感があるが、世田谷区・目黒区については、あまり効果がみられなかったが、実際の効果は継続してみないと判断出来ないと考えている。

期間の長い夏休みには、繰り返し〔こどもの城〕に遊びに来てもらえるように、夏休み期間何度でも遊びに来られるパス制度を新設した。これについては、おとな128枚、子ども104枚の合計232枚と初年度から想像以上の成果をあげることができた。

新しい試みとしては、平成12年度の事業について、各事業部ごとに事業案を作成する前に、全館的な目標を設定し、〔こどもの城〕としての統一イメージづくりにも取り組んだ。この成果については、来年度の年報で述べたい。

(イ) グループ活動

グループ活動の受け入れ件数は、112件2,661人であった。昨年の103件2,611人を上回り、過去最高となった一昨年の117件2,759人に迫る結果となり、「こどもの城のグループ活動」に対する需要が依然として高いことが伺える。月別の利用件数を見ると、２月、３月の年度末の利用が相変わらず高いが、６月、10月、11月といった時期の利用も多少ではあるが増加傾向にある。平均的に高い利用件数の維持を目標にした広報活動が効果をあげつつある。

利用団体別にみると小学校の利用が１割弱と少なく、ここ数年にわたって小学校に対する働きかけが課題とな

っている。2002年から始まる新学習指導要領に盛り込まれている「総合的な学習」への対応が「グループ活動」の中で出来るのではないかという期待が持てるところであるが、実際の影響は現段階では判断し難い。引き続き、プログラムの充実に努めるなど、自分たちの側で出来る準備は怠らないようにしていきたい。

「グループ活動」の利用について年を追って見てくると、一時期利用が落ち込んだ時期もあったが、ここ数年は年間100件以上の利用が継続的にあり、件数的には満足出来る数字が得られていると考えられる。むしろ、幅広い年齢層に対応出来るプログラムの豊富さや、個々のプログラムの完成度など「件数」よりその「質」を追求する時期にきているのではないだろうか。

(ウ) 動くこどもの城

詳細は、137頁参照。

(エ) チャリティー事業

チャリティー事業は企業や団体のサポートを受けて、児童養護施設の児童、母子生活支援施設の親子、障害児(者)グループ、社会福祉協議会のボランティアの人たちを〔こどもの城〕での劇場公演や各種の催しに招待し、楽しいひとときを過ごしてもらう事業である。開館当初は劇場での演劇公演を中心とした招待であったが、その後、子ども向きの催しへの招待と趣向を変えた。しかし、団体や企業の善意に頼っているこの事業は、今日の経済情勢のもとでは財政的に厳しい状況にある。招待の回数が少なくなったり、事業自体の規模が小さくなってはいるが、招待の告知をできるだけ早めにするなど、〔こどもの城〕に来ることを楽しみにしている子どもたちを少しでも多く招待し、事業が継続していけるように努力していきたい。

(オ) こどもの城友の会

「こどもの城友の会」は家族単位で入会してもらい、〔こどもの城〕の施設を積極的に利用し、様々な催しに参加してもらう会員組織で、本年も別表にあるような一般の催しへの優待や会独自の催しを行ってきた。一昨年度から始めた、「こどもの城友の会」会員のための独自の会報「こどもの城友の会通信」も定着してきて、毎回会員から意見がよせられてきている。今年度は増刊も含めて13回発行した。この他「こどもの城ニュース」(年9回)、講座募集や催しの案内などを会員あてにダイレクトメールで発送した。友の会独自の催しでは、会員から要望の多かった「ファミリーキャンプ」を本田技研工業㈱の協力を得て栃木県茂木町の「ツインリンクもてぎ」で実施したほか、秋には都立小金井公園で「ファミリーハイキング」を行った。キャンプやハイキングだけでなく、幅広い年齢層の会員が楽しめ、交流を図ることの出来る催しをこれからも企画し、こうした事業を通して得られる家族の要望を他の事業にも反映していきたい。

❷特別期間などに実施した事業

昨年までに引き続き、特別期間などにギャラリーや青山円形劇場などを使って、外部との提携事業などを積極的に行った。

(ア) あけてびっくり！ しかけ絵本の世界「ラップルの冒険」

しかけ絵本というと、一般には「とび出す絵本」として知られているポップアップ絵本をイメージすることが多いが、この企画展では、それ以外のさまざまなしかけも紹介したいと考え、それらの展示を行った。しかけ絵本は、「絵が動いて見える」、「ストーリーをドラマティックに演出する」などのために、長い歴史の中で、さまざまな作家が努力をしてきた。これらのしかけを子どもたちに楽しく紹介するために、大型の体験型展示物を制作した。「ラップル」という主人公のキャラクターであるウサギが、大好きなリンゴをなくしてしまい、一生懸命にいろいろな所を探していくというストーリーを設定。そのストーリーの中で「動くしかけ」、「めくるしかけ」、「透けて見えるしかけ」、「穴が空いているしかけ」、「動くと場面が変わるしかけ」などを紹介した。展示物を体験したあとは、実際に出版されているしかけ絵本を見てもらうスペースも設けた。

また、他には、しかけ絵本の歴史を紹介するために、今から100年以上も前に出版された古書を展示したり、しかけ絵本の1ページを制作するワークショップを行った。

大型の展示物は子どもたちが動かしたり、覗いてみたりとたいへん反応が良かったが、展示物の一部は紙で制作したために、耐久性に問題があり、期間中何度となく、手直しをせざるを得なかった。

(イ) 第5回人形劇カーニバル

5回目を迎えた人形劇カーニバルでは、「ことばってなに……」というテーマを設け、人形の「動きによる表現」と、台詞による「ことばの表現」をクローズアップした。

【チャリティー事業一覧】

年月日	回数	実施場所	プログラム名	人数	対象者
11. 8. 13	2	青山円形劇場	人形劇カーニバル	56	養護施設の児童、母子寮の親子、障害児(者)グループ、社会福祉協議会のボランティアほか
14	2	〃	〃	〃	
15	2	〃	〃	〃	
11. 12. 4	2	青山円形劇場	ミセス・サンタの「宇宙からのEメール」	9	
5	2	〃	〃	〃	

各劇団に、動きだけで芝居を演じる言葉のない人形劇と、台詞を加えて演じる人形劇の2つを演じ分けてもらい、子どもたちに「動きによる表現」と「ことばの表現」を比較して楽しんでもらった。参加劇団の1つとして、東欧ハンガリーからレナート・オンドラシュ氏の演じる「ミクロポディウム」を迎え、日本の人形とは異なる小さな緻密な動きの芝居も見てもらうことができた。子どもたちは、最初は台詞のない芝居には戸惑っていたが、すぐに雰囲気に溶け込み、台詞のある芝居よりは積極的に楽しんでいた。

また今年は、5回目という節目の年でもあり、特別公演としてカンボジアのクメール民俗文化教育センターの子どもたちによる影絵芝居の公演「スバエク・トーイ」を、財団法人現代人形劇センターとの共催で実施した。

(ウ) むしむし探検隊

夏休みのギャラリーでは、昨年度に引き続き、子どもたちに科学的な体験をしてもらい、関心を持ってもらうことを目的とした展示とワークショップを実施した。取り上げたのは、子どもたちに人気の高い「昆虫」。今回は昆虫の「歩く」、「飛ぶ」、「鳴く」をテーマに展示を構成した。「歩く」では、昆虫の足は6本だが、その6本の足をどのように動かしているのかということで、足の動きを映像で紹介。「飛ぶ」では、昆虫の翅は4枚で、その4枚の翅をどのように動かしているのかをトンボを例に模型で紹介、「鳴く」では、音とは何？というところから、振動が音として聞こえること、人間の声も同様に振動であることを簡単な実験をとおして知ってもらい、昆虫はどのように振動をおこして鳴き声を出しているのかを「セミ」と「スズムシ」を代表に図で紹介した。また、鳴く虫の代表「ミンミンゼミ」、「ヒグラシ」、「スズムシ」、「キリギリス」、「コオロギ」がどんなところで見られるか背景を演出して、鳴き声をもとに探しながら昆虫を知っていくコーナーを設けた。

ワークショップは、ＡＶ事業部が継続的に行っていた科学的な工作教室を、虫をテーマにして実施することにした。〔こどもの城〕に何度も遊びに来てもらうことを意識して、約10日ごとに、「紙でつくる虫」、「羽ばたく虫」「歩く虫」という3種類のプログラムを用意した。「紙でつくる虫」(7/20～8/8)では、パソコンを使用して型紙を製作し、そこから虫のペーパークラフトを作り、それらを標本箱に飾った。「羽ばたく虫」(8/9～8/22)では、木を素材に羽の動くトンボを製作、動力はクランクを利用した手動にした。「歩く虫」(8/23～8/31)はモーターにギ

【こどもの城友の会会員向け催し一覧】

実施年月日	プログラム名	内容
11.7.24～25	夏のファミリーキャンプ	会員から「ぜひ友の会でのキャンプを」の声に応えて開催した待望の「ファミリーキャンプ」。本田技研工業㈱から家族や青少年のための社会活動に協力したいという申し出もあり、栃木県茂木町の「ツインリンクもてぎ」を訪れた。家族でのキャンプの基礎知識のほかに、レース場の中に残されている昆虫や植物を見て回り、人工的な施設と自然環境の調和のあり方についても考えることができた。内容がもりだくさん、しかも気温が高かったので、小さな子どもの多かった参加者にはいささかハードだった。
11.10.24	秋のファミリーハイキング	「自然環境に恵まれた近郊の公園で家族で遊ぶ」をテーマに、都立小金井公園にでかけた。午前中はあらかじめ決められたポイントを探し家族で公園内を散策。昼食はビュフェスタイルでオープンサンドウィッチを食べ、午後からは選択プログラムで、自然の素材を使ったフォトフレームやペットボトルの楽器などの工作を楽しみ、最後は全員でゲーム「だるまさんがころんだスペシャル」でしめくくった。
12.1.6～9	凧作りのワークショップ	「凧（たこ）作りワークショップ」のうち、「角凧」、「ひこうき凧」の親子プログラムへの優先予約と材料費割引をおこなった。昨年実施して好評だった横浜こどもの国での凧揚げ大会は、今年も実施予定で準備をしたが、残念ながら雨天のため中止となってしまった。
	劇場公演に招待・優待	「アニー」、「青山バレエフェスティバル」、「コッペリア」(青山劇場)「こどもフェスティバル」、「人形劇カーニバル」、「月猫えほん音楽会」、「スバエク・トーイ」、「おひさまおはなしコンサート」、「ミセスサンタの宇宙からのEメール」、「ぼくらのサウンド」(青山円形劇場)の公演に抽選で招待。ほかに、自主公演の料金割引などの優待をおこなった。

ア・クランクを利用して、６本の足で歩く虫のロボットを製作した。講習の前には、昆虫の生態などについての解説も行い、単なる工作教室にならないように努めた。夏休みの工作として各講座ともたいへん人気が高くほぼ定員を満たしていたが、〔こどもの城〕独自で考えた工作であったため、部品の調達・準備に非常に時間を割かれたことが、今後の検討課題として残った。

(エ) おひさまおはなしコンサート

今年のファミリーウイークの中核となる催しとして、絵本の読み語りの公演を実施した。小さな子どもたちにとって、絵本は初めて出会う本であり、親がその絵本を読んで聞かせることは、将来子どもが本に親しむためにも、親子のコミュニケーションのためにもとても大切なことである。しかし、テレビの普及や様々な状況の変化により、このような時間が少なくなっている。そこで、絵本の読み語りの楽しさを親子に感じてもらうことを目的として、話すことのプロである声優による絵本の読み語りの公演を企画した。

お父さん・お母さん声優である佐久間レイ、潘恵子、小林優子、関俊彦（敬称略）を迎え、ほかにテレビの子ども番組に関わっているピアノ奏者・人形劇団を加え、音楽とスライド上映を交えながら、絵本の読み語りを行った。上演作品は、『色の女王』（ユッタ・バウアー作・橋本香折訳・小学館）、『マリールイズいえでする』（N. S. カールソン作・J. アルエゴ、A. デューイ絵・星川菜津代訳・童話館出版）ほか。

あけてびっくり！　しかし絵本の世界「ラップルの冒険」



この公演は、事前に往復はがきで参加申し込みを受け付けたが、たいへん反響が大きく、定員各250名の２公演のところ、800家族を超す申し込みがあった。中には、新潟県や静岡県など遠方からの応募もあり、驚かされた。

㈱小学館の協力を得て、参加者には絵本を配布することができ、コンサート後、それぞれの家庭で絵本を親子で楽しむ光景が見られたのではないかと期待している。今後も、ぜひ継続的に行っていきたい。

(オ) 子育てママの悠遊タイム

昨年度から実施しているプログラムで、子育てに追われる母親に、子育てから少しだけ離れてホッとする空間を提供したいと考え企画した催し。今年度は保育研究開発部の協力を得て、母親が参加しやすいように、そして、父親の育児参加を促す意味も含めて、原則として家族での参加を求めた。母親のためのプログラムと、父親・子どものためのプログラムを同時進行で実施した。

家族全員で集合した後、父親と子どもたちは保育スタッフと保育室に移動して、親子遊びのプログラムに参加してもらった。母親は、自身も母親である声優の佐久間レイさんとの懇談に参加した。佐久間さんには小学校低学年の娘さんがいて、テレビの子ども番組を通じて多くの親子を見ている。佐久間さんとの懇談は、母親たちにとってたいへん参考になったようで、明るく楽しい雰囲気のなか、懇談が進んだ。

子どもたちと母親との分離については事前に心配していたが、父親がいたこと、保育のスタッフが積極的に関わってくれたこともあり、ほとんど問題はなかった。父親と子どもたちは、造形プログラムや手遊び・歌遊びなどを楽しんでいた。父親の積極的な参加という意味でも、〔こどもの城〕にとっても新しい子育て支援プログラムとなり、今後も方法を検討しながら継続して実施して行きたいと考えている。

(カ) 第６回おりがみカーニバル

昔から手から手へ受け継がれ、子どもからお年寄りまで誰もが幅広く楽しめる折紙。折紙作品の展示とワークショップを、今年も〔こどもの城〕開館記念特別期間「ファミリーウイーク」に実施した。「ことば」をテーマとした今回は、ことわざの意味を折紙で分かりやすく作ったパノラマ作品、全国からこの催しのために応募された折紙作品、ミニチュア折紙の作品などの展示を行った。作品には、小さな子どもたちにもことわざの意味がわかる

ように、イラスト入りの解説パネルをつけた。単に折紙作品を楽しむだけでなく、ことわざにも触れることができ、折る楽しさだけでなく、それを飾ることにより折紙の楽しさが広がることを紹介できた。

ワークショップでは、「折紙とことば」というテーマに基づき、カルタを題材としたプログラムを実施した。自分の好きな折紙を折り、それをカルタの台紙に貼りつけ、さらに背景などを加えて、絵札を制作した。次に、その絵札をもとに、読み札を作ってもらった。ただ、絵札が折紙でできているために耐久性が無く、みんなで作った折紙カルタで遊ぶことに発展できなかったことは残念であった。日本折紙協会との共催事業。

(キ) 2000年の空に舞い上がれ日本の凧

日本の伝統的な行事が行われることの多い年末年始の時期に、〔こどもの城〕でも、伝統的な遊びの文化を伝えるために、毎年さまざまな催しを実施している。今年は、特に、「凧」をテーマにして展示とワークショップを行った。ギャラリーでは、中央区日本橋にある「凧の博物館」の協力を得て、日本各地に伝わる伝統的な「凧」の展示と紹介を行った。全国を「東日本」、「東海」、「中国・四国」、「九州・沖縄」の4つの地域に分け、それぞれの地域に伝わる「凧」の系譜を解説し、日本の伝統的な「凧」の地域による類似や特徴がわかるようにするとともに、代表的な「凧」約80点を展示した。アトリウムの空間に浮かぶ2 mを越える大凧の姿に、子どもたちは強い印象を受けたようだった。また、地域別に展示された「凧」の何か所かには、地域の観光協会や教育委員会の協力によって寄せられた「凧あげ大会」や「凧の由来」を示す写真も添えられており、単に「凧」の構造やデザインだけでなく、「文化的背景」にも興味をもってもらえるよう工夫した。

会場内のワークショップは、例年行われて人気の「エイ凧」づくりを行った。展示を見るだけでなく、子どもたち自身も参加出来る要素の重要さを改めて認識した。

(ク) 色であそぼう！ 紙であそぼう！～『はらぺこあおむし』のエリック・カールさんと

絵本『はらぺこあおむし』の作者エリック・カール氏が来日した折り、〔こどもの城〕で小学生とのワークショップを、造形事業部との協力事業として実施した。約400人の応募があり、そのうち抽選で1年生～6年生までの53人が参加。カール氏が絵本を作るのと同じ手法で、オリジナルの紙を作り、コラージュで絵を制作した。

準備段階では、造形事業部が中心となり、その専門的な知識と日常のスタジオ活動の経験を生かして、使用する紙の選定をはじめとして、画材の準備、環境設定（会場設営）などを計画した。

カール氏との打合せのなかで最初にぶつかった問題は、ペーパーづくりとコラージュは2種類の異なった作業のため、限られた時間の中では両方の活動は難しいのではないか、ということだった。しかし、カール氏と活動をする意味を考えたとき、やはりペーパーづくりは重要な要素であり、欠かせないと判断し、事前にコラージュ用の紙を準備しておくということで、両方の活動を子どもたちに体験してもらうこととした。ペーパーは、カール氏から事前に届いていたサンプルをもとに、造形事業部スタッフが試行錯誤を繰り返し、カール氏の制作したものに近いものを準備した。そして、ワークショップの会場に、たくさんのペーパーを飾ることで、今回のワークショップに適した環境設定をした。

カール氏の暖かい人柄とダイナミックな作品に触れ、子どもたちは触発されてユニークな作品を作った。

また、カール氏は、氏自身が自分の作品を通じて子どもたちを励ましたいとの願いを持っていることもあり、のびのびと創作する子どもたちのようすに喜びを隠せない様子だった。参加した子どもたちの何人かからは、家に帰ったあとも自分でペーパーを作ったり、コラージュの続きをしたりと、活動の続きを楽しんだという報告があった。〔こどもの城〕としてもたいへん貴重な体験で、この時の様子は、ワークショップの後、造形スタジオなどで展示し、多くの子どもたちに見てもらった。

(ケ) ニッサンゆかいな絵本と童話展「春・はる・コラージュ」

今回の「ニッサンゆかいな絵本と童話展」は、「コラージュ」をテーマに展開した。グランプリ作品がコラージュの手法を用いた作品であったことや、1月にワークショップを実施したエリック・カールさんの作品もコラージュで作られており、その流れをくんでテーマを設定した。

展示は、「第7回ニッサン童話と絵本のグランプリ」で入賞した作品の原画、絵本作家・山田真奈未さんの立体作品「はるまき」、1月に実施したエリック・カールさんのワークショップの様子をまとめたパネル、さまざまなコラージュ絵本の紹介コーナーなどを設けた。

ワークショップは、1月にエリック・カールさんと実施したワークショップをヒントにして、フロッタージュの

手法を用いてオリジナルの紙作りを行った。さまざまなテクスチャーを持つ素材を用意し、その上にパラフィン紙を置き、クレヨンでこすり、模様を浮き出させた。何種類かのテクスチャーを使って色を重ねていくと、色鮮やかなオリジナルの紙ができあがる。そして、その紙を使って紙のカップにコラージュし、ペンたてなどを制作した。

コラージュというテーマがあったので、全体的にまとまった展示になった。ワークショップでは、紙作りの楽しさを子どもたちにも十分感じてもらうことができた。

ただし、作った紙でのコラージュを楽しむという点においては十分ではなく、ペン立てなどのように制作過程の多いものではなく、シンプルに行った方が良かったと感じた。

❸ボランティアの活動と養成

〔こどもの城〕の事業に協力するボランティアを養成するためにボランティア講習会を実施している。本年度の講習会修了者は95人。実際に〔こどもの城〕での活動を希望し登録している人は、前年度からの継続者も含め、年度末現在432名となった。

(ア) ボランティアの活動

【平常期間のプログラムの中での活動】

各部から依頼される活動（保育、スイミング、キッズクラブ、ユースクラブなど）と、ボランティアが各部に働きかけ生み出された活動（人形劇、紙芝居、影絵、パネルシアターなど）の2つに大別できる。

本年度は新しいグループがひとつ生まれた。女性ボランティア3人が始めた平日に行われる絵本の読み語りの活動である。毎月1回、第3金曜日の2時からプレイホールで実施した。本来絵本の読み語りは、青年ボランティアが中心となり、毎月第2日曜日に実施していたが、日曜日に活動しにくい女性ボランティアが、企画研修部に相談を持ちかけ活動が始まった。この活動をコーディネイトする上で一番難しかった点は、ボランティアが持つ活動へのニーズと、プレイホールの環境に合った遊びに大きな差があったことである。ボランティアは絵本をじっくりと子どもたちに聞いてもらうことに活動の焦点をあてていたが、アスレチックなどで子どもが走り回っているプレイホールの環境では、実際にはそれが難しかった。

何度も話し合いをし、体験し、フィードバックを行い、実態にあった活動になるようアプローチを繰り返した。

同時にプレイ事業部のスタッフとも話し合いを行い、プログラムの可能性についてアドバイスをうけた。ボランティアは当初、自分たちの目指していた活動と違った物になることに抵抗感を覚えていたが、繰り返し対応することで、次第に理解して貰えるようになった。この過程において、私たちは共に悩み、共に考える姿勢を大切にした。一緒にプログラムに参加し、フィードバックを行うよう心掛け、考えを上から押しつけるような姿勢をとらないようにした。プログラム内容が決まるまで、3か月以上かかったが、ボランティアとスタッフの両者が納得できるプログラム作りが出来たことは満足の行く結果となった。

しかし、こうした新しいグループが生まれてくる一方、既存のグループの人手不足が深刻化して来た。特に女性ボランティアの各グループは、慢性的な人手不足の状態が続いている。そこでグループに所属している人数と、女性ボランティアの登録者数を比較したところ、約8割のメンバーがグループに所属している事が判った。いくら、人を募っても、ほとんどがグループに所属しているので、グループの人数が増えていかないのは当然の事で

色であそぼう！　紙であそぼう！
「はらぺこあおむし」のエリック・カールさんと



ジュニアアウトドアスクール



ある。ボランティアの持つ、人的資源と活動実態のバランスを充分に検討しながら、コーディネイトする必要があると感じた。

【特別期間のプログラムの中での活動】

子どもたちの長期の学校休み期間で利用者が集中する時期に、より多くの子どもたちが、一度に参加して遊ぶことのできるプログラムを計画した。そして、春休み、ゴールデンウィーク（児童福祉期間）、夏休み、開館記念、冬休みの５つの期間に実施した。

この５つのイベントは、青年ボランティアの有志がプロジェクトチームを編成し企画から準備を進めて行くものである。今年度は、このチームに積極的に加わる学生が多くなった。学生たちを中心にしたプロジェクトチームには、当初ユニークなアイディアがどんどん生まれ、非常に活力溢れるグループのように見えていた。しかし、チーム発足後１か月ほどたつと、チーム内の人間関係が、ぎくしゃくし始める。そして、次第に問題が深刻化し、最後に自分たちの力で問題解決が出来なくなり、スタッフに手助けを求める。こんな例が、今年度の各イベントには必ず起こるようになって来た。メンバー一人ひとりに話を聞くと、「言いたい事が言えない」、「相手に自分の意思が伝わらない」、「相手の考えている事がわからない」と言う、非常に不安定な対人関係の中で、相手と自分ができるだけ傷つかないようにするために、必死でバランスを保ちながらグループ活動に参加している事がわかった。結局さまざまな場面で、葛藤や対決を恐れ、あたりさわりのない関係を続けて行くうちに、ストレスがたまり、ちょっとしたアクシデントがあると、一挙に抱えていた問題を吐き出してしまう。このように、メンバーの社会的な適応能力についても十分認識した上で、グループの活動を見守って行くことが、これからの重要な課題である。

【L.I.T.の活動】

高校生の社会参加活動プログラム。本年度は、前年度の９月から継続しているメンバーの活動が８月まで、そして９月から本年度のL.I.T.(Leader In Training)活動が行われた。４月のイベント行事はクラフト、演劇と２つの異なる種類のプログラムをリーダーが提案した事により、メンバーが自分自身の新しい可能性に気づくきっかけとなったようだ。クラフトで力を発揮するメンバー、演じる事によって自分を表現したメンバー等、一人ひとりの個性が光るチャンスがあった。L.I.T.はプログラム立案をメンバーの力にまかせているが、今回のようにリーダーの働きかけにより、新しい可能性を引き出し、より自主的、積極的に取り組めることもある。スタッフ側のプログラム作りの重要なポイントだと考える。また、８月に取り組んだ『とびだせ！わんぱく探偵団』への取り組みも、貴重な体験だった。事前に募集した小学１年生～３年生30名を対象に、２日間かけたイベントだったが、こうしたしっかりと子どもと向かい合う活動は、「子どもたちのために何かを行おう」とする自発性を養い、「かわいい、いとおしい」と感じる愛情、「子どもたちに頼られている、好かれている」と言う母性的、父性的な感情を感じる機会になる。そして、世代のまったく違う人間と触れ合うことによって、人間を理解することに難しさと大切さを体験を通じて学ぶことができる。社会への出発を目の前にした高校生にとって、人間味あふれる心の成長を促す絶好の機会だと言えよう。

(イ) 野外活動

『ジュニア・アウトドア・スクール』と『ジュニア・スプリング・キャンプ』の２つの野外活動を本年度も実施した。

本年度の特徴は、両キャンプとも、子どもたちの自発的な意思で運営される『グループアクティビティー』を積極的に取り入れたことだろう。『ジュニア・アウトドア・スクール』では、グループ毎１泊２日を自由に過ごす『アウトトリップ』で、テントをかついで、キャンプ場のあちらこちらで宿泊したり、『ジュニア・スプリング・キャンプ』では、クロスカントリースキーをはいて１日自由に、ハイキングにでかけたりと充実した時間を過ごすことできた。

キャンプ終了後の子どもたちのアンケートや作文から、『グループアクティビティー』に対する評価が非常に高い事がわかる。子どもも大人も非常に忙しい現代社会において、子どもの時間確保の大切さを痛感する。大人の干渉を極力なくした、子どもの自発性によって進められる生活はゆったりとしたペースで営まれる。こうした生活を通して子どもたちは、自然のなかで生活する事の難しさや、人間関係の難しさに気づいて行く。そして、その壁を、他者との相互関係で生まれる、一人ひとりの自発性と自己決定によって乗り越えて行く。こうした体験の積み重ねがあり、子どもたちは、自らの意思と力で人生をよりよく生きていく力を養って行くと考える。大自然を舞台に行われる野外教育が、単なる生活技術習得のためのプログラムにとどまるのではなく、子どもの自発的取り組みを促し、人間的成長のプロセスに働きかけることのできるプログラムを重要視していく必要があると感



キャッスルクエスト



走れキャッスルトレイン

じる。

ボランティアは、この2つのキャンプに20名から30名参加し、スタッフと共にキャンプ運営を行っている。そのほか、下記の事業部か主催するキャンプにも多くのボランティアが参加し、班付きカウンセラーや本部運営なども意欲的に行った。

チャレンジキャンプ（体育）／ちびっこ冒険団（プレイ）／フェローシップキャンプ（プレイ）／ゆきんこ冒険団（プレイ）／スキースクール2（体育）

(ウ) ボランティアの養成

〔こどもの城〕でのボランティア活動を希望する人のために、年3回公募して講習会を開催している。希望者はまず、講習会を受講し、〔こどもの城〕への理解や健全育成に携わるボランティア活動の基本的な考え方（子ども論、指導者論、ボランティア論）を学んでもらう。講習会を通して、ボランティア同士の仲間づくりを行い、共通基盤をもって活動に参加し、〔こどもの城〕に新しい風を吹き込む運動体となる事を願っている。

【ボランティア講習会】

2回の講習会（第40期・41期）を実施し、社会人・学生合計99人が参加した。本年度の特質としては、受講生に大学生が増えた事。またアルバイト雑誌のボランティアコーナーに紹介された事により、実に様々な年齢、職業の人たちが集まって来た事があげられる。特に後者にあげた特質は、初期トレーニングのあり方を考え直す必要にかられたケースだ。「ボランティアを目指して来た」と言う動機の裏に、様々な期待や考えが含まれていた。

単に「子どもが好き」と言う理由だけではなく、「大人とはつきあえないが、子どもとなら‥」、「温かみのある人間関係をつくりたい」、「生き甲斐を見つけたい」等、自分自身の日常生活の中で充足できない心理的欲求を満たすために、と言う人たちが少しずつ増えている。こうした状況の中で、ボランティアの意義や、自発性、公益性、そして、子どもと施設とスタッフとのパートーナーシップの重要性を伝える事がますます重要になってきている。

「子どものために」と言う前に「自分のために」ボランティアを希望する人たちが増加して来ている中で、講習会のあり方を考えて行きたい。

【ボランティアグレードアップ講習会】

〔こどもの城〕に登録しているボランティアを対象に、活動の資質向上を図るために実施した。本年度の特色は、野外活動講習会を、ボランティアの中でキャンプの知識、技能、経験の高いメンバーがチームを編成し、企画、準備、実行を行った事だろう。この講習会の目的として、次の3点があげられる。

①キャンプにおけるボランティア活動に向けて、ボランティア個人個人が組織キャンプを深く理解し、参加者となる子どもたちに対して、より良い支援ができるようになることを目指す。

②野外活動の経験が浅いボランティアが、精神的、身体的余裕を持って、子どもたちに対応できるよう、野外活動技術の向上を目指す。

③講習会の運営を、日本キャンプ協会公認ディレクター2級資格を有するボランティアを中心に、キャンプ経験豊かなボランティアが進めている。講習会の運営をボランティア自身が行う事によって、よりニーズにあった講習を計画できる事、企画者自身の資質の向上を図れる事、ボランティア相互の人間関係の促進につなげる事を目指す。

企画者のボランティアの非常に熱心な取り組みにより、充実した講習会となった。〔こどもの城〕の歴史が長くなると共に、専門的な力を持つボランティアが増えて来ている。こうした潜在的な資源を掘り起こし、全体の活性化のために働きかけることは、これからますます重要になってくる。

❹その他

社会福祉講座

開館以来実施している「手話講座」を本年度も行った。受講者数は61人であった。講師は昨年度から引き続き、手話通訳士ＮＨＫ手話ニュース８４５キャスター中野佐世子先生。手話だけにとどまらず、さまざなな視点から障害者に対する理解を深めて行く運営で、充実した講習会となった。

❺まとめ

〔こどもの城〕が直面しているいくつかの問題について、企画研修部という立場から取り組んでいかなくてはならない課題がある。

最初の課題は、急速な児童数の減少に伴う来館者数の減少への対策である。ここ数年行ってきた、地域の小学校、幼稚園、保育所への招待などの積極的な働きかけや、回数券、平日や特別期間パス制度の新設といった取り組みは、一定の効果が認められた。こうした取り組みに起因するかどうかの判断は難しいが、本年度の来館者数が５年振りに増加に転じたことは、〔こどもの城〕にとって明るい話題となった。今後も少しでも多くの人びとが〔こどもの城〕を知り、そして来館し、〔こどもの城〕で楽しい体験ができるように、また、その人たちが利用しやすく、繰り返し来館してもらえるように、活動の環境づくりに取り組んでいきたい。

２つ目の課題は〔こどもの城〕の統一的なイメージづくりであり、それぞれ独立した事業部が全体としていかに機能するかという点である。この１年は、例えば特別期間について共通のテーマ性や意図を盛り込む努力をしてきた。厳しい経済情勢のなか、一部には事業の見直しが求められる事もあると思う。こうした際も、全体としてのバランスや、はっきりした方向性を打ち出していけるように、優れた提案と全体の調整に尽くしたい。

３つ目の課題は、ボランティア育成を通しての施設の活性化という点である。前述のように、ボランティアを志す人たちは極めて多様化している。ボランティアの育成自体、児童健全育成の延長上にある事業であるが、同時に、多様なボランティアの人たちの発想や提案が〔こどもの城〕という施設の活性化につながつていくような育成とコーディネイトが求められていると考える。

こうした課題に取り組みながら、他団体や他の児童館といった外部との交流を通して〔こどもの城〕の事業の充実に努めていきたい。

平成11年度活動一覧表

❶一般利用

〈平常期間〉

名　称	期　間	備　考
色であそぼう！　紙であそぼう!〜『はらぺこあおむし』のエリック・カールさんと	1.30	絵本『はらぺこあおむし』出版30周年を記念して日本各地で開催された原画展に際して来日中の、エリック・カール氏と子どもたちでコラージュをするワークショップを開催。一般から参加者をつのり、53人の小学生が参加した。造形事業部との協力事業。

〈特別期間〉

名　称	期　間	備　考
こどもフェスティバル	5.2〜5	来館者の多いゴールデンウイークに、家族で良質のプログラムを気軽に劇場で観劇できるよう、毎年実施している。家族で楽しめるお芝居と、観客参加のコーナーをふんだんに取り入れたコンサートを実施した。特にアンクルンは、前年度の夏休み一日講座の参加者が、そのときに作った楽器アンクルンを持参し、演奏するという形をとった。アンクルングループ、ガドガドともに、〔こどもの城〕音楽事業部スタッフ中心に編成されている。 5月2日「竹の響きアンクルン」〔こどもの城〕アンクルングループ&グループパナス98 5月3日「三人であそぼ」劇団青芸 5月4日「あとむの時間はアンデルセン」劇団あとむ 5月5日「おんがくがスキ！」ガドガド なお、劇団青芸、劇団あとむの2公演は、㈳全国児童館連合会の優良巡回劇事業の一環として実施した。
あけてびっくり！　しかけ絵本の世界「ラップルの冒険」	4.24〜5.16	一般に「とび出す絵本」として知られているポップアップ絵本だけではなく、さまざまに工夫されたしかけ絵本を紹介する企画展。それぞれのしかけを大型化し、ストーリーを追いかけながら、さまざまなしかけを体験できるように展示した。協力:㈱大日本絵画・株式会社偕成社・株式会社ほるぷ出版・JULA出版局・株式会社絵本の家・駒形克己氏。後援:絵本学会・日本国際児童図書評議会（JBBY）
マックロー　グリーティング	5.5	〔こどもの城〕のマスコット、マック・マックローの誕生日であり、「こどもの日」の5月5日に、マック・マックローが登場。館内の子どもたちと握手をして回ったり、いろいろな遊びにいっしょにチャレンジした。
第5回人形劇カーニバル	8.10, 8.13〜15	人形劇の楽しさ、奥深さを紹介するために実施している催し。今年は、「ことばってなに……」というテーマのもと、9劇団による人形劇の公演を3日間に渡って実施した。また、今年度は節目となる5回目ということで、海外の人形劇団による特別公演も実施した。後援:社団法人全国児童館連合会、東京都公立児童厚生施設連絡協議会。特別公演の共催:財団法人現代人形劇センター
むしむし探検隊	7.20〜8.31	子どもたちに人気のある昆虫をテーマとした企画展。昆虫の歩き方、鳴き方、体の仕組みなど、物理的な面に焦点を当てて展示を構成した〈財団法人つくば科学万博記念財団〉の協力を得て、歩行や停止、方向転換などのプログラミングができる昆虫ロボットの体験プログラムも実施した。また、AV事業部との協力で虫をテーマとした科学工作プログラムの一日講習会を併せて行った。

名　称	期　間	備　考
おひさまおはなしコンサート	11.7	絵本を家庭で楽しんでもらうことを目的として実施した絵本の読み語りの公演。小さな子どもたちを持つお母さん・お父さん声優4名と、テレビの子ども番組で活躍するピアノ奏者・人形劇団・効果音担当者を迎え、生の音楽やスライド上映を交えながら絵本の読み語りを行った。共催:株式会社81プロデュース、後援:㈱小学館、協力:劇場事業部。
第6回おりがみカーニバル	10.30~11.14	子どもからお年寄りまで幅広く気軽に楽しめる折紙に、多くの人たちに親しんでもらうための催しで、日本折紙協会と共催で行っている。今回は「ことばであそぶおりがみ」をテーマに、古くから伝わることわざや格言にかかわる作品の展示や、ミニチュア折紙展出展作品の展示、自由に参加できるワークショップを行った。
子育てママの悠遊タイム~声優・佐久間レイさんを囲んで~	10.31	子育てに追われる母親に、子育てから少しだけ離れてホッとする空間を提供したいと考え、企画した催し。家族で参加してもらい、母親は声優の佐久間レイさんとの懇談、父親と子どもたちは、保育研究開発部のスタッフの指導で、親子遊びのプログラムに取り組んだ。
2000年の空に舞い上がれ日本の凧	12.23~1.11	日本の伝統的な正月遊びを子どもたちに伝承していきたいと考えて実施した、日本凧の企画展。伝統的な凧を地域別に展示し、その地方の祭りなども併せて紹介した。また、誰でも簡単に作れて、よく揚がる「エイ凧」作りのワークショップを、展示の一環として同会場のギャラリーで行った。協力:凧の博物館
凧づくりのワークショップ	1.6~10	毎年行っているワークショップ。〈日本の凧の会〉の協力を得て行っている。今年は日本独特の「角凧」、立体凧の「ひこうき凧」を制作した。10日にはこどもの国の協力を得て凧あげ大会を行う計画だったが、荒天のため中止となった。
新春もちつき大会	1.4	日本の正月文化を子どもたちに伝えていきたいと考え、毎年行っている。できるだけ多くの人たちに参加してもらうために、今年もピロティで実施した。餅つきの前後には、縁起物の獅子舞も登場した。
こま名人きたる！	1.9、10	名古屋にある〈日本独楽博物館〉の館長である藤田由仁氏を迎え、コマの妙技を紹介するプログラム。今年は、プレイ事業部との協力で「新春あそびのお年玉」の中の一つの催しとして実施した。
ニッサンゆかいな絵本と童話展「春・はる・コラージュ」	3.26~4.5	第7回を迎えた、絵本の原画を中心とした企画展。絵本の楽しさを伝えることを目的として、「第7回ニッサン童話と絵本のグランプリ」で入賞した作品の原画、絵本作家・山田真奈未さんの立体作品「はるまき」、1月に実施したエリック・カールさんのワークショップの様子をまとめたパネルなどを展示した。共催:日産自動車㈱。
おもちゃ図書館マックロー	年末、年始、休館日を除く毎週水曜日	心身に障害のある子どもたちが気軽に利用できる遊び場として、昭和62年に開設された「こどもの城おもちゃ図書館マックロー」。本年度も10数人に及ぶボランティアを中心に運営され、延べ49回開催した。利用者は延べ625人、おもちゃの貸し出し数は327個、活動に参加したボランティアは延べ214人にのぼった。全国に約500か所ある「おもちゃの図書館」のモデル的な活動として、全国からの見学者も多い。
豊かな遊びを広げるおもちゃ展	11.30~12.5	毎年この時期におこなわれる「おもちゃ展」。各地のおもちゃ図書館ボランティア手作りのおもちゃを中心に、企業の協力で、障害を持った子どもたちにも使いやすい市販おもちゃの展示と紹介をおこなった。

❷ボランティア関係の活動

〈平常期間〉

名　称	期　間	備　考
おはなし紙芝居のつどい （プレイ）	火曜日 15:00〜15:30	今年度はメンバーが減少し、女性ボランティアのみの活動となる。紙芝居の持つ温かさを伝えることを目標に定期的に活動している。
おはなし人形広場 （プレイ）	水曜日 15:00〜15:30	女性ボランティア人形劇・影絵の両グループが第２・第３水曜日に公演。両チーム共、新作作りにチャレンジ。グループのメンバーは固定化しているものの、積極的な活動を続けている。
手作りおもちゃ （企画研修）	第２・４金曜日 11:00〜15:00	女性ボランティアのグループが、プレイホール幼児コーナーにおく、抱き人形やままごと用具などを製作している。今年度はプレイのスタッフと定期的に打合せを行い、より効果的な遊具作りを行う。
おりがみあそび広場 （プレイ）	木曜日 13:00〜15:00	主として女性ボランティアが中心となって運営しており、週１回の活動とともに各シーズンごとにプレイホールの壁面に展示する折り紙制作も行っている。
木曜ワンダーランド （音楽）	木曜日 16:00〜16:30	音楽スタッフが運営する"サンバ"のリズム遊びの補助活動を行った。数年間活動を続けてきたメンバー全員が活動を休止し、新しい期が入れ代わりで活動する。
楽器であそぼう （音楽）	金曜日 15:00〜15:30	女性ボランティアが定期的に活動。音楽のスタッフと一緒に"サンバ"を素材としたリズム遊びのプログラムを運営している。
わいわいスタジオ （音楽）	日曜日 13:00〜17:00	昨年度活動していたボランティア２名が活動を休止し、今年度はこのプログラムに、ボランティアの参加はなかった。
手足の不自由な子どものスイミング（体育）	土曜日 17:00〜18:00	ハンディキャップを持つ子どもたちを対象とする唯一の活動。定期的に活動するボランティアが増えてきているので、マンツーマンで指導補助を行っている。
日曜体育室 （体育）	日曜日 14:00〜17:00	日曜日の体育室プログラムの指導補助を行う活動。青年ボランティア１名が参加。
絵本のよみかたり （企画研修）	①第２日曜日　14:00〜14:20 ②第２金曜日　14:00〜14:30	保育室にて、親子対象に絵本を読む。青年・女性ボランティアが共に活動に参加。昨年数年ぶりに活動を再開したグループだが、メンバーも定着し、継続的な活動が行われた。また、今年度より、女性ボランティアが、平日活動としてプレイホール内で活動を開始。親子で参加をしてもらうように、歌遊び等を取り入れた活動を実施した。
キッズクラブ （プレイ）	毎月２回土曜日 15:00〜17:00	小学校低学年30人の遊びのクラブ。ボランティアは、グループワーカーとしての視点からプログラムの立案・準備・実施にかかわっている。新しくボランティアが数人加わった。
ユースクラブ （プレイ）	毎月２回日曜日 13:00〜15:00	小学校高学年から中学生までの40人が対象。グループリーダーとしてのボランティアは、思春期の子どもたちにとって"モデル"的な大きな存在となって活動している。
ファミリープレイタイム （プレイ）	毎月１回 11:00〜12:30	親子を対象に毎回さまざまなプログラムに挑戦。ボランティアリーダーはプログラムの運営をサポートした。
保育 （保育研究開発部）	月曜〜金曜日 9:45〜16:00	保育クラブ・幼児グループに、１〜２名程度参加。保育活動の運営補助をする。 長期休暇期間にのみ参加をする活動も今年度より開始。
パネルであそぼう （企画研修）	毎月２回日曜日 13:00〜15:30	パネルシアターの公演とプレイホール(幼児コーナー)での、ワークショップを行う。今年度は、新しいメンバーも数人加わり、賑やかなグループになる。反面、人間関係が複雑化し、お互いの関係性で悩む事が多くなった。
日曜クラブ （企画研修）	日曜日 14:00〜17:00	屋上ふしぎが丘で、ドッジボール、長なわ、フラフープ等の活動を実施。その後４時からプレイホールレクリエーションプログラム「さよならのつどい」を開催。今年度は、季節行事もプログラムに取り入れ、季節にちなんだ、ワークショップ等を行った。
青年人形劇 （企画研修）	月１回土曜日 14:00〜15:00	新規のメンバーも加わり、マックロー人形劇と手遣いの人形劇のプログラムを実施する。参加劇のワークショップにも積極的に取り組む。
土曜あそびの会 （企画研修）	毎月第２・４ 土曜日 14:00〜17:00	昨年度発足したグループ。メンバーも定着し、コマ、みつうま等の昔遊びを中心に活動。お正月行事との連携も充実し、年間を通して意欲的な取り組みを見せた。

※（　　）内は主催事業部

〈特別期間の活動〉

名　称	期　間	備　考
〈児童福祉週間〉 キャッスルクエスト ～暗黒のラバナ～ （企画研修・プレイ・音楽）	5.1～5 11:00～16:00	テレビゲームで人気の「ドラゴンクエスト」をモチーフに行事を企画。5日間で延べ85名のボランティアが活動に参加した。ボランティアの中心となる7人のリーダーも学生から社会人まで幅広いメンバーが参加し、非常に良いチームワークで活動に取り組んでいた。特に学生のメンバーに活気があり、これからの活動に期待が持てた。反面、経験年数の多いメンバーの参加が少ない事が、問題とされた。
〈　〃　〉 おはなし広場 （企画研修、プレイ）	5.3～5 11:00～16:00	青年ボランティアの人形劇グループとパネルグループが協力して実施。3日間連続で「マックロー人形劇場」と「パネルシアター」の公演を行う。両チーム共、新人の活躍が目立つ。経験者が一生懸命、新人の技術向上や、ボランティア活動に対する考え方をアドバイスする姿が印象的。3日間で延べ37名のボランティアが参加。
〈夏休み〉 ウォーター アドベンチャー99 （企画研修、プレイ）	8.12～15 11:00～16:00	屋上ふしぎが丘で、水鉄砲を使ったロールプレイングゲームが実施された。学生を中心としたプロジェクトチームが結成され、活動に取り組んだ。学生が中心のこのチーム、GWと比べて、お互いの人間関係が深まらないまま、活動を進め、様々な場面でスタッフの介入が必要になった。若い世代の人間関係づくりの未熟さが、非常に課題となった事業であった。4日間で延べ76名のボランティアが参加（14日は雨のため中止）。
〈開館記念〉 アニマルパークへ ようこそ （企画研修）	10.30、31 11.3 （受け付け） 11:00～16:00	屋上ふしぎが丘で行う恒例のチャレンジゲーム大会。今年は動物園をテーマにゲームを実施。『やんちゃな子ブタ大脱走』『ドキドキたまご鑑定団』『はらぺこカバさんお食事中』『ピカピカぞうシャワータイム』『七つ子ペンギン大冒険走』のユニークなゲームを実施。社会人、学生が中心となり活動に取り組んだ。今回も学生同士の人間関係がうまくいかず、全体としてぎくしゃくした運営となった。3日間で65名のボランティアが参加。
〈　〃　〉 あそびのおもちゃ箱 （企画研修）	11.20～21 11.23 11:00～16:00 （受け付け）	人形劇、影絵、紙芝居、パネルシアター、音楽の各グループの合同公演。公演の合間には、『ヤクルト人形』を作り、遊ぶワークショップを実施。この行事は、青年ボランティアと女性ボランティアが協力して実施するのが特徴。平日の活動時間帯の違う両グループのコミュニケーションの取り方が毎回問題となるが、今回は、学生のチーフが、平日の昼間に女性ボランティアと話し合いを行い、お互いのコンセンサスが取れるよう努力した。3日間で75名のボランティアが参加。
〈冬休み〉 新春あそびのお年玉～みんなであそぼうお正月～ （企画研修、プレイ）	1.3 13:00～17:00 1.4～1.10 11:00～17:00	昨年度から、土曜あそびの会として、月2回活動を展開していたボランティアが中心になって企画をすすめる。日常的に活動しているメンバーだけに、プロジェクトチームのチームワークは非常に良い状態で進められた。反面、それ以外のメンバーの援助が少なく、準備活動が滞る事が多かった。この現状は『昔あそび』の意義や、楽しさがボランティアに浸透していないためではないかと分析され、今後の課題となった。1週間と言う、長期間のイベントではあったが、ボランティアの熱意ある取り組みにより充実したプログラムとなった。7日間で延べ143人のボランティアが参加。
親子であそぼう あそびのポケット2000 （企画研修）	3.2、3 13:00～17:00 3.4 11:00～17:00	昨年に引き続き、2回目。昨年製作した遊具等を活かし、運営方法や親子への遊びの参加をサポートの重点とした。作って遊ぶワークショップは内容を変え「傘袋ロケット」とした。新規のものでは「手作り遊具によるめくり遊び」と「手作り紙しばい」。他に昨年同様「お手玉」「着せかえ人形」を実施。また1日1回紙しばいの集いを行った。本年は中心となるボランティアが2名と少なく、全体のコーディネートは職員が担当した。準備活動が少なく興味を持って参加をしたのが新規修了の15期生が中心であった。結果的に新しいメンバーの参加は得られたが、継続者の参加が少なく、負担が一部に偏ってしまった。ボランティアの参加は3日間で延べ41人だった。
〈春休み〉 ひらけ！ あそびのおもちゃ箱 （企画研修）	3.21～22 11:00～16:00 （受け付け）	秋の『あそびのおもちゃ箱』は、公演を主体としたプログラムだが、春はお話の世界を様々なワークショップを通じて表現する事を主体として実施。青年人形劇、パネルシアターのグループが中心となって進める。今回は、紙コップの人形を使ったミニシアターを子どもたちに見せてから、参加劇へと導いて行く手法を初めて試みた。このように、『ひらけ！あそびのおもちゃ箱』は、人形を使った様々な表現活動プログラムを、ボランティアが開発し、実施していく場として、非常に重要な位置を占めていると考えられる。2日間で延べ32人のボランティアが参加した。
〈春休み〉 春のチャレンジゲーム 「スプリング アドベンチャー2000」 （企画研修）	4.1～2 4.8～9 11:00～16:00 （受け付け）	毎年、この時期ふしぎが丘で実施されるボランティア恒例のチャレンジゲーム。今年は、館内ラリーとポイントハイキングを組み合わせたプログラムを実施した。カードを見ながら館内各所に設置されたゲームにチャレンジ、ゴールを目指した。館内では、『ボディー　グー　チョキ　パー（体ジャンケン）』『グラグラタワー　SOS（缶積み）』『さがしてビンゴ（宝さがし）』『ぐんぐん育て君の花（カードめくり）』『ねらえジャストストップ（パターゴルフ）』『ダルマサン（ダルマサンがころんだ）』『サイコロコロコロスーパーレース（乗り物レース）』のゲームを実施。複雑なこどもの城の館内を効果的に利用した事は評価できたが、幅広い年齢層や、家族での参加が少なかった事、各々のルールや、用具の仕上がりの甘さが課題となった。

〈高校生プログラム＝L.I.T.（Leader In Training）の活動〉

※ L.I.T.は昨年度より、年度途中の９月より新規メンバーを募集し活動を展開している。ここでは、10年度グループの５月からの活動と、11年度グループの９月から３月までの活動を報告する。

名　称	日　程	備　考
春のイベント準備（12名）	4.4（日）	昨年度から準備をしていたイベントの準備を行う。
春のイベント準備（16名）	4.11（日）	「春だ！　遊びだ！　ワイワイ広場」のシミュレーションを行う。
L.I.T.春イベント「春だ！ 遊びだ！ ワイワイ広場」（16名）	4.18（日） 11:00～16:00	地下１階フリーホールで、『円盤のおもちゃづくり』『ペープサートの公演』を行う。今回はL.I.T.の活動に『ペープサート』と言う表現活動を初めて取り入れてみた。子どもたちは演じる活動を通して、それまで発揮出来なかった可能性を見つけ出す機会となった。
夏の行事企画会議（12名）	5.9（日）	８月までの活動計画を建てるために、ミーティングを行う。今回は、小学校１年生～３年生を事前に募集して行うプログラムに決定する。タイトルは『とびだせ！わんぱく探偵団』に決定。
夏の行事企画会議（16名）	5.30（日）	『とびだせ！わんぱく探偵団』のスケジュール、内容を決める。お互いの関係性が深まって来たのか、終始リラックスしたムード。発言も活発で、スムーズで活気あるミーティングが行われた。
夏の行事企画会議（８名）	6.20（日）	『とびだせ！わんぱく探偵団』の詳細が決定する。３つのチームに分けてそれぞれ準備活動を開始する。３年生が良いリーダーシップを発揮し、初めてのプログラム活動に意欲的に取り組んでいる。
夏の行事企画会議（14名）	7.11（日）	『とびだせ！わんぱく探偵団』の準備と夏合宿のオリエンテーションが行われる。
夏合宿 千葉県 小林牧場キャンプ場	7.17（土）～18（日） １泊２日　テント泊	野外活動のトレーニングを目的として実施。テント設営法、野外炊事指導法、追跡ハイキング、料理コンテストを行う。プログラムを構成する上で、体験を重視するか、指導法を重視するかのポイントがあいまいで、メンバーの意欲的な取り組み姿勢が見られず、課題の残るキャンプとなった。
『ジュニア・アウトドア・スクール』 宮城県国設青少年野営場	8.3（火）～8.9（月） ６泊７日（テント泊）	L.I.T.の中から希望者３名が参加。本部スタッフとして、ジュニア・アウトドア・スクールを支える。少ない人数ながら、何事にも積極的に取り組み、充実した活動を行う。
『とびだせ！わんぱく探偵団』準備活動（延べ51名参加）	7.20～8.25までの期間で全５回活動	活動できる回数によって、メンバー同士の人間関係、主体性、積極性に大きな差が出来ないよう、必要最低限の準備日程で取り組めるよう配慮する。３年生が非常に積極的に活動するか、２年生の依存的、消極的な姿勢が問題になる。３年生が２年生にもっと働きかけ、巻き込んでいけるようアプローチする。
『とびだせ！わんぱく探偵団』実施	7.28（土）・29（日）	小学１年生～３年生30名を事前に募集し、（こどもの城）館内を使った探偵ごっこのプログラムを実施。初日は、探偵になるためのトレーニングと称した、様々なゲーム。二日目は、怪盗Σから出された様々な謎を解読しながら館内を歩き回り、最後に怪盗Σの正体をあばく、と言う流れ。子どもたちは５～６人のグループをつくり、仲間と協力しながらプログラムに取り組んだ。L.I.T.はグループリーダー、ポイントリーダー、本部リーダーに役割分担しプログラムに臨んだ。初めて取り組んだ、特定メンバーに対する、ごっこ遊びプログラム。「子どもの理解」「チームワークのあり方」「子どもと接するリーダーの心構え」等多くの学びのあるプログラムだった。
平成11年度 L.I.T.開講式（22名）	9.19（日）	今年度は、従来の募集範囲（（こどもの城）の講座、クラブ、野外活動の参加者）を広げ、近隣の高等学校、ボランティアセンターにも募集案内を送付した。その結果28名のメンバーが登録をした。開校式では、オリエンテーションと面接、親睦のゲームと自己紹介を中心にしたグループワークトレーニングを実施。初めて出会うメンバーも多く参加したが、次第に緊張感も取れ、活気ある開講式となった。

名　称	日　程	備　考
1月までの活動について (24名)	10.3（日）	1月までの活動についてのミーティングを4つのグループに分かれ、話し合う。出されたアイディアを、仲間づくりをテーマに、絞り込んでいく。『オリエンテーリング』『クリスマス会』『冬合宿（キャンプ）』の活動が決定する。その後『クリスマス会』『キャンプ』にチーム分けをして、役割分担をする。まだ、積極的に参加できるメンバーとそうでないもの差が大きいのが課題となった。
オリエンテーリング 埼玉県 元加治オリエンテーリングコース　(14名)	11.14（日）	全国で初めてオリエンテーリングのパーマネントコースとして指定された元加治オリエンテーリングコースに挑戦する。欠席者が多く、少人数での実行になってしまったのが残念だったが、参加したメンバーは秋のうららかな日射しを、体一杯に浴びながら、楽しい1日を過ごした。
クリスマス会と冬合宿について　(20名)	12.12（日）	クリスマス会と冬合宿の準備をそれぞれのチームに分かれて行う。冬合宿は企画、準備、実行までをすべて自分たちの手で行おうと意欲的に取り組んでいた。クリスマス会は、L.I.T.らしさを強調しようとしたが、イメージの広がりがなく、とまどいを隠せない様子。両プログラムへのメンバーの取り組み姿勢の違いから、リーダーの適切なプログラムづくりへのアドバイスが重要であると反省が残る。
クリスマス会 (20名)	12.19（日）	午前中に役割分担を行い、午後から親睦を深めるための、クリスマス会を行う。前回はとまどいながら進めていた準備も、今日は『かざり』『クッキング』『ゲーム』の3つの係に分担し、積極的に取り組めるようになった。メンバーひとりひとりの、他者との関係性の作り方の課題が次第に、明確になって来た。
キャンプ準備活動 (15名)	12.26（日）	1月に行うキャンプの準備を行う。『物品』『食事』『プログラム』の係に分かれて活動。新しい挑戦に誰もが、意欲的に取り組んだ。
冬合宿　(19名) 千葉県・船橋市 大神保キャンプ場	2000.1.15（土） ～16（日） 1泊2日テント泊	真冬のキャンプ場での野外活動にチャレンジする。企画から自分たちで行って来ただけに、意欲的な取り組み姿勢を見せる。寒さに震えながらも、自分たちで考えた様々な計画を実行して行く姿が印象的。しかし、この合宿を機会に、グループ内で気の合うメンバー同士のグルー化が明らかになって来た。
4月までの活動計画 (22名)	1.30（日）	『仲間づくり』をテーマにした3か月が終わり、次のステップへ向かう最初の活動。スタッフより「メンバー同士の関係性」「自発的なグループ運営」の2つのポイントについて、もう1度見つめ直すよう働きかけがあった。その後、メンバーの進行により、今後の活動計画が話し合われる。
4月までの活動計画 (15名)	2.13（日）	前回の話し合いで、4月と5月に遊びのワークショップを行う事が決定し、本日はその詳細決定が目標。イベントの日程と、プログラムの概要とメンバーが取り組むプログラムのチーム分けが決定する。『ゲーム』と『人形劇』ふたつの内、やってみたいプログラムに参加できるようにしたが、結果は明らかに、親密性の高いメンバー同士がグループを構成する事になった。グループ内の分裂傾向が顕著になり、メンバーもその問題を意識するようになって来た。
4月までの活動計画 (のべ36人)	3.12（日） 3.19（日）	『人形劇』と『縁日』のチームに別れて活動する。『人形劇』はペープサートに種目が決定。『縁日』はおめんつりと腕相撲屋に決定する。タイトルが『春だあそびのふくぶくろ～合言葉はわっしょい～』に決定。グループ内の分裂傾向が顕著になってくる。数人のメンバーが相談に訪れ、解決方法を考えて行く。仲良くしなければと理性的には理解していても、感情的に理解できない様子。
『ジュニア・スプリング・キャンプ　2000』 新潟県 国立妙高少年自然の家	3.26～3.30 4泊5日（宿舎泊）	11名のL.I.T.が参加する。非常に多い人数で、しかもL.I.T.の中には、メンバーとして長くキャンプに参加し、参加者との結びつきが非常に強いL.I.T.も含まれており、本部リーダーとしての役割、L.I.T.として参加する事の意義、ボランティアリーダーとのコンセンサスの取り方等、様々な課題が明確になった。

L.I.T.は前年度から、年度途中の9月に新規メンバーを募集し活動を展開している。ここでは、9年度グループの4月からと、10年度グループの9月から3月までの活動をまとめた。

〈ボランティア講習会〉

名　称	対象・定員	受講数	曜　日・日　時	備　考
第40期 ボランティア 講習会	(人) 18歳以上 (50)	(人) 50	5.15～6.8 18:00～20:30 (5.28～30宿泊研修)	ここ数回に比べて大学生の参加が多かった。このため、講習会修了後、イベント活動、キャンプ活動に参加をする人が多く新規メンバーによる新しい雰囲気がボランティアの中に生まれた。宿泊研修は千葉県・市川少年自然の家で実施。
第41期 ボランティア 講習会	(人) 18歳以上 (50)	(人) 49	1.29～2.29 18:00～20:30 (2.18～20宿泊研修)	ボランティア募集記事が、アルバイト雑誌のボランティアコーナーに掲載される。そのため、申込み件数が100人近くなる。学生、社会人、フリーターと職業も世代も、実に多種多様な人たちが集まる。それだけに、初期トレーニングの運営に、非常に神経を使う。宿泊研修は神奈川県・愛川ふれあいの村で実施。
第15期女性 ボランティア 講習会	概ね30歳 以上の女性 (20)	10	10.26、28・11.2 11.4、11.9 13:00～15:00	より緊密な人間関係が築けるよう、講習会の回数を4回から5回に増やした。親睦を図るゲーム等を導入。地域活動等すでに実施されているかたも多く、活気ある講習となった。

〈ボランティアグレードアップ講習会〉

名　称	対象・定員	受講数	曜　日・日　時	備　考
野外活動講習会	(人) 野外活動に 参加するボ ランティア (30)	(人) 45	6.17　事前講習会 救急法講習会 19:00～21:00 場所（こどもの城） 6.25～27　キャンプ実習 2泊3日テント泊 場所　埼玉県 高原パーク　横瀬	毎年スタッフが企画するこの講習会だが、今年度は、ボランティアの有志で組織をつくり運営した。これは、講習会の運営をボランティア自身が行う事によって、よりニーズにあった講習会を計画できる事、企画するボランティア自身が、より広い視野でキャンプを考える事で、その資質の向上を図れる事、ボランティア相互の人間関係の促進につなげる事を目的に実施した。内容は現役看護婦のボランティアが『キャンプにおける救急法』（講義と実技）を行い、キャンプ実習では、企画者のボランティアがそれぞれ分担をして、『野外炊事実習』、『テント設営法』『キャンプファイアーの準備と実施』『集団あそびの実際』『キャンプ撤収法』を指導した。スタッフはそれぞれのプログラムのスーパーバイズを行った。日本キャンプ協会の公認指導者の資格を有するメンバーを中心に、本部運営のボランティアは非常に熱心な取り組みを行い、充実した講習会となった。

〈社会福祉講座〉

名　称	対象・定員	受講数	曜　日・日　時	備　考
手話講座（前期）	高校生以上	(人) 28	火曜日 18:30～20:00	4月から9月までの6か月間、全15回の講座。講師は、手話通訳士・NHK手話ニュース845　キャスター中野佐世子先生。手話だけに留まらず、車椅子体験等を通じて障害者の理解を深める内容もあり、充実した講習となった。
手話講座（後期）	高校生以上	33	火曜日 18:30～20:00	10月から2月までの5か月間、全15回の講座。講師は前期と同じく中野佐世子先生にお願いした。聴覚障害で劇活動を行っている方を交える等、実践活動が加わり、継続者が多い講習ではあるが変化のある内容となった。また、受講者同士の交流もあり、参加希望者が回をおうごとに増加している。

❸その他（野外活動など）

名　称	期　間	備　考
ジュニア・アウトドア・スクール	8.3～8.9 宮城県 国立南蔵王青少年 野営場	小学生33名、中学生30人、スタッフ38人、合計101人で実施。雨がまったく降らなかった今回のキャンプは、すべてのプログラムを予定通り実施する事が出来た。今回は、各グループが主体的にプログラムを考えるグループアクティビティーの時間を大きく取った。特にキャンプ2日目から3日目にかけて、まる2日を班ごとに過ごす『アウトトリップ』は、ハイライトプログラム。広大なキャンプ場に班毎、テントを背負って出かけて行き、自分たちの考えたプログラムを実行して行く。アンケートの評価からも、『グループアクティビティー』が一番楽しかったとするメンバーが、非常に多く、子どもたちの自治集団体験の必要性を痛感した。
ジュニア・スプリングキャンプ	3.27～3.31 新潟県国立 妙高少年自然の家	小学生37人、中学生16人、スタッフ26人、合計79人で実施。天候は概ね良好で美しい青空の元、グループ毎にクロスカントリースキー、チュービング、かまくらづくりと、思いっきり雪遊びを体験した。しかし、テント泊の日だけは、一晩に30cm以上降り積もる、季節はずれの大雪。テントにどんどん降り積もる雪に、子どもたちは驚きの声を挙げていた。

劇場事業本部



平成11年度の活動

本年度の主な演目

(ア) 青山劇場

【平成11年度の舞踊企画】

20世紀最後の年とあって、舞踊企画の内容も奇妙な静寂につつまれていた。今年度は青山劇場における「第14回青山バレエフェスティバル～変容～」が唯一の舞踊企画だったが、時代の変容を予感させるように、クラシックバレエからネオクラシック、そしてコンテンポラリーダンスと様々なダンス表現があり、印象の強さや芸術性のクオリティーなどは観客の感性に委ねられた。特にバニョレ国際振付賞を受賞して英国から来日したウェイン・マクレガーとランダムダンスカンパニーはダンスそのものの表現が21世紀に向かって変容しつつある様を示し、興味深かった。また、国内の次代を担う舞踊家もそれぞれの切り口で新しい表現を模索していたが、いまだ出口の明かりは見えないというところか。

20世紀を14年間駆け続けてきたこのバレエフェスティバルの役割もそろそろ終える季節かもしれない。助成金の目減り、事業予算の削減、民間メセナのカットなど文化芸術を取り囲む基盤整備は未だし。

(イ) 青山円形劇場

【音楽の玉手箱'99】

日本ポピュラー音楽界は、相次ぐミリオンセラーの出現など、一見活況を呈しているかのように見えるが、その一方で音楽市場を底支えする中ヒット、小ヒットがなくポピュラー音楽のジャンル自体が貧弱になっているとも言われている。そのような現象のなか、コマーシャル・ベースにとらわれず、自らの個性的な音楽を追求して活動を続けているポピュラー音楽家は少なくない。彼等に発表の場を与え、若年層だけでなく幅広い年齢層の方々に、音楽の驚きと喜びがたくさん詰まった「玉手箱」のような世界を届けようという趣旨で昨年度から立ち上げたシリーズ企画で、今年は下記の4プログラムを取り上げた。

■音楽の玉手箱Ⅰ：佐山雅弘SOLO PIANO [Hymn to Freedom]

ジャズを中心にロック、ソウル、ポップス、クラシックとジャンルを越えて活躍するピアニスト佐山雅弘によるソロ・コンサート。ラグからフリー、コンテンポラリーまで幅広いジャズ本来の魅力を存分に見せながら、佐山のオリジナル作品では異色のゲストと競演し、その豊かな音楽性で客席を魅了した。

出演＝佐山雅弘／ゲスト＝原田節（オンドマルトノ）、王暁東（中国琵琶）、塩谷達也［LOVE CIRCUS］（ヴォーカル）

■音楽の玉手箱Ⅱ：ピアノソロ&ノベルリーディング『南の島のティオ』

ジャズ・ピアニストの佐山雅弘の音楽にタレントのラサール石井のノベルリーディング（芝居を含んだ朗読）を組み合わせた異色の企画。作品は、作家の池澤夏樹が児童向けに書いた短編集『南の島のティオ』より「絵は

がき屋さん」を朗読した。時に朗読に寄り添うように、時にピアニスト自身が物語から受けるイメージがあふれるままに奏でられ、観客一人ひとりの心の中で物語の世界は大きく広がり、静かな感動を呼ぶ舞台となった。
出演＝佐山雅弘（ピアノ）、ラサール石井（ノベルリーディング）／原作＝池澤夏樹（『南の島のティオ』文春文庫）、構成・演出＝鈴木裕美［自転車キンクリーツカンパニー］／企画＝松角妙子／協賛＝㈱三陽商会、全日空

■音楽の玉手箱Ⅲ：PONTA BOX meets YOSHIDA MINAKO LIVES '99

人気、実力とも日本を代表するジャズ・バンド、村上“ポンタ”秀一率いるPONTA BOXと実力派女性ヴォーカリスト吉田美奈子による夢の競演。同名のCDアルバムからのスタンダード曲を中心に、パワフルで圧倒的な演奏に満員の客席が熱い昂奮につつまれた。出演＝村上“ポンタ”秀一（ドラムス）、佐山雅弘（ピアノ）、バカボン鈴木（ベース）、吉田美奈子

■第14回こどもの城マタニティ・コンサート ～佐山雅弘 SOLO PIANO～

妊娠期間中の一日、音楽を楽しんでリラックスしてもらおうという「こどもの城マタニティ・コンサート」も14回目を数える。「音楽の玉手箱」出演のジャズ・ピアニスト佐山雅弘を迎えてスタンダードナンバーを中心にした演奏と、『ジャズ絵本』と題した絵本の朗読とジャズ・ピアノのアドリブ演奏のコラボレーションを行なった。（この企画を発展させて、後記の「月猫えほん音楽会」が生まれた。）

恒例の呼吸法指導や産科医と小児科医によるメディカルトークのコーナーでは、来場者からの熱心な質疑応答も見られた。
共催＝こどもの城小児保健部／協賛＝㈱人形の秀月、雪印乳業㈱

ランダム・ダンス・カンパニー



■音楽の玉手箱Ⅳ：さねよしいさ子円形音楽会'99

1996（平成8）年より毎年恒例の企画となっている円形音楽会も4年目を迎えた。一昨年、昨年は編成も音楽のタイプもさまざまなプログラムを組み、さねよしいさ子の魅力を多面的に紹介したが、今年は円形音楽会の原点とも言えるオリジナル・メンバーとともにじっくりと歌を聴かせるコンサートになった。

出演＝さねよしいさ子（ヴォーカル）、鳩野信二（ピアノ）、久下惠生（ドラムス）、関島岳郎（チューバ）、近藤研二（ギター）、佐藤公彦（サックス）／音楽監督＝栗原正己

【月猫えほん音楽会　えほん×ジャズ＝コドモもオトナもめちゃ2楽しいシアターライブ】

1997、98（平成9、10）年に上演した「ことばの森へ出かけよう」に引き続き、“ことば”の持つ魅力を新しい側面から取り上げた新企画で、親子（小学生）を対象とした招待公演。（共催：㈶こども未来財団）。

絵本の絵を大きなスクリーン（月）に映しながらの読み聞かせとジャズ・ピアノの即興演奏を組み合わせた、いわば絵本とジャズとのセッションライブとも呼べるユニークな公演が話題となった。さらにパントマイムを加えて、観客参加で絵本の中のシーンを立体的に作り、ライブならではの生き生きとした時間を会場全員で共有することを目指した。また、開演前に希望する観客には猫のフェイスペインティングを施し、“猫道”と呼ぶ劇場内の長いトンネルをくぐり抜けて入場するなど、さまざまな趣向でナマの楽しさを演出することに成功した。

最近「絵本」とその「読み聞かせ」の魅力が見直されている。それは、優れた絵本が持つ幼い子から成人まで世代を越えて魅了する力と、人の肉声で絵本を読んでもらうときに読み手と聞き手の間に生まれる深い心の交流の大切さに、コミュニケーション不足が指摘される昨今、あらためて多くの人が気づいたからではないだろうか。

そのような関心の高さを示してか、定員1,750名のところ7,000人以上の応募数となった。

出演＝佐山雅弘（ピアノ）、中込佐知子（進行）、本多愛也（パントマイム）、能祖将夫（朗読）／演出＝吉澤耕一／構成＝能祖将夫／美術＝小竹信節／協力＝東京動物園ボランティアーズ／主催＝㈶こども未来財団、㈶児童育成協会

【第14回こどもの城・キリン・ファミリー劇場】
青山円形劇場＋劇団☆新感線プロデュース
「リトルセブンの冒険」

子どもと子ども心を持った大人のためのファミリー企画として、毎年夏休みに上演しているシリーズの第14回

公演。世代の違う大人と子どもが1つの空間を共有し、1つの感動を分かち合い、気軽に足を運べるような劇場空間をファミリーに提供できるように心掛けてきた。

今回は、エンターテインメントに徹する舞台作りで定評の劇団☆新感線のいのうえひでのり(演出家)、中島かずき(作家)と組み、童話『白雪姫』の後日談を描いた冒険活劇を創作した。

ハッピーエンドのはずの童話に想像すらしなかった物語の続きがあり、また新しい物語が続いていくと予感させる展開は、意外性があった。と、同時に観客自身が物語の続きを創っていけるという楽しみを残し、家族の会話につながったのではないかと思う。

出演者の大半はオーディションで選ばれ、粗削りながらも若いパワーと瑞々しさで観客を引き込んでいた。特に、小学校高学年、中・高生の子どもたちは、彼らの演技に共感し、演劇に対する興味を強く持ってくれたように思う。

作=中島かずき　演出=いのうえひでのり　出演=植本潤、河野まさと、藤谷みき、関田豊枝、石村美果、岡部厚子、川角一郎、齋藤真吾、高瀬郁子、中野順一朗、成清正紀、本郷弦、矢崎学　共催=キリン福祉財団

【第13回青山演劇フェスティバル　～1999　再生へ～】

青山演劇フェスティバルは、毎年その年のキーワードや雰囲気を反映したテーマを設定し、そのテーマに沿った作品を上演する『時代を映すユニークな演劇祭』として広く認知されている。本年度のテーマ「再生」は、様々な面での崩壊を抱え、再生を待ち望んでいる今の日本の時代状況に拠るものなのは言うまでもない。このテーマを踏まえ、今回のフェスティバルでは活動を休止(あるいは解散)している劇団に“再生”を呼びかけ、上演に至る過程そのものからテーマを浮かび上がらせるということと、作品の内容を通じて“再生”を探る二つの試みを持った。参加作品は次の3本。

協賛=富士通㈱、富士銀行

■青山円形劇場×ブリキの自発団プロデュース

[20世紀ノスタルジア　ホギウタ～北村想「寿歌」より]

1995年から活動を休止している「ブリキの自発団」(現在は、演出家生田萬氏がユニットを組んで演劇活動をする際の名称)と青山円形劇場との共同プロデュース。

小劇場演劇の名作と評価の高い北村想の『寿歌』を原作とし、80年代演劇の旗手として活躍した生田萬が構成、演出した。最終核戦争後の廃虚を旅する3人の出演者には、『月はどっちに出ている』(93年)でブルーリボン賞最優秀主演女優賞に輝いたルビー・モレノを始め全て国籍の異なる在日外国人を起用。

原作:北村想/構成・演出:生田萬/出演:ルビー・モレノ、スティーブ・ソレイシィ、ユセフ・ロットフィ(劇団テヘラン)

■篠塚祥司(元金杉忠男 ASSOCIATES)プロデュース

[胸さわぎの放課後'99―もういちど逢いたい―]

1960年代後半から97年に急逝するまで独自の演劇理論で舞台を創り続けた金杉忠男を偲び、「金杉忠男ASSOCIATES」(98年に解散)にゆかりのスタッフ、キャストが集まった。小学生の娘を亡くした中年の男の心(記憶)の旅ー逝ってしまった親友や母、死者ともう一度出会う静謐な時間ーを描いた金杉氏の代表作を上演した。

台本:金杉忠男/演出:篠塚祥司・中野精子/出演:篠塚祥司、坂口芳貞(文学座)、守安涼、大崎由利子、会田京子、猪股俊明、羽場睦子ほか

■青い鳥スペシャルプレゼンツ [銀の実時間]

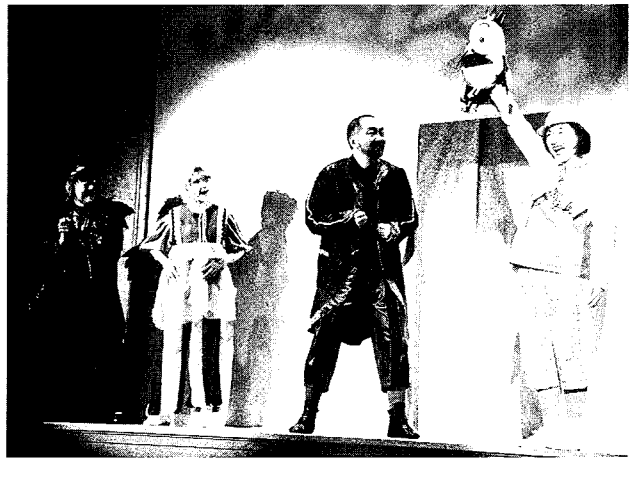
1994年の創立以来、独自の創作劇を目指して活動を続け、女性ばかりの劇団での集団創作スタイルが注目を集めた劇団青い鳥だが、93年から劇団としての活動は休止しており、今回のような“スペシャルプレゼンツ”と銘打った公演も95年以来になる。「銀の実時間」はオリジナルメンバーの芹川藍が作・演出・出演のほか、伊沢磨紀、高彩裕子、近内仁子の劇団青い鳥の役者に加えて、芹川が6年前より大阪で行っている「自己発見表現講座」の修了生でつくられた「芹川藍創造塾びいどろん」のメンバー6名も出演した。

作・演出:芹川藍/出演:芹川藍、伊沢磨紀、高彩裕子、近内仁子、芹川藍創造塾びいどろん/助成=芸術文化振興基金助成事業

■青山円形劇場プロデュース

[ア・ラ・カルト～役者と音楽家のいるレストラン]

五線譜のなかの動物たち「パリのいんげん豆II」



役者と音楽家が一体となって作り上げる「大人の観客が楽しめるお洒落なエンターテイメント」として高い評価を得ている当演目も、季節的なロングランを続け11年目を迎えた。クリスマスを迎えた、とあるレストランの開店から閉店までをショートショートの芝居とジャズを中心とした生演奏でつづるという内容。今回は“新装開店版”として、舞台をセンターに組み、ほぼ360度から客席が取り囲む形に大きく変更した。青山円形劇場の、冬の名風物詩としてすっかり定着しているだけに何年も通ってくださる観客も多いが、新鮮な驚きを持って迎えられたようだ。今年も全22回公演が完売, 7,700人以上を動員することができた。恒例の大阪公演（近鉄アート館・主催＝近鉄百貨店）も９回目を迎えた。

出演：高泉淳子、白井晃、陰山泰、瀧山雪絵、中西俊博（ヴァイオリン）、細野義彦（ギター）、北島直樹（ピアノ）、クリス・シルバースタイン（ベース）／構成：白井晃／演出：吉澤耕一／音楽監督：中西俊博／助成＝文化庁・日本芸術文化振興会舞台芸術振興事業／協賛＝キリン・シーグラム㈱、富士銀行、富士通㈱

【第12回こどもの城・キリン・ファミリーオペレッタ】
「まんぷく村のハムスター　キック４
～ペットになりたいカラスのお話」

オリジナルの童話を、歌やバレエ、生演奏で綴るお正月恒例のファミリーオペレッタ。「こどもの城」のスタッフで創作するこの作品は、今年で12年目を迎え、おとなも子どもも楽しめるファミリー向け公演として、常に高い人気と安定した動員を保っている。

上演は、飼い主とはぐれてしまったペットたちが住む“まんぷく村”を舞台にした「まんぷく村のハムスターキック」シリーズの第４弾。優秀な兄の陰でコンプレックスを抱えてしまった少女が、まんぷく村でさまざまな冒険をし、自信を取り戻していく姿を通して親の子どもへの愛情の深さと、いろいろな個性があることの素晴らしさを描いた。また、さりげなく環境問題なども取り入れたこの作品は、子どもだけでなく大人からも多くの反響を得、その結果、厚生省（当時）中央児童福祉審議会平成11年度推薦文化財の特別推薦を受賞し、表彰された。今後も、現代社会では忘れられがちな心の豊かさ、大切さを感じ取れるような良質な舞台作品を創作し、より多くのお客さまに提供したい。

脚本＝山下哲　演出＝高谷静治　出演＝オペラクリエーション・イン・青山、平多正於舞踊研究所、岸辺バレエスタジオ、早川恵美子・博子バレエスタジオ／共催＝キリン福祉財団

【五線譜のなかの動物たち「パリのいんげん豆II」】

「五線譜のなかの動物たち」は、クラシック音楽のなかから動物や鳥や虫を描いた曲を集めた「芝居仕立ての音楽会」である。円形の特徴ある劇場空間を活かし、音楽家と役者とクラウン（道化）が繰り広げる独自の構成演出方法は、他のオーケストラや音楽団体、会館などが企画する“ファミリーコンサート”物のなかでも異彩を放ち、平成２年（1990年）１月の第１弾公演以来、シリーズ化して好評を博している。

シリーズ第25回目の公演となった今回の上演作品は「パリのいんげん豆II」。1990年夏の第11弾公演で好評を博した人形のキャラクター『いんげん豆の王様』を再登場させ、いんげん豆の王様とひげ黒豆、めんどりとカラス、小豆の赤ちゃんなど、個性あふれる登場人物たちが繰り広げる奇想天外な音楽喜劇に構成した。使用曲は、クープラン作曲『牝鹿』より『ロンド』、サティ作曲『いんげん豆の王様の戦争の歌』と『びっくり箱』より『前奏曲』のほか、ストラヴィンスキー作曲『からす』、ショパン作曲『小犬のワルツ』、サン＝サーンス作曲『動物の謝肉祭』より『序奏とライオンの王様の行進』、ベートーヴェン作曲『のみの歌』をはじめ、イベール、バルトーク、シューマン、フランセ、クープランなどの動物の曲で構成した。

上演回数は過去最高の21回、観客動員数もシリーズ史上最高の5,000人を記録し、こどもの城の代表的ファミリー企画として安定した実績を残した。

出演＝山本隆則（バリトン）／光瀬名瑠子（役者）／白井博之・児真順子［Wテイク］（クラウン）／伊藤エイミーまどか（ピアノ）／構成＝光瀬名瑠子、演出＝吉田雅之／協賛＝富士銀行／平成11年度芸術文化振興基金助成事業

平成11年度公演演目一覧表

❶青山劇場

公演名称	期間	回数	料金	総席数	入場者数	入場率	備考
〈自主公演〉	(日)	(回)	(円)	(人)	(人)	(%)	
第14回青山バレエフェスティバル ～変容～	8.8～11 (4)	3	A:7,000/B:6,000	3,568	2,059	57.7	
(小計) 1	(4)	3		3,528	1,614	45.7	
〈貸し館〉							
「南太平洋」 (東宝)	4.1～18 (18)	27	S:12,000/A:7,000/B:4,000	32,214	24,484	76.0	3.1から続演
明治生命ミュージカル「アニー」 (日本テレビ)	4.19～5.16(28)	34	S:7,800/A:5,800	37,740	32,662	86.5	
「不死鳥ふたたび～美空ひばり物語～」 (アプル)	5.17～30 (14)	19	S:12,600/A:9,000	22,104	19,441	88.0	
「五木ひろしコンサート」(アイエス)	5.31～6.4 (5)	5	S:10,000/A:7,000	5,778	5,235	90.6	
「リトルナイト・ミュージック」 (ホリプロ)	6.5～27 (23)	23	S:12,000/A:8,500/B:4,000	24,702	17,729	71.8	
「ベギー葉山コンサート」 (ミュージックリーグ)	6.28 (1)	1	S:10,000/A:8,000	1,156	1,075	93.0	
「パリ祭」 (石井好子音楽事務所)	6.29～30 (2)	2	S:10,000/A:8,000	2,330	2,248	96.5	
「石川さゆりコンサート」 (ビッグワンコーポレーション)	7.1～4 (4)	4	SS:10,500/S:8,400	4,604	4,335	94.2	
少年隊ミュージカル PLAYZONE'99「Goodbye&Hello」(ヤングコミュニケーション)	7.5～8.4 (31)	35	S:11,000	38,832	37,896	97.6	
バレエ「コッペリア」(スターダンサーズ・バレエ団)	8.12～18 (7)	6	S:9,000/A:6,000	6,420	5,027	78.3	
Dance Station Express vol.13 (ジェイ・クリップ)	8.20～22 (3)	3	前売 指:6,000/自:3,500 当日 指:6,300/自:3,800	3,162	2,704	85.5	
「室田純子コンサート」 (輝音楽事務所)	8.27 (1)	1	前売:7,000/当日:8,000	1,178	553	46.9	
「ラ・マンチャの男」 (東宝)	8.28～9.27(31)	37	S:12,000/A:7,500/B:4,000	41,268	38,982	94.5	
「カルメン」 (東宝)	9.28～11.28 (62)	81	S:12,000/A:7,500/B:4,000	87,731	71,795	81.8	
「谷村新司コンサート」 (キョードー東京)	12.1～19 (19)	13	GF:10,000/BS:8,000	15,080	14,191	94.1	
「アニーがクリスマスにやって来た」 (キョードー東京)	12.22～23 (2)	4	S:5,000/A:4,000	4,704	4,095	87.1	
「MAMA, I WANT TO SING」 (ミュージックリーグ)	12.24～26 (3)	5	全:7,500	5,885	4,647	79.0	
「NANTA'99」 (ディスクガレージ)	1.4～16(13)	14	S:8,000/A:7,000	16,184	10,606	65.5	
「蒲田行進曲」 (RUP)	2.1～20 (20)	21	S:8,000/A:6,000	25,872	25,135	97.2	
ザ・コンボイショウ Vol. 18「新タイムトンネル」 (アニマ)	3.22～31 (10)	6	前売:7,350/当日:7,500	7,188	6,482	90.2	4.9まで続演
(小計) 20	297	341		384,132	329,322	85.7	
青山劇場 計 21	301	344		387,700	331,381	85.5	

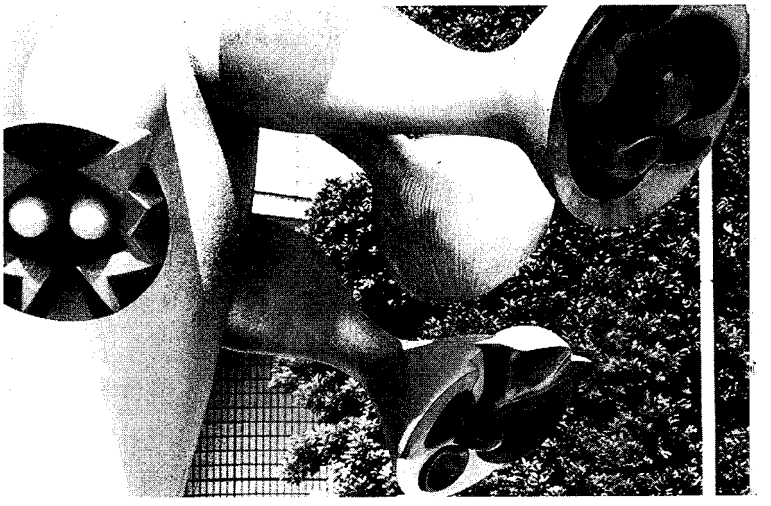
❷青山円形劇場

公演名称	期間	回数	料金	総席数	入場者数	入場率	備考
〈自主公演〉	(日)	(回)	(円)	(人)	(人)	(%)	
五線譜のなかの動物たち「八十日間世界一周」	4.1~5 (5)	8	2,800	2,712	1,938	71.5	3.25から続演
音楽の玉手箱'99				3,593	2,997	83.4	
音楽の玉手箱Ⅰ 佐山雅弘 solo piano <Hymn to Freedom>	4.8 (1)	1	3,500	280	231	82.5	
音楽の玉手箱Ⅱ ピアノソロ&ノベルリーディング <南の島のティオ>	4.9~10 (2)	2	4,000	663	549	82.8	
音楽の玉手箱Ⅲ マタニティ・コンサート	4.11 (1)	1	無料	374	297	79.4	
音楽の玉手箱Ⅳ PONTA BOX meets MINAKO LIVE'99	4.18~20 (3)	3	5,500	1,134	925	81.6	
音楽の玉手箱Ⅴ さねよしいさ子円形音楽会	5.8~11 (4)	3	4,000	1,142	995	87.1	
ことばバラエティーショー「月猫えほん音楽会」	8.2~5 (4)	5	無料	1,800	1,718	95.4	
こどもの城・キリン・ファミリー劇場「リトルセブンの冒険」	8.23~30 (8)	11	2,800	3,927	3,451	87.9	
第13回青山演劇フェスティバル ~1999 再生へ~	10.11~31 (21)	19		5,598	3,401	60.8	
1. ブリキの自発団「ホギウタ」	10.11~20 (10)	8	前売:3,600/当日:3,800	2,440	1,196	49.0	
2. 篠塚祥司プロデュース「胸さわぎの放課後'99」	10.21~24 (4)	4	前売:3,200/当日:3,500/中高生:2,500	1,208	803	66.5	
3. 青い鳥「銀の実時間」	10.25~31 (7)	7	前売:3,600/当日:3,800	1,950	1,402	71.9	
「ア・ラ・カルト」 ―役者と音楽家のいるレストラン	12.6~26 (21)	22	5,500	7,964	7,643	96.0	
こどもの城キリンファミリーオペレッタ「まんぷく村のハムスターキック 4 ~ペットになりたいカラス~」	12.27~29 1.3~9 (10)	13	2,800	4,576	4,384	95.8	
五線譜のなかの動物たち 「パリのいんげん豆Ⅱ」	3.21~31 (11)	15	2,800	4,998	3,530	70.6	4.3まで続演
(小計) 14	91	103		35,168	29,062	82.6	
〈貸し館〉	(日)	(回)	(円)	(人)	(人)	(%)	
大隅一郎単独ライブ「In His Room」	4.6~7 (2)	3	2,500	677	537	79.3	
東京コレクション「松居エリ」	4.13 (1)	2	無料	323	306	94.7	
東京コレクション「研美社」	4.16 (1)	1	無料	330	300	90.9	
東京コレクション「張子林」	4.21 (1)	2	無料	499	484	97.0	
鴻池薫ハワイアンチャリティコンサート vol.5「がんばれ！難病と闘う人々」	4.22~23 (2)	2	6,000	592	505	85.3	
松竹芸能「鶴瓶噺' 99春」	4.24~28 (5)	5	3,150	1,870	1,704	91.1	
ナル・コーポレーション 「ビジネスショウ'99」	4.29 (1)	1	番組収録				
RUP「僕の美しい人だから」	5.12~23 (12)	13	前売:4,200/当日:4,500	3,922	3,180	81.1	
梯郁夫「PERCUSSIVE MOVEMENT」	5.24 (1)	1	前売:3,000/当日:3,500	298	171	57.4	
演劇企画集団66「とうめいなすいさいが」	5.25~30 (6)	7	前売:3,500/当日:4,000	1,680	1,121	66.7	
オフィス・ダム「タンゴ デ カランタン」	6.1~4 (4)	4	5,000	998	910	91.2	
ステージドア「クィーンシティ物語」	6.5~6 (2)	3	2,500	930	761	81.8	

公演名称	期間	回数	料金	総席数	入場者数	入場率	備考
石井光三オフィス「清水宏ライブ」	6.7~8 (2)	2	前売:2,800/当日:3,000	656	545	83.1	
東京ガーラ「グロリアスな男たち」	6.9~13 (5)	7	前売:4,500/当日:5,000/他	1,645	1,116	67.8	
テレサ林「スペイン舞踊公演」	6.14 (1)	1	前売:6,500/当日:7,000	232	218	94.0	
岩下徹「放下12」	6.16 (1)	1	前売:3,000/当日:3,500	232	188	81.0	
水織ゆみ「エディトピアフ」	6.17~19 (3)	5	6,000	1,210	981	81.1	
コマンサヴァ「吉田碁巳・・と共に」	6.20 (1)	1	3,000	361	321	88.9	
AGAPE store「D／Jジェーブンノディー」	6.24~7.4 (11)	12	前売:4,200/当日:4,500	3,610	2,910	80.6	
母子衛生研究会「母子衛生講習会」	7.5 (1)	1	無料	256	174	68.0	
アリオン音楽財団　「チャクプン~祝宴を彩る声~」	7.21~22 (2)	2	3,800	592	522	88.2	
スタジオライフ「死の泉」	7.23~8.1 (10)	12	前売:3,700/当日:3,900/他	4,119	3,962	96.2	
キョードー東京「原田真二」	8.6~7 (2)	2	5,775	745	647	86.8	
吉本興業「山崎邦正ライブ」	8.9 (1)	1	前売:2,300/当日:2,500	300	278	92.7	
吉本興業「ゲラゲラ90分」「BUGIUGI」	8.11 (1)	2	前売:1,200/当日:1,500	436	189	43.3	
吉本興業「ゲラゲラ90分」「山口智充」	8.18 (1)	2	前売:1,200/当日:1,500	503	314	62.4	
キョードー東京「渡辺真知子」	8.19~21 (3)	3	6,000	1,142	898	78.6	
OLDIES「DANCEPARTY」	8.22 (1)	1	4,500	138	107	77.5	
サトコオフィス「LOVEPOINT #2」	9.3~5 (3)	4	前売:4,500/当日:5,000	1,184	896	75.7	
「沢井比河流+池上眞吾コンサート」	9.7 (1)	1	3,500	261	182	69.7	
オフ SET 公演「蘇洲夜曲」	9.8~12 (5)	5	前売:3,500/当日:3,800	1,570	1,469	93.6	
Jointspot「Millennium」	9.15 (1)	2	2,500	492	361	73.4	
高橋クミ子「空を飛びたいコンサート」	9.17 (1)	1	5,000	301	215	71.4	
アートウィル「東京打撃団」	9.18~19 (2)	1	前売:4,000/当日:4,500	602	584	97.0	
プランニング・メイ「本間しげる一人芝居」	9.20~21 (2)	2	前売:3,570/当日:3,990	660	566	85.8	
ライトエージェンシー「光原エミカコンサート」	9.22 (1)	1	本人急病のため休演				
北村真実ダンス「血に聞いて、血に聞こう'99」	9.23~25 (3)	3	前売:4,000・当日:4,500	645	341	52.9	
「西野博和リサイタル」	9.26 (1)	1	5,000	254	212	83.5	
ヒダノ修一「瞬音'99」	9.27 (1)	1	前売:4,000/当日:4,500	361	287	79.5	
佐山雅弘「Can't but help Sayama」	9.29~30 (2)	2	前売:4,200/当日:4,500	752	552	73.4	
パワーボム「MUSIC REVOLUTION　DANCERENAISSANCE」	10.1~3 (3)	3	前売:4,000/当日:4,500	903	864	95.7	
東京音楽大学「二風谷の歌と踊り」	10.4 (1)	1	無料	296	280	94.6	
「樹'Taime」	10.5 (1)	1	5,000	301	193	64.1	
剣幸「うた会」	10.6 (1)	1	5,500	296	253	85.5	
真砂秀明「音と光の天空」	10.7~8 (2)	2	前売:4,000/当日:4,500	681	468	68.7	
青木香葉「ベリーダンス」	10.9 (1)	1	前売:4,000/当日:4,500	333	284	85.3	

公演名称	期間	回数	料金	総席数	入場者数	入場率	備考
office LISA「水町理沙コンサート」	10.10 (1)	1	4,500	374	328	87.7	
ムーンフラッシュ 「はい、山崎です。ただいま留守にしております。」	11.1~4 (4)	8	前売:3,800/当日:4,000	2,202	746	33.9	
ライトエージェンシー「光原エミカコンサート」	11.5 (1)	1	A:10,000/B:5,000	282	227	80.5	
ミラクルパーカッション「コンサート秋　稔り」	11.8~10 (3)	2	前売:4,000/当日:4,500/ 高校生以下　前売:2,000/ 当日:2,500	520	240	46.2	
空中庭園「フェードル」	11.11~18 (8)	7	前売:5,500/当日:5,800	1,908	1,338	70.1	
吉本興業 Piper　「Nicholas Mcpherson」	11.19~25 (7)	10	前売:4,000/当日:4,300	3,000	1,824	60.8	
斎藤美絵「サウンドパズル Vol.2」	11.26~27 (2)	2	前売:3,500/当日:4,000	462	250	54.1	
母子衛生研究会「母子衛生講習会」	1.17 (1)	1	無料	258	48	18.6	
日本音楽集団「RI・TSU・DO」	1.21~22 (2)	2	4,000	522	379	72.6	
「上田遙ダンスリサイタル」	1.27~30 (4)	4	6,000	951	853	89.7	
嶋田典子「ホォン・アンドレス・マジャ・フラメンコ」	2.6 (1)	1	8,000	246	218	88.6	
こども劇場全国センター 「三世代交流フェスティバル」	2.11~13 (3)	4	1,500 2,500 2,500/1,500	619	455	73.5	
いまおかカンパニー「SECRET DANCE 4」	2.16~18 (3)	4	5,500	948	647	68.2	
キリン・全国児童館連合会 「キリンリーダーズシアター」	2.19~20 (2)	2	無料	430	401	93.3	
北野 ch「鳥肌実ライブ」	2.21 (1)	1	無料	370	300	81.1	
日本映画学校卒業公演　「幕末太陽伝」	2.22~28 (7)	6	2,000	1,678	1,333	79.4	
ジョビジョバ LIVE　「Monkey Circle」	2.29~3.17(18)	19	前売:3,500/当日:4,000	7,064	6,589	93.3	
(小計) 63	184	207		60,022	47,532	79.2	
(内部利用)	(日)	(回)	(円)	(人)	(人)	(%)	
こどもフェスティバル	5.1~5 (5)	12	無料	3,840	2,575	67.1	企画研修部
人形劇カーニバルスペシャル 「スパエク・トーイ」	8.10 (1)	2	前売:3,000/当日:3,500/ 子ども料金有り	648	499	77.0	企画研修部
人形劇カーニバル	8.12~15 (4)	9	無料	2,799	2,114	75.5	企画研修部
「おひさま・おはなしコンサート」	11.6~7 (2)	2	無料	567	478	84.3	企画研修部
「三味線の夕べ」	11.28 (1)	1	大人:3,000/子ども:1,500	336	190	56.5	音楽事業部
「テリーがクリスマスにやって来た」	12.3~5 (3)	5	無料	1,880	1,449	77.1	国際交流
ぼくらのサウンド	3.18~20 (3)	5	無料	1,163	877	75.4	音楽事業部
(小計) 7	19	36		11,233	8,182	72.8	
青山円形劇場　計 84	294	346		106,423	84,776	79.7	
劇場総計 105	595	690		494,123	416,157	84.2	

広報部



平成11年度の活動

広報部の仕事は大別すると、PR（パブリック・リレーションズ）と宣伝（アドバタイジング）の2つに分けられる。社会と〔こどもの城〕との良好な関係作りをめざすPRは、長期的な視野が必要になるが、宣伝は、商品を売るなど具体的な反応を喚起するもので、必然的に結果が期待されることになる。例えて言うなら“のれん”の信用を築くのがPRであり、個別商品の売上げをのばすのが宣伝ということになる。もちろん商品あっての“のれん”、“のれん”あっての商品であることは言うまでもない。

いずれにしても、広報部の活動は〔こどもの城〕の活動と密接に関係しているものであり、独立して存在することはありえない。むしろ〔こどもの城〕の活動を的確に理解することから始まる。そして、その活動をより多くの人に理解してもらうためのパイプ役になることが大切であると考えている。

活動の中心となるのは、さまざまな媒体を使った情報提供――「こどもの城ニュース」などの定期刊行物の編集・発行、新聞・雑誌・放送などの外部の各種媒体への情報提供（パブリシティ）――である。これらは、主にPRに属する活動であり、宣伝に属する活動としては、ゴールデンウイーク・夏・冬・春休み特別期間、講座・クラブの募集などのちらし、ポスターの制作、広告の出稿などがある。

最近はIT革命がもてはやされ、“情報”への関心が高まり、インターネットなどの新しいメディアをとおしてさまざまな情報が大量にとびかうようになった。世の中が多様化していることとも関係していると思うが、玉石混淆のカオス状態であり、“情報”を扱う部門としてその対応の重要性も増してきている。

これからは、質の高い、内容の充実した情報をいかに簡潔・的確に提供できるか、いろいろなメディアをその特質を理解していかに有効に利用していくか――など、IT革命の時代の広報のあり方を模索していく必要があろう。

❶パブリック・リレーションズ

〔こどもの城〕は、〈あそび〉をとおして児童の健全育成を図る施設である。子どもたちは遊びのなかからさまざまなことを吸収し、成長していくので、〈あそび〉という表記でその意味を強調しているのだが、遊びのどの部分に着目するかは多様であり、一言で説明するのは難しい。また“健全育成”も実際的には、感性をはぐくんでほしい、社会性を身につけてほしいなど、それぞれの活動領域に応じた展開がなされているので、これも一言で説明することができない。

子どもも一個の人間である。大人と同じように、さまざまな顔をもち、ときには矛盾する顔をもっているかもしれない。そのような子どもの成長を手助けするときに、“健全育成”という抽象的な言葉で一律にくくるのは無理がある。体育、造形、プレイ、音楽、AVなどの各領域で行われている、〈あそび〉をとおした健全育成活動を積み上げたものが〔こどもの城〕であると考えるのが自然ではないだろうか。まず個々の活動への理解を得ることか

らPRしていきたいと考えている。

(ア)「こどもの城ニュース」の編集発行

本年度から、年11回編集・発行することになった。実質的な月刊化である（年末年始に合併号を発行するので年11回となる）。〔こどもの城〕の利用者や周辺の学校、幼稚園、保育所などを主な対象に、〔こどもの城〕の活動を紹介。さらに、全国の児童館・児童センターにも、都道府県児童館連絡協議会をとおして配付している。

編集にあたっては、〔こどもの城〕の催し物の案内に終わるのではなく、それらのプログラムが意図するもの——子どもたちへのメッセージ、それをきっかけにして子どもたちの生活を豊かにすることなど——まで伝えられればと考えて紙面作りをしている。

子どもの遊びや子育て支援のプログラムが各地で活発に行われるようになってきている中で、どのように〔こどもの城〕の活動をアピールしていくかが課題である。印刷（活字）媒体の利点を生かした編集を心掛けたい。

「こどもの城ニュース」はB3版、表面4色（カラー）印刷、裏面1色印刷。各号25,000部発行。主な配付先は下記のとおり。

都道府県児童館連絡協議会など……	6,350部
こどもの城友の会……約	2,000部
各都道府県民生主管部……	1,156部
保育所、幼稚園、小・中学校（各2部）（渋谷区、港区）……	390部
渋谷区町内会長ほか（各2部）……	202部
その他（一般入館者、招待者、見学・視察者など）……約	15,000部

(イ) 取材対応・パブリシティ

最近の傾向として、多数の情報誌・紙の発行があげられる。〔こどもの城〕へも、子どもや若い家族を対象とした媒体を中心に、多数の問い合わせが寄せられている。印刷（活字）媒体だけでなく、インターネット関連のものが増えてきている。

夏・冬・春休みなどの“おでかけシーズン”にあわせた問い合わせが多いが、月刊誌などの原稿の締め切りは早く、問い合わせを受けた段階でプログラム内容が決まっていないことも多い。早めの決定、早めの宣伝を心掛ける必要がある。

問い合わせを受けた媒体には、毎月1回（月末から月始め）「こどもの城通信」という名称で1～2か月先の情報を提供するようにしている。送付先は新聞社などのマスコミから地域のミニコミまで約160社。ファックスやEメール、郵送などさまざまな方法をとっている。さらに、各特別期間のプログラム紹介、講座・クラブ等の募集のお知らせなども「こどもの城通信」の特別号として送付している。

本年度の取材件数は、新聞38件、テレビ・ラジオ15件、雑誌22件、その他79件の合計154件。前年に比べ32件の減だった。

❷宣伝関係

一口に宣伝といっても、新聞広告のように広く伝えることに適したものもあれば、ダイレクトメールのように詳しく伝えることに適したものもあり、その手段・方法はさまざまである。

講座・クラブの受講生募集のように地域的に限定されるものもあれば、特別期間の案内のようにより広範な地域への働きかけが必要なものもある。対象年齢の絞り込み、個々人の興味・関心の持ち方などもあるし、〔こどもの城〕がだれに何を働きかけたいかという主体性とも関係してくる。価値観が多様化している現在、どのような宣伝方法がよいのか、ますます難しくなっている。

(ア) 新聞広告など

夏休み特別期間、講座・クラブの新年度受講生募集の前などに、別表のような宣伝（新聞広告、折り込み、駅貼りポスター）を実施した。

本年度は、都営地下鉄とのタイアップ広告（沿線の観光案内のポスターで、下部に〔こどもの城〕の広告が入る）で都営地下鉄全駅へポスター掲示、夏休み特別期間の周知を図かった。〔こどもの城〕へのアクセスには乗り換えが必要になるが、京王線との乗り入れしていることや沿線に団地等も多いこと、単独でポスター掲示を行うより安価なことなどから、新規に取り組んだ。

(イ) ちらし・ポスターなど

児童福祉週間（ゴールデンウイーク）、夏休み、冬休み、春休みの各特別期間に催し物案内（ちらし）・ポスターや講座・クラブの募集案内などを作成、配付した。

ちらしについては、〔こどもの城〕に資料請求をしたことのある人をリストアップして、ダイレクトメールを送るようにしている。

夏休み特別期間については、本年度から毎日開館することになり、その周知をはかることを念頭において、キャッチコピーも「こどもの城は毎日元気」とし、“毎日”

を強調するようにした。

❸その他

(ア) 渋谷スタンプラリー

夏休み恒例の「渋谷スタンプラリー」に本年度も参加した。第16回目。「NHKスタジオパーク」、「こどもの城」、「たばこと塩の博物館」、「天文博物館五島プラネタリウム」、「電力館」、「東京都児童会館」の6館で実施。約1万人が参加した。

このスタンプラリーは、渋谷駅周辺にある各館が共同で施設の存在と活動をPRするのが目的。"点"ではなく"面"でPRするのが大きな特長。6館の情報交換の場ともなっている。

(イ) 「こどもの城のご案内」(リーフレット)の改訂

平成8年度に改訂した「こどもの城のご案内」(リーフレット)を5年ぶりに全面改訂した。改訂にあたっては、内容面では〔こどもの城〕を利用する子どもが見て楽しいものを、そして経費面では節約を念頭においた。

「こども活動エリア」のそれぞれのスペースが活気あふれる楽しい活動をしていること、それぞれのスペースの位置関係を分かりやすく提示することなどを考慮して、子ども向けの雑誌などに掲載されている"図解マップ"のイメージを取り入れた。

体裁も、594mm×210mm(A4用紙を縦に2枚つないだ形)・表4色裏4色・観音5つ折りから、B4四つ折り(仕上がりはB6サイズ)・表4色裏2色にし、印刷等の経費の節減を図かった。

(ウ) その他

インターネットのホームページ(HP)は、コンピュータでネットワークされた社会の一種の"掲示板"であり、街角にある町会や行政の掲示板、電柱や壁・塀にはられているビラなどと本質的には同じものといえる。現実の社会ではその場所に行かなければ、掲示したり、見たりすることはできないが、HPでは端末のコンピュータを使って居ながらにしてできる。コンピュータがもたらした"便利なシステム"である。

〔こどもの城〕でもHPを開設してはいるが、その管理・運営が十分な体制のもとで行われているとは言いがたいのが現状。今後の課題である。広報部では、プレスリリース「こどもの城通信」、特別期間のちらし、講座募集などの作成時のデータを二次利用する形で、HPに情報を掲載している。

http：//www.kodomono-shiro.or.jp/

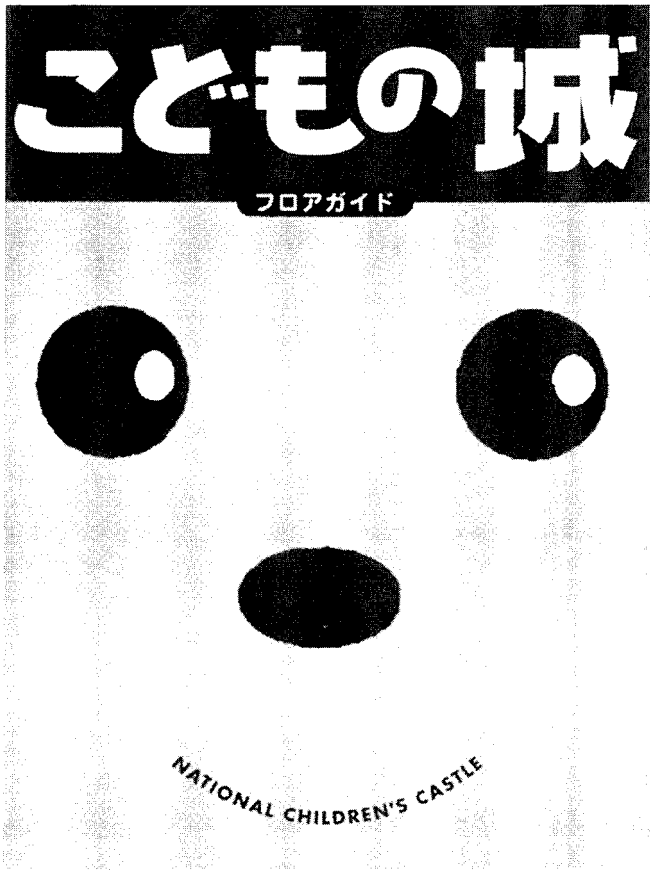
❹まとめ

情報技術がめざましい勢いで進歩し、旧来からある新聞・雑誌などの紙(印刷)媒体やテレビ・ラジオなどの電波媒体だけでなく、最近はインターネットに代表される"電脳"媒体が大きな役割を果たすようになってきた。

〔こどもの城〕としても、新しい媒体を利用していく必要があるが、"新しさ"に目を奪われるのではなく、どのような情報をだれに伝えるのかという原点に立って、それに適した媒体を選択し、情報の提供のしかたを工夫することが大切になる。どのような媒体であっても、常に"情報の質"が問われるからだ。

また、さまざまな媒体に対応するために、基本となる情報をそれぞれに適した形にアレンジして提供することを考えていかなければならない。業務用・一般用・贈答用で梱包が異なるように、同じ商品でも用途によって使い分けることに似ている。核となる1つの情報をそれぞれの対象や媒体に適した形にして提供する——いわば、情報の多角的有効利用の体制作りも必要となるだろう。

新しい「こどもの城のご案内」(リーフレット)



【平成11年度発行の「こどもの城ニュース」の主な内容】

	発行日	内容	発行部数
第93号	平成11年4月15日	帰ってきたキャッスルクエスト～暗黒のラバナ	25,000部
第94号	〃 5月15日	子どもの成長に合わせて　スポーツ遊びで健康づくり	〃
第95号	〃 6月15日	まず、“音”を“楽しむ”ことから～夏休み3つの音楽ワークショップ	〃
第96号	〃 7月15日	生活の中の“竹”を見直す　素材との出会い展～竹と造形(造形スタジオ)	〃
第97号	〃 8月15日	“太っている＝病気”ではないけれど…	〃
第98号	〃 9月15日	毎日元気に遊びました～夏の思い出は〈出会い〉と〈発見〉	〃
第99号	〃 10月15日	子どもとの時間を大切に！　子どもと一緒に楽しんで　親も子も“夢中”に遊べ	〃
第100号	〃 11月14日	(こどもの城)で遊んでいた100人のお友だちに聞きました	〃
第101号	〃 12月15日	こんにちは2000年(ミレニアム)　作って、あげて「凧」	〃
第102号	平成12年2月15日	平成12年度第1期講座・クラブ受講生募集!!　今日から仲間に！	〃
第103号	〃 3月15日	春休み「こどもの城映画劇場」アニメーション作家山村浩二作品集 “うごき”のおもしろさとふしぎな“キャラクター”	〃

＊平成11年度から月刊化した（ただし、年末年始は合併号とし、年11回発行）。

【平成11年度に作成した印刷物などの一覧】

名称	発行部数	内容
平成10年度事業年報	1,200部	平成10年度の全館および各部の活動記録(A4、144ページ)。
平成12年度講座一覧	200,000部	平成12年度全講座・クラブの案内(BA、4ページ、2色刷り)。
(こどもの城)の案内(和文)	170,000部	8月に7,000部増刷。3月に全面改訂した(100,000部)。
その他(各種ちらし・ポスター)	214,500部	GW、夏休み、冬休み、春休み等特別期間の催し物案内、講座・クラブ等募集案内(2期、3期、夏休み短期講習会)等のちらし等

【掲載した新聞広告の一覧】

掲載新聞名	掲載形式	掲載日	内容
朝日新聞　都内各版	全5段ほか	平成11年7月1日～8月24日	夏休み特別期間の（こどもの城）のPR。
〃　少年少女スポーツ(埼玉)	全2段	平成11年7月14日	
朝日小学生新聞	半2段・全5段	平成11年7月15日、8月5日	
毎日小学生新聞・毎日中学生新聞	タブロイド3段	平成11年7月16日	
東京新聞	全5段	平成11年7月16、21、29日、8月4日	
日刊スポーツ新聞　東京本社版	7×10cm	平成11年7月22日	
朝日小学生新聞	全5段	平成11年12月26、29日	冬休み特別期間の（こどもの城）のPR。
東京新聞	全5段	平成11年12月23、28、29日	
毎日小学生新聞	タブロイド3段	平成12年1月1日(新年号)	
朝日新聞　都内各版	全5段ほか	平成12年1月30日～3月12日	平成12年度1期の（こどもの城）講座・クラブ受講生募集。
東京新聞	全5段	平成12年2月20日	
朝日小学生新聞	〃	平成12年2月17、20、23日	
毎日小学生新聞・毎日中学生新聞	93×127mm	平成12年3月23日	春休み特別期間の（こどもの城）のPR。

【その他の広報活動】

形式	日時	
都営地下鉄駅ばりポスター	平成11年7月18日～8月7日	都営地下鉄とのタイアップ広告。B全版ポスター「板橋の花火大会」の記事下200×728mmのスペースで（こどもの城）の夏休み特別期間をPR。都営地下鉄全75駅に掲示。
新聞折り込み	平成12年2月15日	(こどもの城)周辺地域の読売新聞と毎日新聞の朝刊(合計17万部強)に、平成12年度開講の(こどもの城)の全講座・クラブの案内と受講生募集のちらしの折り込広告を実施。



児童福祉週間（ゴールデンウイーク）特別期間（ちらし・ポスター）



夏休み特別期間（ちらし・ポスター）

冬休み特別期間（ちらし・ポスター）



春休み特別期間（ちらし・ポスター）



国際交流担当



平成11年度の活動

❶交流プログラム

(ア) アートスケープ展

「アートスケープ2000」は3月1日～3月12日までの2週間、聖心・清泉・西町・セントメリー・横浜の各インターナショナルスクール、横田・キニックの各ハイスクール、クリスチャンアカデミー・アメリカンスクール・ブリテイ ツ シュスクールの10校と日本から武蔵野東学園の計11校が参加して開かれた。

関東地区のインターナショナルスクールやアメリカンスクールで学ぶ子どもたちの絵画工芸作品の展示会として始まったアートスケープ展は、今回で20周年、こどもの城で開催されるようになって15周年を迎えた。

日本に住む50数ヵ国の国々からの子どもたちや海外で教育を受けた日本の子どもたち、小学5年生から高校3年生までの生徒たちによる水彩画・油絵・版画・陶芸・ガラス工芸・建築・写真など600点以上の作品がアトリウムギャラリーに展示された。

初日の前日にアトリウムで行われたオープニングセレモニーは、参加校の教師、生徒、関係者ら約300人が集まり、盛大に行った。

今回、会期中の日曜日に行われる恒例のワークショップは、3月5日と12日の2回開催された。5日は、〔こどもの城〕に来館された一般のお客様に陶芸を体験してもらう、陶芸作りのワークショップと仮面作りのワークショップを、12日はお客様の注文に応じて生徒達が目の前で制作するステンドグラスのワークショップを行った。陶芸では、聖心インターナショナルスクール・武蔵野東学園の教師と生徒、ステンドグラスでは、アメリカンスクールインジャパンの教師と生徒がそれぞれ指導にあたった。いずれも教師と生徒には外国人も含まれており、片言の英語と日本語や身振り手振りで参加して下さった方々とコミュニケーションを図りながらワークショップに取り組んだ。ステンドグラスは生徒が作った作品をその場で参加者にお渡しできたが、陶芸作品は参加者の作品を各校で焼成を行ってもらい、約2週間後に〔こどもの城〕に受け取りに来てもらうようにした。(希望者には郵送)。

今回は新しい試みとして、こどもの城に来られない方々にもアートスケープ展を楽しんでいただけるよう、聖心インターナショナルスクールの先生がアートスケープのホームページを開設してくれた。

50ヵ国以上の生徒が参加しているこのアートスケープ展は、違う文化を持った人たちとの交流の機会の少ない日本において、自分とは違った視点が有ることに気づかせてくれる大変有意義な企画である。今回、ブラジルのケーブルテレビ局や日本に住む外国人のための雑誌社から取材を受けたほか、読売新聞が紹介してくれた。

(イ) ミセスサンタの宇宙からのEメール

今回のクリスマス公演は、バイリンガルファミリーシアターを始めてから15回目の節目を迎える記念すべきクリスマスとなった。例年、2日間にわたる4回公演だ

が、15回目を記念して今回は、12月４日（２時と４時の２回）と５日（11時、２時、４時半の３回）の計５回公演に増やした。今年も青山円形劇場で行った。入館券対応（開演前に整理券を配布、こどもの城の入館券のみで入館できる方法）で整理券を開演１時間前からアトリウム受付で配布した。

今回のストーリーは、ミセスサンタが解読不可能の不思議なＥメールを受け取るところから始まる。彼女の秘書ジングルベルは、世界的に有名な暗号の解読者グレートヒロキを呼び寄せる。彼によると、そのＥメールは宇宙旅行をしていた「うめ星」人からのものだという。彼らは毎年12月になると地球がライトアップされているのを不思議に思い、ミセスサンタにＥメールを出したのでした。そこで、ミセスサンタはうめ星人たちの疑問を解くために、歌や踊りにあふれている世界中のクリスマスを体験するワールドツアーの案内役を務めることになる。この宇宙の友だちは、科学技術がとても発達した星に住んでいる。しかし、彼らは創造性豊かな歌や踊りに触れ、忘れかけていた何かを思い出す。

我々人間の生活も日々変化を遂げている。そのような中で、子ども達の創造の可能性を生み出す、音楽や芸術などの大切さを見直す時が来ているのではないか。

今回で、バイリンガルファミリーシアタープログラムは15年目を迎えた。それを記念して、PAGのメンバーのほか、表現クラブ、親子 Yo-Yo クラブ、〔こどもの城〕の保育クラブから３歳～12歳までの子どもたち、総勢160人以上が出演した。また、例年２日間で４回公演を行っていたが、今回は土曜２回、日曜３回の計５回公演を行った。

この公演の大きな特長は、観客の方々にも参加していただき公演を作り、楽しむことにある。恒例のファミリーディスコタイムでは、PAG親子表現クラブのメンバーと観客の方々が一緒になって踊りを楽しんだ。出演者が

アートスケープ展



客席に行って参加するよう誘っても、恥ずかしさのためか、舞台に出てきてもらえない方も見られ残念であった。

ファミリーディスコタイムと同じく、観客の方々が参加できる企画としてゲームタイムも例年行っている。しかし今回は、ゲームタイムの変わりに Yo-Yo クラブのメンバー（母と子）が天使の国から来た天使役として出演して、劇中に親子で表現遊びを行った。普段、講座で行っていることを観客の方々に見ていただくために表現遊びを披露した。観客の方々がお家に帰ってから、同じ様に親子で表現遊びができるよう、どこの家庭にもある古新聞を用いた表現遊びを行うことに決定した。子どもたちが新聞でできたリボンをつけ、世界中の子どもたちに配られるプレゼントに扮し、親が新聞でできた角をつけたトナカイ、ひげのサンタクロースにそれぞれ扮した。クリスマスらしく、かつ、簡単にでき、何より子どもたちの天使がかわいらしかったと Yo-Yo クラブの表現遊びは大好評だったようである。この公演を見て、Yo-Yo クラブに興味を持ってくださり、受講を希望する方も少なくなかった。

協賛は、芦田基金事務局、上廣倫理財団、株式会社メイトの各社。プレゼントグッズを提供して下さったのは、株式会社メイト。

公演についてのアンケートも実施した。楽しかったという回答が多数あり、PAG、表現クラブや親子表現クラブの各講座に興味を示してくださった方も多かった。国際交流担当の各講座についてのインフォメーションを送って欲しいという希望もあった。

❷講座・クラブ

㋐ パフォーミング・アーツ・グループ〔PAG〕

PAGは、指導者が国際交流担当の職員で、英語を母国語とする外国人であるために、国籍を越えた交流ができる講座になっている。日本語と英語のバイリンガルで劇や歌・踊りなどを楽しむことや、自己表現の方法を身につける活動を行っている。

本年度は受講希望生が多く、定員（40人）より多い47人でスタートした。

１期は15周年を迎える円形劇場の公演のためいつもより早く準備に取りかかった。新学期より入った子どもたちのためにも、そして新しい学年になった子どもたちのためにも昨年も来て頂いた体育の特別講師（寺崎一宏さん）を迎え、まず、ストレス解消の意味も込めグルー

プで行う作業をする前にいろいろと踊りをした。高学年が多かったため、新しく入った子どもたちは大きい子どもたちが元気良く取り組んでいる姿を見て、恥ずかしいと思う気持ちを無くすことができた。

グループ分けやダンスも元PAGのメンバーが毎週来てくれてサポートしてくれた。

台本は6月にはできあがり、子どもたちのグループ分けも第1期中にできた。11ヵ国をダンス・歌などに分けるのは大変だった。なぜなら公演時間の限られた時間の中にはそれぞれの国の良いところを盛り込み、ステレオタイプ（STEREO TYPE）にならないようなものにしたかったから。人間の色をメインにはしたくないという指導をする職員の希望で、人間ではなく、それぞれの国を代表する動物の格好で踊りや歌をすることにした。そうすれば来てくださった方も人を外見で判断をしようと思わなくなる。

夏休み中には衣装の布選びをお母さん方とした。また裁縫の得意でない方のためにも型紙も作ってくれた。ひとりにつき2～3の国を担当するのでサイズ分けなどいろいろ細かい作業があったがお母さん方の協力でスムーズにいった。

第2期はこども一人一人に役名、衣装、材料、音楽のテープやダンスの振付が入っているビデオを渡した。ビデオを渡すことによって、お休みした子も復習したい子も助かった。11階会議室を借り裁縫が全く出来ない方のため、ボランティアを通して衣装作りに力を入れてくれた。また公演の裏方を手伝って下さる親を「サンタママ」と呼び子どもたちに一番便利な衣装替えや移動が出来るよう計画した。ダンスの国は寺崎さんが担当しアメリカ（ヒップホップ）、アフリカ、日本と中国そして櫻田素子さん（元こどもの城音楽事業部職員）にはインドネシア、歌の粟野めぐみさんには韓国、フランス、ロシアとアフリカを担当してもらった。その他の国のハワイとスペインは職員が担当し、負担にならない程度に振り分けられた。本当に国際交流を代表できる素晴らしい公演だった。

第3期は子どもたちに台本作りを体験してもらうため、台本の途中に英語や日本語での道しるべをあげ台本を作ってもらった。これは今欠けているグループ作りに必要なコミュニケーションの場ともなった。

PAGは子どもたちの才能を大切にしながら、グループの活動からいろいろな表現活動へと発展させ、積極性や創造力を伸ばしている。それがいじめられている子どもの仲間作りや、家や学校でありのままの自分を受け入れてもらえるきっかけにつながったりしている。自分を表現する方法を見つけることで、よりよい環境を作る手助けになって欲しいと思っている。

(イ) 表現クラブ（X-PRESSクラブ）

「表現クラブ」は、5～7歳の幼児を対象にした講座。定員20名のところ、受講希望者が非常に多く、本年度は25名でスタートした。

表現クラブでの活動は主に、切り絵と自己表現の2つに分けられている。切り絵の活動では、はさみを使ってユニークな作品を作りながら、指先を器用にするトレーニングを行う。表現の活動では、日本語と英語による歌やダンス、劇などを通して自己表現の仕方を学び、楽しく歌ったり踊ったりしながらネイティブでない言語や積極性を自然に身につけることを目的としている。そしてグループでの仲間作りや、一人一人の個性を大切にし、育てていくことも目的としている。

今回のクリスマス公演は、バイリンガルファミリーシアターを始めてから15回目記念ということで、表現クラブの受講生たち（有志）も特別出演した。よって、2学期の講座では、通常の活動とともに公演に向けての練習も行った。表現クラブの子どもたちは、世界中の子どもたちに届けられるプレゼント役を演じた。ぬいぐるみ等のおもちゃを演じる子どもとプレゼントの箱になる子どもに分かれた。子どもたちが入る箱の制作には、お母さん方にもご協力いただいた。小道具の制作だけでなく、本番当日の子どもたちの誘導や着替えの際にもご協力いただいた。

また、第3期には新しい試みとして、折り紙の特別講師（藤澤紀子氏）を迎え、竹と和紙を使ったかぐや姫の人形を2週にわたって制作した。みんな悪戦苦闘していたようではあるが、本物の竹や和紙に直接触れたり、最後まで作品を仕上げたことは、子どもたちにとって、とても良い経験になったと思う。

ミセスサンタの宇宙からのEメール



㈠ 親子表現クラブ（Yo-Yoクラブ）

本年度から新しく設けられた講座。「親子表現クラブ」は、3～4歳児とその親が対象の講座。Yo-YoのYoとは幼児の「よう」と、童謡の「よう」から取り名付けた。

また、おもちゃのヨーヨーの離れたり、戻ったりする動きが、子育ての叱ったり、抱きしめたりということに大変似ており、ヨーヨーのようにいいバランスで子育てを行いたいという気持ちが込められている。

講師の2か国語指導により、親子で日本の童謡を英語で楽しむほか、手遊びや表現遊びを行う。その遊びを通して親子間のスキンシップを図ることを目的としている。

また、切り絵では、はさみを使い、親と子共同でユニークな作品を作りながら、指先を器用にするトレーニングをする。

当初、親子表現クラブは、1クラスで定員が親子20組で行う予定であった。しかし、受講希望者が非常に多かったため、2時から3時のAクラスと3時15分から4時15分までのBクラスの2クラスを設けた。各クラスそれぞれA－16組、B－22組でスタートした。

12月のクリスマス公演の5回公演のうち3回に、Yo-Yoクラブの受講生とお母さん方（有志）が、天使の国から来た天使役として出演した。親子の天使たちが、新聞紙を使った表現遊びを劇中で行った。普段、講座で行っていることを観客の方々に見ていただこうということになった。そこで、受講生たちにアンケートを行った結果、新聞紙を使った表現遊びを演じることに決定した。子どもたちの天使の衣装作りもお母さん方にご協力いただいた。

講座では、季節の行事に合わせた切り絵制作なども行った。例えば、ハロウィン、クリスマス、バレンタインデーなど。また、日本ではあまり馴染みのないハロウィンの時には、カボチャをくり抜いてランタンを作ったり、ハロウィンの由来や習慣を紹介した。同じ行事でも、日本とアメリカでの習慣や祝い方の違いや、行事の由来などを知り、受講生やお母さん方にとって、とても興味深かったようである。

講座対象者の年齢が低いため、子どもたちの様子を見るということで、1学期は月に2回講座を行った。2学期から、毎週火曜日に講座を行った。

平成11年度活動一覧表

❶一般利用

〈平常期間〉

名　称	期　間	備　考
アートスケープ'2000 Artscape'2000	3.1〜12	今回で20回を迎える恒例のインターナショナルスクールを中心とした小・中・高生の美術展。参加した学校は、東京と横浜を中心としたイナターナショナルスクール10校と武蔵野東学園の計11校。出品作品は600点を越え、展示品でアトリウムギャラリーは溢れるほどであった。また、5日と12日には一般に来館する子どもや大人のためにワークショップを開催（陶芸など）し、国際交流のイベントを行った。
ミセスサンタの宇宙からのEメール	12.4　14:00、16:00 12.5　11:00、14:00 16:30	家族ぐるみの国際交流を目的とした日本語と英語の2か国語で演じるクリスマス・ファンタジーシアター。パフォーミング・アーツ・クラブ（PAG）の子どもたちが1年間の自己表現の成果を公演という形式でみせる。今回は、新しく始まった、親子表現クラブの「Yo-Yo クラブ」の受講生とその親が、3回の公演に友情出演してくれ、会場の雰囲気を引き立ててくれた。

❷講座・クラブ

名　称	対象・定員	受講数	曜日・日時	備　考
パフォーミング・アーツ・グループ Performing Arts Group	(人) 小学生 (35)	(人) ① 41 ② 40 ③ 38	水曜日　16:30〜18:00 (全35回)	歌、ダンス、劇を通じて子どもの自主性や積極性を刺激し、自己表現の力を身につける講座。日本語と英語の両国語で指導。その成果を年末の青山円形劇場公演「ミセスサンタの宇宙からのEメール」に参加で披露。台本、振り付け、衣装などのアイデアも考えた。講師は、バイリンガル（英語がネイティブ）の国際交流の職員。受講料＝1・2・3期各15,000円
表現クラブ X-PRESS CLUB	5〜7歳児 (20)	① 29 ② 19 ③ 20	水曜日　14:30〜16:00 (全34回)	切り絵で表現し、指先の感触が豊かになるように指導しながら、自己表現の方法を学ぶ。また歌やダンス、劇を通じて自己をよりよく表現する方法も学ぶ。指導は、日本語と英語による。講師は国際交流部のバイリンガル(英語がネイティブ)の職員。受講料＝1・2・3期各10,000円
親子表現クラブ Yo-Yo クラブ	3〜4歳児とその親 (20組)	A①15 ②15 ③15 B①22 ②20 ③22	火曜日　(全27回) A　14:00〜15:00 (16組) B　15:15〜16:15 (22組)	本年度から開講した「親子クラブ」。親子で日本語の童謡を英語で楽しみ、手遊や表現遊びを行い、それを通じて親子の間のスキンシップを図ることを目的とした。受講希望者が多かったために2組に分け2回コースとした。1期については各コース月2回のクラスとし、2期から週1回の通常のクラスとした。

❸その他

名　称	期　間	会　場	備　考
児童福祉週間記念事業 「こどもすくすくランド」	5.9	石川県 産業展示館4号館	金沢市内を中心とした0歳から就学前の児童を持つ親子10,000人が対象。子ども達が心身ともに健やかに生まれ育つという願いのもと、児童福祉週間にちなみ、子どもの健やかな成長、家族の大切さ、子育ての楽しさについての市民の理解を深めることを目的に開催されたイベント。切り絵と表現遊びを中心としたステージ。
こどもの城保育研究開発部 第16期　親子教室 「社会と子育て」	6.26	こどもの城・5階 保育研究開発部	こどもの城保育研究開発部が開講している1〜2歳の親子を対象にした両親参加の親子教室。前半は、親子遊びを通して親子のつながりを深め楽しく遊び、後半はお父さんお母さん同志が育児への思いを交換し合うディスカッションとの2部構成。ディスカッションでは、育児を楽しく豊かにする為に、改めて親として子どもを見る目、親子の関係などを考えた。
「テリー先生とハサミを使って見つけよう」	7.4	千葉県立 手賀の丘 少年自然の家	社団法人ガールスカウト日本連盟が主催の5〜6歳女児を持つ親子を対象としたイベント。自然に触れながら親子で新しい発見をしよう、また、自然の中で子ども達の可能性を見つけ、子どもの才能を引き出すことが目的。ハンドエアロビクスと切り絵中心の講演。
ニコニコ親子の関係	7.14	栃木県 上三川町中央公民館	小学生の子どもを持つ親子約40組が対象。上三川町中央公民館の主催の家庭教育学級・乳幼児学級生の7月講座。表現遊びを中心の講演。

名　称	期　間	会　場	備　考
「FUKUOKA インターアクション'99」	8.6 ～8.8		福岡県環境生活部県民生活局青少年課主催。青少年の健全育成に向けて、幅広い県民運動の高揚を図る為、3日間にわたって開催された福岡県少年国際村事業、FUKUOKA インターアクション'99。青少年国際村の村長を務めた。また、福岡県在住の外国人家族も参加し野外でのレクリエーションや自然体験を通して国際交流を深めた。
国際高齢者年記念事業シンポジウム　高齢者の生涯学習と社会参加ーすべての世代のためにー	9.20	東京都 国立オリンピック記念青少年総合センター国際会議室	財団法人さわやか福祉財団主催。「高齢者の生涯学習と社会参加」をテーマにしたパネルデイスカッションのパネラーとして発言。日本の生涯学習と地域貢献への提言。
「21世紀を担う子どもを育てる国際シンポジウム」	10.9	広島県 広島市 NTT クレドホール	社団法人日本 PTA 全国協議会・財団法人上廣倫理財団主催。PTA 会員及び一般の方々約800名が対象。「21世紀を担う子どもを育てる」をテーマにしたパネルデイスカッションのパネラーとして発言。
子育てネットワーカー養成講座	10.15	埼玉県 埼玉県立 浦和青年の家	埼玉県庁教育局生涯学習部生涯学習課主催。家庭教育に関する指導者養成の事業として開催された子育てネットワーカー養成講座。その中で「外国から見た日本の子育て」という題で講演。受講生は約50人。
今、子どもたちは ～子どもたちはどこに 親たちはどこに～	10.21	山梨県 山梨市民会館	主催・山梨県教育委員会。主管・東山梨教育事務所。21世紀を担う子どもたちが健全に育ち、人間として調和のとれた成長を遂げるにはどうすればよいか、学校生活だけでなく家庭生活、地域、社会での様々な観点から地域ぐるみで議論を重ね、みんなで考えるという目的で開催された山梨県地域教育フォーラム東山梨集会。その中で「今、子どもたちは・・・」というテーマで講演。PTA、幼稚園保護者、教育行政関係者等約200人が対象。
おもしろい子育て講座「わいわい子育て」	10.27	東京都 港区立高輪幼稚園	港区教育委員会生涯学習推進課主催。港区立高輪幼稚園の2～3歳児を持つ保護者25名が対象。子育てを楽しく進めている親、子育ての難しさを感じている親が子育ての悩みを出し合い、話を聞き、自信を持って子育てに向かう力をつけようという目的のおもしろ子育て講座。「わいわい子育て」では講演と子育ての質疑応答の2部構成。
「2000年に向けて 今の子どもたちは・・・ 親たちは・・・」	11.1	東京都 学芸大学付属 世田谷小学校	芦田基金教育事業として学芸大学付属世田谷小学校にて講演。日常生活における親子関係を通して、お互いの気持ちや考えをもっと豊かにするためにはどうしたらよいか、また創造性、表現力、グローバルな心を養うためにはどうしたらよいかという PTA の母親の問題意識に応えて催された講演。PTA の方々約100名が対象。
国立オリンピック記念青少年総合センター運営委員会	11.1	国立オリンピック記念青少年総合センター	運営委員会の一員として、国立オリンピック記念青少年総合センターの運営についてという議題で会議に出席した。
「自分を大切にする」	11.19	兵庫県立北摂三田高等学校体育館	兵庫県立北摂三田高校の生徒、教職員、育友会員約500人を対象とした講演。テーマは、「自分を大切にする」という性教育講演。
平成11年度 国立那須甲子少年自然の家運営委員会	11.22	栃木県 国立那須甲子少年自然の家	運営委員会の一員として、国立那須甲子少年自然の家の運営等についてという議題で会議に出席した。
芦田基金教育事業 第5回　企画運営委員会	12.10	株式会社　ジュンアシダ　本社会議室	運営委員の一員として、芦田基金教育事業の本年度の活動報告と運営についてという議題で会議に出席した。
高松　冬のまつり	12.11	高松市立 中央公園	高松市民約10,000人が参加した冬まつり。ミセスサンタがオープニングセレモニーと点灯式に参加。特設ステージでダンスや表現遊びを中心とした親子イベントも開催。イベント後には写真撮影会も行った。
「表現力と創造性を 高めるために はさみを使って遊ぼう」	00 1.27	愛知県 名古屋市公会堂 第7集会室	「中部地区幼児教育研究会」の分科会にて講演。中部地区9県下の幼児教育関係者（園長、幼稚園教諭、保育士等）120名が対象。表現遊び、ハンドエアロビクス、切り絵を中心にしたプログラム。創造性を高め、発想を豊かにする指導法について講演。名古屋市・名古屋市教育委員会・NHK 放送局・中日新聞社等8団体が主催。
平成11年度 高知県こども子育て応援団養成講座	2.17	高知県安芸郡 安田町文化センター	「地域において子育てを支援できる人材」を養成し、地域全体で子育てを支援することを目的として開講された講座。親子関係について講演。高知県安芸福祉事務所主催。
「国際人から見た 生きる力」	2.19	埼玉県 川口総合 文化センター	川口市教育委員会学校教育部指導課主催。川口市立の幼・小・中・高の校（園）長及び教頭、川口市教育委員会学校教育部指導課指導主事ら約180名が対象。「国際人から見た生きる力」を演題に講演。講演の後半には、質疑応答のコーナーをもうけた。
シンポジウム「子どもの目が輝く 日は・・・。」 ー地域で育む子どもの心ー	2.23	東京都庁 第1本庁舎5階 会議場	社団法人東京のあすを創る会主催。子どもを地域で育てる活動を続け、成果をあげている実践に学び、討議し、子どもの目が輝く日が実現されることをねらいとしたシンポジウム。パネリストとして発言。一般市民、小・中学校の PTA 約500名が対象。後援は、NHK。
「親子ふれあいあそび」	2.25	栃木県・今市市 総合文化会館	今市市（地域子育て支援センター事業）主催。今市市内の一般の就学前の親子100組が対象。手遊びや歌遊び、切り絵を中心に親子のコミュニケーションを深める目的のプログラム。
「楽しい子育てあそび」	2.28	栃木県 はくおう幼稚園	はくおう幼稚園・はくおう幼稚園父母の会主催。はくおう幼稚園の父母約80名が対象。手遊び・歌遊び・はさみを使った切り絵を中心とした講演。講演の後半は、父母からの子育ての質問コーナーを設けた。

業務部



平成11年度の活動

業種別の状況

(ア) ホテル

ホテルの利用状況を見ると、客室利用率は和洋室全体で83.7%、客数利用率では70.2%となっており、前年度に比べ客室利用率で4.4%の減少、客数利用率で3.5%の減少となった。客数利用率が客室利用率に比べて低いのは、ツインルームのシングルユースおよび和室の利用人員が客室定員より少ない場合が多かったためである。3室しかないシングルルームの利用率は、窓のない部屋であるにもかかわらず、94.8%と極めて高率であり、ツインルームのシングルユースも26.3%と利用率が高く、シングルルームの需要が高い。

7月に、客室全室のインフォメーションホルダーを更新した。

10月から、インターネット予約システム e-place に参加登録した。

12月に、宿泊客サービス用の製氷機を更新した。

2月に、デラックスツイン室のハイダーベッドとフロアスタンドを、また、全ての洋室のシャワーカーテンを更新したほか、全ての洋室には姿見を、和室には鏡台を設置した。

3月に、全ての洋室の内装を改修し、既に改修済の和室を含め、全ての客室の内装改修を完了した。また、全ての客室のトイレにシャワートイレを設置し、フロントのカウンターおよびレジを更新した。

洋室の内装改修工事のため、6階は3月1日から15日まで、7階は3月16日から31日まで売り止めにした。

前年度に引き続き、旅行情報誌、ホテルガイドへの広告の掲載や関係団体の全国会議でのパンフレットの配付など広報に努めた。

【ホテルの利用状況】

客室種別	利用客室数	客室利用率	利用客数	客数利用率
シングル	963室	94.8%	963人	94.8%
ツイン	5,675室	84.1%	10,436人	77.3%
和室	711室	69.9%	3,318人	51.5%
合計	7,349室	83.7%	14,717人	70.2%

(注)利用率は、次により算出した。

(1) 客室利用率 $= \dfrac{\text{利用客室総数}}{\text{営業日数(354日)}\times\text{販売可能客室数(26室)}-\text{工事売止数(422室)}} \times 100$

(2) 客数利用率 $= \dfrac{\text{利用客総数}}{\text{営業日数(354日)}\times\text{販売可能客数(62人)}-\text{工事売止数(993人)}} \times 100$

※総客室数は27室、総定員は64人だが、このうちツイン1室を予備室としているため、販売可能客室数は26室、収容可能客数は62人とした。
なお、工事期間中の売止客室数422室、売止客数993人を分母の販売可能

(イ) 研修室・ギャラリー

研修室の利用率は合計で62.0%で、前年度より1.5%減少した。

利用の内容は、外部へ有料で貸し出すほか、〔こどもの城〕の企画による催事などにも利用されている。とりわけ春・夏・冬休み、ゴールデンウイーク（児童福祉週間）などの特別期間中は、研修室、ギャラリーのいずれも内

部利用の割合が極めて高く、〔こどもの城〕の限られたスペースでの充実したプログラム作りに寄与している。

10月に、9階用の椅子をバンケットチェアーに更新したほか椅子用キャスター1台を購入した。

3月に、受付用小テーブル3個、椅子用キャスター2台を購入した。

研修室の広告は、産労総合研究所の「全国研修施設／講師一覧」、社会経済生産性本部の「全国研修室便覧」（インターネット版を含む）に毎年掲載している。

【貸し室の利用状況】

室種別		有料利用		内部利用		計	
		件数	利用率	件数	利用率	件数	利用率
研修室	午前	1,739	49.0	233	6.6	1,972	55.6
	午後	2,446	68.8	282	7.9	2,728	76.7
	夜間	1,348	46.2	163	5.6	1,511	51.8
	合計	5,533	55.2	678	6.8	6,211	62.0
ギャラリー		40	11.1	208	57.9	248	69.1

(注)利用率は，次により算出した。

(1) 研修室利用率＝$\frac{\text{各室を午前・午後・夜間各1件とした場合の年間利用件数}}{\text{年間営業可能件数}}\times 100$

※平成11年度における年間営業可能件数は，午前3,547件，午後3,557件，夜間2,919件の合計10,023件（日曜日・祝日の夜間休業のほか，じゅうたんクリーニングなどのため利用不能となった件数を除く）である。

(2) ギャラリー利用率＝$\frac{\text{利用日数}}{365\text{日}-(\text{年末年始5日}+\text{基幹停電日1日})=359}\times 100$

(ウ) その他の業務

売店、自動販売機による販売、駐車場の提供、館内公衆電話の管理などについては、前年度に引き続き〔こどもの城〕事業活動に即応する形で利用者サービス事業の一環として実施してきている。

〔こどもの城〕の利用を促進して行くうえで、これらの利用者サービス事業はいずれも欠くことのできないものなので、引き続き多様な利用者需要に合わせたサービスの向上を図っていく必要がある。

9月から、平日駐車料金券（300円券50枚綴り1万円）の発売を開始した。

3月に、公衆電話の利用が減少してきたため、9階のエレベーターホール、7階ホテルロビー、3階ロビー、1階アトリウムの同一場所に2台設置してあった公衆電話のうち、カード専用電話機（計4台）を撤去した。

6月から、子ども連れのファミリー客の利用増加を図るため、従来の「お子様セット」に加え、小さい子どものために半額程度の「お子様メニュー」を設けた他、メニューを〔こどもの城〕のレストランに相応しいものに一新した。

8月から、2階アミティーエにおいて夜間にフランス料理の営業を開始し、昼食時にも洋食メニューを追加することとした。

このため7月に、青山通り脇の飲食用の看板を更新するとともに、アンファン及びアミティーエの入口に看板を、アミティーエ入口の螺旋階段に照明を新設したほか、営業時間から11時～18時（休館日休業）から11時～22時（年中無休）に変更した。

11月に、2階アミティーエのラストオーダー時間を22時から20時に変更して、2階担当者が21時以降は研修室設営業務を担当できるようにした。

3月から、利用実態をふまえ1階アンファンの営業時間を7時30分～20時から7時30分～18時30分に、2階アミティーエは再び休館日は休業とし営業時間も11時～20時から12時～20時に変更した。

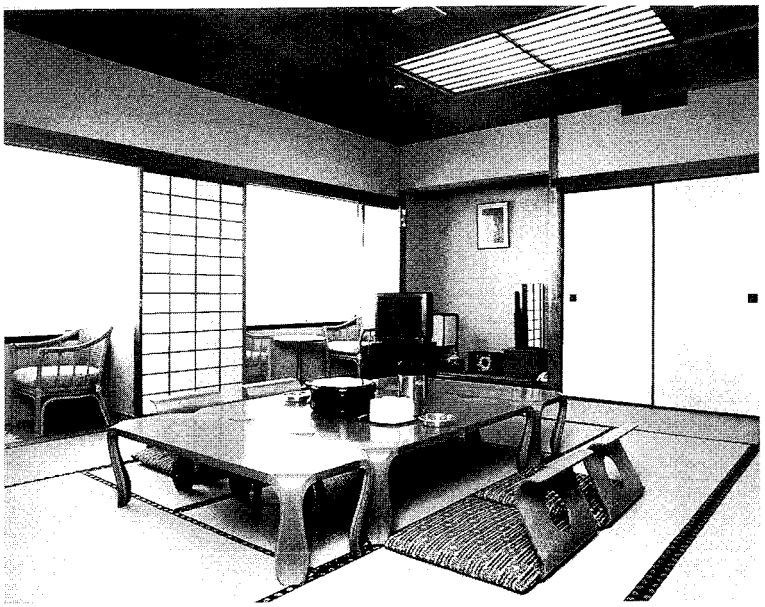
平成11年度の概要

業務の一覧

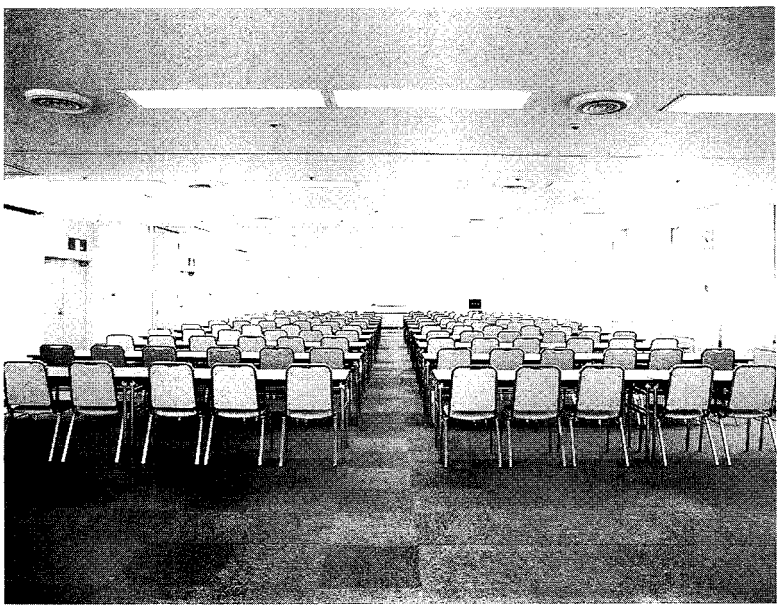
業種	店名等	場所	利用客席数	営業日・営業時間	備考
ホテル	こどもの城ホテル	6・7階	客数 27 客室定員 64	無休(12月29日～1月2日を除く)	洋室24室(シングル3、ツイン10、デラックスツイン11) 和室3(4人用1、5人用1、10人用1) 料金＝1泊6,400円～(税別)
貸し室	研修室	8・9階	研修室 10 ※一部通しで使用できる。利用人員350人ぐらいまで	無休(12月29日～1月2日を除く) 営業時間＝9：00～21：00	研修および会議など 料金＝1単位時間11,500円～(税別)
	ギャラリー	1階アトリウム		無休(12月29日～1月2日を除く) 営業時間＝10：00～18：00	各種展示会および実演など 料金＝1日30,000円(税別)
物品販売	売店	1階アトリウム	1か所	営業日時＝「こども活動エリア」の開館日時と同じ 毎週月曜日休業(月曜日が祝・休日のときは火曜日) 土、日、祝・休日、春・夏・冬休みの特別期間＝10：00～17：30 平日＝12：30～17：30	玩具、文具、音楽用品、スポーツ用品、講座指定水着、催事関係用品、印刷出版物、衣料、雑貨、フィルムなど
	自動販売機	館内各所	飲・食・乳 14か所 たばこ 6か所 フィルム 1か所 テレホンカード 2か所	無休	ドリンク類、牛乳類、スナック類、カップ麺類
公衆電話		館内各所	15か所24台	無休	
駐車場		屋内(地下2階～地下4階)、屋外(1階)	約126台 (業務車両分含む)	無休(12月29日～1月2日を除く) 営業時間＝8：00～22：00	普通車両は地下駐車場、バスなど大型車両は屋外(1階)に駐車 料金＝普通車両30分300円、マイクロ車両1時間840円、大型車両1時間1,260円(税込み)
飲食関係	カフェテラス「アンファン」	1階	客席数 140	無休(12月29日～1月2日を除く) 営業時間＝7：30～20：30 (3/1～＝7：30～18：30)	ファミリーレストラン、弁当仕出し、パーティーなどホテル宿泊者の食事など
	すし「ひさご」	1階	カフェテラス「アンファン」内	無休(12月29日～1月2日を除く) 営業時間＝11：00～20：30 (3/1～＝11：30～18：30)	すし、和食、弁当・料理の仕出しなど
	コーヒーラウンジ「アミティーエ」	2階	客席数 60	毎週月曜日休業(月曜日が祝・休日のときは火曜日) 営業時間＝11：00～20：00 (8/1～＝11：00～22：00 無休) (11/19～＝11：00～20：00 無休) (3/1～＝12:00～20:00 月曜日休業)	喫茶、軽食 (8/1～＝フランス料理、喫茶、軽食)
	劇場内「スナック」	青山劇場内地下ロビーおよび2階ロビー	立食	公演に合わせて営業 営業時間＝開演前・幕間	喫茶、軽食



こどもの城ホテル客室（洋室）



こどもの城ホテル客室（和室）



研修室

Ⅲ こどもの城から全国へ

こどもの城から全国へ



平成11年度の活動

❶こどもの城のセンター的機能について

〔こどもの城〕の建設に先立つ基本構想の段階から、〔こどもの城〕が全国の児童館のセンター的な役割を果たすようにという計画があった。この考え方は、当初の児童文化や児童福祉全般に関する情報センター的な構想と異なり、現在では大型児童館としての実践活動の中から、事業の成果を他の児童館にフィードバックしていくという形態になっている。そしてそれは、現在の〔こどもの城〕の運営のなかである程度具現化されている。全国の多くの児童館と比べると、〔こどもの城〕の規模や専門的な設備、また、都心に位置する地理的な環境などは特殊である。しかし、15年にわたる事業の蓄積は地域の児童館をはじめとした多くの児童健全育成関係者にとって有意義なものである。そしてこうした事業の成果を多くの人たちに伝えていくことは、〔こどもの城〕の果たすべき社会的な使命である。

こうしたセンター的な機能のなかで、現在行われている事業を挙げていくと、㈠児童厚生員などの児童館で働く職員を対象とした実技指導の講習会、㈡児童厚生員などの児童館で働く職員の研修生としての受入れ、㈢地域で開催される研修会や催しへの〔こどもの城〕職員の講師派遣、㈣「動くこどもの城」事業の4つである。それぞれの事業の具体的な内容は次に記すとおりである。

❷センター機能の実践

㈠ こどもの城児童厚生員等実技指導講習会

児童厚生員などの児童館で働く職員を対象とした実技指導の講習会は、〔こどもの城〕開館時から「児童厚生員等実技指導講習会」として、毎年3～4回開催されてきた。この講習会は、㈶児童健全育成推進財団及び都道府県の児童館連絡協議会が行う児童厚生員対象の講習会が理論的なものを中心にしているのに対し、明日から活動の中で利用できるプログラムの紹介と児童館活動のなかで起こりうる事象の考察という極めて実践的な内容にその特徴がある。また、宿泊研修を基本とし参加者同士が長時間生活を共にするものであり、そうした時間を通し児童館の運営についての情報交換を行うことのできる場としても貴重である。4日間の宿泊研修には勤務の都合上参加しにくいという、主に首都圏の児童館関係者の声を考慮して、近年は2日間の研修を通いで行う講習会も開催している。いずれの研修会も参加希望者が定員を上回り、すべての希望者を受け入れるのが難しい現状にある。しかし、他の事業も抱える〔こどもの城〕にあっては、これ以上の回数の講習会を開催することは困難であり、また、宿泊設備の関係から、定員増についても厳しい状態である。従って、講習会に参加した各々が地域に戻り、講習会で得た知識や技能をその地域の人たちに伝達し、その地域で抱える問題点や独自のプログラムを携えて、この講習会に参加していただくことを期待してい

る。

(イ) 研修生・実習生の受け入れ

〔こどもの城〕の創設以降、各地に開設されてきた県立の大型児童館のなかには、職員の初任者研修を〔こどもの城〕に依頼してくるところがある。また、開設以降も新たに採用された職員の研修を依頼される場合が少なくない。こうした現場での研修依頼を研修生という形で日常活動のなかで受け入れてきた。本年度はこうした研修生を44人受け入れた。

また、ここ数年、地域密着型児童館の職員から、単なる施設見学にとどまらない短期研修についての要望がでてきている。「児童厚生員等実技指導講習会」の参加定員に限りがあり、日程や予算措置などの条件によりすべての希望者が「児童厚生員等実技指導講習会」に参加することが難しい現状を補う意味もあり、こうした要望も現状の業務のなかでできる形で受入れていきたい。

実習生の受け入れは、大学・短期大学、専門学校から依頼のあったものについて、企画研修部でコーディネイトして、保育研究開発部、プレイ事業部、音楽事業部、AV事業部、造形事業部、体育事業部の5つの事業部で44人の実習生を受け入れた。

このほかに、日産自動車㈱が実施しているNPO(公益法人)ラーニングシステムでの奨学生を2人受け入れた。

(ウ) 講師派遣

地域で開催される研修会や催しへの〔こどもの城〕職員の講師派遣については、年々その要請が増してきている。

〔こどもの城〕がこれまで行ってきた「こどもの城児童厚生員等実技指導講習会」、「保育セミナー」、「小児保健セミナー」、さらには「動くこどもの城」といった事業により〔こどもの城〕の事業内容が広く知られることとなり、評価されている結果と考えられる。件数の増加にともない、依頼の内容も広範なものとなってきており、新しく始めた事業についても、こうした講習会で紹介していけるような準備が常に求められているわけである。職員個人の知識や技能が評価されているだけでなく、〔こどもの城〕の事業全体への評価と受けとめ、これからも日常業務に支障をきたさない範囲で積極的に応じ、事業の成果を多くの人たちに紹介していきたい。

(エ) 動くこどもの城

「動くこどもの城」は、こうしたセンター的機能の一つとして、平成6年度より国の助成を受けて始まった事業である。予算やスケジュールの制約があり、毎年派遣件数が大幅に増加している訳ではないが、派遣依頼は年々増加してきている。「動くこどもの城」では子どもを対象とした公開プログラムの実施だけでなく、これに併せて児童厚生員を対象とした研修会も開催している。現地のスタッフの協力も得られるなど、〔こどもの城〕のプログラムを体系的に紹介するには極めて恵まれた条件である。

今後は一度の訪問がより広い地域、多くの人の目に留まるように地域の協力を求めるとともに、「動くこどもの城」のプログラムとして紹介できるラインナップをできるだけ豊かにしていくよう、〔こどもの城〕での日常活動プログラムの一層の充実が必要である。

❸今後の課題

以上、現在のセンター的機能として4つの仕事があげられるが、これらは〔こどもの城〕の、一つの児童館としての活動実績に基づいた仕事である。このほかに、〔こどもの城〕以外の児童館と、そこで行われるプログラムについての情報の受入れと発信という仕事が、全国のセンターとしての〔こどもの城〕に求められてきている。

昨年度から着手した〔こどもの城〕と条件の似ている都道府県立の大型児童館の基本情報のストックを手始めに、来年度は「乳幼児の子育て支援」や「中高生対策」などといった特定のテーマについての実態調査も計画中である。こうした情報は冊子としてまとめるだけでなく、〔こどもの城〕ホームページなども活用して、広く公開し、児童館活動の活性化に寄与していきたい。

平成11年第1回児童厚生員等実技指導講習会



平成11年度活動一覧表

❶〈動くこどもの城〉プログラム一覧

〈子どもや家族を対象に行うプログラム〉

名　称	内　容
スポーツあそびで体力づくり	かつて、子どもたちは元気に遊ぶ中で自然に身につけていた体力、その中でも「敏捷性」「バランス」を養うために、陣取りゲームなどのスポーツあそびを多彩に展開する。
身近な道具でスポーツあそび	身の回りにある道具を使って体を動かすプログラム。新聞紙・棒・ひも・そして特定のスポーツの道具として使うことが多いボールなどの使い方を、人数や場所の広さによって変えていく発展型プログラム。発想を変えることによって、さまざまな運動遊び、スポーツへと展開する。
お母さんと赤ちゃんのすくすく体操	赤ちゃんが自然に健康に成長していることは、母親でも意外と意識しないもの。音楽や楽しい遊具を使いながら、赤ちゃんにできる簡単な体操を通して、表情や動きの新しい発見をしてもらう。
パソコン遊びのワークショップ	パソコンで楽しく遊ぶコーナーを一定期間設置する。実施するプログラムは、「きれいなグラフィック遊び」やさまざまなペーパークラフトをパソコンでデザインし、実際に作って遊ぶ「パソコンクラフト」など、今まで〔こどもの城〕のパソコンルームで実施したプログラムの中から、いくつかを選択して実施する。
みんなで遊ぼうパペット・ランド	人形作りと人形遊びの2つの活動で構成されたプログラム。人形は、紙コップや封筒など身近な素材で作制。人形でお話をしたり、仲間とコーラスを楽しんだり、ごっこ遊びを繰り広げたりと、イメージの世界をみんなで共有するプログラム。
がらくた楽器のコンサート	ロック、クラシック、ラテン、民族音楽好きの4人が、従来の楽器の他に、手作り楽器、民族楽器、身の回りの道具などを演奏。今までにないサウンドは、文字通り寄せ集め（ガドガド）。すべての人に音楽をより身近なものとして感じさせるコンサート。
おんがくがスキ！	従来のように参加者に聴かせるだけのコンサートではなく、歌遊びや手遊びの要素が盛り込まれているコンサート。演じる・観る・聴く・楽しむの行為が一体となり音楽の楽しさをより一層体験できる参加型のプログラム。
竹の響きアンクルン・コンサート	アンクルンはすべてが竹で作られたインドネシアの民族楽器。一つの楽器から一つの音しかでないため、「竹のハンドベル」とも呼ばれている。コンサートでは、アンクルンのほかに、竹のマリンバ、ベースなどといっしょに、童謡やインドネシアの民謡を演奏する。子どもたちをステージにあげ、アンクルンを体験するコーナーもある。
アニメ・ワークショップ	遊びを通して、映像の仕組みを考えることができるプログラム。2枚の簡単な絵を描いて作る「ぱたぱたアニメ」、映画発明以前の動く絵を楽しむ玩具、「視覚玩具」などの制作を通して映画、映像の仕組みを体験する。また、ワークショップでは制作の難しい複雑な「視覚玩具」などの展示も行う。
こどもの城映画劇場	子ども向けに作られた国内外の芸術的なアニメーションの短編作品の上映を行う。基本的に、こどもの城フィルムライブラリー「武藤行雄記念文庫」に収蔵されたアニメーション作品から数本を選んで上映する。「武藤行雄記念文庫」にはカナダ国立映画制作庁NFBCのアニメーションをはじめ、世界中の優れた作品を約110本収蔵している。
映像探検写真ワークショップ	私たちが日常なにげなく撮っている写真も、いろいろな"仕組み"の上に成り立っている。そんな、写真の"写る仕組み"を体験してみるプログラム。写真の発明以前に、画家たちがデッサンの補助的器具として用いていた"カメラオブスクラ"や、レンズを使わないカメラ"ピンホールカメラ"を使ったワークショップや写真の仕組みや歴史についての展示も併設。
ボランティア交流プログラム	〔こどもの城〕で活動しているボランティアリーダーと地域のボランティアとの交流プログラム。ボランティアの養成やさまざまな活動についての情報交換を行う。

〈児童厚生員などを対象とした実技研修会〉

名　称	内　容
手作り楽器のワークショップ	普段は、がらくたとして捨ててしまうようなものを生き返らせて、楽器を制作。金属の缶やフィルムのケースなどが、音の道具に早変わり。そして制作終了後には、全員で作った楽器で音をだして遊ぶ。
造形ワークショップ	素材・発想・技法などで、さまざまなプログラムが生まれる。どこにでもある素材を用いて、ほんの少しだけ発想を変えると、普段は見えないものが見えてくる。こうしたプログラムを何種類か参加者と体験制作し、それが生まれる考え方や発想法についても考察する。
不思議な映像実験室	≪映像の時代≫ともいえる現代に生きる子どもたちにとって豊かな映像に触れることは欠かせない。映像の基本的な原理について、遊びを通じて理解できるプログラムを体験するワークショップ。
造形ワークショップ展	(こどもの城)造形スタジオの、今までの実践活動のプログラムを、視覚的に分かりやすく、展示パネルの形式にまとめて展示。その中からいくつかのプログラムを子どもたちやその家族を対象に実施。パネル展示が中心となるプログラム。

〈地域の児童館などでの巡回展示とワークショップを併せて行う事業〉

名　称	内　容
ブルーノ・ムナーリ展	1985年に(こどもの城)の開館を記念して行われたブルーノ・ムナーリ氏の作品展およびワークショップ。子どもの触覚、視覚、体感覚を使って造形感覚を磨こうという考えが基本となっている。グラフィック・アート、プレイシングス、絵本、オブジェなどの展示とワークショップで構成。
ピクトル・ダミコ展	1995年に(こどもの城)の開館10周年を記念して行われた「ピクトル・ダミコ展 "こどもアートカーニバル"」を巡回キット化。「色、光、触覚」を遊びながら体験できる21個のボックス型造形美術玩具は、子どもの造形意欲や創造性を喚起させ、好奇心と感性に刺激を与える環境となる。このほかに、特別に設計されたイーゼルや回転式円形コラージュ・テーブルなどを加えた環境の中で、絵画とコラージュ制作を中心としたワークショップを実施。
お父さんの少年時代	児童館などを訪れる子どもたちのお父さん、お母さんが子どもだった頃、昭和30〜40年代の「遊び」の展示。めんこ、ベーゴマ、凧、日光写真などの遊び道具の展示をきっかけにして、親子のコミュニケーションを図り、子どもたちに昔遊びのエッセンスを体験してもらう。
コマガタワールド	「コマガタワールド」は、絵本の持つ「コミュニケーションのためのツール」という面に着目し、さまざまな絵本を制作し、ワークショップを実践してきた駒形克己氏の絵本の世界を取り上げたもの。平成9年夏に(こどもの城)で実施した展示とワークショップで構成されている。



「動くこどもの城」みんなで遊ぼうパペットランド

❷〈動くこどもの城〉実施一覧

場　所	開催団体	期　日	プログラム	担　当	催し	研修	展示
愛知県	岡崎地域分化広場　おかざき世界子ども美術博物館	5.2〜4、22	アニメワークショップ	AV	○	○	○
三重県	津市保健センター	6.14	お母さんと赤ちゃんのすくすく体操	体育	○	○	
三重県	四日市市児童福祉課	6.15	お母さんと赤ちゃんのすくすく体操	体育	○	○	
長崎県	佐世保市	7.11	がらくた楽器のコンサート	音楽	○	○	
群馬県	ぐんまこどもの国児童会館	8.7〜29	コマガタワールド	企画研修	○	○	○
大阪府	交野市保健福祉部健康増進課	9.30	お母さんと赤ちゃんのすくすく体操	体育	○	○	
新潟県	新潟県・新潟県児童館連絡協議会	10.1	手作り楽器のワークショップ	音楽		○	
香川県	財団法人香川県児童・青少年健全育成事業団さぬきこどもの国	10.3	がらくた楽器のコンサート	音楽	○	○	
埼玉県	坂戸市立児童センター	10.5	お母さんと赤ちゃんのすくすく体操	体育	○	○	
愛媛県	社会福祉法人愛媛県社会福祉事業団えひめこどもの城	10.17、18	スポーツ遊びで体力づくり	体育	○	○	
大阪府	豊中市立豊中解放会館児童館	11.4〜26	パソコン遊びのワークショップ	プレイ	○	○	
栃木県	栃木県児童館連絡協議会・栃木県こども総合科学館	11.12〜14	みんなで遊ぼうパペットランド	プレイ	○	○	
秋田県	秋田市児童家庭課・秋田市子育て総合センター	11.20	お母さんと赤ちゃんのすくすく体操	体育	○	○	
山口県	山口県・山口県児童センター	11.19	不思議な映像実験室	AV		○	
神戸市	神戸市総合児童センター 神戸市社会福祉協議会	1.15、16	おんがくがスキ！	音楽	○	○	
宮城県	仙台市健康福祉局健康福祉部	1.20	手作り楽器のワークショップ	音楽		○	
静岡県	藤枝市幼稚園長・保育園長会	2.12	おんがくがスキ！	音楽	○	○	
千葉県	銚子市保健福祉部	1.18	お母さんと赤ちゃんのすくすく体操	体育	○	○	
千葉県	佐倉市志津児童センター	1.20	お母さんと赤ちゃんのすくすく体操	体育	○	○	



「動くこどもの城」アニメワークショップ

❸講習会

名　称	対　象	受講数	曜日・日時	備　考
平成11年度 第1回児童厚生員 等実技指導講習会	児童館職員 ほか (50)	44	5.8、22 (こどもの城)Bリハーサル室	『不思議な映像実験室』を、テーマに(こどもの城)AV事業部専門スタッフの協力で『映像遊び』のワークショップを行った。 通勤型の2回連続講習会。視覚玩具として、『くるくるアニメ』『ライトパノラマ』『ピンホールカメラ』等の製作、ビデオを使った『しりとりビデオ』のプログラムに取り組んだ。児童館では、なかなか馴染みのうすい、『映像遊び』も、ちょっとした工夫で身近な遊びになる事に気づかされる講習会となった。
平成11年度 第2回児童厚生員 等実技指導講習会	児童館職員 ほか (50)	59	10.20~22 こどもの城研修室	『児童館の手作りおもちゃ~創って、遊んで、考える~』をテーマに実施。身近な素材でつくるおもちゃ、ダンボール工作、人形づくりと人形劇等のワークショップを行った。講師には、横浜レククラフト研究所所長の兼松ムツミ先生、筑波大学名誉教授高山正喜久先生、イラストレーター石井秀明先生をお招きしワークショップを行った。また、まとめとして、児童館の環境構成をテーマに聖徳大学講師神谷明宏氏に講義をお願いした。
平成11年度 第3回児童厚生員 等実技指導講習会	児童館職員 ほか (50)	50	1.19~21 (こどもの城)研修室	『発見!子どもグループが育つ児童館~フィールドワークを通してこれからの児童館を究める~』をテーマに実施。都内8か所の特色ある活動をしている児童館をグループ毎に訪れ、実態調査をし、それを発表し、まとめる形態をとった。子どもや子どもを取り巻く親、地域住民が主体的に活動するための拠点としての児童館のあり方が様々な角度から論じられた。コーディネイターとして、大正大学教授吉沢英子先生にご協力をお願いした。また、研究発表のコメンティターとして、児童青少年センターゆう杉並の鈴木雄司先生、北区神谷児童館の石井妙子先生、東京小中学生センターの柴田俊明先生をお招きした。

❹講師派遣

名　称	期　日	担　当	依　頼　先	派　遣　先
児童館・学童クラブ職員研修	6.23	体育事業部	板橋区児童女性部	板橋区産文ホール
子育てフェスティバル	11.19	体育事業部	子育てフェスティバル実行委員会	豊島区立要町第2児童館
児童館職員研修	12.9	体育事業部	保谷市保健福支部子育て推進課	保谷市立下保谷児童館
「親子で遊ぼう」	2.1	体育事業部	杉並区今川児童館	杉並区今川児童館
「肥満傾向のある子どもや運動嫌いの子どもへの運動指導の方法」	2.3	体育事業部	行田市保健所	行田市総合体育館
少年スポーツ指導者講習会	2.23	体育事業部	千代田区教育委員会	千代田区立総合体育館
「みんなで楽しめる新しい交流遊び」	10.13	プレイ事業部	大田区児童部児童福祉課	大田区立鵜の木児童館
「作って遊ぼう」	10.16	プレイ事業部	福島県会津本郷町健康福祉課	会津本郷町児童クラブ
埼玉県児童館連絡協議会西部ブロック研修会	11.18	プレイ事業部	埼玉県児童館連絡協議会西部ブロック会	坂戸市　オルモ
平成11年度中央区児童館保育士研修会	12.1	プレイ事業部	中央区福祉部児童家庭課	中央区堀留町児童館
平成11年度渋谷区校庭開放指導員研修会	1.26	プレイ事業部	渋谷区教育委員会	渋谷区勤労福祉会館
荒川区児童事業職員職場研修	3.14	プレイ事業部	荒川区総務部	町屋ひろば館
絵本学会第2回大会	6.19	造形事業部	絵本学会	富山県大島町絵本館
夏季実技研修会　造形・美術ワークショップ	7.27、28、29	造形事業部	横浜市小学校図画工作教育研究会	(こどもの城)　研修室
平成11年度保育専門講座ー表現を学ぶ　造形あそびについてー	9.16	造形事業部	山形県社会福祉研修所	山形県社会福祉研修所講堂

名称	期日	担当	依頼先	派遣先
新学習指導要領「作って遊ぼう」の単元に関する研修	10.22	造形事業部	東京都小学校生活科教育研究会	(こどもの城)　会議室及び造形スタジオ
愛知県児童総合センター「遊具・遊びプログラム企画審査委員会」	10.30～H12.3.31	造形事業部	愛知県児童総合センター	愛知県児童総合センター
平成11年度福井県児童厚生員研修会	11.16	造形事業部	福井県児童館連絡協議会	福井県児童科学館
家庭教育学級「親子で作って遊ぼう」	11.18	造形事業部	港区教育委員会生涯学習推進課	港区青山児童館
山形県児童安全互助会・児童館連絡協議会・母親クラブ連絡協議会合同研修会	12.17	造形事業部	山形県児童安全互助会・児童館連絡協議会・母親クラブ連絡協議会	山形県総合社会福祉センター
平成11年度放課後児童指導員研修	2.26～27 3.5	造形事業部	広島県社会福祉協議会	三次市平和人権センター／備後地域地場産業進行センター／広島県健康福祉センター
児童福祉週間「こいのぼり」掲揚式	4.27	音楽事業部	厚生省児童家庭局	厚生省
表現遊びの指導法	8.29	音楽事業部	京都市楽只児童館	京都市楽只児童館
「サウンドマーケット」	11.3	音楽事業部	富山県こどもみらい館	富山県こどもみらい館
みずほ幼稚園（こどもの城）音楽会	11.3	音楽事業部	みずほ幼稚園父母の会	みずほ幼稚園
ドリームコンサート「歌はともだち」	2.13	音楽事業部	狭山市立第２児童館	狭山市市民会館小ホール
「乳幼児親子で楽しむリズム遊び」	2.23	音楽事業部	練馬区立光が丘なかよし児童館	練馬区立光が丘なかよし児童館　体育室
母親学級卒業生グループ交流会「子育てに音楽を取り入れましょう」	2.24	音楽事業部	杉並区和泉保健センター	杉並区立永福和泉区民センター
リトミックにより心と体をリラックス「感じる心を育てる」	2.25	音楽事業部	川崎市立金程小学校	川崎市立金程小学校
児童のためのリトミック教室	3.12	音楽事業部	日本ダウン症協会世田谷支部ふたばの会	東京都立光明養護学校
「乳幼児親子で楽しむリズム遊び」	3.22	音楽事業部	みずほ幼稚園父母の会	みずほ幼稚園
日本アニメーション学会第１回大会	7.10～11	AV事業部	日本アニメーション学会	東京都写真美術館ホール
アニマックス　アニメーションワンダーランド in Sony Building	7.20	AV事業部	アニマックスブロードキャスト・ジャパン	銀座ソニービル4F HDVSスペース
「メビウスの卵展」手作りアニメーション	8.17	AV事業部	岩手県東山町	
カナダアニメーション上映会	10.17	AV事業部	アニメーションミュージアムを創る	練馬区役所多目的ホール
映像セミナー「小型映画の世界と現在形」	12.26	AV事業部	福岡市総合図書館	福岡市総合図書館
日本アニメーション学会第１回アニメーション	3.11	AV事業部	日本アニメーション学会	武蔵野美術大学
科学実験教室「不思議な映像実験室」	3.19～20	AV事業部	北陸電力エネルギー館	北陸電力エネルギー館
富山県こどもみらい館ボランティア養成講習	11.6	企画研修部	富山県こどもみらい館	富山県こどもみらい館
平成11年度子どもに関係するボランティア研修会	11.7	企画研修部	宮城県中央児童館	宮城県中央児童館
「あそび＝まなびのパートナー講座」	11.20	企画研修部	座間市教育委員会	座間市青少年センター

名　　称	期　日	担　当	依　頼　先	派　遣　先
「福井市子ども会育成連合会指導者研修会」	12.4	企画研修部	福井市子ども会育成連合会	福井市少年自然の家
横浜市南部児童相談所職員研修会	1.26	企画研修部	横浜市南部児童相談所	横浜市南部児童相談所
生涯学習ボランティアの集い	2.6	企画研修部	和歌山県教育委員会	和歌山県立図書館メディア・アート・ホール
生涯学習コーディネーター養成講座	3.17	企画研修部	座間市教育委員会	座間市青少年センター
サマースクール 東北大会 東京大会 名古屋大会 鹿児島大会 京都大会 静岡大会	 7.27 7.28 7.31 8.3 8.10 8.19	国際交流担当	日本幼年教育研究会	
「FUKUOKA・インターアクション'99」	8.4	国際交流担当	福岡県民生活局青少年課	福岡県英彦山青年の家
子育てネットワーカー養成講座	10.15	国際交流担当	埼玉県教育委員会	浦和青年の家
保健講話「自分を大切にする」	11.19	国際交流担当	兵庫県立北摂三田高等学校	兵庫県立北摂三田高等学校
国立那須甲子少年自然の家運営委員会第1回	11.22	国際交流担当	国立那須甲子少年自然の家	国立那須甲子少年自然の家
第24期東京都社会教育委員（委嘱）	10.1～ H13.9.30	国際交流担当	東京都教育委員会	
中部地区幼児教育研究会	1.27	国際交流担当	名古屋市民生局	名古屋市公会堂
高知県子育て応援団養成講座	2.17	国際交流担当	高知県安芸福祉事務所	安田町文化センター
「親子ふれあいあそび」	2.25	国際交流担当	今市市	今市市総合文化会館
幼稚園児の保護者を対象としたレクチャーと実技研修	2.28	国際交流担当	白鷗大学女子短期大学附属幼稚園	白鷗大学女子短期大学附属幼稚園
国立那須甲子少年自然の家運営委員会第1回	3.13	国際交流担当	国立那須甲子少年自然の家	東海大学校友会館
保育実習特別講義	6.24	保育研究開発部	玉川大学	玉川大学
家庭教育学級「親と子のふれあい」	7.3	保育研究開発部	品川区立芳水小学校	品川区立芳水小学校
保育職員研修「保育士としての親との接し方・関わり方」	9.1	保育研究開発部	財団法人　鉄道弘済会	弘済会館　会議室
児童厚生員研修会「児童館活動と子育て支援」「子どもの健やかな成長と遊び」	9.2	保育研究開発部	福島県社会福祉協議会	福島県総合社会福祉センター
子育てフォーラム「遊びを通し親子のふれあい」	9.11	保育研究開発部	千葉市教育委員会	千葉中央コミュニティーセンター
子育てフォーラム「父と子でアート」	9.25	保育研究開発	千葉市教育委員会	千葉中央コミュニティーセンター
子育てフォーラム「リズムにのって体を動かす」	10.9	保育研究開発部	千葉市教育委員会	千葉中央コミュニティーセンター
子育てフォーラム「社会と子育て」「お友だちとみんなで遊ぶ」	10.23	保育研究開発部	千葉市教育委員会	千葉中央コミュニティーセンター
子育てフォーラム「話あってみよう！聞いてみよう！我が家の子育て事情」	10.30	保育研究開発部	千葉市教育委員会	千葉中央コミュニティーセンター

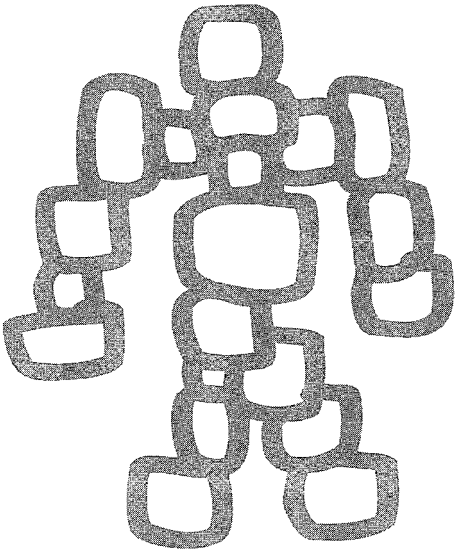
名　称	期　日	担　当	依　頼　先	派　遣　先
育児講座「親子で楽しむリズム遊び」	9.28	保育研究開発部	平塚市子育て支援センター	平塚市総合体育館
ふれあい社会福祉講座	11.18	保育研究開発部	福島県喜多方市社会福祉協議会	喜多方市総合福祉センター
子育て支援事業指導員富山市立幼稚園教育研究会研修会	1.15	保育研究開発部	富山市教育委員会富山市立幼稚園長会	富山国際会議場
子育て支援事業「親子で遊ぶ」	2.10	保育研究開発	千代田区立四番町児童館	千代田区立四番町児童館
児童福祉施設栄養士研修会	9.21	小児保健部	財団法人いしかわ子育て支援財団	
職場研修「乳幼児の発達Ⅰ，Ⅱ」	2.1 2.24	小児保健部	新宿区福祉部	新宿区役所分庁舎
子育てコンサルタント養成講座	2.29 3.6	小児保健部 小児保健部	岐阜県健康福祉環境部	関市役所 大垣市ソフトピア
家庭教育学級「幼児コース」『今どきのしつけ～私の子育てこれでいいの～』	9.18	小児保健部	荒川区教育委員会	荒川区立生涯学習センター
浦和市教育委員会保健部会研修会「保護者と子どもに対してのかかわりー勇気づけによるー」	11.12	小児保健部	浦和市教育委員会	浦和市青少年宇宙科学館
第4回岐阜県子育て支援シンポジウム　パネルディスカッション「今、求められる子育てネットワークづくり」	12.2	小児保健部	岐阜県	恵那文化センター
板橋区地域別子育て講座「冬も元気にすごそう～赤ちゃんの寒さ対策～」	12.17	小児保健部	板橋区児童女性部	板橋区立仲町区民センター
新国立劇場整備計画策定委員会（委員委嘱）	9.10～ H12.9.9	劇場事業本部	日本芸術文化振興会	
平成12・13年度公共ホール音楽活性化事業登録アーティスト選考（委員委嘱）	11.17	劇場事業本部	財団法人地域創造	港区高輪区民センター
カザルスホールのクリスマス1999	12.24	劇場事業本部	株式会社　お茶の水スクエア	お茶の水カザルスホール
足立区総合文化センターホールの実施設計に係わる助言（委員委嘱）	1月～3月	劇場事業本部	足立区教育委員会	
「ほんとのふれあい読書マラソン　読書のつどい」	3.5	劇場事業本部	埼玉県立浦和図書館	県民活動総合センター
公共ホール音楽活性化事業・アーティスト研修会	2.23	劇場事業本部	財団法人地域創造	ヤマハ㈱東京支店会議室
世界劇場会議 国際フォーラム2000	2.10	劇場事業本部	世界劇場会議国際フォーラム2000事務局	愛知芸術文化センター

第2回児童厚生等実技指導員講習会



第3回児童厚生等実技指導員講習会





こどもの城 事業年報

平成11年度

平成13年3月31日発行

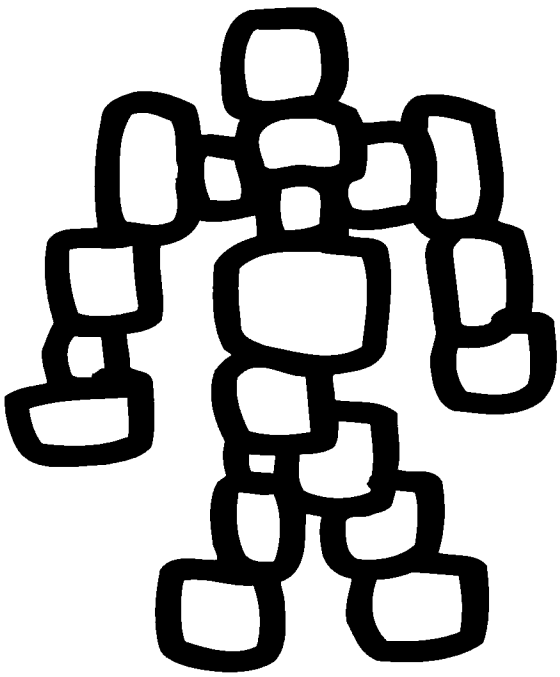
［編集・発行］

財団法人 児童育成協会

理事長　　高峯　一世

〒150-0001　東京都渋谷区神宮前5-53-1
電話　03-3797-5666

表紙イラスト ―――――― 田中靖夫
デザイン ―――――― COIL
印刷所 ―― オーイ・アート・プリンティング



財団法人 児童育成協会
こどもの城
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-1
TEL 03-3797-5666(代表) FAX 03-3797-5676